



(上) 圖版 I—A Tughluqabad 堰堤Ⅲ (北方より撮影)

(下) 圖版 I—B Tughluqabad 水門Ⅳと放水路 (東方より撮影)



(上) 圖版 II—A Mahipalpur堰堤 (北翼より南翼を遠望)

(下) 圖版 II—B Wazirabad 南方の水門(右)と橋(東面)

デリーに現存するサルタナット時代の の堰堤および水門の遺跡について

——サルタナットの首都デリーとその
遺跡に関する歴史的研究（IV）——

荒 松 雄

目 次

序. (山本達郎)

I. まえがき

II. 堰堤の遺跡について

III. 水門の遺跡について

IV. 堰堤および水門に関する文献上の諸問題

V. 堰堤および水門に関する歴史的諸問題

VI. むすび

補 註.

追 記. (山本達郎)

序

東京大学インド史蹟調査團は1959—60年と1961—62年の二回にわたり、冬期を中心としてそれぞれ数ヶ月に及ぶ調査研究を行つた。調査地域は相當に廣かつたが、重點はデリーを中心とするデリー諸王朝（サルタナット）時代の遺蹟にあり、遺蹟を現状に於て調査すると共に關係文献の蒐集を行つた。もともとこの調査は

荒 松雄君が1954—56年にわたりニューデリー滞在中に各種遺蹟の所在を確かめ、寫眞を撮影してあつたところに、別にこの時代の歴史に興味を持っていた私が組織的企畫を立て、東洋文化研究所を中心に生産技術研究所丸安研究室の協力を得て遂行したもので、兩人のほか大島太市（寫眞測量）・月輪時房（考古學）・三枝朝四郎（寫眞撮影）諸君が團員として參加した。現地での共同調査を終り、東京に歸つてからの整理研究に當つては、各自の専門を主として分業で仕事を進めている。文獻研究は荒君の擔當で、デリー諸王朝の同時代の史料と、その後近年までの遺蹟に関する諸記録とを綜合して、各遺蹟の文獻上の比定と遺蹟の性格の解明を意圖している。その成果は遺蹟の現状に関する圖面・寫眞・記述とあわせて、最終的な報告となるべきもので、今回ここに發表の論文は荒君の研究であると同時に調査團の成果でもある。調査團としての最終報告書はここ數年の間に逐次刊行してゆく豫定であるが、文獻研究の詳細を全部収録することは不可能であるから、それは別個に本紀要に發表して、その主要な内容だけを報告書に掲載することとし、又同時にこの發表を以て豫備報告の一部とするものである。

デリー附近の諸遺蹟を調査するに際しては次のような方針を立てた。即ち數百個所に及ぶデリー諸王朝時代の遺蹟は早急に調査しなければ失はれる危険があるものがあるので、なるべく多くの遺蹟を訪ねてこれを概観すると共にその中から幾つかを選んで詳細に現状調査を行い發掘はしないということである。これは研究の現状と現地に於ける各種の事情に基いた結果である。選擇した遺蹟の種類は、墓とモスクと水に関するものが中心で、それぞれ主要なものについて詳密度の段階を分けて調査したが、今回取り上げられた堰堤及び水門は各種の井戸と共に調査團が従來の諸研究とは異つた角度から特別に問題としてきたものである。水に関する諸遺蹟はインドの風土と民衆の生活に特別關係が深いと思われる。農業生産に不可欠であり、政治權力の消長と結びつき、日常生活に貴賤を問わず必要な水の遺蹟に調査團として特に注意を拂つたものである。調査團の關心は考古學的、建築史的、美術史的であると共に、歴史學的である。（山本達郎）

I. ま え が き

この小論は、「サルタナットの首都デリーとその遺跡に関する歴史的研究」の一部をなすもので、さきに『東洋文化研究所紀要』の第35冊に載せた「デリーに現存する奴隸王朝末期の墓について」と題する小論につづく第4論文である。内容は、デリー＝サルタナット時代に屬すると推定される堰堤および水門で、デリー地域に現存する遺跡を中心とした歴史的考察である。

本稿、および奴隸王朝の墓に関する私自身のこれまでの三論文をふくめて、私がデリーの遺跡についての歴史的考察をつづいて発表することを志したことについてのいきさつ、その研究の目的や対象と課題、および私自身の方法とその限界などについてのさまざまな問題については、私の第1論文「デリーに現存する奴隸王朝初期の墓について」の冒頭に記した「序文」に述べておいたので、本論文では、一切、省略することにする。

さて、デリー地域に現存するムスリム遺跡のなかで、その数も多く、またその建造物の構造および様式などからいつて、もつとも目立ちやすい性質のものは、なんといつても、墓とモスクとであろう。それらのなかでも、とくに、規模の大きい建造物や歴史的に有名な遺跡は、これまで、多くの人びとによつて、敘述や研究の対象として、しばしばとりあげられてきた。しかしながら、注目されやすいそれらの墓やモスクの遺跡にくらべて、學者や旅行者もふくめて人びとの注目をひくことの比較的少ないのが、水に關係ある建造物、すなわち水利施設の遺跡である。もつとも、そのうちの若干のものは、たとえば、續稿で紹介する豫定のパーオリ（bāūlī、すなわち階段付き井戸）のうちの二三の例のように、その構造の面白さや、あるいはそれが設けられている場所そのものが有名なことによつて、ひろく一般にも知られてきたものもある。しかし、

リー地域における水利関係の大部分の遺跡は、ふつうは、旅行記や案内書にもほとんど言及されることがなかつたし、また研究の対象になることもきわめて稀れであつたといつていいであろう。その理由の一つは、さきにも述べたように、一部の墓やモスクのように、ひとの注意を引きやすい遺跡が少ないことにある。とくに、パーオリーや井戸などの遺跡の多くは、ふつうには、地上の展望では見出すことがむずかしいので、一部の珍しいものや著名な場所にあるもののほかは、ほとんど一般の話題にもならないという事情もあるのである。しかも、これらの建造物は、モスクや墓の遺跡とは異なり、建造物といつても、無蓋の構築物がふつうである。そして、美術史や建築史のうえで興味のある対象となるような様式上の問題や、文様その他の附屬物の點で、従來のさまざまな學術的關心の視點からは、やや外れており、また、審美的にも、問題の焦點となり得るような要素をほとんどもっていないものが大部分を占めているのである。

要するに、水利関係の施設や構築物の遺跡は、従來の建築史や美術史に関する學問的研究の視點からすれば、いつてみれば、つまらぬ遺跡とでもいうべき対象であり、ごく限られた一部のものをのぞけば、ほとんど研究対象からは外されていたのである。試みに、Art, Architecture, Archaeology, Monument などというような語を掲げている研究書や論文を想起してみても、その大部分の場合、これらの水利関係の遺跡の多くが省かれ、あるいは忘れられ、または故意にとりあげられていないことに気がつくであろう。しかしながら、これらの水利関係の建造物の遺跡は、せまい意味での美術史、建築史學などの研究分野とは異なつた視點に立つて見てみるときには、きわめて興味ある歴史的意味をもつ研究対象であるといふことができるのである。

これらの水利に関する建造物は、いわば、水の利用や、あるいは水を動かす施設として構築されたものがその大部分を占めているが、それを、種類別にみると、運河、貯水池、堰堤、水門、井戸および特殊な構造をもつ階段井戸、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

つまりバーオリーとよばわれているものなどを指摘することができる。(ここでは、橋は、水利施設のなかには入れない。)

デリーにおけるサルタナット時代の水利関係の遺跡は、これらの諸種の建造物をすべてふくんでいる。しかし、デリーが、その後、ムガル帝国の首都として約400年間ものあいだ存続してきたという事実にもかかわらず、水利施設の遺跡に関する限り、ムガル帝国時代のものよりは、サルタナット時代に属する遺跡の方が、建造物の規模においても、またその数においても、目立っているのである。このことは、歴史的にみれば、きわめて興味あることといえよう。

もともと、城砦や宮廷関係の建物はもちろん、モスクや墓の大部分は、いずれも、スルターンやサルタナット支配の上層に属する人びとが建造したものである。そして、その建造の目的は、一部のモスクをのぞけば、世俗的または宗教的權威をふくめて、支配層自體の直接の關心と利害關係から出發しているものがその大部分であるといつていいであろう。それに對して、水利関係の建造物には、支配層自らの利害關係や、その生活上の環境をつくりあげることにかわるものも多くあるが、また、その反面、被支配層ともいべき一般民衆の生活上の利害關係や生産活動の諸面にむすびつく構築物も、少なからず見出すことができるのである。サルタナット時代における運河、貯水池、堰堤、水門や、その他、諸種の井戸施設などの構築が、その大部分は、ときの支配層によつて行われたことは、のちに私も述べるところである。しかしながら、その建造の動機には異なるものがあつたにせよ、それらの施設が、當時の被支配層の一部に與えた經濟的、社會的影響には、やはり、注意すべき點があると思われるのである。また、これらの水に関する建造物には、イスラームの宗教的な施設や建造物に附屬するものとして構築されたものもあり、その意味において、民衆の生活と關係する場合もあるのである。とくに、モスク、それもいわゆるジャーマ=マスジッド (jāma' masjid) といわれる大モスクや、ハーンカー (Khānqāh, すなわち日本流にいえば庵、道場) などは、イスラームの宗教的

施設として、一般の民衆と関係をもつていた重要な建造物であつたといえるのであるが、水利施設のなかでも、とくにパーオリーや井戸などは、これらの宗教的建造物に附設して構築されていたことが多いことも指摘することができるのである。従つて、たとえ、建造自體は政治權力、あるいは宗教的權威の直接の所産であるとしても、そのもつ社會的な意味は、墓や城砦、王宮などにくらべると、その影響の範圍において、ずつと大きい。また、運河や、貯水池、井戸や、本稿でとりあげる堰堤や水門などの構築物が、農業を中心とする民衆の生産活動と生活の存続とに大きな関係をもつものであつたことは、いまさら、言を俟たないところであらう。

一般的にいえば、サルタナット時代の建造物に關する歴史的研究の資料となり得る文獻史料が、その數も内容も、きわめて限られたものであり、それを補うべき他の諸資料もまことに少ないということは、私自身、すでに第1論文の「序文」やその後の論考のなかで、くりかえし述べたところである。従つて、逆に、これらの建造物や遺跡そのものが、歴史的研究の資料として注目されて然るべきであらう。とくに、權力と民衆との接點に位置し、支配關係の一面を象徴するともいえるこれらの水利建造物は、當時の經濟および政治、社會の解明に役立つ貴重な資料たり得ると思うのである。

私自身は、1954~56年にかけての最初のニューデリー長期滞在のときには、水利關係の遺跡については、それほど大きな關心はもつていなかったといつた方が正直であらう。もちろん、すでにそのころから、私は、サルタナット時代に屬すると思われた堰堤、水門、あるいはパーオリーなどの遺跡の存在については注意しており、一應の關心はもつていた。事實、私自身、その當時、現地に赴いて、いくつかの水利施設の遺跡の寫眞を撮影している。しかし、ただ一人で滞在していたそのころの私は、水利關係の多くの建造物の存在については、今にして想えば、あまりよくは知つていなかったのである。これらの遺跡に、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

學問的な關心をもち、慎重な心がまえで、注意をむけはじめたのは、東京大學のインド史跡調査團に加わつて、その現地調査のためにニューデリーに行つてのちのことであつた。(この調査については、拙稿第1論文「デリーに現存する奴隸王朝初期の墓について」冒頭の「序文」を参照されたい。) 1959年11月から數カ月間にわたつての第1次現地調査に際して、山本達郎團長とともに、私は、これらの水利施設の遺跡に大きな關心を寄せはじめたのであつた。この調査團による二回の現地調査においては、水利施設については、デリー地域に現存する堰堤、水門、井戸、およびパーオリーなどの、數多くの遺跡のなかからとくにいくつかの對象を選び出し、それらの限られた研究對象について、墓やモスクその他の建造物と同じく、それぞれ、かなり詳細な測量、地上立體寫眞測量、および寫眞撮影、觀察その他の調査作業を、現地において集中的に行なつたのであつた。これらの調査作業は、山本團長の統轄のもとで、主として、三枝・大島・月輪諸氏の手で行われ、私自身も、ときに應じて、不慣れな仕事を手傳わされたのを、今でも懐しく想い出す。これらの現地の調査の結果は、寫眞資料はすでにほとんど整備されたが、測量の結果の作圖作業が山本團長を中心として、進められている最中であり、いずれ調査團の共同研究の成果が、主報告書の一巻として公刊されるはずになつている。私自身は、この現地調査に際しては、主として、現存遺跡の綜合的探査と現地檢證、および文獻や諸資料の記述との照合による歴史的考察を擔當したことは第1論文にも記しておいたところである。従つて、主に、インド國の國防上の祕密保持の必要上またはその他の特殊な狀況のもとで調査作業上の制約を受けた對象をのぞけば、本稿およびその續稿でとりあげる水利關係の諸遺跡については、可能な限りにおいて、遺跡の現場に赴いて自らそれを見ることに努力したのである。その結果は、大體において、⁽¹⁾ 少なくともその第一義的な目的だけは達成することができたように思うのである。

これらの水利施設の遺跡については、調査團の主報告書のなかでは、いくつ

かの選ばれた建造物を中心にして、その構造や様式その他いくつかの問題が主に論じられるはずである。しかし、そこでは全遺跡について言及する餘裕はないであろう。また、體裁、紙幅などの制限もあるから、これらの諸遺跡に関する詳細で自由な敘述は、きわめて制約されざるを得ない。そこで、本論文では、これらの水利關係の諸遺跡のうち、まず堰堤と水門とについて、右の主報告書には十分に論じる餘裕のないさまざまな問題に關して、とくに私自身の考察をまとめて記しておきたいと思うのである。しかし、このような考察は、いずれも、東京大學インド史跡調査團の現地調査、あるいはその前後の研究活動と關連してはじめて得られた成果の一部である。従つて、ある意味では、主報告書の前提的、あるいは豫備的報告といつていいであろう。なお、主報告書公刊に先んじて、私自身の名で本稿を公表することについては、山本達郎團長の承認を得ていることに、一言ふれておきたい。

ところで、本稿でとりあげるところの堰堤および水門の遺跡の場合には、相互に關連する存在理由と機能とをもつものが、むしろ、ふつうである。デリーの遺跡の場合にも、堰堤には水門が設けられている場合が多い。つまり、水門は、堰堤の一部に、その機能を貫徹させるのに必要な施設として設けられているのが一般である。本稿で、堰堤と水門とをあわせて考察の對象とし、まとめてとりあげたのも、主として、そうした理由にもとづくものである。

デリー = サルタナット時代の堰堤および水門に關する文獻上の記述は、同時代の歴史書についていえば、きわめてわずかな例外をのぞくと、あとはほとんど見當らないといつてもいいほどである。ただ、一部の文獻のごく限られた一節に、堰堤と思われる建造物の名稱が記されていたり、またはそれについての若干の記述が残されていて、それらが存在していた事實を、わずかに、今日に伝えてくれているのである。しかし、それらは、いずれも、堰堤と推定される建造物に關する記載である。私の知る限りにおいては、これまで、いかな

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

る史書にも、サルタナット時代の水門に関する記述は、同時代の著作には、一行とて見出されなかつた。この點に關連して、もし、私の言葉が正確さを缺き、そのような事實があれば、是非とも教示をいただきたいものと期待している。

さて、サルタナット時代およびその後のインドの諸文献では、堰堤は、ふつう、*band* (バンド) という言葉で記されているようである。現在、ふつう、英語でも、*bund* という語が、*embankment* と同じような意味で用いられている。ウルドゥー語で *band* というのは、ペルシア語の *band* がそのままインドで用いられたことによるものであろう。ウルドゥー語の起源の時代的問題にはさまざまな論争があるが、トゥグルク朝時代にはかなりの範囲にわたつて用いられていたことはたしかなようであるから、それ以後、この外來語が、北インドで一般のヒンディーおよびウルドゥー語のなかで用いられたと考へてさしつかえないであらう。水門については、すでに述べたように、サルタナット時代の文献には見當らなかつたが、ウルドゥー語では、少くともデリー地域周辺では、*mori* (モーリー) という語が用いられていることは、のちにもふれるとおりである。

Band すなわち堰堤についての記述は、サルタナット時代では、のちに第IV章でくわしく紹介するように二つの文献に出てくる。その一つは *Minhaj al-Din Siraj 'Afif* (ミンハージュッディーン=スイラージュ=アフイーフ) がトゥグルク朝の *Sultān Firūz Shāh* に獻じた史書 *Tārīkh-i Firūz Shāhī* (ターリーヘ=フィーローズ=シャーヒー) である。この文献では、*Firūz Shāh* 時代に構築された諸建造物の一部として、*band* があげられており、しかも、具體的に、12の *band* の名稱まで列擧されているのであつて、まことに珍重すべき史料というべきものである。他の一つのサルタナット時代の文献は、同じく、*Tārīkh-i Firūz Shāhī* とよばれる史書で、これまで私もしばしば引用してきたトゥグルク朝後期の *Ziya' al-Din Barani* (ズィヤーウッディーン=バラニー) の著書である。この文献の一節に、*Firūz Shāh* が建造したという *band* らし

い建造物についての記述が、わずかながら、見出されるのであつて、これまた、本稿の観点からみれば、まことに貴重な史料といえるのである。以上の二つの文獻は、いずれも、トゥグルク朝後期の作品である。のちにくわしく紹介するように、現存するサルタナット時代の堰堤、水門は、その大部分が、いずれも、トゥグルク朝の時代の構築と推定されるということがらとあわせて考えるとき、このことはきわめて興味あることといえよう。それらの文獻の記述の内容、さらに、そこに記されている *band* が現存の堰堤とどのように関連するものであるかという問題については、本稿の第IV章において述べられるはずである。

右に述べたように、堰堤や水門に関するサルタナット時代の文獻史料は、その数が全く限られている。しかしながら、今日、デリー地域に現存している、あるいは、かつて存在していたことが報告されている堰堤や水門の遺跡のなかで、サルタナット時代の構築と推定されるものは、いくつか指摘することができるのである。本稿でまず報告の対象としたのは、これらの遺跡である。ただし、のちにくわしく述べるように、遺跡のなかには、もともと、都市あるいは王城の城砦の城壁として構築されたものであつて、同時に、あきらかに、堰堤と同じような水の利用、とくに貯水を目的として造営され、またその機能を十分にはたしたと思われるものが存在しているのである。それらは、城砦、城壁のもつ本来の機能の一部と考えられるので、本稿の考察では、とくに水利のうえで個別的に特殊な意味をもつと思われる *Jahānpanāh* (ジャハーンパナー) 城壁の南壁の場合をのぞいて、とくに研究対象としてはとりあげていない。ただ、トゥグルク朝の *Tughluqābād* 大城砦に関係をもつ三つの堰堤の場合には、特殊な存在理由、機能、および建設目的をもつものと考えたので、*‘Ādilābād* (アーディラーバード) 城砦と *Tughluqābād* 本城砦とを結びつける一種の城壁である *Tughluqabad* 堰堤Ⅲもふくめて、単純な貯水壁堤である他の城砦、城壁の場合と異なつて、本稿でも、主要な研究対象としてとりあげたわけである。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

そこで、次にサルタナット時代に建造されたと推定される堰堤および水門で、デリーに現存しているものを挙げてみよう。以下に用いた名称は、本稿の研究に際して便宜的に使用したものであり、のちに公刊される豫定の調査團の主報告書で用いる名称とは若干の異同があるかも知れない。固有名詞は、ほぼ、地名によつてはいるが、その一部は傳承または歴史的固有名詞に依據したものもある。そして、水門は、すべて堰堤に附設されているので、ここでは、その堰堤と並記することにした。⁽²⁾

〔堰 堤〕

Tughluqabad 堰堤 I

Tughluqabad 堰堤 II

Tughluqabad 堰堤 III

Jahānpanāh 南壁堰堤

Mahipalpur 堰堤

Station Road 堰堤

Būli Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤

デリー大學 (University of Delhi) 構内堰堤

故ネルー首相公邸 (Nehru House) 庭内堰堤

Wazirabad 南方堰堤

Malcha 堰堤

(Basantpur 堰堤)

〔水 門〕

Tughluqabad 水門 I

Tughluqabad 水門 II

Tughluqabad 水門 III

Satpulah

Mahipalpur 水門 I

Mahipalpur 水門 II

Station Road 水門

Būli Bhatiyārī kā maḥal 水門

Wazirabad 南方水門

サルタナット時代の構築と推定される堰堤および水門の遺跡でデリー地域に現存しているのは、私の知っている限りでは、以上のものに限られる。興味あることは、私自身その存在を確認できなかつた Basantpur 堰堤⁽³⁾をのぞくと、

上に挙げた堰堤は、のちにくわしく述べるように、いずれも、トゥグルク朝時代に建造されたものと推定されることである。

次に述べておきたいことは、本稿では堰堤という一般的な名称を用いてまとめて記したのであるが、右に列挙した11の堰堤は、その存在する場所の地形や環境、あるいは構造や機能からいつて、それぞれ若干の差異があるという点である。それについては、本稿でも、それぞれの堰堤について述べる場合にふれられるであろう。しかも、現存するこれらの堰堤の遺跡は、多くの場合、構築物の一部分のみが残存しているのがふつうであつて、堰堤全體が完全に残り、その構築物の全構造がわかるのは、限られた遺跡の場合だけである。また、これらのもののうちには、Wazirabad 南方堰堤、Malcha 堰堤の場合のように、それがまさしく堰堤であるのか、あるいは少なくとも堰堤とよぶにふさわしい構築物であるのかどうかということにも若干の疑念が感じられるものがあるのである。これについても、のちに、くわしく述べるつもりである。

もちろん、現在、堰堤が存在している環境やその構造から、その機能や水利のメカニズムなどを推測することは、ある程度は可能であつても、現存する遺跡の規模が小さかつたり、あるいは遺跡が存在している場所あるいはその附近の環境の變化のために、サルタナット時代にさかのぼつての復原的推測がきわめてむずかしい場合もあるのである。また、ある場合には、堰堤が単に貯水池の周邊の堤岸の一部を形成していて、獨立して堰堤としての機能をもつているかどうか疑わしい場合も考えられるのである。本稿では、堰堤というものを、自然的あるいは人工的貯水池や河川などの、單なる堤岸というだけの機能においてとりあげるつもりはない。ただし、堰堤の構築により、自然の地形を利用して、一時的に貯水池をつくり出す役割りをもつものは別である。その場合は、單なる貯水池造營に本來の目的があるのではなく、その貯水を利用してより複雑な水利計畫が企圖されていることが多いからである。そうしたものは、本稿でも、考察の対象に入れているのである。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

ただし、水利政策というべきものは、本稿でとりあげる堰堤あるいは水門ばかりではなく、運河や貯水池などを造成する水利工事の実施の事実とあわせて考察して、はじめて歴史的な意味をもち得ると、私は考える。また、デリー地域の水利関係の構築物としては、井戸やバーオリーも、重要な、経済的、社会的機能を果たしてきたのである。これらの構築物による水利の運営には、當然、政治権力や支配関係の諸問題を考察しなければならないであろう。けだし、水利事業は、しばしば、権力者による支配の貫徹のための手段としてとり上げられてきたことが多いからである。従つて、水利関係の構築物の考察の場合には、それを誰が建造させたのかという、いわば造営の主體と、その水利政策が終極的に何を目標としていたかということをも慎重に追求する必要があると思う。そして、遺跡の地域的範囲や分布、あるいはその建造の時代的比定に関する考察を総合的に試みることによつて、支配権力による水利政策、あるいは、ひろく農業生産ないしは徴税政策に関する歴史的諸問題の解明に寄與できる材料を整え得ることも十分に豫想されるのである。

もちろん、これらの水利施設の場合には、その社会的、経済的意義は、それぞれの建造物によつて必ずしも一様であるとはいえない。それらのなかには、宗教的施設に附屬して設けられているものもあり、とくに水を宗教的儀禮の必要欠くべからざるものとして慣習的に利用するイスラームの場合には、井戸やバーオリーのもつ宗教的な意味は、きわめて重要なものとなつてくるのである。しかし、ひろく経済的、社会的、政治的見地からみるとときには、飲料水の確保、防衛、あるいは農業政策との関連などの問題が、歴史的には、きわめて重要なものとして考えられて然るべきであろう。こうした視角からの遺跡の研究は、これまで、インド史研究のなかでは、具體的には、全くとりあげられなかつたといつていい。従つて、私は、とくに本稿の第Ⅱ章において、そうした問題についての二三の試論を提出してみたわけである。

さて、19世紀以降のインド人やヨーロッパ人による遺跡の研究は、これらの

水利施設の遺跡については、二三の著名な対象をのぞけば、ほとんど空白のままに放置されてきたといつていい。ただ、私の研究のもつとも重要な資料であるところの A, S. I. の Delhi Monuments List が、1910 年代の状況について、かなりよく伝えてくれているのみである。このことは、遺跡に関する従来の問題意識や研究が、狭義の建築史、美術史的な観点からのみとりあげられてきたことが多かつたため、水利関係の建造物が、ほとんど正当な研究対象とはなり得なかつたことを示しているといえよう。従つて、本稿では、墓やモスクを対象とする私の他の論考の場合と異なつて、19世紀以降の近代の著書についての言及は、總じて、ずつと少なくなつていく。

II. 堰堤の遺跡について

1. はじめに

この章では、デリー地域に現存するサルタナット時代の堰堤について、それぞれ、所在地およびその遺跡の現状、その建造物の特徴や地形その他周囲の環境などについて、ごく簡単に紹介したいと思う。それぞれの遺跡についての歴史的背景、とくに傳承や行事などがあれば、それらについても、必要な限りにおいてふれてみたい。

デリー地域に現存する堰堤について、私は、前章に、12 の遺跡を列挙しておいた。すでに述べたように、そのうちの最後の Basantpur 堰堤は、本稿では省くこととして、他の11の堰堤の遺跡について紹介したい。まず、私は、それらの遺跡を、次のように、それぞれ、A. トゥグルク朝前期、B. トゥグルク朝後期に屬すると推定される堰堤の二つに分け、さらにそれらを二分して紹介してみることとした。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

A. トゥグルク朝前期に属すると推定される遺跡

I. Tughluqabad 堰堤群

1. Tughluqabad 堰堤 I
2. Tughluqabad 堰堤 II
3. Tughluqabad 堰堤 III

II. Jahānpanāh 南壁堰堤

B. トゥグルク朝後期に属すると推定される遺跡

I. 人工構築による堰堤

1. Mahipalpur 堰堤
2. Station Road 堰堤
3. Būlī Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤
4. デリー大学 (Univ. of Delhi) 構内堰堤
5. 故ネルー首相公邸 (Nehru House) 庭内堰堤

II. 自然地形利用による堰堤

1. Wazirabad 南方堰堤
2. Malcha 堰堤

以上のリストをつくるうえで、時代区分に関しては、私は、まず、A. S. I. の Delhi Monuments の所説をも参考にした。しかし、大體は、それぞれの堰堤について、さまざまな見地から、私自身が考えた時代比定の推論をもとにしたものである。それらに関する問題点については、それぞれの遺跡の項で述べるつもりである。この時代区分のうち、トゥグルク朝後期というのは、ほぼ、Fīrūz Shāh の治世をいうものであり、それについても、のちにくわしく説明するはずである。

ただ、このうちの [B] の堰堤群のなかで、I. 人工構築による堰堤と、II.

自然地形利用による堰堤と二分したのは、私自身の仮設にもとづくものである。とりあえず簡単に述べると、デリー地域に現存する堰堤の遺跡のなかで、Firūz Shāh の時代に屬すると推定されるものについて観察してみると、次の二つの特徴を指摘し得るように思えるのである。すなわち、一群の堰堤は、碎石とモルタルとを併用して構築材料とし、完全にあるいはほぼ平坦な地表面に、全く人工的に構築したと考えられる堰堤であるのに對し、他は、起伏ある自然の地形、とくに岩盤地帯における傾斜起伏の著しい地形をそのまま利用して、碎石とモルタルとを加えて構築したと思われる堰堤と考えられることである。従つて私は本稿では、一つの仮設として、以上に述べたように、〔B〕グループの遺跡群を、I. 人工構築による堰堤、II. 自然地形利用による堰堤というふうに二つに分類してみたのである。ただし、この〔B〕群の、I-5に記した故ネルー首相公邸内にあるといわれている堰堤は、私自身見たことはなく、1964年の A. S. I. の Y. D. Sharma の報告ではじめてその所在を知らされたものであり、1962年初頭の現地調査に際して、A. S. I. の Photography Section の好意で複製させていただいた寫真にみられる建造物がその堰堤の一部にあつたと推定されるのである。従つて、この堰堤については、右の寫真と、Y. D. Sharma の簡単な敘述とにより、この〔B〕群の〔I〕に包含したのであり、私自身や他の調査團員の観察の結果によるものではない。(なお、これについては、その後、山本達郎教授が現地で見えられたので、それについて記した本稿「追記」を参照されたい。)ただし、後述する私自身の推論のように、この堰堤の南部延長部分が、アショカ=ホテル (Ashoka Hotel) の裏手の地形につづくものと推測するならば、この堰堤は、〔B〕群の〔II〕にあげた自然地形利用の性格をあわせもつものとも考え得るのである。しかし、このことは私のみの推論にすぎないものであるし、その遺跡の主要部分の特徴こそが分類の要點であると考えるので、この首相公邸庭内堰堤は、一應、〔I〕に含めた。もちろん、このような〔I〕、〔II〕の分類は、その絶對的な意味におけ

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

る分類ではない。人工構築といつても、水を集め、貯えるための、周辺の自然的地形の利用を前提としていることは、程度の差こそあれ、いずれの堰堤の場合においてもあてはまることで、地形利用こそは、いわば、堰堤存在のための前提的必要条件であるとさえいつていいであろう。従つて、私が〔Ⅱ〕として分類したのは、むしろ、堰堤建造物そのものに、決定的に自然的地形を利用した場合をいうものと考えてほしい。

そこで、次に、以上に記した順序に従つて、それぞれの遺跡についての説明に移ろう。

2. トッグルク朝前期に属すると推定される堰堤について

まず、ここでは、トッグルク朝前期、すなわちデリー＝サルタナット第三番目の王朝の創始者 Ghiyāth al-Dīn Tughluq Shāh (ギヤースッディーン＝トッグルク＝シャー) および Muḥammad bin Tughluq (ムハンマド＝ビン＝トッグルク) の治世に構築されたと推定される堰堤について紹介しよう。

I. Tughluqabad 堰堤群

Tughluqabad, 正しく復原すれば Tughluqābād (トッグルカーバード) は、いわゆるクトゥブ地域からちやうど真東の方向に現存する大城砦都市の遺跡をいい、またひろい意味では、その大城市を中心とする附近一帯の数々の遺跡群をもいう。もつとも、現在では、この大城砦都市のあとの一部にある部落そのものを Tughluqabad といつている。この城砦遺跡の西端は、クトゥブ地域の中心にある奴隸王朝初期の大モスクである Qūwat al-Islām Masjid (クワットゥル＝イスラーム＝マスジッド) から約 7 km ほどであり、城壁南面の長さは、直線にすれば約 2km にも及ぶところの、きわめて大規模な城砦である。

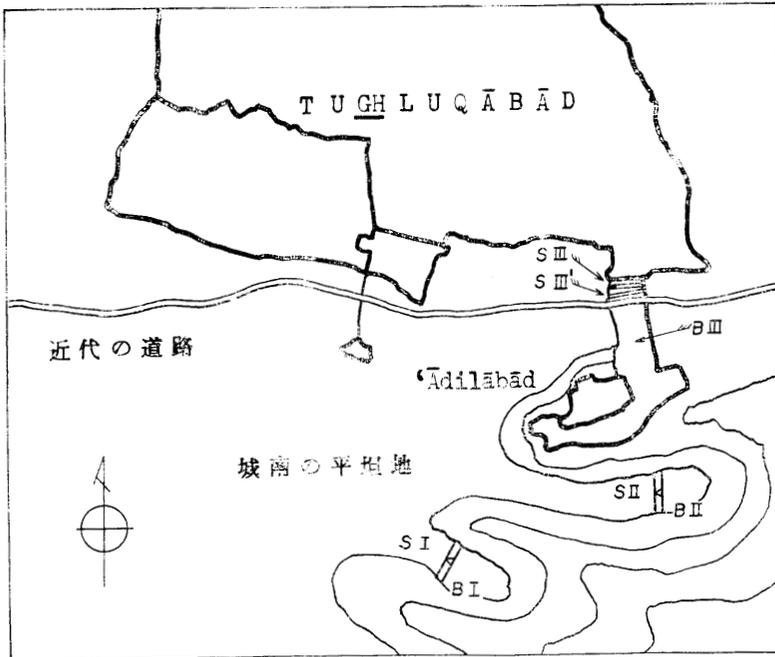
この大城市と大城砦に関する歴史的諸問題とその背景については、私も、いずれデリーの城市の變遷について記す場合にくわしく研究するつもりであるが、

本稿では、さしあたり、この大城砦の大部分が、トゥグルク朝の初代スルターンである *Sultān Ghiyāth al-Dīn Tughluq* によつて建設されはじめ、その死後、725 A. H. 年 (1325年) にスルターン位を継承したところの、いわゆる *Muḥammad bin Tughluq* が、つづいて、暫時の間、ここをデリー政權の首都としたことを述べておくにとどめる。また、主城砦⁽⁶⁾の東南方、約 350 m ほどをへだてて、もう一つ、ずつと小さい、小岩丘の上に建造された城砦の遺跡がある。この城砦は、ふつう ‘*Ādilābād* (アーディラーバード) と呼ばれている遺跡で、その南面に外壁の長さ約 500 m ほどの二重城壁をもっている、堂々たる構築である。‘*Ādilābād* が、はたして、いつ造営されたかは、文獻その他の資料では正確にはわからないが、ふつうには、‘*Ādil Shāh* (アーディル＝シャー) を稱したところの *Muḥammad bin Tughluq* によつて営なまれたものとされている。しかし、ここでは、‘*Ādilābād* 建造についての歴史的問題點は、別稿にゆずることとする。

この *Tughluqābād* 城砦都市の建設は、きわめて大規模なもので、その建造に用いられた大量の勞働力と資材とは、サルタナットの権力の問題として考えてもきわめて興味あることがらといえよう。しかし、本稿の問題解明の視角からすると、この城砦都市をめぐる水利についてのさまざまな問題が、現存する遺跡から復原提示し得るように思えるのである。城砦の内部においては、宮廷や要塞部分にも、また、一般人民の居住地であつたと思われる区域にも、大小の井戸や貯水池が設けられたらしく、今日まで現存しているいくつかの遺構からも、當時、水を確保するためにいかに多くの努力が拂われたかを、十分に知ることができるのである。これらの井戸については、別稿で紹介するつもりである。また、この都市の外縁、すなわち外城壁の外側の濠のあとをみると、この大きな城砦の防衛を目的として、それらの濠に水を満たすことのために相當な考慮が拂われたらしいことも、かなりのところまで復原推測することができるようである。しかも、このような水の確保と水の利用ということは、たんに

德里に現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

城砦の防禦を目的としたばかりではなく、同時に、他のさまざまな目的をも考察したうえで水利計画ではなかつたということが推測されるのである。そればかりか、こうした水利計画は、のちに述べるように、きわめて巧妙で、しかもかなり規模の大きいものであつた。たとえば、北部外城壁下部の自然岩壁地帯の地溝を、巧みに、しかも廣範圍に利用している點でも指摘できるし、また、築城に用いた石材の石切り場のあとと思われる凹地を、そのまま濠あるいは貯水地として利用するという巧妙な計画があらかじめ考慮されていたことも、十分に推察し得るのである。しかし、とくに、いわゆる Sulṭān Ghīyāth al-Dīn Tughluq Shāh の墓をふくむ著名な城砦型墓廟のある Tughluqābād 主城砦南



挿圖 1 Tughluqābād 城南の堰堤 (B)、水門 (S) の位置を示す。

方の地域と、そのすぐ東方の 'Ādilābād をふくむところの一帯の平坦な地域について、地表の自然傾斜と、附近の地形とを慎重に考慮したうえで、大規模な水利計画を考え、しかもそれを実施した點は、まさに巧妙かつ賢明なものといえよう。本章でまず紹介する Tughluqabad 堰堤群も、次章に紹介する附帯の水門施設とともに、Tughluqābād 城砦都市の水利計画のもつとも重要、かつ新味のある部分を占めるものと、私は考えている。ただし、これらの水利計画の規模とそのメカニズムの多くの問題點については、東大インド史跡調査團の主報告書のなかで、現地測量の結果を示す数字と圖面とによつて、かなり精細な報告が準備されつつある段階なので、それらに関連する具体的な内容は、本稿では、ふれることを、あえて避けている點を了承されたい。従つて、本稿では、これらの水利計画の大要と、その目的や機能についての私自身の歴史的考察を概述するにとどめたい。その意味では、本稿は、右報告書の前提的研究ともいうべき性質のものである。従つて、調査團の調査によつて得られた精細な測量數値はここでは用いず、むしろ、これまでの諸研究を参照しつつ、きわめて簡単な略圖⁽⁷⁾を載せておくにとどめた(挿圖1参照)。この略圖も、決して正確なものではなく、さしあつては、それによつて、この Tughluqabad 遺跡群のなかでの以下に記す三つの堰堤 (BI, II, III) および三つの水門 (SI, II, III) と放水路 (SIII') の大體の位置の相互關係と環境とを知つていただければよいのである。とくに堰堤 I, II の位置と附近の地形のコンターとは、ほとんど想像圖にひとしいほどの不正確さである。正確なものは、目下、調査團で準備中であり、主報告に載せられよう。

1. Tughluqabad 堰堤 I

Tughluqabad 堰堤 I としてまず紹介するこの堰堤は、挿圖1でわかるように、Tughluqabad の三つの堰堤遺跡のなかでは、もつとも南方に設けられているものであり、その規模も、次に紹介する Tughluqabad 堰堤 II にくらべ



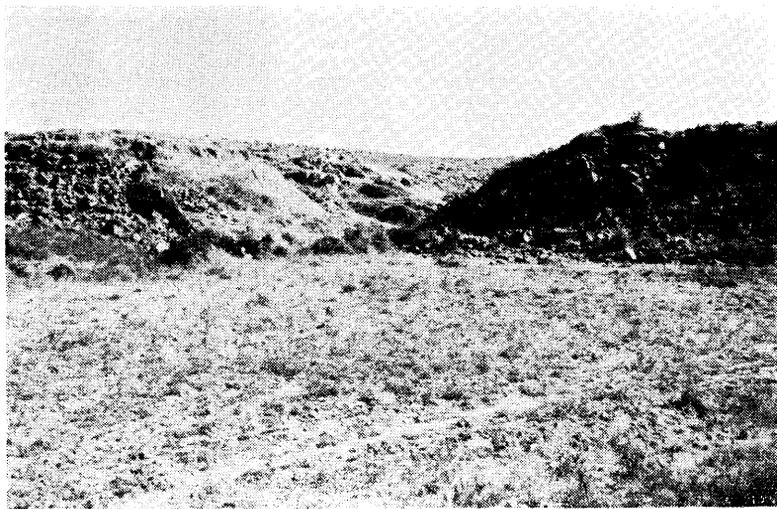
挿圖 2 Tughluqabad 堰堤 I. 南翼の西面の一部.

るとかなり大きい。ここに掲げた写真（挿圖 2）でわかるとおりに、かつて水門、あるいはそれに準じる水路があつたと推測される中心部の左右の西壁外面は、切り石を積みあげた堂々たる構築であつて、その石材の切り方と石積みの方法とは、Tughluqābād 主城砦の城壁に見える石材、特徴的な切りかたと石積みの方法とほぼ同じであるように見受けられた。現在、堰堤としての形を十分に留めているのは、中央の水路を中心として南北それぞれ約50mほどである。しかし、その中央の水路附近は、今日では、ほぼ崩壊してしまつていて、かつてそこにあつたと推定される水門がどのようなものであつたかは現在ではわからない。しかし、附近の地形と、この堰堤の遺構とをあわせて考えてみると、この崩壊してしまつた地溝の部分に、かつてなんらかの形の水門的な施設があつたこと、そして、後代に、その水路が、そこに集中する水の壓力によつて崩壊し去つたのではないかということは、のちに水門の項で説明するように、

容易に推測されるところである。

2. Tughluqabad 堰堤 II

この堰堤は、上に紹介した Tughluqad 堰堤 I にくらべると、その規模はやや小さい。その位置は、挿圖 1 でわかるように、‘Ādilābād の外城壁東南端の城門趾の南方約 150m ほどの地点にあり、ほぼ南北に走っており、その主要



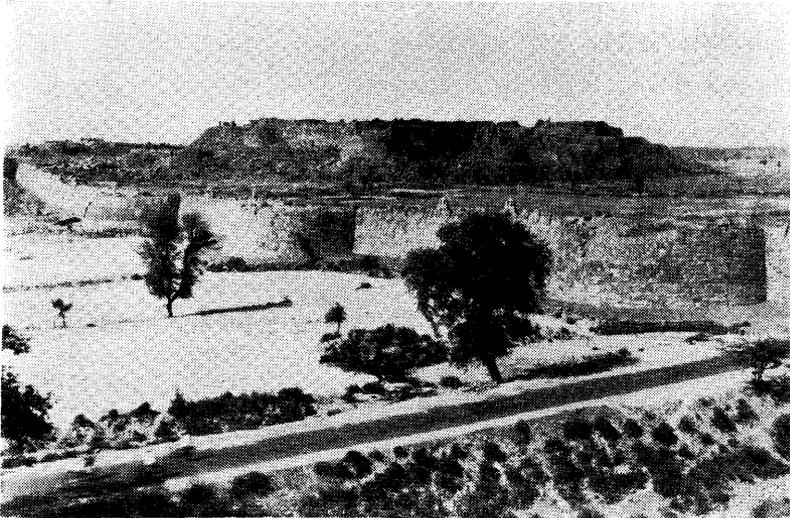
挿圖 3 Tughluqabad 堰堤 II, および水門 II (西方より撮影).

部分は石積みの構造であつたと想像される。ただし、寫眞(挿圖 3)でみるように遺跡の破損は著しい。石積み自体もその表面はほとんど崩壊してしまっているのであるが、堰堤 I の如く整然たる切り石積みであつたことは、やはり、寫眞の向つて右側の一部の切り石残存の事實からも、その可能性が十分にあると考えていいであろう。この堰堤の場合にも、集中的かつ系統的に水を集め得るように、中央部に、水門または水路の機能をはたすならんかの施設がかつて存在していたことは、前述の堰堤 I の場合と用じように推測されるところであ

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について
る。

3. Tughluqabad 堰堤 III

Tughluqabad 地域におけるこの第三の堰堤は、上に紹介した Tughluqabad 堰堤 I および II にくらべると、その構造も様式も、またその機能も、従つて建造目的そのものも、全く異なつていると思われるものである。Tughluqābād 大砦城の城壁は、その東南端の、今日、住民から Andhera Gate (アンデーラ門) とよばれている城門趾の西側約 150m の地敷で、南方に突出している。そして、この城壁は、さらに北方に曲折して、やがて西に走る。その結果は、大城市西南部を占める宮廷内城区域とのあいだに、いわば逆凹字型をつくり出しつつ、その間に城南の平坦地域の一部を囲む形となつている (挿圖 1, 17 参照)。この平坦地東側の突出した城砦の部分から、さらに南方に向つて、相当



挿圖 4 Tughluqabad 堰堤 III (東面). 後方は 'Ādilābad 城砦.

なひろい幅をもち、長さ約80mほどにわたる城砦壁が、南北に構築されているのである。この大城砦壁こそ、ここに私が、Tughluqabad 堰堤 III として紹介したい遺跡である。この構築物の東側は、いわゆるバステーションをもつところの典型的な城砦城壁の形式を備えており、壁としてもたいへんなひろさをもつものであるが（巻頭圖版 I—A、および挿圖 4 参照）、その西側は、現在、近代になつて設けられたと思われる新しい石壁となつている。（この建造物を、私は、本稿の視點からして堰堤として紹介するのであるが、これが、同時に、城砦壁としての機能をもっていることも十分に指摘しておく必要があると思う。しかし、本稿では、堰堤として扱う。）この堰堤は、さらにそのまま南に延びて、約 200m ほどでいわゆる 'Ādilābād の東部の内城壁に達するが、堰堤の東側の壁面は、そのままさらに延びて、'Ādilābād の外城壁の東南部を形成するぐあいになつている（挿圖 1、および、巻頭圖版 I—A を参照）。要するに、この Tughluqabad 堰堤 III は、'Ādilābād 城砦と Tughluqābād 大城市東南部とを接續する城壁をなしているわけである。そして、このことは、本稿の問題の視點からして、より廣範圍の地形と環境ということからみると、次のようにいえると思うのである。すなわち、この城壁の形をとる構築物は、'Ādilābād とその南方につづく岩盤丘陵地帯を南にひかえ、Tughluqābād 大城市の南城壁を北にして、その間の西側一帯にひろがつている平坦地の東端を仕切る役割りを果しているのである。

このことは、この Tughluqabad 堰堤 III が、Tughluqābād 大城市南方の、いわば小盆地ともいふべき平坦地の緩やかな傾斜面を利用して、水を貯える目的のために設けられたのではないかということ、まず私たちに推測させる。そう考えてみると、この堰堤の機能と、その建設の目的とは、すでに紹介した第 I、第 II の堰堤のように、水をせきとめてその散出を防ぎ、中央水路に導入集水して、そこに設けた水門から系統的にまとめて取水するという集水および取水のための堰堤の機能とは異なつて、城南の盆地状の平坦地に貯えられた

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

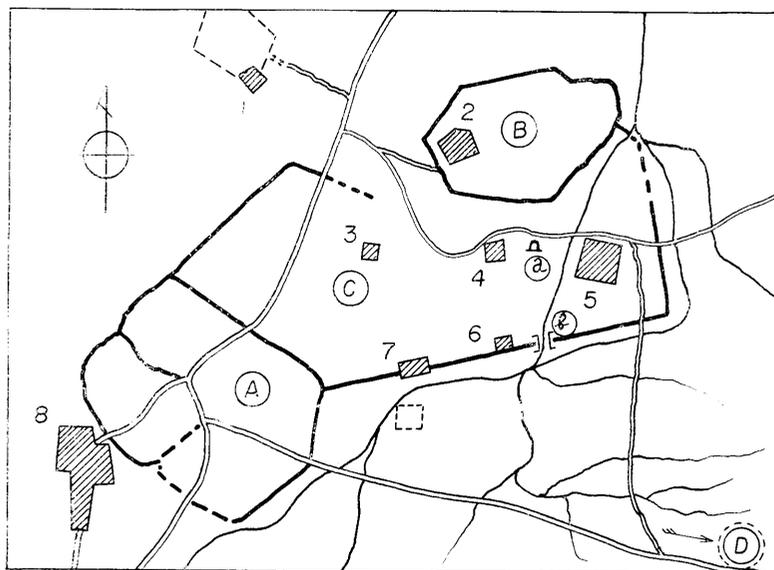
水をせきとめることによつて、その貯水をそのまま保存することを第一の目的としたものであることが推測されるのである。しかし、これらの水は、ある時期には、東方に向つて緩やかに低下している土地の傾斜を利用して東方の低地に放流し、あるいは灌漑水に用い、東方のジャムナー川の方に導く必要があつたと思われる。そこで、城砦に近い堰堤の北方部分に、放水路および水門施設が設けられて、随時、貯水の水量を調節し、放流することを計畫しているわけである（巻頭圖版 I—B 参照）。この水門と放水路については、次章で述べるが、以上の水利施設、とくに、そのメカニズムと水の動きについての詳細は、私自身の一應の観察による推論であり、それらが、主報告集に發表される、より科學的な測量値にもとづく考察の結果によつて、種々の點において訂正されることがあり得るかも知れないということに、一言、ふれておきたい。

II. Jahānpanāh 南壁堰堤

Jahānpanāh とは、トゥグルク朝時代に建設された城壁都市であつて、サルタナット史上、デリーにおける首都建設、移動の歴史のなかの重要な都市として、ひろくその名を知られた歴史的名稱である。しかし、本稿では、この Jahānpanāh の城壁、とくにその南部城壁が、都市を圍む城壁としての本來の存在意義のほかに、同時に、水利施設として利用され、事實、實際にそれにふさわしい機能をはたした建造物であるということを明らかにすることが、私の目的である。Jahānpanāh については、第 IV 章で述べるように、サルタナット時代の文獻にもその名稱がみえている。問題の南壁をふくめてのこの城砦に関する歴史的諸問題については、それらの文獻史料とあわせて考察する方がよいので、ここでは現存する城壁の現状の一端にふれつつ、若干の概括的説明をしとておくにとどめよう。

いわゆる奴隸王朝の時代にスルターンの居城として支配層の中心據點であつた舊デリーの城砦は、その建設者とされているヒンドゥーのラージャの名をな

まつて、のちに Qil'ah-i Rāi Pithaurā (キラエ=ラーイー=ピタウラー、すなわちラーイー=ピタウラーの城砦の意味)として、ひろくデリー地域の住民に知られるようになった。問題の Jahānpanāh とは、この城砦と、奴隷王朝の次のハルジー朝の治世に、Sulṭān 'Alā' al-Dīn Khalji (スルターン=アラウッディーン=ハルジー) によつて新しく建設された Sīrī (スィーリー)



挿圖5 Jahānpanāh 城砦略圖。[A] Rāi Pithaurā 城砦。[B] Sīrī 城砦。[C] Jahānpanāh 城市。[D] Tughluqābād (地圖外)。(部落) 1 Hauz Khas. 2 Shahpur Jat. 3 Begampur. 4 Shaikh Sarai. 5 Chiragh Delhi. 6 Khirki. 7 Hauz Rani. 8 Mehrauli。(遺跡) a Dargāh-i Shaikh Salah al-Din. b Satpulah. 道路は最近のもの、水流は19世紀後半の地圖を参照して挿入した(161 ページ参照)。

の城砦とを接續する意圖をもつて、トゥグルク朝のスルターンの Muḥammad bin Tughluq が構築した城砦都市、およびその城壁をいうのである。Jahānpanāh の城壁を、他の諸城砦との関係において簡単に圖示すれば、ほぼ、挿

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

圖5のようになる。次に、この Jahānpanāh 大都市の圍壁の現存する遺跡を、現在地との関連において説明してみよう。それには、上にふれたデリーの二つの舊城市についての説明が必要である。まず、いわゆる Rāi Pithaurā の城砦というのは、クトップ地域を中心とする大城砦である。また、Sīrī の城砦とは、かつて、二三の人びとから異論があつて論争を生んだことはあつたが、現在までにほぼ通説となつているのは、ニューデリーを南下してクトップ地域に走っているいわゆる Mehrauli Rd. (メヘローリー通り) に沿う Hauz Khas Enclave (ハウズ=カース圍地) の東方の小村落 Shahpur Jat (シャープル=ジャット) をその西端部に含むところの、ほぼ橢圓形の城砦趾に比定されている。現在でも、この Sīrī 舊城市の西部と西南部の城壁の一部や、そのバステーションあるいは大城門の遺構などは、廢墟として残存しているのである。そして、地圖のコンターをみても、また現地実際に赴いて観察した結果でも、この都市を圍んでいた城壁のあとは、今日なお、明瞭に辿ることができるのである。

ところで、この二つの舊城市と、Tughluqābād と Jahānpanāh とから、デリーは成立つていると、Ibn Baṭṭūṭa (イブン=バットゥータ) は、14 世紀のその著名な紀行文に記しているのである(後述 105 ページ参照)。そして、その Jahānpanāh については、Muḥammad bin Tughluq が、「四つの都市を一つの城砦に統合することを欲した」がためにつくられたものであつたが、出費がかさんだためについてその建設を中止したものであると、同じ Ibn Baṭṭūṭa はつけ加えているのである。⁽⁹⁾

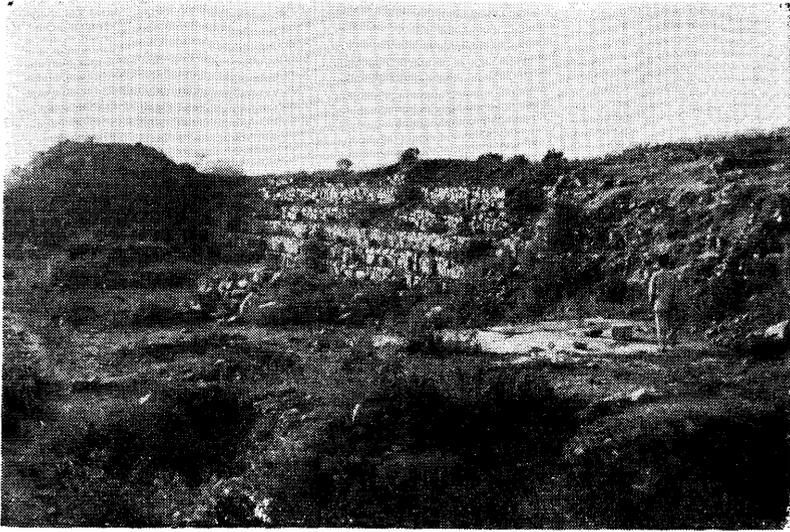
この Ibn Baṭṭūṭa の記述は、のちに述べるように、サルタナット時代の他の文獻史料によつても確認されるのであるが、このうちの「四城市」というのは、Jahānpanāh のほかに、あきらかに、彼が記している Dihlī (すなわち私がすでにふれた Qil'ah-i Rāi Pithaurā), Sīrī, および Tughluqābād の三城市のことをいつたものである。しかし、すでに述べたように、未完に終つたこの諸都市統合の大計畫のうち、Tughluqābād との結合については、實際

には、なんらの手もうたれなかつたであろうことは、現在の遺跡あるいは地形の状態をみても推測され得るのである。もつとも、Tughluqabad の西北方の地域には、岩盤上の丘陵が斷續して、もともと自然の要害ともいふべき地形を形成しているといえるほどなので、あるいは、そのまま放置したのかも知れない。しかし、Siri と Rāi Pithaurā 城砦とを結ぶ城壁は、現在、なお、きわめてよくそのあとを辿れるほどに残っているのである。それは、20世紀になつて刊行された諸地圖を参照してみても、コンターの走り方をみただけでも、はつきりと確認し得るほどである。さきにあげた略圖（挿圖5）によつてもわかるとおりに、Qil'ah-i Rāi Pithaurā は、その西北部を占める、いわゆる Lāl Kūt（ラール=コート）とよばれるふるい城砦の部分をもふくめて、現在、その遺構は、現地において、きわめて明瞭に辿ることができるのである。Jahānpanāh の城壁の遺趾は、その北西部の南端にあたる部分が、この Rāi Pithaurā 城壁の北西隅、すなわち、Katwari Sarai（カトワーリー=サライ）とよばれる現存部落の南々東約500mほどの地點にはじまつているのである。この Jahānpanāh 北西部城壁は、そこから現在の Hauz Khas Enclave 團地（念のために記しておくが、この名は、Hauz-i Khāṣ Haoze=ハースといわれる貯水池の遺跡に由来するが、現在のこの團地は、ちよつとはなれていて、Mehrauli Road の東側の新しい住宅地をいうのである）の方へ、北北東の方向に長い土壁が盛り上っているのである。それも、現在なお、比較的容易に辿り得るほどに残っているのである。ただし、その延長線、つまり、Jahānpanāh 城市の城壁の北方にあたる部分は、地圖の上でも明瞭ではなく、また、現状も、新しい道路や團地の建設工事のために、はつきりとは辿ることが難しい。もともと、この部分は、未完成であつたか、あるいは着工もされなかつたのかも知れないが、とにかく、地形の起伏する状況から推せば、略圖（挿圖5）に示したように、Hauz Khas Enclave 團地のあたりで東方に折れて、Siri 城砦に接續する計畫であつたと考えるのがもつとも妥當のように思われるのである。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

一方、Jahānpanāh の東南壁はどうであろうか。Qil'ah-i Rāi Pithaurā の北東隅、すなわち、ふつう Darwāzah-i Hauz Rānī (ハオゼ＝ラーニー門) の遺跡といわれている一つの門の遺構のすぐ北方にあたる地点から、かすかに北に寄りつつ東方に向けてほぼ一直線に残っている城壁の遺跡を、今日、明瞭に辿ることができるのである。現在、この遺跡を現地でみると、全体としては、かなりひどく崩れてしまつて土手か堤防といった感じのものにすぎない。しかし、この遺構は、Rāi Pithaurā 城砦東北隅からはじまり、現在の Malaviya Nagar (マラヴォヤ＝ナガル) の南端近くに位置する Hauz Rani という古い部落の南邊を通り過ぎ、さらに Khirki (キヒルキー) 部落を北方にみながら、全く一直線に延びていつているのである。そして、やがて、現在の Chiragh Delhi (チラグ＝デリー) 部落の東方を南北に走る近代的舗装道路をこえ、その東方の小丘状のマウンドに達し、そこから、ほぼ直角にその向きを北方に變える。そして、こんどは、北々西方にある舊 Sirī の城砦の東端に向けて走つてゆく。この部分の土堤の遺構は、現在、その北端部は定かではないが、少くともその大半を明瞭に辿ることができるのである (26ページの挿圖5 参照)。

この Hauz Rani→Khirki 兩部落を結ぶ線の南側にそつて、一直線に走つている Jahānpanāh の南城壁は、Qil'ah-i Rāi Pithaurā の北東部分から、上に述べた Jahānpanāh 城市南東隅の小丘状マウンドに至るまで、その全長は、約 3.5km ほどに及ぶ。そして、まさに一直線に走っている點が、きわめて特徴的である。このことは、この南城壁が、おそらくは自然の地形の起伏をそのまま利用した構築ではなく、ほとんど人工的な土盛りによる構築の結果ではないかということ推測させるものである。この Jahānpanāh の南城壁は、さきにもふれたその北東壁や東壁の遺構にくらべてみると、その残存の程度ははるかに良好であるといつていい。このことは、私見では、おそらく、それだけ慎重にこの南壁が造營されたために、現在まで比較的よく残つていると考えていいのではあるまいか。とくに、その遺構の現状について若干述べれば、Rāi



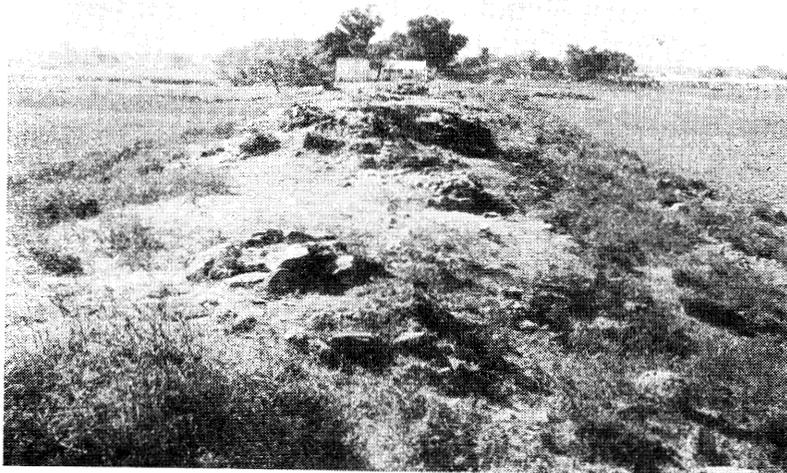
挿圖6 Jahānpanāh 南壁の西端部. Hauz Rani 部落西方 (挿圖5 参照).

Pithaurā 城砦との接觸部にあたる Jahānpanāh 南壁の西端およびそれに近い部分は、急斜面ではあるが一種の階段狀に築かれており、きわめてよく残つていようにみうけられたのである。もつとも、この部分は後代の補修の結果であるのか、あるいはトゥグルク朝時代の構築の様相を相當程度とどめているものであるのか明らかではない。この部分は、兩城砦の結合部分に近く、南部平坦地の、いわば隅にあたる部分に當るので、雨期や雨期あけに水が貯つた場合のことを考えれば、あるいは、後代に補強される理由も十分に認められないことはない。また、城壁南方に墓のようなものが残つているのをみてみると、なにか別の目的で後代に補強されたのかも知れない。この點はのちの觀察にゆずりたい。

この Jahānpanāh 南壁は、單なる土壘や土壁ではない。それが、碎石とモルタルとをあわせ用いることによつて、かなり堅固、慎重に構築されていることは、現在、この南壁の遺跡の頂面を歩いてみれば、それらのものが露呈さ

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

れている部分が容易に認められることから知られるのである。しかも、この城壁が、単なる城市の圍壁ではなく、のちに私も指摘するように、堰堤としての役割りをもつものとして利用されたばかりでなく、また同時に防衛機能をもつものとして建造されたことは、この構造物の隨所に、ある程度の間隔を置いて設けられている半圓形の、かなり大きなバスティヨンの遺構と推定される部分があることからも明らかにわかるのである。それらは、規模においては、Tughluqābād 大城砦の城壁の諸所にみられる大バスティヨンには及ばぬとしても、この城壁が、城市の防衛、防禦の意圖をもつて造られたものであることを知らせてくれる。もちろん、その高さも Tughluqābād 城壁にくらべれば、問題にならぬほどの低さであるし、現状から推してみると、城壁の保壘として、おそらくは、建設なかばの高さのままに放棄し、未完成に終わったものであつたのかも知れない。



挿圖7 Jahānpanāh 南壁の一部の遺跡. Hauz Rani 部落東方.

しかしながら、Jahānpanāh 全城壁のなかでみてみると、この南壁が、他の部分の城壁にくらべてずつと強固なものであつたかも知れないことは、例えば、北東部、東部の圍壁の遺構の現状とくらべてみるとよくわかるのである。しかし、それについては、これ以上にふれるつもりはない。ただ、この南壁の堅固さは、工事の順序とか偶然の結果ではなくて、他の方面の城壁にくらべて、この南壁だけが、単なる圍壁としてのみならず、別に、特殊な機能をはたすべき役割りをもたせられたが故のことではないかと想像するのである。すなわち、その役割りとは、のちに述べるように、この南壁を水圧に十分に堪えさせるということである。いいかえれば、この南壁が堰堤としての特別な構造上の強固さを考慮して構築あるいは改造されたのではないかと推定することも、あながち全くの空想とはいえないのではないかと考えるのである。

全長約 3.5km にもおよぶこの壁堤には、現在、小水門が一個所、近代的構築法による jhaṇā (ジャルナー)、すなわち低水路ともいうべき水利施設が二個所あり、そのほかにも一二の施設が見出されるが、そのほかに、Satpulah (サトブラ) と呼ばれる大水門の遺跡が残存しているのである。これらの水門および他の水利施設に関しては、次章で改めて紹介するが、そのなかで、Satpulah 大水門の遺跡は、あきらかにトゥグルク朝時代の建造物と考えられるものであり、しかも、本稿の研究のもつとも重要な対象の一つであることにふれておこう。

3. トゥグルク朝後期に属すると推定される堰堤について

この節では、トゥグルク朝後期に属すると推定される堰堤の遺跡について記すのであるが、このような時代区分の根拠は、現存する遺跡の構造や様式ばかりでなく、二三の遺跡については、ほぼ同時代の文獻史料との関連において指摘できるのである。すなわち、のちに述べるように、トゥグルク朝後期にはかなりの数の堰堤が建設されたことが文獻上から推定され、また、現存する遺跡

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤のおよび水門の遺跡について

に比定し得ると思われる堰堤の名稱が、同時代の文獻にあらわれているのであり、そこでは、いずれも、Firūz Shāh が建設したものとして記されているのである。

さらに、このような時代の比定を可能ならしめる根拠の主なもの、それぞれの遺跡から知り得る構築資材、およびその構築技術と方法、あるいは様式などの比較からする年代の推定と、問題の遺跡の周邊に現存する建造物との関連、あるいはその環境にもとづいて行なう考察などである。トゥグルク朝後期、とくに Firūz Shāh 時代の建造物は、デリーの遺跡のなかでは、比較的数多く残存している方である。とくに、Firūz Shāh の治世に構築されたと確定し得るものは、彼が建設したデリー地域の新都市 Firūzābad (フイーローザーバード) の宮廷を中心とした、いわば内城の遺構で、現在、一般には、Kotla of Firoz Shah (コトラ=オウ=フイーローズ=シャー) とよばれている遺跡や、また、現在、Hauz Khas (ハウズ=カース) と一般に稱されているところの、このスルタンの墓をふくむ遺跡群をはじめ、デリーの諸地域に散在しているのである。そのなかには、Firūz Shāh 時代の建造であることを明瞭に示すところの、いわゆる歴史碑文が、その遺跡そのものになおのこつているモスクや墓などもあるが、また、その建築資材や、構築技術、様式などにおいて、あきらかにこの時代の特徴を示しているものも多いのである。本稿で問題とする堰堤や水門にも、資材や、構造あるいは様式上で Firūz 時代の特徴を指摘できるものがいくつかあるのであつて、このことが A. S. I. の Delhi Monuments List にみえる時代区分の記述においても、Firūz Shāh 時代と推定する大きな根拠となつているのである。それらの諸特徴が、いくつかの點では、きわめて著しいものであることは、私自身がデリー地域の現地調査において、これらの遺跡をみてまわつているうちに、それらの特徴を見出した建造物を Firūz Shāh 時代のもつと推定してほとんど誤まるところがなかつたという経験からも知られよう。とくに、ここでとりあげる堰堤の場合には、その堰堤そのものの一部に、

あるいはその附屬建造物のなかに、またはその近傍の建造物のうちに、あきらかにこの時代の構造・様式の諸特徴が見出されるものがあるのであり、これが、これらの堰堤そのものの建造の時代を推測させる大きな理由となつてゐるわけである。それらについては、以下の敘述においても、個々の場合に、必要に応じてふれるつもりであるが、主報告書でとりあげる遺跡についてのくわしいことは、それにゆずりたい。ただし、時代区分としては、本稿では、Firūz Shāh 時代としないで、トゥグルク朝後期としておいた。

すでに述べておいたとおり、この時代に屬すると思われる堰堤を、私は一應、二種類に分けてみた。そこで、次に、それに従つて、遺跡の所在地と、その現狀、およびそれについてのいくつかの問題點などについて述べてゆくことにする。

I. 人工構築による堰堤

この項に入れていいと思われるデリー地域の遺跡を、私は、現地で、四つ見ている。しかし、別に他の著者の敘述と、A. S. I. 保存の寫眞とにより、その存在が決定的と思われる遺跡が一つあるので、次に、その五つの遺跡について紹介しよう。

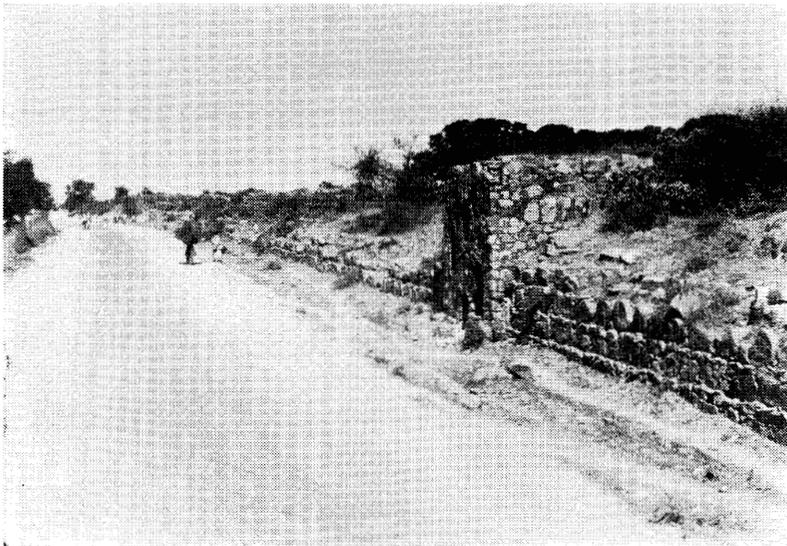
1. Mahipalpur 堰堤

この堰堤は、デリー地域に現存する、この時期に屬する遺跡としては、もつともよく残つてゐるものの一つである。また、私がのちに述べるように、同時代の文獻にも比定の根據が見出し得る對象と考えられるので、東大の現地調査にあつても、とくに測量を詳細に行なつた遺跡である。Mahipalpur という名は、デリー地方に權力を及ぼしていた Chauhan (Chauhāna) Rajput の支配者の一人 Mahī Pāl (マヒー＝パール) に由來するものと推測されているが、おそらくは、デリー地域において、その歴史を古くまでさかのぼることのでき

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

る村落の一つではあるまいか。この部落の中心には、現在でも、部落民が、Maḥal (マハル、すなわち宮殿) と稱しているところの、あきらかにトゥグルク朝後期に属すると思われる建造物がある。⁽¹⁰⁾ この Mahipalpur については、私も、拙稿第1論文で、Sulṭān Ghārī, すなわち Sulṭān Shams al-Dīn Ilet-mish の子の Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の墓廟の遺跡について述べたくだり⁽¹¹⁾でふれておいた。すなわち、メヘローリー通りを、クトップ地域を通りこして Cantonment (キャントンメント) および Palam (パーラム) 方面に向つて北西西方に進むと、その道路に沿つて、主にその北側にひろがっているところの、かなり大きな部落である。

問題の堰堤は、この部落の東端に沿つてほぼ南北に走り、その南半部分は、やや東南方に折れている。その構造のくわしい點は、さまざまな數値、圖面とともに、調査團の主報告書に述べられるはずである。この堰堤は、私がさきに、



挿圖8 Mahipalpur 堰堤の南翼の一部 (卷頭圖版 II—A を参照). 手前の突出部は水門.

トゥグルク朝前期の堰堤として紹介したグループに属するものとは、その構造と様式において全く異なっている。くわしいことは主報告書にゆずつて本稿では一切省略するが、その現状の一端は、巻頭圖版 II—A および挿圖 8 の寫真から承知されたい。この Mahipalpur の堰堤の場合には、次章に述べるように、水門が、北半部と南半部との兩翼に、それぞれ、一つずつ附設され、その遺構は今日でも見ることができる。

この Mahipalpur 附近の地形の特徴は、本稿での重要な推論の形成に関連しているので、ここで少しくふれておきたいと思う。附近の地形は、この部落を中心として、大體において平坦地といえるのであるが、それでも、きわめて緩やかながら西方に向つて傾斜しているようである。そして、部落東方の、農耕に適すると思われる平坦な土地をへだてて、部落の北東、東、および東南方には、緩やかな丘陵地帯が存在しているのである。これらの地帯は、デリー地域の西南部に存在している岩盤の丘陵地帯であつて、問題の部落東方の平坦地は、その西側にあたるわけである。部落の南側を走る現在の Mehrauli Road の南方の地域は、岩盤地帯が散在して荒地の様相を呈しているのであるが、そのメヘローリー通りの北側の Mahipalpur 部落東方平坦地一帯は、現在では、きわめて良好な耕地となつている。従つて、この堰堤は、まさに、この平坦な耕地に向つて両手をひろげているかつこうになつている、といつてもいいであろう（巻頭圖版 II—A 参照）。

この遺跡について、これまで、もつともくわしく紹介しているのは、A. S. I. の Delhi Monuments List である。この遺跡は、その第IV巻の Palam Zail の Maipalpur の地區に、No. 108 として収録されている。⁽¹²⁾この A. S. I. の報告書も指摘しているように、この堰堤の建設の目的が、上述の北東、東、東南方の丘陵地帯に降る雨水を集めて、その部落東側のひろい、平坦な耕地に集め、それを貯水することによつて人工氾濫をおこし、その結果の農業生産力の上昇を企圖したものであることは、現地に赴いたものには、たれの眼にもまず

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

明瞭であろう。従つて、この堰堤は、あきらかに、農業生産力の向上を目的とした農業用水利施設と考えていいであろう。

なお、現在は、この堰堤の北方部分に近代になつて建設されたとみられるコンクリート製の低平水路がある。このことは、この堰堤の遺構を利用しつつ、現在なお、水利調節が、この近代的コンクリート製のジャルナーによつて行なわれていることを示しており、私が部落民に聞いたところからも、そのことは確認された。また、この近代の建造物は、大洪水の際には、水をうまく集めて部落の北側を西方に流して、その被害をくいとめる役割りを演じ、その點でも、部落を守る機能をはたしているという。これは、遺跡が、現代でも、その一部を改築あるいは増築することによつて、農業水利および治水に役立つている好例といえると思う。この遺跡の東側の農地にできる作物の豊かさ、道路の南側のすぐ近くの瘠せた荒地に生えている植物をくらべてみたとき、私自身、この堰堤構築の知恵について、きわめて感慨深い印象を覺えたことをつけ加えておきたい。

なお、この Mahipalpur の堰堤の遺跡については、最近では、Y. D. Sharma 編のインド政府考古調査局によるデリー周辺の遺跡案内書にも言及されて⁽¹³⁾いる。これについては、古くは、1860年代に、Cunningham が Firūz Shāh Tughluq の建造物として、1850年のデリー考古學協會の刊行誌 (Journāl of Archaeological Society of Delhi) を註記して、簡単にその存在について述べて⁽¹⁴⁾いる。しかし、この間、他に、この遺跡についてふれている報告はあまりなく、まして、ここに紹介したようなくわしい説明や、この堰堤の建設目的や機能などについての特別な考察を記したものは全くないのである。

2. Station Road 堰堤

この堰堤の遺跡の存在については、私は、A. S. I. の Delhi Monuments List の記述ではじめて知らされた。その第IV巻の Palam Zail, Band Shikar

の地區に報告されているこの遺跡の位置について、同報告書は、“In the depopulated village of Majra, near the water supply tanks of the New Cantonment” と記している⁽¹⁵⁾。私は、この Majra という村については、これまでそれに言及した文献を知らない。現在、この遺跡のあたりは、近代的な道路およびデリーの Cantonment 地區建設のため、むかしの環境は全く變つてしまつたものと考えていいだろう。Delhi Monuments List の敘述は、他の堰堤にくらべると、比較的くわしい方であるが、1962年はじめに、私が自らこの遺跡をみた印象は、のちに述べるように、D. M. L. が公刊された 1910 年代の状態にくらべると、遺跡の崩壊の程度はずつと著しいようである。しかし、この興味ある遺跡が、新しい舗装道路網の建設に際して、全面的に破壊されてしまわなかつたのは、さいわいなことというべきであろう。

さて、D. M. L. によつて、この遺跡がデリーの Cantonment 内にあると豫想したときには、私は、それがすでに破壊されたか、あるいは現存していても、軍事施設の多い地域内にあるために現地での検証はまず不可能であろうと想像し、確認についてはほとんどあきらめていた。しかし、1962年初めのある日、デリー大學を停年退職された P. Saran 氏が、「ニューデリー南郊にある Firūz Shāh 時代の bund をみたことがある」といわれて、三枝朝四郎氏と三人でい⁽¹⁶⁾つたのが、思いがけなくも、この遺跡だつたのである。現在の環境からその位置をいうならば、次のとおりである。すなわち、ニューデリー中心地域から Cantonment 地區へ通じる Parade Road (パレード通り) を南に下つて、Cantonment に通じる Station Road を右折して約 120m ほどの地點に、この堰堤の遺構はのこつている。そして、遺跡は、Station Road をはさんで、その南北の兩側に、ほぼ南北に走るかたちで現存しているのである。Parade Road はもちろん、Station Road も立派な舗装道路で、その上を自動車で走つているかぎりには、この低い堰堤の遺構は、おそらく、誰にも気がつかないであろう。道路の南側に残つている遺構は、約50mほど南に下つてからさらに東

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

の方へ向つて折れているのであるが、この道路南側の残存部分は、かなりきれいに残っている。一方、道路の北側は、インド人のいわゆるジャンガル（ジャングル）地帯で、タマリンドの樹や名の知れない灌木が繁茂しているので、道路からみる限りでは、遺跡の状態はもちろん、その存在さえも、ほとんどわからないほどである。この樹間をわけて低地に入ると、上に述べた道路南側の遺構の、あきらかに北方延長とわかる堰堤の遺跡が、ジャンガルのあいだに残つ

ているのを見出すことはもはやむずかしいことではない。そして、道路から約 70m か 80m ほどの地点に、かつてはいくつかの部屋や門をもつていたと推定される建造物の廢墟があり、そのすぐ北東方にあつて、水道孔をもつ水門施設の遺構が残っている。これらの建造物の状態は、現在では、註に引用しておいた Delhi Monuments List の1910年代のディスクリプションとくらべてみると、その崩壊の程度がき



挿圖9 Station Road 堰堤北翼の一部。人物のすぐ右上方に水門趾（挿圖23参照）がみえる。

わめて著るしいようである。そのうちでも、前者すなわち廢墟と化した建造物の方は、その入口の門のあたりをのぞくと、ほとんど崩壊してしまつており、ただ、その入口部の基石のみは、きわめてよく残っている。これらの基石の石

積みやモルディングなどの特徴や、その他、建造物のさまざまな部分からうかがえる特徴は、私には、Firūz Shāh 時代の様式と構造のそれをはつきりと示しているように思われたのである。実際のところ、私は、この建物の入口の基石の残存部をみて、のちに記す Būlī Bhatiyārī kā Maḥal の東入口の門の基部を直ちに思い浮べたほどであつた。なお、この堰堤に附設されている水門の部分については、次章で述べることにする。そもそも、この堰堤の遺跡については、東大の調査では、他の團員による観察も測量も全く行っていないので、この機会に、少しく私見を記しておくことにする。

このあたり一帯の地形と環境とについて簡単に述べてみよう。この遺跡のある附近は、デリーとニューデリーの西側を北から南南西にかけて走っている、ふつう Ridge (リッジ) と呼ばれている低い丘陵地帯の西側にあたっているのである。このリッジの頂部には、現在、Upper Ridge Road (アッパーリッジ通り) という快適なハイウェイが通っているのであるが、これが、Ring Road (リング通り)、Kitchner-Parade Road (キッチナーパレード通り) と合流する五叉路のあたりは、リッジの高さも、ずつと低くなっている。なるほど、こうした地形の状況をみても、問題の Station Rd. 堰堤の遺構のあたりで水をせきとめることによつて、リッジ南部の地形の傾斜を利用して若干の水を貯えることは可能なのである。ただ、さきに紹介した Mahipalpur 堰堤の場合にくらべると、この Station Road 堰堤の場合には、リッジに近いこともあつて、それほどひろい地域にわたつて水を集め、貯えるというほどの規模はもち得ないように思われる。1929年刊行のデリーの地図をみても、この位置には堤防の標識がのせられてあり、さらにまた、1950年刊の地図にも、道路の北方にだけは堰堤らしきものが簡単に記されている。この1950年刊の地図は、従つて、この堰堤の半分しか載せていないということになるわけである。

この堰堤の建設の目的も、デリー = リッジの西の斜面の地形を利用して、雨水を集め、それを貯水することにあつたものと推測されるのである。ただし、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

このあたりは、リッジの西面のスカートにあたり、岩盤が多い地帯で、現在でも、道路の北側は灌木の密生しているジャングル地帯で、はたして農耕地として適している土地かどうかはきわめて疑わしい。こうした状況は、サルタナット時代にあつても同じであつたであろうことは、想像するに難くないところである。ところで、この堰堤については、最近の A. S. I. のデリー遺跡案内を書いた Y. D. Sharma もふれておらず、私の知る限りでは、すでに紹介した Delhi Monuments List 以外にこの遺跡に言及したものはないようである。この A. S. I. の1910年代の報告書は、この遺跡を収録している地域の見出しを“Band Shikar”としているのであるが、この地名は、あるいは、この遺跡に由来するところの、この附近一帯の歴史的地名なのかも知れない。のちに述べるように、この堰堤に附設されているもの水門は、そのままでは用をなさなくなつていたらしいが、おそらく1910年代に新しく水門施設が補設されたらしい。そのことから、この古い堰堤の遺跡が、20世紀になつても、雨水の貯水や排水、水量調節などのために利用されていたことがわかる。その使用の理由や方法は、Mahipalpur の場合とは少しは異なるものがあるろうが、サルタナット時代の建立と思われる堰堤遺跡が、近代になつても、改築されて利用されている一例として面白い。

なお、ついでに書き添えておくと、実は、P. Saran 氏の案内で、三枝氏と私とがこの遺跡を確認することができた際、三枝氏と私の二人とも、そのカメラのフィルムがすぐになくなつてしまつたのであつた。そして、次の機会を期しているうち、ふたたびこの軍營地域に近い遺跡には行くチャンスを失つてしまつたのであつた。従つて、私たちの写真資料が、この遺跡に関しては、きわめて少ないのが、いまにして思えば、たいへん残念である。

3. Būli Bhatiyāri kā Maḥal 堰堤

Delhi Monuments List の記述⁽¹⁴⁾をみて、“Boli Bhatiyari ka Mahal” とよ

ばれる遺跡を、1960年のはじめに訪ねたのは、東大調査団員のなかでは、山本團長が最初であつた。第2次調査ではじめて、私も、Firūz Shāh 時代に屬するとされるこの建造物に行つてみる事ができた。この遺跡は、Delhi Monuments List では、Delhi Zail の Banskoli という地域のなかに収録されているが、現在では、この地名は使われていないようである。ニューデリーの西方を走るリッジを南からさかのぼつて辿ると、途中で一應切れて、その延長が、ふたたび Civil Lines 地區で上昇している。その南部リッジの北端に、Būli Bhatiyārī kā Maḥal とよばれる小城砦風の、一風變つた建造物が残つているのである。その位置を、現在の道路を基準にしていうと、ニューデリーの北部の中心地 Connaught Place (コンノート=ブレース) から出發する Panchquin Road (パンチクイン通り) の延長上の Link Road (リンク通り) が、すでに紹介した Upper Ridge Road と合流しているロータリーの東南方、約 200m ほどの地點に存在する。そして、この城砦風建造物の西北側に接して、半圓形の近代的貯水池があり、鐵製の大水道管が、この地の東側を南北に走つている。そして、ここで問題としてしているところの、Būli Bhatiyārī kā Maḥal と名づけられた遺跡は、この小城砦風建造物の北側に、その遺構の一部をとどめているのである。

この堰堤と、次章に記すところの、この堰堤に附設されていたと推定される水門については、東大の現地調査では、とくに、くわしい調査對象としてはとり上げなかつたので、本稿では、他よりやや詳細にふれておくことにする。Delhi Monuments List が刊行されはじめた 1910 年代後半のころには、現存する近代的施設の貯水池は、まだできあがつていなかつたであろう。右報告書の記述によれば、この堰堤は、もつともひろいところで、17フィートの幅もち、500フィートの長さで、高さは 24 フィートもあつたと記されているのである。この A. S. I. の報告書によると、その堰堤の一部に設けられていた水門の階段を上ると、bund の頂部に出られると記されているのであるが、私が現

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

地でみた限りでは、現状は、1910年代のこうした状態とは全く違つてしまつて
いるようである。現在、この堰堤は、その大部分が埋没されてしまつてい
るといふてよい。この堰堤の東側は、いまでは地溝になつていて、そこに、前述の
太い鐵製水道管が敷設されていて、そのあたり一帯は、灌木の繁るいわゆるジ
ャングル地帯となつている。上述の小城砦風建造物の入口に通じる道路の西側
には、それほど大きくはないが、半圓周型の近代的貯水地があり、Maḥal の
遺跡の西壁が、まさにその半圓の直線部の南端部分を構成しているというぐ
あいになつている。問題の堰堤は、Maḥal の遺跡の東北部の入口の門のあたり
から、現在の道路の地表にその遺構の一部をあらわしながら、北に走つている。



挿圖10 Būlī Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤の一部遺構。

その東側の壁面は、一部分露出しているので、今日でもその石積みをみるこ
とができるが、この露出した東側壁面は、私のみるところでは、必ずしもすべて
オリジナルなものではなく、のちに補強改修されたところがあるようである。

Maḥal より北方約 100m ほどの地点の東壁面には、半圓形の坑道があるが、そのなかに入つてみると、おそらくは Firūz Shāh 時代のものと推定される水門の水道孔がのこつている。これについては、次章の水門の部分でふれるであろう。要するに、この堰堤については、現在のところ、地表面の一部と東側地溝の一部に露呈されているところの遺構の若干の部分をつかひ得る程度である。このような現状のもとでは、ここに存在していた堰堤と水門の、建設當初の状況を、大ざっぱに復原して想像することは一應はできても、Delhi Monuments List に記されているような 500 フィートにわたる遺構の確認はもちろん、その全貌を把握することは、到底、無理である。

現在の地形からみると、この附近は、デリーのリッジの南半部の北端に位し、北に向つてやや低く下つてゆく部分に當つている。ニューデリー建設、貯水池、水道および道路の建設工事などで、その舊状は著しく改變されてしまつたと思われるので、もと、この附近一帯の地形や環境がどのようなものであつたかは、今日では、なかなかわからない。しかし、ほぼ南北に走つていたと推定されるこの堰堤の東側が、次第に、東北方および東方に向けて低くなつていた状態は、おそらく昔も同じであつたであろう。これに反して、リッジの西側、とくにその南方は、次第に高くなつてついにリッジを形成するわけであるから、この地点に設けられた堰堤の目的は、その西側一帯における貯水にあると考えるのがもつとも自然であろう。つまり、この堰堤によつて、現存する近代的貯水地と同じ側に、現在の貯水池よりはもつとひろい地域にわたつて水を貯えることを目的としたものであろう。この堰堤は、現在われわれの目につく露出部分からずつと北方へ延びていたと考えられるわけであるが、右のような貯水目的を考えると、その北部堰堤部分は、あるいは、やや西方に向けて、緩やかに彎曲していた可能性もあると、私は思う。従つて、この堰堤の南端にあるところの、いわゆる Būlī Bhatiyārī kā Maḥal と稱する小城砦風の建造物自體が、とくにその西面の壁で、この堰堤とともに貯水のための堰堤の役割りを演じていた

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

と考えて、おそらくは誤まつていないと思う。つまり、この Maḥal は、貯水を豫定していた地域範囲のほぼ南端にあつたと推測していいのではないであろうか。そもそも、この遺構のある地域一帯は、リッジの一部といつてもいいほどの位置にあるわけであり、従つて、一般の農耕に適した土地とはいえないのである。ただし、東側一帯は、少くとも地形はずつとゆるやかであり、ある程度耕作の可能性はあつたかも知れないが、やはり相當の荒地のようである。いずれにせよ、さきに紹介した Mahipalpur 部落の東側の耕地のように、耕作に適した好条件の土地ではない。

ところで、Būli Bhatiyārī kā Maḥal とよばれる建造物そのものは、なかなか堂々たる規模をもつものであり、また、そのふるい姿をよく留めている遺跡といつていいであろう。この建物自體については、19世紀の Syed Ahmad Khan 以来、さまざまな書物が言及している⁽¹⁸⁾。この Maḥal の名稱である Būli Bhatiyār については、あとで紹介する Ahmad Khan の説明以外に注意すべき所説はないようである。この堰堤について、Syed Ahmad は、「この *band* は、たいへんよくつくられていて、現在まで、わずかの損傷をのぞくと、ほとんどこわれていない」と記しているのである。これを、すでに紹介した Delhi Monuments List の1910年代後半の敘述と讀みあわせてみると、この Maḥal の建物のみならず、北方にあつた堰堤や水門施設そのものも、少くとも20世紀の10年代までは、たいへんよい状態のままにのこされていたのではないかと想像させられるわけである。ニューデリー建設の諸工事が、やむを得ず、ふるい遺跡を葬り去つた一例といつていいのではあるまいか。

Syed Ahmad Khan は、この地で、毎年、Asāḥ (アサール) の月の満月の日に、Paūn Prachhiyā (パウーン = プラチヒヤー) の祭りが行なわれるということ、その著 *Āḥār al-Ṣanādid* のなかに記している。それによれば、この日には、バラモンがここにやつてきて、空を見つめて、モンスーンの雨占ないをしたという⁽¹⁹⁾。この事實は、14世紀のムスリムの支配者が造營したと

思われる水利施設が、ずつとくだつて、19世紀のなかごろになつて、雨期の雨の状態を心配するインド人にとつて、ヒンドゥーの雨占ないの祭祀が行なわれる場所となつていたことを示して、きわめて興味深い。A. Cunningham は、この遺跡のことにはふれていないが、Carr Stephen (1876 年刊) は、この堰堤にふれ、もはや當時は、「使用されてはいないが、よく保存されている」ことを述べ、「長さ518フィート、幅17フィート、高さ22フィート」と、その数値までをあげている。⁽²⁰⁾ この数字が、さきの1910年代の D. M. L. の報告しているものに近いことに注意しておきたい。最近のものでは、Y. D. Sharma がこれにふれているが、その内容は、簡単なもので、特別にここに紹介することはない。⁽²¹⁾

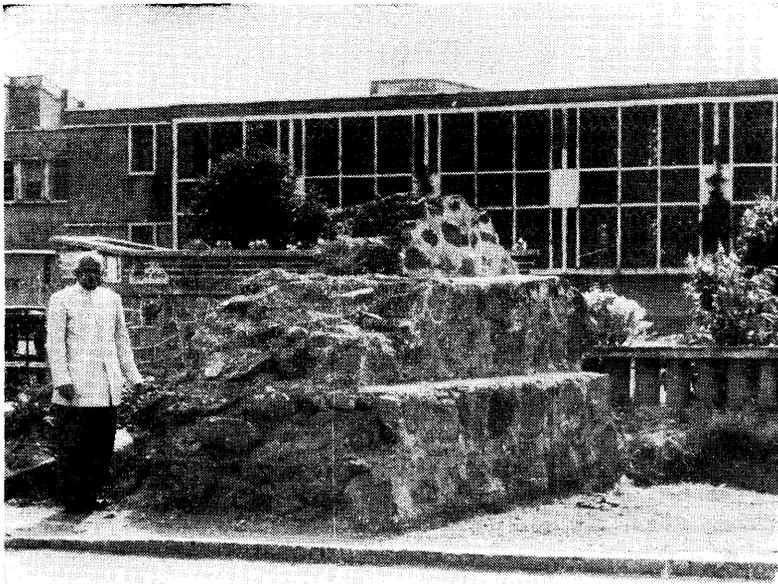
なお、この堰堤の西端の小城砦風の建造物が、Būli Bhatiyārī kā Maḥal とよばれるに至つた事情については、Syed Ahmad が興味ある説を紹介している。⁽²²⁾ 彼によれば、いつのころからか、Bū 'Alī Khān Bhaṭī (ブー=アリー=ハーン=バハティー) なる人物がこの建物に住んでおり、そのため、この人物の名が建物の名となり、Maḥal という語とともに後世に伝えられたのであろうというのである。この Ahmad Khan が紹介した傳承については、Delhi Monuments List も、くりかえして記している。

その Syed Ahmad をはじめ、その後の諸著のほとんどすべてが、この Maḥal について、Fīrūz Shāh が建設したものであるという説明をしている。Ahmad Khan は、Fīrūz Shāh が Kūshak Shikār を建てた年、つまり、「ほほ 755 A. H. 年、すなわち 1354 年」の建造と記している。しかし、この Kūshak-i Shikār、すなわち狩獵宮ともいうべき建造物については、たしかに、同時代の Minhāj al-Dīn Sirāj 'Afif にもその名が見られるのであるが、しかし、⁽²³⁾ この Kūshak-i Shikār が問題の Būli Bhatiyārī kā Maḥal に當るということにはなんらの證據もない。従つて、Ahmad Khan のこの所説は、そのまま採用するわけにはいかない。しかし、この問題は、これらの堰堤の建設目的や、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について
それに附属して造営されたと思われる建造物について考察する第 VI 章において、ふたたびふれるつもりである。

4. デリー大学構内堰堤

ここに私が紹介する堰堤の遺跡は、A. S. I. による 1910 年代の詳細な調査報告書、Delhi Monuments List にも収録されていないもので、従つて、私自身も、この遺跡の存在については全く知らなかつた。この遺跡の存在について私に知らせてくれ、自ら、私と三枝朝四郎氏とを現地に連れていつてくれたのは、P. Saran 氏であつた。同氏が私に話してくれたところでは、デリー大学設立工事のための整地以前には、この堰堤は、かなりの長さにとわたつて存在し、もとの姿をよくとどめていたという。ここに掲載した写真（挿圖11）は、その



挿圖11 デリー大学構内堰堤の遺構の一部。左方に P. Saran 氏がおられる。

遺跡の一部であるが、P. Saran 氏が現地に案内してくれたときに、同氏とともに写したものである。現在のこつている遺跡は、きわめて断片的なものであるが、その位置を大ざっぱに言えば、ほぼ、次のとおりである。すなわち、Rāmjas College (ラームジャス=カレッジ) の南方の競技グラウンドの西南隅の壁外にそのあとが若干残っているのが、今日みられる遺構のもつとも北端らしく、さらに道路をへだてて消え、やがて西に折れる道路の南側歩道の水溝の近くに、その一部がこつているのである。この部分は、もつともよく残存している個所であつて、これが、挿圖11の写真に示した遺構である。この堰堤の延長部分は、大學の新築の建物のために切斷消滅させられてしまつてはいるが、あきらかにその延長と思われる部分の碎石およびモルタルの構築物の断片が、Kamla Nagar (カムラー=ナガル) 附近の道路と家屋の壁の一端に、その姿をあらわしているのはたいへん興味深い。P. Saran 氏は、大學の建物を迂回して、その痕跡を、私たちに親しく教えてくれたものである。

ここに写真を載せておいたところの、この堰堤遺跡の残存している部分の構築材料、およびその構造と構築技術などをみみると、そこには、もちろん後代の補修のあともあるようにも見受けられるが、やはり、この堰堤が、他の Firūz Shāh 時代の堰堤のそれと同じような特徴をもっているように、私には思えるのである。Saran 氏も、デリー大學建設工事以前に自ら見られたという遺構を回想して、あきらかに、Firūz Shāh 時代の構築物であると断言しておられた。しかし、この附近一帯は、デリー大學の諸施設をはじめ、Roop Nagar (ループ=ナガル)、Kamla Nagar などの新しい住宅地の建設のための區劃整理と整地工事が、もとの地形や環境を完全に變更してしまつているので、この堰堤が置かれていた古い時代の周囲の環境について想像することは、今日ではほとんど不可能に近い。ただ、この建造物が、これまでに紹介してきたトゥグルク朝の後期に屬すると推定される二三の堰堤と同じように、デリーのリッジを中心とする地形的條件と關連して、リッジの西側において雨水を貯える目

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

的をもつて構築されたものと考えるのが妥当ではないかと私は思う。ただ、P. Saran 氏がかつて自ら確認されたような長い堰堤であるなら、他の堰堤については、たとえ簡単ではあつても、ともかくふれている Delhi Monuments List が、これに全く言及していないのはいささかおかしい。このあたりの地域にはムスリムの遺跡が、比較的少なかつたと思われるし、従つて、D. M. L. の調査者は、この附近の探査には、他の地域におけるほどの努力を傾けなかつたのではあるまいか。P. Saran 氏は、たしか、デリー大學建設工事以前の、問題の堰堤の古い写真をおもちのようにいつていたから、いずれ、なんらかの機会に、この遺跡についての氏の意見を發表していただけるとありがたいと、ひそかに考えている次第である。

5. 故ネール首相公邸庭内堰堤

この遺跡については、私自身は、残念ながら、自分の眼でこれを確認したことがないことを、まず、述べておきたい。しかし、これについては、最近、Y. D. Sharma 氏がその編著で述べており、また、私自身、インド政府考古調査局内の Photography Section で、この堰堤遺跡に附設されていたと思われる建造物の写真を見つけ出していたし、その實在はほぼ確實と思われたので、ここに載せることとしたものである。(私が本稿を終えた直後、ニューデリーに寄つて歸國された山本教授が、出發前の私の希望をいれて、この遺跡をみてこられた。本文には間に合わないので、「追記」として、補註のあとで、本稿を補つていただいた。214—217 ページ参照)。ところで、私は、この建造物は、Delhi Monuments List の第 II 巻の、Kushak という地区のなかに、No. 327 として紹介されているところの、“A building probably Shikargah” という建造物にほかならず、ここで問題にしている堰堤こそは、その叙述のなかにふれられている“band”であると思うものである。⁽²⁴⁾この1910年代後半の記録は、「堰堤 (embankment) の線は、Kushak の前を北に向つて、きわめてわずか

な部分だけがのこつているほかは、今日では消滅してしまつてゐる。」と述べてゐる。

この堰堤と関係ある建造物が現存しているという故ネルー首相公邸は、ニューデリーの各國大使館があつまつている Chanakyapuri (チャナーキャプリ、あるいは、ふつう Diplomatic Enclave ともいつている) 北々東にあたり、有名な大統領官邸、Rashtrapati Bhavan (ラーシュトウラパティ=ブハヴァン) から真西に向う South Avenue (南大路) のつき當りにある。實をいえば、私自身も、ニューデリー滞在中、D. M. L. の説明に従つて、この附近をもふくめて、この“Kushak”に相當する建造物の遺跡を求めていく度となく探しまわつたあげく、ついにはたし得なかつたというわけである。それが、Y. D. Sharma の近著により、なんと、故 Jawaharlal Nehru 前首相の公邸、しかも、かつて私も毎日のようにその前を通つたその公邸のなかにあるとは、思いもよらないことであつた。附近の家の庭は、のぞきこんで探したものであるが、さすがに、衛兵のいるネルーの公邸だけは、私も遠慮した。まさに盲點というものは、かくの如きものか！いささか感慨をもようすものがある。

Y. D. Sharma の記すところ⁽²⁵⁾によれば、この堰堤と附設されている問題の建造物は、今日なお、かなりよく残つているらしい。彼も、また D. M. L. も、この、Maḥal といわれてきた建造物を、Firūz Shāh 時代に屬するものとし、それを Shikagah、すなわち、狩獵用の建物と推定している。従つて、兩者ともに、問題の堰堤をも、Firūz Shāh 時代の建設に考へていることは容易に想像がつくところである。ただ、Y. D. Sharma の記述は、50年近く前の Delhi Monuments List の内容と若干異なり、堰堤そのものはすでに消滅してしまつたような書き方である(補註25参照)。ネルー首相の死後、この舊公邸は、圖書館、博物館として、一般にも公開されるようであるから、問題の遺跡も、今後は、容易に、私たちの觀察の對象となり得るであろう。

なお、この堰堤について、もう少々つけ加えておきたいことがある。さきに

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

も述べたように、私はニューデリー滞在中、この堰堤と附設されている問題の建物とを見つけ出すことに努力していたわけだが、その折り、有名な Ashoka Hotel (アショーカ = ホテル) の裏手の北東北側に、岩盤の細長い小丘をみて、あるいは、これが、かつて、堰堤の一部をなしていたのではないのと考えたものである。これは、次節で述べるとおりに、自然の岩盤地帯をそのまま堰堤、あるいはその一部に利用したという推定にもとづくものである。そして、その当時は、私は、問題の “Kushak Maḥal” の方は、おそらく Kautilya Marg (カウティリヤ通り) の東側にあつて、すでに崩壊してしまつたものかも知れないと、ひそかに想像をめぐらせていたのである。ところで、この堰堤であるが、Delhi Monuments List の記述の内容をみると、それは南北の方向に走っていたことがうかがえるのである。そこで私は、あるいは、その堰堤は、舊首相公邸内から南に走り、現在の Kautilya Marg の東方から、やがて、これに沿つて、Ashoka Hotel 裏手のこの小丘陵につづいていた可能性も考えられなくはないと思うのである。このホテル裏手の岩盤地帯は、実際は、全く低い小規模な岩盤状の小丘に過ぎないが、それは、より南方においては、ずつと高い、岩盤地帯の丘陵をつくつている。現在の外国公館地域は、この丘陵と、はるか西方のリッジとの間に建設されたものである。しかし、現在の周囲の環境からみると、この地帯も、かつては、耕作に適する農耕地というよりは、むしろ、いわゆるインド流のジャングル地帯であつたと推測した方が當つているようである。ただ、おそらくは、平坦地であつたであろうから、耕作に全く不適であつたとは考えられない。私の一つの推論としては、かつて南北に走つていたと推定されるこの堰堤は、その西側、すなわち、やや高い丘陵地帯とのあいだの地域に水を貯える目的をもつて建造されたのではないかということである。とすれば、あるいは、さきに述べたように、Ashoka Hotel の裏手の岩盤地帯も、堰堤の南翼の部分として利用されていたかも知れない。この貯水がなんの目的のものかは、当時の環境が把握できないかぎり、よくわからないが、あるいは

農耕、狩獵のためであるかも知れない。それに關連する私自身の推論については、第 VI 章でまとめて述べることにしたい。

II. 自然地形利用による堰堤について

私が自然地形利用による堰堤とよぶものは、これまで紹介してきた五つの堰堤とは、そのあり方と構造とが、かなり異なるものである。簡単にいえば、それは、自然の地形、とくに岩盤地帯にふつうにみられるところの縦に走っている岩層などの起伏によつてできている小丘や地溝などを巧みに利用し、自然の地形を、そのまま、または若干の人工構築工事を施すことによつて、すでに紹介してきたような人工構築による堰堤とほぼ同じ機能をもたせようとしたものである。ただし、こうした自然地形利用による堰堤という類型を設定したのは、私自身であつて、あれこれ考えて、私は、以下に述べるところからもわかるように、そうした構築物の存在を推定したのである。しかし、現在のところでは、これも一つの假設にすぎない。本稿で、この類型にあてはまるものとして紹介する二つの遺構にしても、それが、はたして、眞に堰堤であつたのかどうかという点については、實は、完全な決め手と思われるものはないのである。のちに述べるように、私が堰堤として紹介する二つの遺構に關しては、私の考證によると、ほぼ同時代の文獻史料に、その存在を推測させるものがあるのであるが、これとて、私が以下に指摘する構築物(?)そのものが、その文中の“band”と記されたものに全く照應するものであるかどうかは、決定的には斷言できないのである。以下、二つの堰堤と思われるものを紹介するまえに、念のため、以上のことを記しておきたい。

1. Wazirabad 南方堰堤

Wazirabad 正しくは Wazirābād (ワズィーラーバード) というのは、現在のいわゆるオールド=デリーの東北北方にあたる地區で、デリー州でも北端に

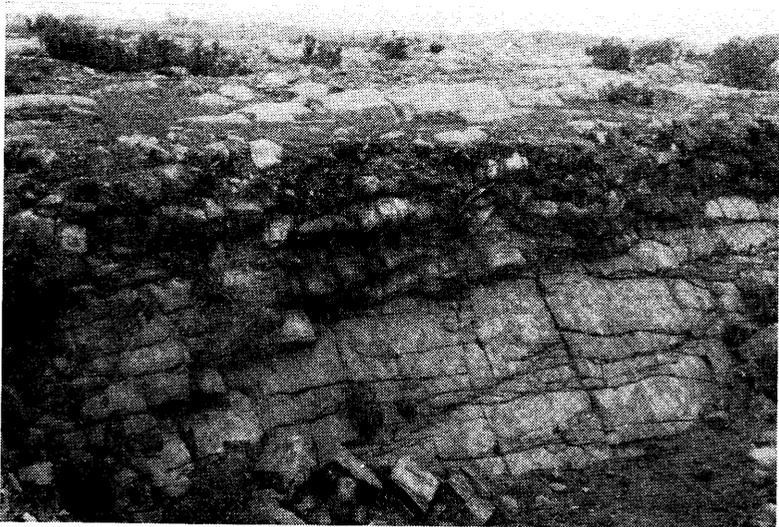
デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

近く、東方はるかにジャムナー川をひかえた部落である。地形からみると、この地域は、デリーのリッジが次第に低くなつていく、その北端にあたっている。この部落の南南東 1.5km ほどの地に、ジャムナー川の本流から西北西にさかのぼる運河があるが、その水流にかけられた橋は、きわめて興味ある遺跡で、その資材、石積みやモルタルの工法、あるいはその様式の特徴などからみると、どうみても、トゥグルク朝後期の建造物と推定されるのである。この橋の右岸に、橋の南端からほぼ数メートルの近くに、中型のモスクがあるが、その内庭には、Shah-i 'Ālam (シャーエ=アーラム) の墓と稱する 12 本柱の建造物がある。このモスクは、その主室および東門の様式と構造とからみて、さきの橋と前後して建てられたものと想像され、これまた、疑いもなく、トゥグルク朝後期の建築の諸特徴をもつているのである。これらの、Wazirabad 南方に現存する後期トゥグルク朝時代の遺跡群は、19世紀以来、諸著書にしばしば引用されている。

また、この橋の遺跡（といつても、現在なお、交通に利用されている）の北方延長線上に、この橋とほとんど同じ資材を用いた水門施設が存在する。従つて、この橋と水門とは、橋の上を通る道路としては、欄かんとともに全く連続しているのである。橋と水門とのいずれが先に建造されたものか、両者が同時代の建設かは、なお考察の餘地があるところであろう。この水門については、次章でふれることになつている。ところで、Delhi Monuments List は、この橋梁の北方延長部分で、この水門と橋との間にあたる個所を“a solid band”⁽²⁶⁾と記してしている。のちに述べるように“band”という語はもともとバンド、ベルトの意味もあり、堰堤という意味から、場合によつては、水門そのものを指す場合もあり、かなりひろい意味に使われるのがふつうのようである。しかし、私が本稿で用いている堰堤の意味を考える場合には、この Delhi Monuments List のいう“band”は、あまりにも狭すぎる用語法であろう。Y. D. Sharma は、Wazirabad の水門を“a solid causeway”と呼んでいるが、

なかなか思慮のある表現というべきであろう。Delhi Monuments List が述べているところの“a solid band”は、少くとも、私がここに紹介する堰堤とは、直接、関係をもたない。それについては、水門の項でふたたびふれたいと思う。私が、ここで堰堤として紹介するのは、一應、この“bund”や“causeway”とは別もので、それらとは全く異なつた、獨立した構築物なのである。

私が本稿で、堰堤として紹介したいのは、右に紹介した Wazirabad 南方の橋および水門の遺跡の北方に見出されるところの、ほぼ南北の方向に縦走している岩盤地帯である、この地帯の両側は一種の地溝をなしているために、この縦走する岩盤地帯は、ちょうど、前節で紹介した人工構築による堰堤と同じような役割りを演じ得るのである。ここに紹介する寫眞はその縦帯の一部で、東側の地溝がよくわかると思う（挿圖12）。この縦走する岩盤地帯を、私が自然



挿圖12 Wazirabad 南方堰堤（東側）。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

利用の堰堤とする推論の一つの根拠は、のちにふれるように、Minhāj al-Sirāj ‘Afif の *Tārikh-i Fīrūz Shāhī* にみえる “Band-i Wazīrābād” という名稱があらわれていることにあるが、その考證については、第 IV 章でくわしくふれるはずである。他の一つの根拠は、この岩盤地帯の現状からの推測である。というのは、この縦走する岩盤地帯の表面および側面に、かなりの範囲にわたつて、相当細かい碎石とモルタルの断片のあとが、はつきり残存しているのが観察できるのである。このことは、この岩盤の縦帯と地溝とが、自然のままに放置されて今日に至つたのではなく、かつて、この岩盤地帯の表面や側面に、人工的なモルタル工事が施されたことを示すものと考えられるのである。そこで、私は、自然地帯に若干の人工的工事を施すことによつて、南北に縦走する堰堤が、かつてこの地に存在したのではないかと推定したのである。これが、あくまで一つの推論にすぎないことは、私も知っている。たとえば、上述したモルタルの痕跡は、この岩盤縦帯自體の工事に用いられたものでなく、附近の建設工事のために、モルタル製造についての、たとえば混合作業がこの地で行われ、その痕跡が岩盤地帯にこびりついて今日まで残存しているものであるという反論も、決して不當ではないのである。しかし、モルタルの痕跡が岩盤上の平坦な表面部ばかりでなく、岩盤の、地溝をつくつている側面にもかなりはつきりと指摘できるということは、右の反論を否定する一つの根拠たり得るのである。とすれば、かつて、なんらかのモルタル利用工事が、この岩盤縦走地帯そのものについて施行されたという可能性も、相當考えていいように思われるのである。それに加えて、のちに述べるように、同時代の文獻の Band-i Warizābād への言及の事實とあわせて、私は、この岩盤縦走地帯を、自然利用による堰堤であると推論したわけである。

このような推論に立つとき、この堰堤の建設の理由と目的とはどのようなものであつたと考えるべきであろうか。私見の一端を述べれば、その存在理由は、すでに述べたトゥグルク朝後期に屬すると思われる、右の問題の岩盤地帯の南

方にある橋と水門の存在理由と関連するものであると思う。この橋について考えてみると、現在でもその下を通っている水流は、當然、この橋の造られた時代にも存在していたと考えられるのであり、それは、おそらくは、Firūz Shāh が北インドの各地に開さくさせた運河の一つではないかと推測されるのである。この運河および橋と水門とが、はたして同時代の建造物であるか、また、そのどれが先につくられたものであるかということは、慎重に検討されなければならない問題であろう。もし、右に記したように、自然岩盤地帯利用による堰堤が構築されたという私の推論に立つときには、その構築は、上述の水門・橋・運河と同時代かあるいはそれ以前かということによつて、その建設目的と機能の問題が解釋を異にしてくるのである。

この問題については、私はなお研究不十分であることを記しておきたい。ただ、東大の調査團は、右の Wazirabad 南方の諸遺跡のうち、モスクおよび水門については、かなりくわしい測量調査を実施している。そして、その調査資料の數值的處理によつて、橋と水門との關係、その建設目的、あるいは、運河と思われる水流の機能などについても、さまざまな問題が、ある程度、見極められるのではないかと考えている。この問題は、Firūz Shāh 時代の水利問題についての他の重要な課題である運河建設の問題ともむすびつき、その點からいつても、將來の考察によつてさらに深められると思う。

そこで、ここでは、現在の私の推論の一端にちよつとだけふれておきたい。私は、問題の堰堤の存在を推論したわけであるが、その機能は、他のいくつかの堰堤のように、雨水の貯水を第一義的な目的とするものであつたとは思われないのである。それは、なによりも、この Wazirabad の南部附近一帯の地形の特徴が、他の堰堤の場合とはずつと異なつた要素をもつていることによるものである。まず、この問題において考慮に入れるべきは、この地域の東方をほぼ南北に流れている大河ジャムナーの存在であろう。そして、私の推論を簡単にまとめていうならば、次のとおりである。すなわち、このあたりの自然の地

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

形は、問題の岩盤縦帯の西側の平坦地については、雨期ののちに氾濫をおこさせ、その水をジャムナーに流すのをとどめる役割りをはたしており、逆に、ジャムナー川の雨期後半、雨期あけの増水の結果、この岩盤地帯の東側に氾濫し、必要以上にふえてくる可能性のある水を、一應、この地点で抑えるという役割りをもはたしていたのではないかと考えるのである。このことは、Firūz Shāh が、この岩盤地帯をさらに補強すべく、人工的なモルタル工事を施し、自然地形を巧みに利用した堰堤を構築したとする私の推論をまつまでもなく、事實は、すでに、それ以前から、この岩盤縦帯の地形は、ある程度、事実上の堰堤の機能をはたしていたのではないかとさえ思うのである。

そこで、私は、問題の水門および橋の建設は、上に述べたような、雨期の降雨あるいはジャムナー川の水の動きを考慮して、附近の地形を慎重に考合したうえで、Firūz Shāh 時代に至つて、工事の着工が企圖され、実施されたのではないかと考えるのである。それについては、のちに述べる水門の項で、さらに、私の推論について敷衍し、私見を補つてみたい。少くとも、私の推論に立つ場合には、運河と、橋梁と水門との建設が、あるいは、時を同じうして行われたのではないかということも考え得ることの一つであろう。なお、その他のことは、のちに Wazirābād 水門について述べる場合に、さらにふれるつもりである。

2. Malcha 堰堤

ここに紹介する堰堤も、上に私見を述べた Wazirabad 南方のそれと同じく、私が、自然地形の条件を利用して設けられた堰堤ではないかと推測する一例である。次頁に掲げた寫眞(挿圖13)は、ふつう Malcha Mahal あるいは Baradari とよばれる Firūz Shāh 時代の建立と思われる建造物の南方の地帯の一部である。私が、これを自然地形利用による堰堤の一つの例としてここに紹介するのは、主に、次の二つの理由によるものである。その第一は、Delhi Mo-



挿圖13 Malcha 堰堤と推定される遺構の一部。

numents List の記述である。⁽²⁸⁾すなわち、この1910年代の調査の報告書は、上にふれた Malcha Mahal といわれるかなりの規模の建造物について紹介し、それを Firūz Shāh 時代の shikārgāh (狩獵場) の一つだと考えているのである。そしてそのほとりに、「大きな貯水池」(a large tank) があつたと推定し、「右の Mahal から約 50ヤード南に」ある “band” が、その貯水池の堤岸であると記しているのである。そして、この報告書は、Shams-i Sirāj ‘Afif の記述にも言及している。この Delhi Monuments List の記述はきわめて具體的で信頼するに足るものである。ただ、最近の Y. D. Sharma も、これに簡単にふれているが、⁽²⁹⁾彼の場合には過古形を用いていることを注意しておきたい。

私の推論の根據の他の一つは、第IV章でくわしく説明するところの Shams al-Dīn Sirāj ‘Afif の Tārīkh-i Firūz Shāhī が、“Band-i Māljah” という名稱

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

の“band”についてふれている事実である。のちに述べるように、この Mālja は Mālcha であつて、この問題の Mahal, すなわち正しくいえば Mālcha Maḥal といわれる Firūz 時代の建造物のある地域の歴史的地名ではないかと推定されることである。‘Afif は、この Mālja の“band”には、Firūz Shāh が、メッカの名井 Zamzam (ザムザム) の水をこの池に投入させたことまで述べている (後述 128~129 ページ参照)。

この Malcha Mahal へは、いまでは Sardar Patel Road (サルダール=パテル通り, すなわちもとの Kitchner Road) から、また、Wellington Crescent (ウェリントン=クリセンド) から、ジャンガルのなかにつくられた、自動車も通れる道路を辿ることによつて行くことができる。このあたり一帯は、デリーのリッジの南半の一部を占め、完全なジャンガルの地帯である。この地帯にある問題の Mahal の南に堰堤の遺跡を求めるとしたら、それは、写真 (挿圖12) にみられるような岩盤が縦走している個所にちがいないように、私には思えた。少くとも、その他に、この附近に、Delhi Monuments List のいうように、かつて貯水池の堤岸をなしていたと思われるような人工構築物の遺跡は見當らなかつたのである。なお、上述の著書のほかに、この遺跡については、その存在にふれているものはないようである。

さて、もし、この岩盤地帯の一部を堰堤の遺構の一部と推定するならば、これは、全く、自然の地形を利用した堰堤づくりとみていいであろう。そして、このあたりの地形からみても、これは、リッジの地形の起伏を利用して、小範囲の地域にモンスーンの雨水を貯えるのを目的としたものではないかと推定されるのである。そして、Mahal あるいは Baradari とよばれている建造物は、さきの兩報告もいうように、あきらかに、Firūz Shāh 時代の構造と様式とを備えており、たしかに、狩獵を愛好していたこのスルターンが各地に建てた shikārgāh (狩獵場) の一つであつたかも知れないと考えられるのである。そして、この地域における水の確保は、のちにも論じるように、Mahal 滞在に

際しての飲料水の確保、狩獵のための条件整備、とくに水邊に動物をあつめることの必要、さらに、涼を求め、あるいは自然の景觀を一層よくするというに、その建設の最終の目的があつたのではあるまいか。この地に關する限り、附近の地形と環境からすれば、農耕との關連は、あまり考えられないのではないかと思うのである。従つて、もしそうだとすれば、この場合には、排水や水量調節のために必要な水門施設は全く不要であつたと考えていいであろう。附近に、それに當るような遺跡をなんら確認できなかつたことも、あるいは、このことを裏書きしているのかも知れない。

このように考えてみると、この Malcha 堰堤は、これまで紹介してきた堰堤の諸遺跡のなかでも、もつとも單純な機能をもつもの、いかえれば、貯水池の堤岸の一部の役割をはたすにすぎないものであつたのかも知れない。この考えをさらにおし進めれば、あるいは、この堰堤は、本稿でいう正しい意味での堰堤とは異なり、もともと自然の岩盤地形そのものであつたのかも知れない。ただ、さらに別の可能性は、このあたりを精細に調査した場合に、私のいう人工構築か自然利用かのいずれにせよ、私がこれまでみたことのない遺構が見出されるかも知れないということである。1910 年代の Delhi Monuments List の報告内容が虚構でない限り、“bund” の存在だけは、かつて、この地域において確認されているからである。

III. 後代の堰堤について

以上に述べてきた堰堤、あるいは堰堤と推定されるものは、いずれもトゥグルク朝時代の建造物と推定されるものであつた。しかし、本稿で問題としているデリー地域現存のサルタナット時代の建造と推定される遺跡で、私がこれまで紹介してきた以外のものについてふれている著書は一つもないのである。ただし、すでにちよつとふれたように、Delhi Monuments List が “Pathan” として載せている堰堤の遺跡が一つあるので、まず、これについて若干ふれて

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について
おきたい。

1. Basantpur 堰堤

Delhi Monuments List は、Basantpur を第IV巻の Palam Zail に入れているが、現在の Palam といわれる地域には、同名の村落は一つもない。当初、私は、国際空港建設などで全く環境を一変してしまつた Palam 地区のことだから Basantpur なる舊村落も消滅してしまつたのかと考えていた。ただ、私が参照した三地圖には、Basant Nagar (バサント=ナガル) という部落が見出されたので、これを、Delhi Monuments List の第IV巻所収の地域略圖とくらべてみると、ほぼ同位置にあたることがわかつた。従つて、右報告書のいう Basantpur とは、この Basant Nagar の部落にちがいない。この Basant Nagar という部落は、デリーのリッジの南端のあたりに位し、Moradabad Pahari (モラーダーバード=パハーリー) という地域(ここには、現在、部落はなく、数々のトゥグルク後期、ロディー朝時代のものと思われる墓やモスク、あるいはパーオリーの遺跡などが、廢墟として残つているのみである。)の北北東方に當る。D. M. L. によれば、この堰堤は、「東から西に走る碎石の壁で、ややカーヴしている」とあり、「長さは約2分の1マイルで、北側のやや高い地帯の雨水を貯える意圖で」構築されたものと推定している⁽³⁰⁾。その構築の時代の比定については、同報告書は、“Pathan”としているが、この報告書の他の堰堤で Firūz Shāh 時代の造營と思われるものについては必ずその旨を記しているので、D. M. L. のいうこの“Pathan”という時代区分は、この堰堤が、Firūz Shāh 時代の諸特徴をもつていず、かなり後代の構築と推定しての結果であろうと考えられるのである。

この遺跡については、他の著書でそれにふれているものは一つもないようである。私自身がつねに参照しているところのデリー地域の三地圖には、そのいずれの場合も、Basant Nagar 附近の地形標示において、堰堤あるいはそれに

相當するような土地の起伏をあらわす符號は全く見當らない。私は、かつて、1953年に友人のインド人と Moradabad Pahari の遺跡群を見にいつた歸りに、自轉車で Basant Nagar 部落の近くまでいつたが、この“bund”の存在には全く氣がつかなくつた。その後の第1次、第2次の東大の現地調査に際して、私はついにこの部落へゆく機會を失つた。それは、一つには、Palam 軍營地域を眼下に見おろすこの地域の調査については、慎重にかまえたからであつた。従つて、私は、右の Delhi Monuments List の報告する遺構が現存するかどうかの確認もできなかつたわけである。しかし、その記述内容を信用すれば、この堰堤は、私がすでに、トゥグルク朝後期の堰堤のうちで、人工構築による堰堤として紹介した諸遺跡とほぼ同様の建設目的と機能とをもつ構築物と考えてほぼ誤まりないであろう。リッジ中腹の部落に近い堰堤として、その目的は、飲料水の確保にあつたかも知れないが、リッジもこの附近になると、近邊には農地があり、耕作も行われていたと思われるから、農耕のための貯水という目的も十分考えられたと思う。しかし、ともかく、私自身、未見であり、また、現存するかどうかの確認もしていないので、これについては、以上にとどめておき、また、將來の教示をまちたい。

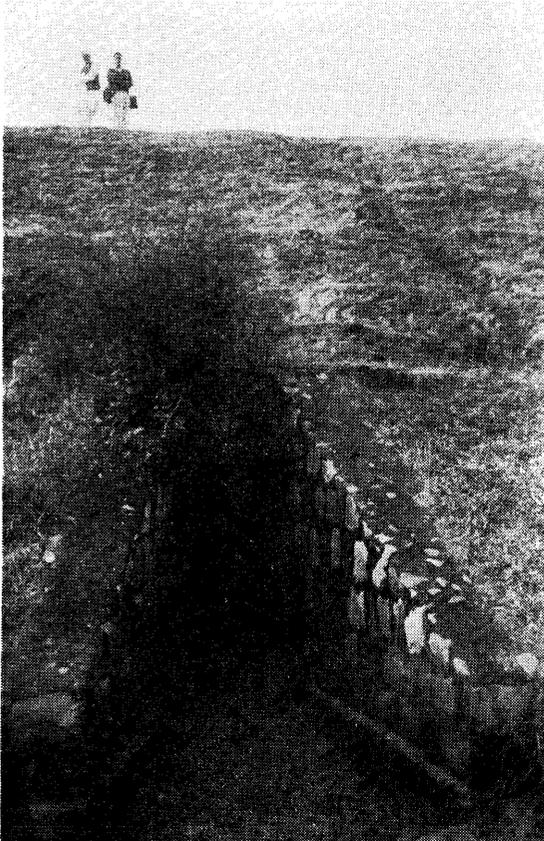
さて、堰堤の遺跡としては、Delhi Monuments List は、このほかに、今日、ニューデリー西部地區にある、有名な Talkatora (タールカトーラ) 庭園の“tank”，すなわち貯水池 (*tal* とはその意味であり、これが、この地名の起源でもある) と、堰堤の役割りをはたした建造物であると考えられた“terrace”に言及しており、その雨水を貯える方式は、Firuz Tughluq の他の遺跡の場合と同じようなものであるとつけ加えている。⁽³¹⁾しかし、この庭園および建造物は、あきらかにムガル末期のものであると思われるし、また、問題の“terrace”が、ムガル式庭園造營の以前からここに存在していて、それが本稿で問題とする意味での堰堤としての機能をもつていたかどうかとなると、全く

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について
わからないというよりほかはない。庭園内の現状も、ここにとくに紹介すべき
歴史的問題点を提示するものもなにも一つ見当たらない。従つて、ここには、これ
以上ふれる必要はあるまい。

さて、地図をみてみると、私が以上に紹介してきた遺跡のほかにも、あきらかに
堰堤ではないかと推測させるに十分な地形上の標識をもつ個所が、デリー
地域には、なおかなり指摘できるのである。とくに、ニューデリーの南方地域
で、メヘローリー部落の西方、あるいはメヘローリー部落の南方にあたる、地
形的にみて比較的平坦な地帯にそれらが見出されることが多い。この地域は、
デリー州のなかでも、もつとも重要な農耕地帯を形成しているのであるが、そ
れは、おそらく、サルタナット時代とて同じであつたであろう。1929年および
1950年刊行のインド政府発行のいわゆる「1インチ地図」(one inch map)を
みてみると、さまざまの方向に走つているところの、堰堤らしい直線、あるい
はゆるやかな曲線を示す土地の隆起の標識を、地図上に見出すことができるの
である。しかし、サルタナット時代の遺跡のみでも一々現地を確認検証、観察
するのにすでに多くの時間をかけた私たちにとつて、地図上の堰堤らしき標識
を目当てとして、一々それに當ることは、氣をつけてはいたが、なかなか容易
なことではなかつた。私が他の遺跡の確認の途中で、折りにふれて探査したか
ぎりでは、そのすべては、近代の構築物であるか、あるいは、とてもサルタナ
ット時代まではさかのぼれないと思われる時代不明のものが多かつた。そして、
時代不明といつても、ムガル時代のものも、1900年代のはじめの補修も、こ
うした簡単な構築物となると、時代比定がきわめて難かしいのである。とくに、
このメヘローリー部落西、南にひろがる耕地一帯は、東、西、および南方を緩
やかな丘陵地帯で囲まれた形の地域で、一種の盆地をかたちづくつているわけ
である。従つて、よく地形を考察したうえでは、人工構築の堰堤をつくること
によつて、集水、貯水、排水の機能を十分に發揮できるような人工氾濫、人工
貯水、人工灌漑などの水利施策を実施し得る格好な地域といつていい。従つて、

ムガル以降、とくに19、20世紀になつての建設もいろいろあることは、當然、豫想され得るのである。

そこで、最後に、私たち調査團が、地圖の上で推測した堰堤を訪ねた一つの經驗について簡単にふれておこう。第2次調査の1962年1月に、山本團長と私は、三枝氏とともに、現在の Chhatarpur (チャハタルプル) と Fatehpur



挿圖14 Gadaipur 附近の近代の大堰堤と、その一部に設けられた水門。

Beri(ファテプル=ベリ)という兩部落の中間に位するところの、全長が地圖上でもおよそ3 kmほどにおよぶ、ほぼ東西に走っている大堰堤を、地圖をたよりにして偵察にいつたことがある。これは、Gadaipur(ガダイプル)という小村落のやや南方の地點から東方に延びている大規模な土堤で、その建設の時代は、あきらかに近代のようにみられた。そして、その土堤の一部には、近代式の水門施設も存在していたのである。比較の意味も兼ねて、ここにその寫真一葉を紹介しておこう(挿圖13)。この大土堤と水

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

門の建設目的と機能とを考えると、おそらく、次のようにいえると思う。すなわち、この地域の南方の丘陵地帯一圓からの雨水、とくにこのあたりに多い自然地溝を傳わつてくる水を集め、それらの水をこの大土堤の南側にまず貯水し、それによつて、限度をこえる大雨の場合には、北側の村落を洪水から守るとともに、もし必要であれば、雨期に際して、適時、人工氾濫をおこさせるように、南側の雨水を北側にも導入して農地を浸水させる。しかも、同時に、乾期には南側の貯水を南部に、適時、灌漑用水として利用できるかも知れない。私は、こうした目的と機能とを、この大堰堤、水門について、想定したのである。この建設事業は、あきらかに近代のものであつて、本稿で問題としているところのサルタナット時代の構築である堰堤の遺跡とは、なんのかかわりもないように思われる。しかしながら、こうした治水、用水に關する人間の知慧は、その原理と目的とにおいては、それほど變つていたとは思えず、この近代の大堰堤の見學は、私たちの調査研究にも、大きな参考となつたのであつた。

以上の例は、私たちの記録の一端にすぎないが、なおデリー諸地域を丹念に探れば、サルタナット、あるいはムガル時代にさかのぼり得る堰堤の遺跡を、私がすでに紹介したもの以外にも、見出し得るかも知れない。また、その構築の起源はふるくても、その後しばしば補修あるいは改築され、そのため、現在では、全く近代の構築としかみえない建造物もなしとはしないのである。すでに、私自身、二三の例をあげたように、サルタナット時代の構築で、現在なお、現實の水利にもなんらかの機能をはたしているものも見出されるのである。こうした、時代をこえての有用さが、これらの遺跡の時代考證を困難にしている面を、私自身、現實に即して、つよく、そして同時に興味深く感じたことを、ついでに書き添えておきたい。

III. 水門の遺跡について

1. はじめに

ここでいう水門とは、堰堤をはじめ、貯水池の堤岸あるいはその他の構築物の一部に設けられている水路または水道孔で、水の流出入を調節する機能を営む水利施設をいうものである。水門は、デリー附近では、ふつう、mori (mūrī, モーリー) とよばれているようであるが、これはサンスクリット起源のヒンディー語系の語であり、用水路の如きものから地下水道やパイプなどに及ぶさまざまな水利施設について用いられる言葉らしい。従つて、ここに私が用いる日本語の「水門」という言葉よりはずつとひろい意味と語感とをもつ言葉といえよう。これに對して、jharna (jhaṛnā, ジャルナー) といわれている建造物がある。この方は、動詞として「落ちる」という意味のブラクリット系の語らしいが、下流に對して傾斜をもつところの平たい水路や、せきなどをいうのがふつうであり、ひろい意味では水門ということにならないことはない。たとえば、ムガル庭園などにみえる大理石や赤砂岩の平板、あるいは碎石・モルタルなどを用い、傾斜をつけてそこに水を流すところの、一種の人工の瀧や水路などはこれに當る。その傾斜がかなり急な場合には、英語では、“Waterfall” と譯したりすることもある。このジャルナーは、農業用の水利施設として存在するばかりでなく、王宮や庭園内の景觀のための施設としても、しばしば用いられてきている。水門としての機能は、いわゆるモーリーとも同じ場合もあるが、本稿でとりあげるサルタナット時代の水門施設の場合には、このジャルナーは、ほとんど対象にならない。

ただ、前章で詳述した堰堤 (bund, embankment) に對して用いられた “ba-

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

nd” というペルシア語が、ある場合には、水門施設そのものにも用いられたのではないかという点は、若干、注意を要する。たとえば、のちに記すように、Satpulah (サトブラ) とよばれる大水門の遺跡は、その機能からして、堰堤そのものではなく、あきらかに、堰堤の一部に設けられたところの水門である。しかし、Syed Ahmad Khan は、この Satpulah 自體をも、はつきりと “band” として記しているのである。band の意味もまた、ある場合には、きわめてあいまいなものがあるので、水門施設にしても、その規模や構造、それが存在する環境によつては、band という語が用いられたと考えていいのかも知れない。少なくとも、ウルドゥー語で記された Syed Ahmad Khan の *Āthār al-Şanādīd* や、二三の 19, 20 世紀の著書の用語法からは、そうしたことがいえそうである。

さて、これらの水門施設については、すでに前章で紹介した堰堤以上に、文獻史料にはあらわれていないのである。事実、サルタナット時代の文獻で、水門そのものについてふれた記述をのこしているものは、少なくとも、史書に関する限りは、私は、一つも知らない。しかし、一方、デリー地域に現存する水利施設、とくに堰堤の遺跡についてみると、そこに、いくつかの水門施設が存在していたことがまことによくわかるのである。ただし、これらの水門は、ごくわずかな例外をのぞくと、一般的にいつて、建造物としては比較的小規模なものが多いので、とかく一般には見落され易いものである。とくに、その遺跡の環境あるいは構造が、後代に改変あるいは破壊されてしまっている場合には、なおさらのことである。だから、それらの水門が建設された時代や年代についての考證はかなりむずかしい。年代推定の場合の大きな決め手の一つとなるのは、水門それ自體の構造と様式にみえる特徴と、その水門がその一部として存在している堰堤全般や、あるいは附近の關連する建造物とあわせてする考察である。さいわいにして、サルタナット時代の水門は、すべて、すでに紹介した堰堤の一部に存在しているのである。従つて、その時代考證も、堰堤の年

代考證と密接に関連してくるのである。そして、水門の機能は堰堤なしにははたし得ないので、一般的にいえば、後代における堰堤そのものの大規模な改修事業を考慮に入れないかぎりには、水門は、堰堤とほぼ同時か、あるいはそれより後代に設けられたものと考えていいわけである。それでは、次に、それぞれの例についてみていくこととする。

2. 現存する水門の遺跡について

次に紹介する水門は、サルタナット時代に構築されたと推定されるものであるが、いずれも、前章に述べた諸堰堤の一部として存在するか、あるいは、地域や環境などからみて、それらに關係するものである。従つて、本章でも、前章の堰堤の場合の敘述の順序に従つて述べていくこととした。

1. Tughluqabad 水門 I

ここにまず紹介する水門は、前章の冒頭に紹介した Tughluqabad 堰堤 I (I-1) に設けられていたと推定されるものである。現在の状況は、すでに堰堤の項でもふれておいたように、水路にあたると思われる部分だけが切り崩されているのであるが(前掲 21 ページ, 挿圖 2 参照), その附近の地形, とくにその崩壊部分の東側一帯にわたつて, 一種の地溝がはつきりと認められるのである。この附近の地形の傾斜の状態を考えると, この水門のあとと推定される地点の東南側一帯の丘陵地帯の水がこの地溝に集まり, それが, この水路によつて堰堤 I を通つて西側の地に流れこむという水系があきらかに観察できる。このことは, 過古においてもそうであつたとしか考えられない。さらに, のちに述べるように, Tughluqābād 城砦南面一帯の水利計畫の構想を復原想像してみるとときには, この堰堤の, いわば切り通しの崩壊部に, かつて, 水門あるいはその機能をはたすべきものがあつたと推測することは, 自然のように思われるのである。従つて, 私は, この Tughluqabad 堰堤 I の切り通しの

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

崩壊部を、水門の遺構と考え、これを Tughluqabad 水門 I とよびたい。

この水門の遺構と思われる部分の附近には、現在でも、かなり大きな切り石が散在している。私は、遺石群のなかに、のちにふれるところの、Tughluqabad 水門 III や、他の Firūz Shāh 時代の水門施設に特徴的にみられる半圓孔のある切り石が見当たらないかと探査したが、それらしい石は一個も見出すことができなかつた。このことは、次節に述べる水門 II の場合にも同じであつた。しかし、このネガティブな事實は、決して、これらの部分が水門施設でなかつたことを意味するものとはいえない。そして、このあたりの地形を慎重に考慮すれば、雨期の大雨の間に、あるいはその直後に、この地溝に集まる水量は相當なものがあると想像される。そしてその水流の水圧は相當大きくなる可能性もあると想定できる。(實は、これらの水量、水圧は、雨量の推定計算によつて、ある程度、數量的に提示し得るのではないかと考えるが、それらは、私の論考の範圍外である。)従つて、この堰堤が、かなりの高さともつ大規模なものであるのも、まことに理由のあることである。そして、上述したように水門の存在を推定したとすれば、その東側や水の流れる内側面などは、相當に堅固なものであつたはずである。そして、Tughluqabad 水門 III や、あるいは Firūz Shāh 時代の水門にみられるような半圓孔の切り石積みの構造の施設などでは、この場所の水量と水流の激しさあるいは水圧には、到底、抗し得なかつたと考えてもいいであろう。後述するところの Tughluqābād 城砦南面の水利構想を思うと、この水門には、圓孔式切り石積みの小規模な開閉装置は不必要であつたばかりか、それでは、かえつて物理的に維持不能ではなかつたかと思うのである。

以上のように考えてみると、この水門の場合には次のようなことが考えられるのである。すなわち、

(a) 堰堤 I に、切り通し的な水路を設けることにより、東南側の丘陵地帯の雨水が、この堰堤と地溝の存在とにより、この水路に集中して、西方に自

然に導かれるように構築されたもの。この場合には、水の抑制は全く考慮に入れないから、水門は、単にその周辺を水壓に堪え得るようにつよく建造することが必要であつた。特殊の開閉装置はとくに必要としなかつた。このことは、雨期の水はほとんど流れるに任せて、Tughluqābād 城南の平坦地へ流入貯水させたということを意味する。降水量の少ない年には、この水門は、集水の役割りのために、とくに大きな意味をもつていたと考えられる。

(b) この水門には、あるいは、木材などを用いた簡単な開閉装置があつたかも知れない。しかし、その場合も、その装置は、水門施設としては、きわめて簡単なものであつたにちがいない。

以上のように、この水門がどのような装置をもつていたか、あるいは、単に、いわば水路以上のものでなかつたかは、今日では、推測の域を出ないのであるが、ともかく、私は、上の二つの場合を考えてみたのである。のちに記すように、城砦南面の大貯水計畫を想定した場合、城砦南面の平坦地が、やや東方に向つて緩やかに傾斜しており、従つて水門 I、水門 II を通つてこの平坦地に集められた水は、後述する水門 III の装置によつて、適時、東方のジャムナー川の方角に向つて排水できるのである。従つて、よほどの連続大雨のないかぎり、この水門 I を閉めることによつて過剰溢水を防ぐ必要はないし、また、そのような状況を想定する場合には、この水門 I を閉じれば、それが設けられているところの堰堤 I そのものをも崩壊に導くものであろう。

以上のような點を考えると、私は、導水と平坦地への貯水を考える限りにおいては、さきに述べたように、この水門 I は、開閉装置をもたない、水門施設としてはかなり簡単なものであつたという推定（前述〔a〕の場合）が成り立つのではないかと考えるのである。いかがなものであろうか。ただし、水門を開閉しなかつた場合を考えても、水路そのものは、雨期にはかなり大きな水壓を受けらると思うので、水門自體は、きわめて堅固に造られていたことが豫想されるのである。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

以上の想定は、とくに集水、城砦南面平坦地への貯水の點を、附近の地形状況と関連して考えた場合のことである。しかし、この場合にも一つの反論が考えられる。それは、この附近の地形をみれば、岩磐丘陵地帯の降雨は、堰堤がなくても、自然の流水體系に従つて、結局は、城砦南面の平坦地に集まる可能性をもっていることがわかるということである。こうした地形のなかで、わざわざ堰堤 I, II を設けて集水の體系を整備した理由は、平坦地への單なる貯水ということのほか、集水體系を整備することにより、南面平坦地をある程度保護するということがまず考えられる。さらに、第二には、堰堤、水門を設けることによつて、その上流、つまり、この場合には、東および東南側の岩磐丘陵地帯に、雨期明けに貯水を行ない、これを、適時、灌漑用水として用いたかも知れないという可能性が想定される點である。こうした想定に立てば、すでに〔b〕として述べた（前ページを参照）ような、水門閉塞のための、なんらかの、簡単な装置があつたことが考えられなければならないのである。デリー地域の雨期の末期は、大體において、連日の集中豪雨に見舞われることは、まず稀れだし、雨期明け後の降雨はほとんどないので、こうした上流貯水の場合の水門閉塞の装置は、それほどむずかしい技術や構造を必要としなかつたと思われる。

一應の結論として、私は次のように推論したい。すなわち、この水門 I の場合には、その目的と機能とからして、流水の調節のための複雑な開閉装置は、まず、必要としなかつたと思われるし、その位置および機能からして、Tughluqabad 水門 III や後代の Firūz Shāh 的な半圓孔石積みによるデリケートな装置の存在もほとんど考えられない。しかし、こうした集水體系を整備する堰堤設置の構想から推すと、その東、東南側の地溝を中心にして、雨期明け、あるいは冬期の少量の降水のある程度の貯水の構想が考えられるので、そのためには、簡単な規模で、しかも堅固な閉塞装置がかつて設けられていたことは十分に可能性のあることである。もちろん、このことを實證する材料は、今の

ところ、見出し得ない。水門そのものは、その後の雨水の流出入のために、破壊されてしまっているのである。

2. Tughluqabad 水門 II

この水門は、Tughluqabad 堰堤 II に設けられていたと推定されるものである。すでに堰堤の項でも記しておいたように、前項に述べた水門 I と、さまざまな点で共通する問題点をもっている。すでに紹介しておいた写真（挿圖 3）でわかるとおりに、この水門は、上に推定した水門 I よりはその規模がかなり小さかつたものと考えられる。このことは、堰堤 II が堰堤 I よりもかなり規模が小さく、また、この堰堤の東・東南側の地形の規模から推して、その集水の容量もずつと小さかつたと推定されることから、容易に想像し得ることである。

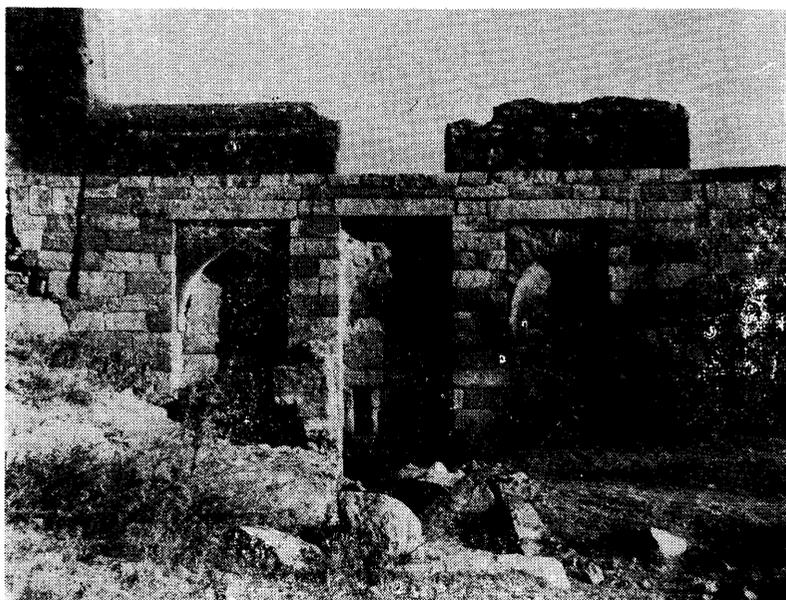
この水門の建設目的とその機能については、おそらく、水門 I の場合とほぼ同じと考えていいであろう。この水門 II の場合にも、かつて、なんらかの閉鎖装置が存在したことを想像させるような遺構はもちろん、それらを推測させるに足る石材その他の遺物は、附近に、なにひとつとして見当たらないのである。従つて、この水門の復原は、正確には不可能である。ただ、堰堤 II の設立目的と機能についてすでに前章に記した推論から考えて、水門 I についての私の推論が、この場合にもそのまま適用できるのではあるまいかと考えるものである。

ただ、この水門 II の場合に、地圖をみればわかるとおりに（19 ページ、挿圖 1 を参照）、その機能にかかわるものとして、‘Ādilābād 城砦が立っている城壁の小丘そのものが、一種の堰堤の役割りをはたしているということが注目されるのである。このことは、この水門 II の東側一帯での貯水が、あるいは、‘Ādilābād のための用水池としての役割りをはたすものとして考えられていたかも知れないということも想像させる。水門 I は、こうした目的のためには、その距離がいささか遠い感じがする。水門 II の場合には、位置的、構造的にも、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について
あきらかに 'Ādilābād との関連は十分に考え得ると思う。あえて、私見を書き添えた次第である。

3. Tughluqabad 水門 III

これは、挿圖 1 でわかるように、Tughluqābād 城砦の東南端に近く、東部城砦南面のすぐ下方を、ほぼ東西に走っている地溝の西端に位置する。この水門の西側は、城砦城壁が北方にひつこんだ形で逆凹字形となつているので、小



挿圖15 Tughluqabad 水門III (西南), (挿圖 1 の略圖, および挿圖17を参照)

規模な平坦地となつている (76ページの挿圖17を参照)。すでに述べたところの Tughluqabad 堰堤 III は、この水門 III の南部に、一直線に南北に連なり、そのまま、'Ādilābād 城砦の東南部の外壁に連なるわけである。

この水門は、みじかい堰堤に設けられた施設で、構造からいえば、その内部

に水の流入を抑制調節する開閉装置の機構をもつものである。この水流抑制および調節の装置は、切り石を用いた石積みで、興味のある構造をもつものであつて、のちに紹介するところの Wazirabad 南方に残存している水門のそれと、ほぼ同一のメカニズムをもつものであり、また、原理的には、Satpulah 大水門の巨大な開閉装置のメカニズムとも同様のものである。ただし、Wazirabad の水門の装置が、内室ともいふべき部分に、完全に内蔵されたかたちで設けられているのに對して、この Tughluqabad 水門 III の開閉式水量調節装置の場合には、東側は、オープンなのである（挿圖 16 参照）。このことは、實は、理由があるのである。すなわち、私見によれば、前者の場合は、水が水門の両側から流入してもいいようにつくられ、従つて水門の東西両面が石積み



挿圖16 Tughluqabad 水門 III (東面), (卷頭圖版 I—B, および挿圖 1 参照).

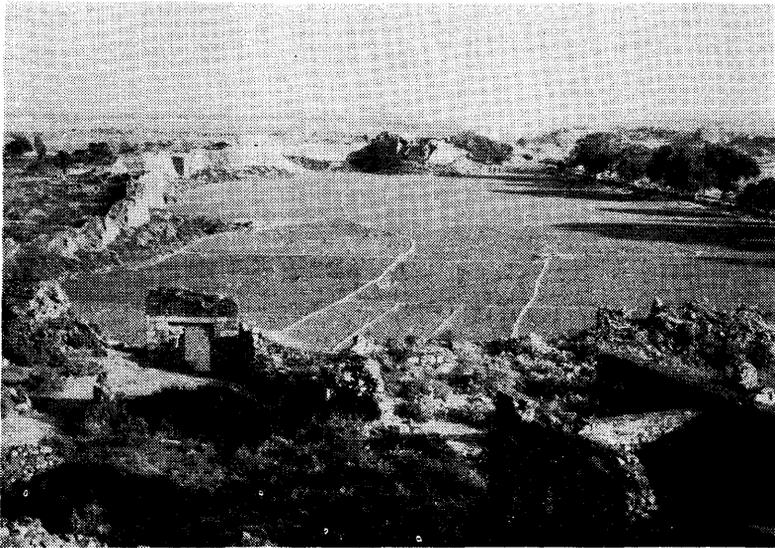
デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

よつて、一應、保護された形になつていのである。これに對して、後者すなわち、この Tughluqabad 水門 III の場合には、水はつねに西側より流れ込み、東方へ流出するという、いわば一方的な水流の動きにのみ應じて作られたものであることをよく示している。この點では、次節に述べる Satpulah 大水門の場合も、構造的には、この水門 III と同じなのである。

Tughluqabad 水門 III には、その南側に、南方に緩やかに彎曲しているところの、約 150m ほどの放水路と思われるものが存在しているのである（巻頭圖版 I—B 参照）。この放水路と思われるものは、石造で、水路の床と思われる部分も石敷きであつて、デリーの遺跡のなかに、ほとんどその類例をみないような、きわめて興味あるものである。A. S. I. に保存されているところの、この水門施設のプラン⁽³²⁾ “Hammam and Sluice of Tughlaqâbâd City, Delhi,” をみると、この部分には、“Road” と記されてあつて、道路というふうと考えられていたようである。しかし、この、彎曲する石敷きの“Road”は、緩やかに東方に傾斜しており、その東端は、そのまま、あきらかに城砦直下の地溝に合流してしまつていのである。この點からみて、私は、この興味ある建造物を、一種の放水路であると考えたい。さきにも述べたように、この水門は、現地調査にあつて、かなり詳細な測量觀察を試みた対象の一つであり、また、附近一帯の測量も行ない、そのなかには、この放水路と思われる建造物も入つている。とくに、水門の水流調節装置のレベルと、この放水路の取水口のレベルの差も、數值的に報告されるはずである。その結果は、あるいは、この水門 III そのものと、南方に隣接するこの放水路らしい施設との關連の祕密を復原的に明示してくれるかも知れない。いまは、この水路と思われる興味ある施設の存在と、それがあきらかに水門施設との關連において設けられたものであらうという推論の外郭のみを記すにとどめる。

次に、この Tughluqabad 水門 III の存在理由についての私見の一端を記しておきたい。ただし、それについては、私は、Tughluqabad 堰堤 III につ

いて述べる際にふれておいた。要するに、この附近の地形は、西から東の方へ向つて傾斜し、緩やかに低くなつていつているのである。従つて、この水門IIIは、Tughluqābād 城砦南面に貯えられた水についての、一種の放水ダムの如き機能をもつものと考えられる。(従つて、前述の放水路の取水口のレベルまで水量が上つたときには、水門の調節施設に関係なく、餘剰の水は、つねに放水路から東方へ向つて排水されるしくみとなつていたと想像されるのである。)



挿圖17 Tughluqābād 城砦南方の凹字型平坦地。耕地の向う側に水門 III が小さくみえる(挿圖1の略圖を参照)。

つまり、この水門は、城砦南面の水利構想の一環として、Tughluqabad 堰堤 III と関連して構築されているものであり、第一に城砦南面の貯水を目的としている。挿圖17は、この水門の西方平坦地の現状で、見事な耕地となつているのがわかるが、この凹字型城壁に囲まれた平坦地内の貯り水が、はるかかなたに小さく見える水門 III で調節されたわけである。この水門は、また必要に應

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

じて、東方ジャムナー川方面への放水を第二の目的とするものであると考えられる。従つて、この水門は、堰堤IIIとともに、Tughluqabad 南方の水利構想実施の、いわばかなめにあたる施設といえよう。

この水門および放水路の建造の時期については、さまざまな推論が可能だろう。しかし、少くとも、Tughluqābād 城砦建設の時期より前ではないことはほぼ確かである。また、この水門の存在には、城砦と、'Ādilābād の立つ丘陵とのあいだに、堰堤が存在することが前提である。従つて、私は、この現存の水門施設の建設の時期を、Tughluqābād 堰堤IIIの構築の時期と同時か、あるいは、それよりわずかのちの時代と考えている。

この水門 III について最後に記しておきたいことがある。それは、のちに紹介する Wazirabad の水門についても、巷間伝えられるさまざまな説があるようであるが、この水門についても、一時、これが hammām (ハンマーム)、すなわち、トルコ風呂というふうに考えられていたふしがあることである。それは、さきにもふれたインド政府考古調査局が保管する、プランを主とする圖面(前註32を参照)の寫眞の題に、“Hammam and Sluice...” というふうに記されているのである。なるほど、この水門の頂部は平坦なモルタル屋根であつて、ハンマーム特有の小ドームこそないが、ちよつとハンマームの遺跡を連想させる雰囲気がないこともない。この“Hammam”なる説明が、俗傳をとつたものか、あるいは A. S. I. の調査者が自ら想像して記したものか、おそらくは前者であろうが、私見では、この施設が、かつてトルコ風呂として用いられたと推定される根拠は、なに一つとして見當らなかつたことを添記しておきたい。

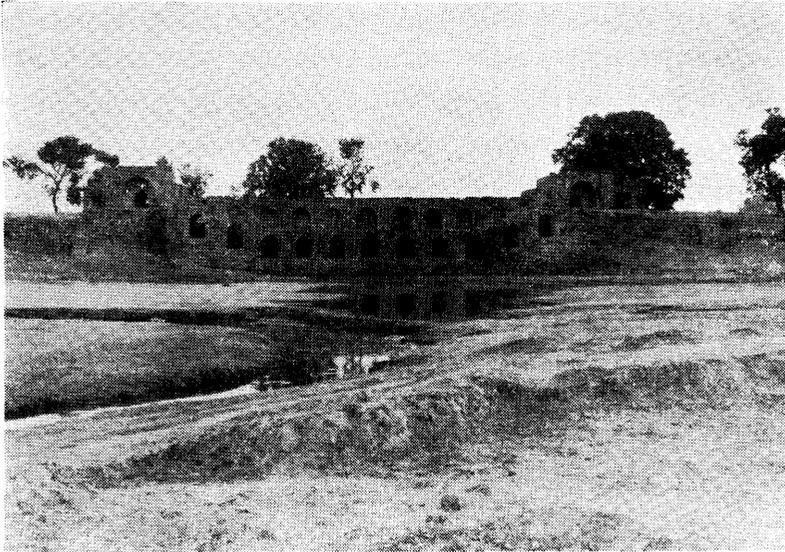
4. Jahānpanāh 南城壁の水門、とくに Satpulah とよばれる遺跡について

Satpulah とは、ヒンディー語で七つ (*sāt*) の橋 (*pulah*) を意味する語で、これまでも、そのまま譯されて “seven bridges” などとして紹介されたこと

(33) もある。この興味ある遺跡は、ニューデリー南郊の Malaviya Nagar 新団地の東南方にあるふるい部落 Khirki (キルキ) の東方約 200m ほどの地點にあり、さきに堰堤の部分で紹介した Jahānpanāh 南壁のほぼ中央に位するものである。デリー地域に現存する水門の遺跡としてはもちろん、インドで建設されたサルタナットあるいはムガル帝國の時代の水門施設としては、おそらくは、最大の規模をもつものといつていいのではなからうか。この Satpulah すなわち「七つの橋」という名稱の由來は、現在でも、この大遺跡の北面の全景をながめれば、直ちにわかるところである。すなわち、この構築物を構成する主要な中央水路の部分は、七つの大きなアーチ式坑道に分れていて、そのために、この建造物全體が、あたかも七つのスパンをもつところの大きな橋のようにみえるところから、この名稱は由來している。これに類する名稱としては、デリー地域にも、例えば Ātpulah (八つの橋)、Bālapulah (十二の橋) というように、本當の橋について用いられてきた例が、ムガル時代の遺跡にも指摘することができるのである。この大水門の場合は、橋そのものではないのであるが、建造物の特徴をうまくいいあらわした名稱といつてもいいであろう。また、この水門は *band* とよばれている。Syed Ahmad Khan もそのようによんでいる一人である。もちろん、この場合は、水門兩側につづく堰堤全部をふくめているわけではない。一般には、堰堤の一部分に設けられた、Satpulah のような水門施設をも、*band* という名でよんでいたことも、しばしば、あつたようである。

この巨大な水門については、1959~60、61~62年の冬期に、東大調査團が、附近の地形もふくめて、かなり詳細な調査を行なつた。豫定されている報告書のなかでも、相當くわしく報告されるはずの対象の一つである。従つて、その遺跡のディスクリプションには、A. S. I. による Delhi Monuments List の敘述の一部を補註に引用(後註34参照)するほかは、私の論旨に必要な點だけを記すにとどめたい。この大水門の構造については、とくに、水流を調節する

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について



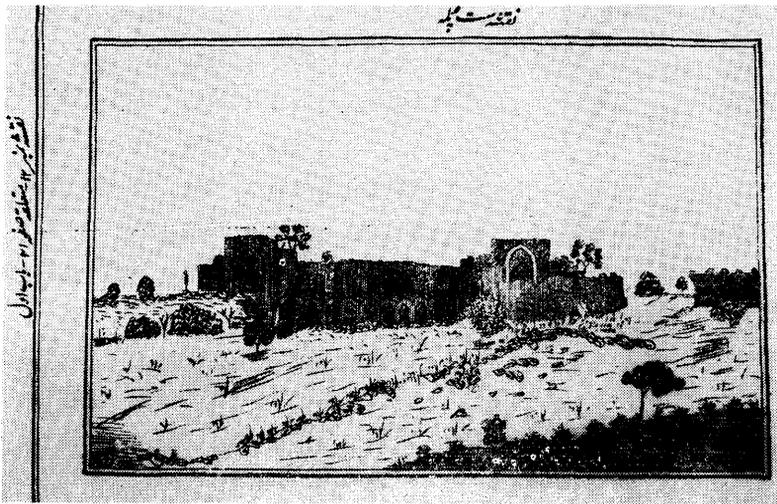
挿圖18 Satpulah 大水門 (北面).

水門開閉装置のメカニズムが、きわめて興味あるものであり、さきに紹介した Tughluqabad 水門IIIや、のちに述べる Firūz Shāh 時代のもものと推定される水門のそれにくらべて、桁はずれの規模を備えており、また、その技術の細部にも種々の特徴をもつ、いわば異例なものといえるのである。大へん興味あるこれらの諸問題についても、本稿ではふれずに、調査團の主報告の内容によりたい。この大水門 Satpulah は、デリーの遺跡のなかでも、目立たぬ地點に現存するというべきであろうが、かなりの規模をもつものであるし、また、その建造物の構造と様式の特異さからいつても、これまで、多くの學者や旅行者などの関心をひき、19世紀以降、さまざまな著者によつて言及されることが多かつたのは、當然のことといえようか。⁽³⁴⁾

現在、この Satpulah は、それ自體としては、水利施設としての機能を全く停止している。しかし、遺跡の南側の中央部には、碎石・モルタルとコンク

リートとを併用した近代的な堤防がつくられ、この遺跡を保護すると同時に、Jahānpanāh 南壁の遺構とともに、その南方一帯の水を抑制する役割りは演じているようである。そして、その南面の排水は、現在では、Satpulah のすぐ50mほど東方の近代的水利施設と、これとは別の、二つのジャーナー型の近代的水門によつていらしい。従つて、この Satpulah 水門の遺構も、雨期になつても十分に保護されてきたようである。

なお、Syed Ahmad Khan の *Āthār al-Ṣanādīd* の敘述をみても、その挿畫（下の挿圖17参照）でもあきらかにわかるとおり、Satpulah そのものの向つて右、すなわちこの大水門の西方延長線上の Jahānpanāh 堰堤の一部が、あたかも切り通しのように崩壊している。Ahmad Khan の挿畫のこの部分をみると、Satpulah 水門の南側のはるか彼方がみとおされるように描かれている。この描寫法から推すと、この Satpulah 西方の堰堤の崩壊部分は、



挿圖19 Ahmad Khan の *Āthār al-Ṣanādīd* (1987年刊本) 所載の挿畫。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

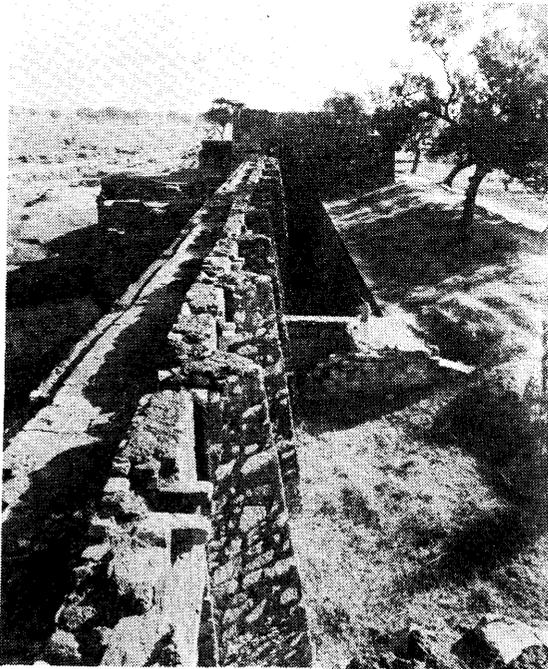
単なる描寫上の想像としてはあまりにも寫實的すぎるように思える。Ahmad Khan は、その初稿本の敘述の終りのあたりで、彼が、自分で遺跡の寫生のために現地に赴いたことについて記している。⁽⁵¹⁾従つて、少くとも、19世紀のなかごろのある時期に、この挿畫にみられるように、Satpulah 水門西方の堰堤の一部が崩壊していたことは、ほゞ間違いないと私は考える。しかし、この挿畫にみられる崩壊部分にあたる個所を現在の場所にてらしてみると、その北面の石積みなどは若干違つていて、後代に行なわれた補修のあとが、少しはわかりそうである。思うに、問題の個所に相當する部分を少々發掘してみれば、崩壊および補修の事實は、よりはつきりするのではあるまいか。

この Jahānpanāh の南壁が、いくつかの地點で崩れ、Satpulah 自體も、英領時代に入つてから改修あるいは閉鎖されたこともまた、Syed Ahmad の記述から知ることができる。この點に關して、Ahmad Khan の *Āḥḥār al-Ṣanā*⁽³⁶⁾*dīd* の初稿本から關係部分を英譯して紹介すると、ほゞ次のようになる。

“……This *dīwār* had fallen down at some places, and so, in the reign of *Hukkāmṛwālā maqām Angrīzī*, they built *kachchhā band* in these places; and closing the *dars* also, they stopped the water. Then the whole fields became full (of water), and the *zamīndars* got advantage of it. Recently at one night, by the strength of water, this *dīwār* was all at once broken down. Now again, they have closed (the *dīwār*) and built the *kachchhā band*……”

これによると、英領インド當局は、*dīwār* すなわち壁の崩壊部を *kachchhā band* で修復し、同時に、Satpulah の *dar*、すなわち水道坑の戸口を閉じたいことがわかるのである。しかし、のちにまた、ある晩、壁が決潰したので、さらに *kachchhā band* を設けてこれを補修したというのである。この Ahmad Khan の文申に用いられたウルドゥー語の *kachchhā* (カツチャハー) という語は、ふつう、*pakkhā* (パツカハー) という語に對して用いられる對

語であるが、*band* などの場合には、石造やコンクリート、あるいは碎石や漆喰などを用いる方法に對して、土のみを用いた場合を意味するものと思う。さきにかゝげた挿圖17にみえる *Āthār al-Ṣanādīd* 挿畫についても、⁽³⁷⁾*dīwār*(壁)を堰堤の一部と解すれば、あるいは、その文中に現在完了形、述べられた英領インド當局による補修の直前の状態を描いているものに當るかも知れない。そして、デリー地域では、雨期以外に連続的な大雨が降ることはごく珍しいことであるから、補修作業は、もちろん、雨期以外の時期、それも野外の工事に適しない3月～5月の酷暑期をのぞいた11月から2月あたりに行なわれたものと思われる。



挿圖20 Satpulah 大水門の上部西側より東方を望む
右側に、近代の構築物がみえる。

さて、現在では、Satpulah 自體は、水門としての機能を全く停止し、完全なる廢墟の遺跡であるにすぎない。下方の七つの水道坑と上方兩側二つずつの四つの坑道も、そのうちのいくつかは、泥土で埋められ、閉ざれてしまつていようである。さらに、すでにふれたところの Satpulah 南側の近代的な障碍構築物も、*Jahānpanāh* の南壁の遺構の一部となつて Satpulah 遺跡の坑道部を南側で完全に保護し、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

堰堤の一部の役割りをもはたしているわけである（挿圖20参照）。この近代的な防禦工事は、さきに補註34で紹介した1910年代後半のDelhi Monuments Listのディスクリプションの引用の最後の部分に現在完了形で記された作業であろう。

次に、Satpulahの建立に關する年代の考證という困難な問題に少し言及しておく必要がある。この問題については、私は、次章において、トゥグルク朝時代の文獻史料の記述に關連ある私見の一端をくわしく述べるつもりであるが、こゝでは、従來の諸著のいうところを中心として記しておきたい。實は、次章に記す私自身の疑問にもかかわらず、Satpulahについては、これまでの諸著は、トゥグルク朝第2代のスルターンであるMuḥammad bin Tughluqの時代の建造ということについては、ほぼ見解が一致しているのである。ただ、Syed AhmadのĀthārの初稿本のみが、のちにふれるように、次のスルターンのFirūz Shāh Tughluqの時代の建立説を述べているのであるが、そのSyed Ahmad自身、その改稿本においては、「727 A. H. 年、すなわち1326 A. D. 年に」トゥグルク朝のMuḥammad Shāhが建立したと、その説明を改めてしまつているのである。Ahmad Khanによる727 A. H. 年説については、その後の諸著書も、それを踏襲しているものが多い。すなわち、例をあげれば、Carr Stephen (1878年)、Fanshawe (1902年)などはそれである。最近のY. D. Sharma (1964年)などは、Muḥammad Shāh Tughluq (1325-51)の建設といいながらも、限られた年代の設定については慎重である。Delhi Monuments Listも、はつきりした年次は記してはいない。

Syed Ahmad Khanにはじまる727 A. H. 年(1326 A. D. 年)建立という説については、正しく考えてみると、その西歴年次換算においても多少の疑問がある。というのは、727 A.H.年は、1326年11月27日から1327年11月16日までである。⁽³⁸⁾すなわち、727 A.H.年は、西歴1326年についてはわずか1カ月と數日しかない。たとえ、この期間は乾期で建設工事に好適な時期であつたとし

ても、1327年である可能性の方もかなり多いはずである。せめて、この場合には、727 A. H. (1326—27 A. H.) 年というふうに訂正されて然るべきであろう。

ところで、この 727 A. H. 年という限られた年次について、Ahmad Khan が、一體、どこからそれをとつたのかは、私には目下のところ、よくわからない。この年は、Muḥammad bin Tughluq がスルターンに即位したわずか2年のちにあたるのである。Wolseley Haig の研究によれば、この年に、首都はデカンの Devagiri (デーヴァギリ) に移され、Muḥammad 自身も、新都 Daulatābād (ドーラターバード) に赴いたということになつて⁽³⁹⁾いる。そもそも、Satpulah は、Jahānpanāh の南壁、あるいは、それに代る同位置に、堰堤が存在するという前提なくしては、その存在理由はほとんど考えられない性質の水門である。かりに Satpulah が現在残つているような大構築物でなく、あるいはより簡単な水門であつたとしても、Jahānpanāh の建設は、Satpulah あるいはその前身の水門施設の建設と同時か、あるいはそれ以前のことと考えるのが理の當然である。とすれば、Setpulah が、Tughluqābād を即位當時にそのまま用いていたと思われる Sulṭān Muḥammad Shāh の即位後わずか2年にして造営されたというのは、とりもおさず、彼の即位後2年あるいはおそらくそれ以前に、Jahānpanāh 南壁が少くとも現在の規模ほどには構築されていたということになる。これでは、どう考えても、時期が早すぎると思う。私はその可能性はきわめて少ないと思うのである。だから、Ahmad Khan をはじめとする 727 A. H. (1326 A. D.) 年の Satpulah 建設説については、つよく疑問を提出せざるを得ない。Jahānpanāh についてはともかくとして、Satpulah 建立の時期については、いささか私見もあるので、のちの章で、さらにこの問題にふれることとした。

さて、Ahmad Khanによる、727 A. H. 年、Muḥammad Shāh 建立説を紹介批判したついでに、彼の初稿本の所説についても記しておくことにする。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

776 A. H. 年（すなわち、1374年6月～1375年6月にあたる）に、Muḥammad bin Tughluq に代つてスルターンとなつた Firūz Shāh の子の Faṭḥ Khān（ファトゥフ＝ハーン）が死んだ。そのため、Sulṭān Firūz Shāh がいたく悲しんでいるのをみて、彼のアミールたちが、スルターンの悲しみを忘れさせる一助にと、shikārgāh（日本語では、「お狩り場」とでも譯そうか）として、この band をつくつたというのである。この説は、歴史的⁽⁴⁰⁾事実としては直ちに信じられないが、Satpulah の建設目的についての一つの傳承としては興味深い話である。Ahmad Khan 自身、改稿本では、この説についてはふたたび述べていないし、他に、Firūz Shāh 建立説をつよく主張している人もいない。

問題は、この水門施設の構造および様式である。この水門の主要部分もさることながら、Satpulah 水門部の南北両端の堰堤上部に建てられているところの、アーチ式入口を北面にもつ、二つの對稱的な小屋の構造および様式上の細部の諸特徴は、とくに、時代区分の場合に問題点となろう。私自身の不十分な観察の結果では、これらの構造と様式とは、Firūz Shāh 時代の他の建造物のそれとくらべると、必ずしも同じとはいえないような氣もする。しかし、同時に、それらは、Tughluqābād 内城址や他の Muḥammad Shāh 時代の建造物にくらべると、若干異なるような氣もしてくる。いずれにせよ、時代的には數十年とは離れてはいないのである。だから、正直にいつて、現在の私には、この大水門およびそれに附屬する建造物の構造と様式からは、正常な結論を導き出す自信がない。この點は、東大調査團の諸資料の比較検討の結果、あるいは、より決定的な方向に近い時代区分論が出されるかも知れない。ただし、Muḥammad Shāh 時代か Firuz Shāh 時代かということについては、のちの章で文獻史料と關連して、私自身の推論を述べたい。

次にふれておきたいのは、この大水門建設の目的についての問題である。上に紹介した Firūz Shāh 建立説は、一つの傳承にすぎないものであるが、建設理由として、shikārgāh、すなわちお狩り場をつくるためであつたというの

は興味がある。水を集めて動物を誘い、狩獵条件を整えることは、私ものちに述べるように、支配層がよく行なつたやり方であつた。しかし、この Satpulah 附近は、當時も農耕地をひかえていたと思われるし、ともかく、新市の城壁のあるところである。しかも、狩獵場造りにしては、この大水門の工事は、少々、その規模が大きすぎるようにも思える。とまれ、この Satpulah 大水門の建設の機能と目的とは、これまでの諸著書の多くが一致して記しているように、Jahānpanāh 南壁南方の平坦地に水を集め、その貯水を、この大水門によつて、適時、北方に放流することにあつたことは、ほとんど疑いをいれないところであろう。これについては、後章で、さらに私見を開陳したい。

最後に、この Satpulah 大水門にまつわる宗教的な傳承と、それと関連する民間信仰の行事などについて紹介しておきたい。Syed Ahmad は、Āṭhār al-Şanādīd の初稿、改稿兩本で、Shaikh Naşīr al-Dīn Maḥmūd (シャイフ=ナスイールッディーン=マハムード)、すなわち、ふつう Rūshan-i Chirāgh-i Dihli (ローシャネ=チラーゲ=デリー、すなわち、デリーの燈灯(日本流に言えば、「お灯りさま」とでもいおうか)とよばれているスーフィーの聖者に關する傳承を、Satpulah の遺跡に關連して載せている。かつて、この Satpulah の遺跡に、この高名な聖者がやつてきて、午後の 'asr (アスル) の祈りをした。ところが、彼は、氣分がわるくなつた。しかし、あたりには水がない。そこで、この聖者は、自分の手で地面をひつかくと、ふしぎにも、それから水がでてきた。彼は、その水で手と口とをすすぐことができたというのである。そして、この地の水に沐浴したものは、どんな病氣をもつていてもそれがなおるように、このシャイフが祈つたというのである。その後、この band の前面に小さな井戸がほられたが、誰もがそこで水をとつては困るので、小さい壁がめぐらされた。その後、この地の水は、ムスリムとヒन्दウーの兩者ともに、聖なる水と考えるようになり、その水に浴すると病人もなおると傳えられるようになった。そのため、Kātik (すなわち、Kartuk, カルティク) の月、Dī-

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

wālī (ディーワラー) の週、さらに日曜日や月曜日には、この地に多勢の人びとが集まつてきてにぎわうという。子供を連れた婦人もまじる會衆が, ṭhi-liyā (ティリヤー), すなわち小さい土の容器に水をいれてもつてかえるという習慣についても, Ahmad Khan は記している。さきにもちよつと紹介しておいたように, Ahmad Khan 自身, 寫生をするために Satpulah まで行つたとき, あまりの人ごみに, とても寫生どころでなかつたと記しているほどであるから, 彼が Āḥḥār al-Ṣanādīd を著わした前後, すなわち19世紀のなかごろにも, Satpulah の遺跡では, まだ, そうした慣習がつづいていたものと思われるのである。これらの民間信仰的行事のある日には, Chirāgh-i Dihlī のダルガーのハーディムが土器を賣つてもうけていたらしいことも Ahmad Khan は記している。それによると, 彼らは, 同時に, この水門を利用して, 一風かわつた網を張つて, フクロー (ullū, ウッルー) を捕えてかせぎにしていたといふことである。⁽⁴²⁾

なお, この Satpulah は, Delhi Monuments List の記すところに従えば, このあたり一帯では, Madrasah (マドラッサ), つまり學校とよばれていたらしい。それは, この大水門遺跡の東西兩端の二つの小室が, 一時, この地域の村民たちの maktab (マクタブ, 意味は用じく學校) として使用されたことがあつたことによるといふことである。また, この A. S. I. の調査が行われた1910年代には, この二室のうち, 西側の小室の方は, デリーの District Board が倉庫 (godown) として用いていたといふことである。⁽⁴³⁾ ただし, 現在では, Satpulah は, 全くの廢墟の遺跡であつて, A. S. I. の文化財保護の青札がはられており, そのほかの用に使われてはいないし, また, 私の聞いたかぎりでは, なんら, 民間信仰的な行事も行われていないらしい。

さて, Jahānpanāh 南壁の堰堤には, Satpulah 大水門のほかにも, あと四つの水利施設がある。Satpulah の西方約 50m ほどの地點には, コンクリー

ト造りの井戸の施設がある。現在、その北側には、碎石モルタルの、ふるい構築物が、Jahānpanāh の壁に喰いこんだ形でその崩壊部を露出している。そして、この崩壊部の下部は、一種の小さい淵のようになっている。この凹みの下方の淵の部分にも、碎石とモルタルが露出しているのである。この崩壊した部分は、その碎石とモルタルの露出部の状況から、単に Jahānpanāh 城壁がそのまま一部分崩れたものとするよりは、むしろ、なんらかの構築物が、かつて存在したようにもみえるのである。もし、そうだとすると、この部分と、Satpulah 本體との関係がよくわからない。一つの推測としては、この、現在、淵のようにみえる部分は、Satpulah 北方の水を、この場所にとくに貯えるためのものであつて、おそらくは Ahmad Khan も、すでに私が紹介した傳承に關してふれているように、この附近では容易に得られたらしい地下湧水の井戸をも兼ねて設けられた、一種の貯水淵のようなものではなかつたであらうか。現在あるところのコンクリート製の近代的施設は、一面で、この水を汲み上げるための井戸施設の、いわば、汲み上げの足場であらうと私は考えている。おそらくは、乾期における灌漑用として、この淵にたまっている水を、堰堤の南側にもとり出し、利用するためのものではあるまいか。これは現存する近代的施設についてのことであるので、これ以上は述べないが、淵の部分の崩壊個所の碎石モルタルのふるさの状態をみると、この貯水淵は、あるいは井戸的なものとしての機能を兼ねたもので、相當ふるい時代から、Jahānpanāh 南壁南面の灌漑用に用いられていたものかも知れない。

この貯水淵らしい、ふるい遺構と、その上部の近代的な施設のほかに、Jahānpanāh 南壁の堰堤には、なお三つの水利施設がある。そのうち、Hauz Rani 部落の西端に近く、堰堤を横切つて設けられている水門は、Satpulah にくらべると大岩と小石にたとえていいほどに小規模のものではあるが、Delhi Monuments List にもわずかに言及されている。この水門が、はじめは、はたしていつごろ建設されたものかということ、いまでは推測しようにもちよ

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

つと手がかりがない。ただ、Delhi Monuments List もそれについて述べているように、現在の水門の様式は、どうみてもムガル時代より前には到底さかのぼれないように、私には思えるのである。石板か木片かを用いて水道坑の開閉を計つた装置が、かつて用いられていたであろうことは、水門の水道坑の兩



挿圖21 Jahānpanāh 南壁の一部にある小水門 (Hauz Rani 部落東方).

側にある凹溝の残存により容易に推測できるところである。現在では、この水門の附近一帯は、雑草でおおわれている。雨期あるいはそのあとに、この舊水門施設が、現代でも用いられているのかどうかについて村民に聞きもらったのは、今にして思えばいささか残念であるが、私の推察では、今日では全く用をなしていないと思う。Satpulah 南壁に現在する他の二つの水利施設は、いわゆるジャルナー、ジャルとよばれるもので、水門（モーリー）といわんよりは、むしろ傾斜のある通水路というべきである。しかも、現存しているものは、いずれも、近代の所産であることがはつきりとわかる構築物である。Jahānpa-

nāh 南壁には、こうした水利施設が大小二つあるが、そのうちの小さい方は、上に述べたムガル時代以降のものらしい小水門の西方にあり、一方、大きい方のジャーナーは、Satpulah のずつと東方にある。現存するものは、あきらかに近代の建設にかかる立派なもので、現在もちろん役にたっているのは、なんびとにもあきらかなところである。しかし、これが、かつて、同じ場所になんらかのふるい様式と構造とをもつて存在していたもので、それが近代に至つて改善されたものなのか、あるいは、近代になつて、堰堤を切り崩して、新しく造つたものかはよくわからない。Delhi Monuments List (1910年代)も「最近直されたようにみえる」といつている。いずれにせよ、私には、これらの水門施設が、もともと、サルタナット時代までさかのぼり得るのかどうかということについての決め手は、いまのところ一つもないので、ここでは、以上の紹介にとどめておきたい。

なお、Jahānpanāh 南壁については、そこに設けられたとされるかつての城門、すなわち Darwāzah (ダルワザ)の問題があり、これが水利施設の造営と、どこかで係わりがあると考えられるのである。しかし、これについては、のちに文獻史料について考察するときふれたいと考えている。

5. Mahipalpur 堰堤に現存する水門 I, II

Satptlah 大水門についてはいささか問題はあるにせよ、これまで紹介してきた水門の大部分は、いずれも、トゥグルク朝前期に構築された建造物であると推定されるのであるが、これから述べる水門は、いずれも、トゥグルク朝後期、とくに Sulṭān Firūz Shāh 時代の治世における構築と推定されるものである。

ここにまず紹介するところの、Mahipalpur に現存する二つの水門施設は、いずれも、第II章で紹介した Mahipalpur 堰堤 (II—1) に設けられているもので、現在なお、その舊状をよくのこしている遺跡である。Mahipalpur の

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

堰堤は、ほぼ南北に走る北翼と、中央部からやや東南方に走っている南壁とに分けられるが、ここに記す二つの水門は、南北兩翼のそれぞれに設けられているものである。本稿に關するかぎり、北翼にあるモーリーを Mahipalpur 水門 I、南翼にあるモーリーを同じく水門 II と名づけることにする。

このMahipalpur 水門 I および II についても、この堰堤と同時に、東大の調査團が、1961～62年にかけての冬期に觀察測量を実施しているので、水門の構造も、堰堤の諸問題とともに、右報告書のなかにくわしく報告されるはずである。従つて、本稿では、そのうちの水門 II の寫眞の一部をかかげることにして（挿圖 22 參照）、兩水門の構造についての敘述は省略することにする。北翼にある水門 I は、これよりもその規模がずつと大きいし、水道坑も石ではなくて、碎石モルタルのアーチ型の大きなものである（挿圖 22 參照）。この二つ



挿圖 22 Mahipalpur 堰堤北翼の水門，西側突出部。

の水門については、これまで、Delhi Monuments List が、band を説明する
敘述のなかでふれている⁽⁴⁶⁾。この水門の構造のなかで注意すべき点は、とくに南
翼の水門の場合にそれぞれ半圓孔をもつ二つの石を積み重ねて水道坑をつくつ
ていることである。この方のは、Tughluqabad 水門 III, およびのちに述べる
Wazirabad 南方の水門, Būlī Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤の下にみえる水門
趾などの水道孔ときわめてよく似ており、それらの構造をより簡単にしたもの
のように思われる。

この Mahipalpur の堰堤については、のちに述べように、Shams al-Dīn
Sirāj ‘Afif の Tārīkh-i Fīrūz Shāhī に、Band-i Mahipālpūr としてあらわ
れている堰堤に比定し得ると推定されるのである。従つて、この堰堤および水
門の構造と様式、および推定される機能などは、その時代の比定がほぼ推定で
きるものの好例として、デリーの水門の遺跡のなかでも、調査團が、とくに歴
史的に重視した対象なのである。のちにくわしく述べるが、上にふれた ‘Afif
の史書の記載についての考證があたつているとすれば、この堰堤と水門には、
いずれも、トゥグルク朝後期の Fīrūz Shāh の時代に建造されたものと推定し
得るのである。

j. Station Road の水門

この水門については、すでに、Delhi Monuments List が、Palam Zail の
なかの “Band Shikar” の地域の堰堤 (Vol. IV , No.139) の敘述のなかに簡
単にふれている⁽⁴⁷⁾。1961~62年の冬期に私が P. Saran 氏と現地へ赴いたときの
経験では、Station Road 堰堤の道路の北側に残る部分のジャンガルのなかに、
堰堤部より西方にかなり突き出しているモーリーを見ることができた。それは
二つの水道孔をもつていたようであるが、それもかなり崩壊が著しかつたよう
である (挿圖23参照)。

この水門は、さきにも堰堤の部分で述べたとおりに (40 ページ参照)、そ



挿圖23 Station Road 堰堤北翼の水門，西側突出部の水道坑。

の東側の、いわゆるリッジの南端にある丘陵地帯西側の、緩やかな斜面からの水をせき止めて貯え、その水を、乾期に西側の低地に導くために設けられたものと推定されるのである。水門の部分に関しては、現状は、ただ、堰堤の西側のみが遺跡として残っているのであつて、寫眞（挿圖21）でみるように、その表面のモルタルはすでに剝落してしまつていて、水道孔がその暗い奥底をのぞかせているにすぎない。ところで、この水門の部分の東側の方には、近代になつて設けられたと思われる半圓型のモルタルの圍壁が現存しており、そこには階段も設けられていて、ひとが昇り降りできるようになつている。さらに、鐵板あるいは木板を上下する水門開閉装置も設けられている。私自身は、堰堤の西側でみたところの水道孔の存在は、東側では、残念ながら、確認できなかった。この近代的工事は、サルタナット時代の構築と推定される水門施設の舊水道坑がそのまま放置されることによつて、東側の地にたまつた雨期の水が、

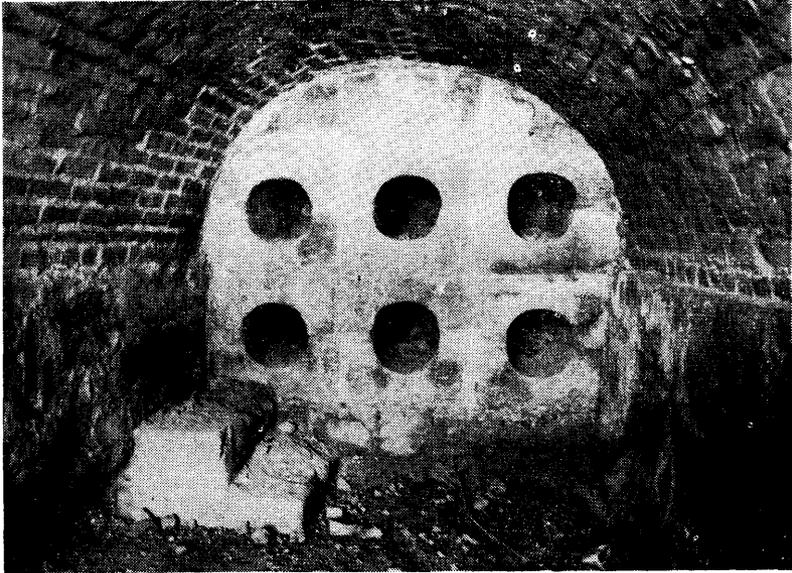
堰堤および水門の遺跡を崩し、同時に、附近の土地に被害を與えるのを防ぐための工事であつたと想像する。そして、開閉装置の存在でわかるとおりに、近代においても、この水門遺跡は、實際に、水を通すのに用いられ、また、水の調節、抑制にも利用されていたことも推測されるところである。従つて、半圓形の近代的圍壁は、ただ、文化財としての水門の舊跡の保護のためにのみ設けられたものとは思われない。この工事については Delhi Monuments List にも、“recently” という副詞つきでふれられているので、1910 年代後半のことであることがわかる。あるいは、New Delhi 南郊の道路の整備や、Cantonment 地區建設と並行して行われた補修工事であるかも知れない。現在でも、雨期の雨量が著しいときには、この圍壁や舊水門の機能が、東側の近代的な開閉装置とともに、實際に機能していると、私は思う。

この水門は、すでに私も堰堤の部分で述べたように、水門わきの廢墟と化している建造物にてらしてみても、おそらくは、Firūz Shāh 時代のものである可能性が相當に考えられていいであろう。ただし、重要な遺跡であるにもかかわらず、私の知るところでは、すでに述べた Delhi Monuments List のほかには、この水門にふれているものは、ほとんどないようである。

7. Būli Bhatiyārī kā Maḥal 北方の水門

この水門は、第II章で紹介した Būli Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤 (I—3) に設けられていたと推定されるものであり、かつては相當の規模をもつ施設であつたことが、Delhi Monuments List の記述からもうかがえる⁽⁴⁸⁾。しかし、その後行なわれたこの附近の道路工事、近代的貯水地建設、および水道管敷設の工事などが、この水門の遺跡をとりこわしてしまつたと推定される。1961～62年の冬に、私が自分でみたところでは、この水門施設の一部であつたかも知れぬ水道孔の遺構が、もとの堰堤の上を通る道路に設けられた近代的な穹坑の奥に、東側に向つてのこつていた。これが、はたしてもこの水門の水道孔そのものか、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

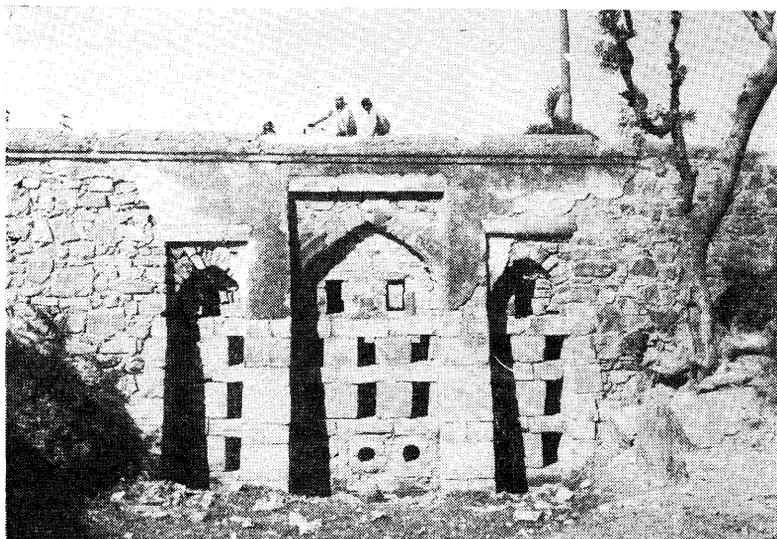


挿圖24 Būli Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤の水道孔施設と推定される遺跡.

本物としてももとの位置にあるものかどうかは、よくわからない。いまでは穹坑の奥の暗いところにあるので、史跡に特別な興味のあるひとでもないかぎり、注意はしないであろう。この水道孔の構造をしてみると、まさに、Firūz Shāh 時代の構築と推定される他の水門、とくに、次節で紹介する Wazirabad の水門のそれをそのまま小型にしたような感じがするのである。すでに紹介した、近傍の小城砦風の建造物が、Firūz Shāh 時代のものと推定されるという事実からみても、また、現存する水道孔の構造と様式とから推しても、水道孔があつたと思われる水門は、堰堤や、Maḥal とよばれる既述の建造物と同じく、Firūz Shāh 時代の造営であることも、相当可能性があるものと考えられよう。

8. Wazirabad 南方の水門

この水門は、Wazirabad の部落の南方にある第 II 章で紹介したところの堰堤、すなわち Wazirabad 南方の堰堤 (II—2) の南方に現存するものである。この水門の特徴は、まず、それが Firūz Shāh 時代の他の水門の場合と異なつて、堰堤そのものの一部に構築されているのではないということである。この水門は、この地方のはるか東方を流れているジャムナー川に連なる運河の上にかかっている橋梁の北方に、その橋の延長部として存在しているのであり、あたかも、右の橋に附設された小橋梁として、運河のバイパス的な流れを引き受けているというかつこうである。この水門は、ひとことでいえば、南北に走っている橋梁状の構築物の下の部分を部屋にし、その部屋の内側の下方に、いくつかの水道孔を、水位に應じるように階段状に置き、それに巧妙な開閉装置を



挿圖25 Wazirabad 南方水門 (西面).

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

ほどこしたものである。そして、この内室が、水流に對して、格子型の石積みによつて防禦されるようにできている點も、さきに紹介した Tughluqabad 水門 III の西面の場合と同様である。水道孔もはつきりとのこつており、開閉装置に用いる木板（あるいは、石板か鐵板かなど）をはさんだ溝も、はつきりのこされている。本稿で紹介するところの水門のなかでは、Satpulah 大水門ののぞけば、Tughluqabad 水門 III とともに、その特徴的な水道孔と開閉装置の原型を、もつともよくのこしている遺跡といつていいであろう。

この水門を、私は、すでに1953年に自分でみていたのであるが、そのときには、まことに不明にして、外形のみから變つた型の橋としてしか考えていなかった。1959年の秋、東大の調査團の人びとを案内して、再度、デリー地域最北端のこの遺跡に赴いたときに、はじめて、この遺跡の内室に入る機會を得て、その水門の巧妙な装置に感心したのであつた。このことが、のちの Tughluqabad 水門 III をはじめ、本稿に紹介したところの諸水門の探査と現状確認とにたいへんな役に立つた。私自身としても、水利關係の遺跡に注目した、もつとも最初の對象として、忘れられない遺跡である。

この水門については、興味ある遺跡である割りには、それについてふれている著書が意外と少ないのである。最近の Y. D. Sharma のデリー遺跡案内は、簡単にこれにふれているが、ややくわしくこの遺跡にふれているのは、Delhi Monuments List である。もつとも、この 1910年代の詳細な遺跡調査報告書も、この水門を獨立した項目としてとりあげずに、南方の“Bridge”の項につけ加えて紹介しているだけである。この水門は、東大の調査で測量觀察を行なつた對象の一つであり、その結果は報告書に載るはずであるから、本稿では、その構造と様式の問題は、一切省略することにして、D. M. L. の關連部分を註記しておくにとどめたい。⁽⁴⁹⁾

ただ、この運河と、その上にかかつている Firūz Shāh 時代の構築と思われ
る橋、水門と、その水門に關係をもつところの水流のバイパスなどを、關連さ

せて考察してみることは、この水門の建設目的と機能とを推察する第一の手がかりであろう。そして、こうした水利構想の総合的な復元的考察には、さきに第II章で私がある存在を推論したところの Wazirabad 南方堰堤はもちろん、東方のジャムナー川の存在と附近の地形などを含める必要があるのである。この水門の水流の調節や開閉装置のメカニズムだけは、遺跡の残存状態がきわめて良好であるために、かなり容易に、復原推考できるのである。しかし、上に記したように、水門建造の目的と、その水利政策上の機能の問題とは、他の諸水門の場合よりは、相當に複雑のように思われるのである。現在、この水門と



挿圖26 Warizabad 水門内部の施設。上段の溝は縦板を上下にはめる溝、下段の溝は泥土に埋れている。

南方の橋の西方には、近代的な水門式ダムが構築され、また、この運河の両堤岸は、まことによく整備されて東西に走っている。この運河の機能が、あきらかに、ジャムナー川の水を、主として灌漑の目的のために、引きこむことにあることはいうまでもない。

Delhi Monuments Listは、その註においてこの水門の效用について變つた解釋を紹介している。すなわち、水浴場 (bathing place), 魚獲場 (a place for the

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

catching of fish) という俗説である。Y. D. Sharma も、魚獲のわな (fish trap) としてこの後者の説を紹介している。ただし、D. M. L. の筆者は、これら兩説に對して、別の、より重要な推論を述べている。それによれば、この水門は、南側にある橋梁の “heavy superstructures” と同じように、洪水時のジャムナー川からの水の逆流を規制し、あるいは、それをとめるために設けられたものであるとしている。そして、この水門の構造が、泥土その他をためて、のちに清掃できるようにするために意圖されたものであると述べているのである。⁽⁵⁰⁾ この二つの推論は、大體において、私自身も、ほぼ賛成していいのではないかと思う。それについての私見の一端をごく簡単に述べておきたい。

まず、格子型の石積みの外壁についてであるが、これは、Tughluqabad 水門 III の西面にも同様にみられるものであつて、私は、簡単な石積みではあるが、水門装置を保護し、水流に乗ってくる障碍物の除去にも大きな役割りを果たしたと思う。例えば Mahipalpur 水門などにこれがみえないのは、Tughluqabad やこの水門の方がずっと技術的に大がかりで進歩していることを示していると考えてもいいであろう。とくにこの水門の場合には、水は、平坦地の貯水ではなく、ジャムナー川から直接流れこむ、あるいは逆にジャムナーに流れ入る水流である。また、場合によつては、相當期間にわたつて、常時この水門は利用され、單なる貯水のせきとしてではなく水流に對處していた施設なのである。従つて、自らの防衛と絶えざる清掃とが、兩側の石積みによる格子型の構造をとらせたものとみていいであろう。

つぎに、水利計畫に關連する問題であるが、私は、D. M. L. のジャムナー川氾濫時の逆流に對する對應處置のための水門という考え方にはほぼ賛成である。このことは、附近の地形と、ジャムナー川が、往時は、現在よりももつと西側を流れていたらしいという推定を想起すれば、⁽⁵¹⁾ ずつと理解し易くなるであろう。そして、このことは、すでに私が前章において、Wazirabad 南方堰堤の項で述べたところの推論とも關係しているのである。すなわち、そこで、私は、南

北に走る自然の地溝を巧みに利用して堰堤が南北に設けられたことを推論したのも、ジャムナー川の氾濫による過度の逆流水による被害の防止のためであったと考えたのである。この Wazirabad 南方堰堤の存在は、當然、その南部延長線上に、南北の同一方向に走っている水門および橋の構築と関連していると考えていいであろう。すなわち、ここに設けられた橋は、スパンの上に、なおかなりの余裕をとつて、しかも、きわめて頑丈に造られているのであり、この構造自體が、水流の増量、水位の上昇には、橋自體が、一種の堰堤の機能を果たすことを推測させてくれるものである。要するに、私は、この水門を、橋と運河、さらにその北方を南北に走る堰堤の存在と関連する水利施策の一環としての建造物と考え、従つて、その建造目的、機能を、すでに前章で述べたように、まず、ジャムナー川の氾濫による過度の水量の制限と抑制とにあつたと推察したい。

ただし、私は、Delhi Monuments List がいうジャムナー川の水の過度の逆流の抑制のみが、この水門の目的であつたとは考えない。それは、私が、すでにあきらかにしたように、この水門の附近の地域は、耕作に利用されていたと考えられるので、豫想されるジャムナー川の水の適度の氾濫は、ある程度は必要であつたし、また逆に乾期の灌漑も當然望まれたにちがいない。そこで、私は、上に述べた逆流水の抑制、過度の氾濫の被害の防止とともに、この水門は、次の如き場合にも利用されたのではないかと考えるのである。すなわち、

- (1) 橋、水門および堰堤の西側におこつた氾濫がそのままある期間つづくように、この水門を閉じることによつて、雨期の最中あるいはその後に水が東のジャムナー川に向つて引くのをある程度抑制し、また水量を調節した。
- (2) 運河の存在を前提とすれば、年によつては、また時節によつては、ジャムナー川の水の逆流に代つて、運河の水がジャムナー川に向つて流れこむことも考えられる。この水を、ある場合には抑止し、ある場合には調節する必要があつたかも知れない。そのためには、この水門が有用である。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

以上に推定した二つの場合は、さきのジャムナーの逆流の場合と反対に、水門への水流は、西方から東へ流れることになる。この水門が、特異な格子型の石積みによつて、その内室の装置を保護しているのは、片面だけでなく、東西両側ともにそうである點を、私はとくに指摘しておきたい。Tughluqabad 水門 III の場合には、水流の方向は、つねに西方から東方へと決つていたので、こうした石積みの外壁は、水門の西面のみで足りた。しかし、この Wazirabad 南方水門が、まさに東西両面において保護構造がとられているのは、水流が、つねに一方的ではなく、東方から西方へ、そして、時には、逆に西方から東方へということもあつたことを示すものといえるのではあるまいか。

ところで、この運河の存在は、上にもふれた氾濫水の人工的引水のほかにも、ジャムナー川からの灌漑用引水の用をまなしたであろう。これらの點については、Firūz Shāh 時代の運河の構築の問題とも関連することで、本稿の觀點をはるかにこす、さらにひろい問題に連なるところである。また、調査團の主報告書においては、さらに精密なる測量値にもとづいて、私見とは異なつた、あるいは、私見を一層發展させるような結論が示されるかも知れないことにふれておきたい。

IV. 堰堤および水門に関する文獻上の諸問題

1. はじめに

本章では、堰堤あるいは水門と思われるものに関して、サルタナット時代の諸文獻にあらわれている記述をとりあげ、すでに紹介したいくつかの遺跡と関連するものがあれば、それについて考察を試みてみたいと思う。拙稿第1論文冒頭の「序文」のなかでふれておいたように、⁽⁵²⁾もともと、サルタナット時代の建

造物にふれているところの、同時代あるいはサルタナット時代の文獻史料の数は、きわめて限られている。そればかりか、それらの文獻史料に言及されている内容は、概していえば、きわめて曖昧であり、また、せつかくの記述が、まるで簡単きわまるものであつたりする。そして、ときには、あきらかに誤謬と思われる記述さえも認められるのである。しかも、本稿で問題としている水利施設に関しては、文獻史料でそれらに言及しているものは、きわめて少ないのである。なかでも、次稿でとりあげるはずのパーオリ（bāūli）や、通常の井戸についての言及は、これらの史書の場合、ほとんど皆無といつていい。逆に、碑文の面では、かえつて、遺跡としてはほとんど目立つことのない小さい井戸などに、その建立に關する歴史碑文が残っている場合もときにあるのである。しかし、本稿で問題とした堰堤や水門となると、そのような碑文が残っている遺跡の例は、これまで、デリー地域に關する限り、一つもないのである。このことは、井戸の場合には、地方の有力者などにより、ムスリムとしての社會的、宗教的立場から建造されたものが多いために、その建立の由來を碑文にとどめて誇りとしたことにもよるものであろう。堰堤、水門となると、建造物の性質上、碑文はもちろん、文様でさえつけることがほとんどなかつたことがふつうだつたようである。そして、建造の時に、あるいはのちの時代の補修に際して、たとえ碑文の如きものが、現地にのこされたとしても、水流、水壓に抵抗しなければならぬその環境から考えて、損傷度が著しいことが、當然、豫想される堰堤や水門の如き建造物には、それらが長い期間にわたつて残存することは、なかなか難しいことと思われるのである。

ところが、このように文獻上でほとんど言及されてない堰堤についても、きわめて稀な例外が、一二のサルタナット時代の文獻に見出されるのである。しかも、これまで述べてきたことからわかるように、サルタナット時代でもとくに堰堤や水門の遺跡が集中的に現存しているトゥグルク朝時代の文獻で、*band* という言葉をそのまま用いて、あきらかに堰堤と思われる建造物につい

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

てふれている史書が、私の知るかぎりでも二つだけはあるのである。それはいずれも、トゥグルク朝後期の Firūz Shāh の治世に、このスルターンに捧られた史書である。すなわち、その一つは、Ziyā' al-Dīn Baranī (ズィヤーウッディーン=パラニー) が、758 A. H. 年 (1357年) に完成したといわれる Tārīkh-i Firūz Shāhī (ターリーヘ=フィーローズ=シャーヒー) であり、他は、Minhāj al-Dīn Sirāj 'Afif の同名の史書で、Baranī の上述の著書よりものち、少くとも、Timūr (ティームール) によるデリー侵入のあとの作と考えられているものである。これらの著書が、いかなる性格をもち、歴史書としてどのような限界をもつものであるかという問題については、数年前に、P. Hardy がその著書で述べているところである。このような、史料に対する厳しい態度は、われわれも堅持する必要がある⁽⁵³⁾。しかし、一般的にいつて、遺跡の名称とかその状態、あるいは本稿でとりあげた水利建造物などについては、錯綜する人間関係がからんでくる政治的事件や社会関係の諸問題と異なつて、ことからの性質上、相当程度、信用していいように思われるのである。もちろん、本稿でも問題にするように、権力者の政策に關することとなると、慎重に考慮すべき点があるのはいうまでもない。しかし、そうした場合であつても、水利政策や農政上の場合、とくに本稿でとりあげるような問題の内容には、かなり信用できる点もあるのである。ともかく、本章では、以上のような點に留意しながら、堰堤および水門に關して、上に記したトゥグルク朝後期の二つの歴史書を中心とし、その他の史料をも用いて、歴史的なあとづけを試みてみたい。

1. Jahānpanāh, とくにその南城壁について

すでに第 II 章で、私は、Jahānpanāh の南壁が單なる新都市を圍む城壁として造營されたばかりでなく、その建設にあつては、別にいくつかの目的があわせて考慮されていたのではないかという推論について、簡単にふれておいた。本章では、Jahānpanāh が、いつ、そして、だれによつて造營されたかとい

う問題について、文獻史料のわずかな文章との関連において、まず、あきらかにしておく必要があると思う。

Jahānpanāh については、私の知る限り、Fīrūz Shāh にその史書を捧げた二人のトゥグルク朝時代の史家 Ziyā'i Baranī にも Shams-i Sirāj 'Afif にも、その名が出てこないようである。これは、私の不完全な検索の結果でないとするれば、ちよつと奇妙なことであり、この點、今後の御教示をまちたいと思う。しかし、このことは、この二人の歴史家の時代に Jahānpanāh という名が用いられていなかったということにはならない。それは、彼らの前後の時代に書かれた文獻に、その名が、明瞭に記されているからである。まず、Baranī よりも早く、自らデリーに滞在してトゥグルク朝の宮廷にも関係していた Ibn Battūṭa は、これについてはつきりと記述をのこしているし、また、Sulṭān Fīrūz Shāh 自身が著わしたといわれる Futūhāt-i Fīrūz Shāhī (フトゥーハーテ=フィーローズ=シャーヒー) にも、Jahānpanāh という名のもとに、それについての記載がみえるのである。この二書の例をもつても、トゥグルク朝時代において、すでに、Jahānpanāh という名稱が一般に用いられていたことは、ほとんど疑いをいれないところである。

そこでまず、Ibn Battūṭa の記すところをみてみよう。彼は、そのなかの Dihlī (デリー) について 最初の部分に、Jahānpanāh について記している。それは、次に引用するような内容の文章ではじまつている。ここでは、いつものように、Sanguinetti-Defrémercy による佛譯を引用しておき、必要に応じて、同譯書につけられたアラビア語テキストからの原語をつけておくことにしたい。すなわち、

“Cette ville [*madīna*] est d'une grande étendue, et possède une nombreuse population. Elle se compose actuellement de quatre villes [*arba' mudun*] voisines et contigués, savoir.....”

にはじまる文章のあと、この「四つの町」についての簡単な紹介的説明が記さ

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について
れている。その順序は、(1) Dihlī それ自體 [Dihly proprement dite],
(2) Sīrī [Sīry], (3) Tughluqābād [Toghlok Abād], および (4)
Jahānpanāh [Djihān pénāh] である (以上、括弧内は Def. Sang. の写字法
を記した。)。そして、問題の Jahānpanāh については、次のように記されて
いる。⁽⁵⁵⁾

“4° Djihān pénāh (le refuge du monde), qui est destinée particu-
lièrement à servir de demeure au sultan Mohammad chāh,
actuellement roi de l’Inde, et que nous venions trouver. C’est lui qui
la bâtit; il avait en l’intention de relier entre elles ces quatre
villes par un seul et même mur; il en édifia une partie, et renonça
à élever le reste, à cause des grandes dépenses qu’aurait exigées
sa construction……”

上述した Ibn Baṭṭūṭa の記述から、ほぼ、次のことがあきらかになると思う。
すなわち、

(1) Jahānpanāh は、既存の Dihlī, Sīrī, Tughluqābād の三城市を結び
つける意圖のもとに建設された。

(2) Jahānpanāh は、Sulṭān Muḥammad bin Tughluq により建てられ
たもので、Ibn Baṭṭūṭa がデリーにいたころには、そのスルターンの居所で
あつた。

(3) Jahānpanāh は、このスルターンの意圖にもかかわらず、城市として
は、未完成のままに残された。その原因の一つは財政上の問題と思われる。

ここで、同じくトゥグルク朝時代の文書である Futūḥāt-i Firūz Shāhī の記
事から関連する部分を英譯して次に紹介してみよう。⁽⁵⁶⁾

“……Jahānpanāh, which is the establishment of the late Sulṭān
Muḥammad Shāh, my kind patron, by whose bounty, I was reared and
educated, I restored.”

この文献の記述も、すでに紹介したところの Ibn Battūta のそれと全く同じように、Jahānpanāh は、前代の Sulṭān Muḥammad Shāh が建てたものと、きわめて明瞭に、指摘しているわけである。

Jahānpanāh については、これらの文献よりさらにのちの時代の史料、すなわち、トゥグルク朝末期の1398年にデリーに侵攻してきた Timūr (ティームール) の事蹟を記している文献にも、はつきりとあらわれているのである。それらの一つは、Maulānā Shāraf al-Dīn ‘Alī Yazdī (モラーナー=ジャラフディーン=アリー=ヤズディー) の著といわれ、15世紀前半の作とされる Zafar Nāmah (ザファル=ナーメ) と、他は、もとトルコ語で書かれ、のちペルシア語にも翻譯されてインドにもひろく伝えられた Malfūzāt-i Timūri (Tūzak-i Timūri) (マルフザーテ=ティームーリー, トゥーザケ=ティームーリー) で、ふつうには、ティームール自身による自叙傳と考えられてきた文献である。この兩著をくらべてみると、デリー侵攻前後のできごとについては、その内容がほとんど一致している点が多い。私自身は、残念ながら、兩著の原文をもっていないが、たまたま、テヘラーン刊の Zafar Nāmah を黒柳恒男氏が所藏されていたのを借用させてもらうことができたので、本稿の問題点と関連する部分の一端を、それから英譯して紹介しておくことにした。そして、必要に應じて、それに照應する Malfūzāt-i Timūri の記述については、とりあえず、Elliot-Dowson の抄譯を註記しておきたい。

Zafar Nāmah は、Malfūzāt とともに、デリーにおける三都市、すなわち、Dihli-i kuhna (つまり舊デリー)、Sīrī、および Jahānpanāh について、明瞭な記述をのこしており、この点では、さきに紹介した Ibn Battūta の記述をはつきりと裏づけるものであると考えられる。しかし、本稿の視点からみると、Zafar Nāmah や Malfūzāt-i Timūri のなかの Jahānpanāh についての記述のすべてが、それほど重要な意味をもっているわけではない。そこで次に本稿の論点に関連すると思われる個所を、Zafar Nāmah から三つだけ選んで、英

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

譯して紹介してみたい。その第一のものは、Jahānpanāh の建設の時代の問題と間接に關連するものであり、あとの二つは、Jahānpanāh の南壁と關係ある門 (darwāzah, ダルワーザ) に關する記述をふくむものである。なお、以下の英譯のなかで、括弧中に記した語は、原文からとつたものである。

(1) “……In the midst of the state, Ḥazarāt ‘Āliyāt Chalpān Malik ‘Āghāz and others went into the city to look at the Thousand Pillars [*Ḥazār Sutān*] which Malik Jaunah had made invented [*iḥdās namūdah bād*] in the Jahānpanāh……”⁽⁵⁷⁾

(2) “……And, when the darkness went on in the night, Sulṭān Maḥmūd went out through the Gate of Ḥaud Rāi [*Darwāzah-i Ḥaud Rāi*⁽³⁾], while Mallu Khān through the Gate of Barkah [*Darwāzah-i Barkah*], the two gates being situated to the south direction of Jahānpanāh [*dar jānib-i junūbi-i Jahānpanāh*]……”⁽⁵⁸⁾

(ただし、この原文中に (3) として註記された *Darwāzah*’-i Ḥaud Rāi には、カルカッタ本には Ḥaud Rānī とある旨、記されてある。これは、のちに述べるように、Ḥauḡ-i Rānī の轉記である。)

(3) “……And, the state of these three cities [*shahr*] described are thus explained:—Sīrī is encompassed by a round wall [*sūr-i madūr*], and the old Dihlī [*Dihlī-i kuhna*] by a similar wall, but larger than (that of) Sīrī. And, from the wall [*sūr*] of Sīrī which is found to the north-east^(a), to the wall [*sūr*] of Old Dihlī [*Dihlī-i kuhna*] which is towards the south-west^(b), a rampart [*bārū*] was founded from the two sides [*az dū jānib kashīdah-and*], and they called it Jahānpanāh. It is larger than Dihlī, and from Sīrī three gates [*darwāzah*] are opened [*gushādah ast*] to Jahānpanāh, while four gates towards outside. And, Jahānpanāh has thirteen gates,

six from north-western side, and seven from south-east^(c). There fore, thirty gates are opened from Dihli which is made out of these three cities.....”⁽⁵⁹⁾

以上のうちの（１）の記述から、Zafar Nāmah および Malfūzāt の兩著とも、Jahānpanāh 内の Hazār sutūn, すなわち干本柱の宮殿を Malik Jaunah が建てたとして記していることがわかるのである。これは、おそらく、著者がデリーで聞いたことを、そのままに記したものと思う。この Malik Jaunah とは、ほかならぬ、のちの Suṭlān Muḥammad bin Tughluq などである。その Hazār sutūn (干本柱) とはどこにあつたのか、それがニューデリー南郊の Begampur (ベーガムブル) 部落北方のトゥグルク様式の建造物 Bijay Mandil (ビジャイ=マンディル) とよばれる建造物の一部にあつたかどうかは、ここでは別問題としてふれずにおこう。ともかく、この Zafar Nāmah の記事は、Jahānpanāh そのものが、少なくともトゥグルク朝前期の Muḥammad Shāh 時代にすでに存在していたことを推定させる一つの材料となり得ると思うのである。とすれば、これは、さきの Ibn Baṭṭūṭa および Fatūḥāt-i Firūz Shāhī の記述を補足する有力な資料たり得るのではあるまいか

(2), (3) にあげた文章は、主として、Jahānpanāh の門 (darwāzah, ダルワーザ) に關する記述である。さきに本文中に譯出しておいた Zafar Nāmah の記述と、補註に引用しておいた Malfūzāt-i Tīmūrī の記事の内容とは、門の数において、若干の差違が指摘されよう。しかし、Zafar Nāmah も Malfūzāt も、Jahānpanāh の門の数については、いずれも同じ記述をのこしている。すなわち、その西北壁に6門、東南側に7門という数である。(Zafar Nāmah の Elliot-Dowson 譯本に「西南方」とあるのは、はつきりした間違いで、正しくは「東南方」であることは、すでに補註 59, (c) において指摘しておいたところである。

さて、上に紹介した Zafar Nāmah からの引用文の (2) では、Jahān-

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

panāh の「南方にある」二つの門の名を, Hauz Rānī 門と Barkah 門と, はつきりその名稱をあげているのである。これは, 本稿で直接に問題にしてきた Jahānpanāh 南壁に關係する門の名稱であるかも知れないという點で, ちよつと見逃すことのできない記述である。J. D. Beglar は, かつて, 彼が A. S. I. に提出した1871年の報告書(1872年刊)のなかで Jahānpanāh について述べているが, そのなかで, その西側の壁は荒廢して門を復原比定することが不可能である旨を記しており, さらに, 問題の南側については, 次のようにいつて⁽⁶¹⁾いる。ただし, 下記の Beglar 文中の「東方の壁」[the walls on the east] という個所は, その文中の意味するところ, とくに「水門の建設とその保存」という言葉からも, せまい意味での東壁をいうのではなく, 本稿で問題にしている南壁をもふくむものであることは, 言を俟たないところであろう。

“……the walls on the east have undergone occasional repair and alternation, especially for the construction or maintenance of sluices, and other contrivances for the regulation of water and this renders the position of its gates doubtful……”

つまり, 南壁における水利施設の建設などを主として, 補修, 變更が行われ, ために, 門の位置を比定することが難しくなつてしまつたというのである。この J. D. Beglar の考え方は, ある意味では正しいのではないかと思われる。Satpulah 大水門をはじめとして, すでに述べたように, 南壁には, 現在, いくつかのモーリーやジャーナーなどの水利施設があるのであつて, このことが, 現在, その個所に, もと門があつたのかどうかもほとんどわからなくしてしまつてゐる。もつとも, すでに私も簡単に紹介しておいた, Satpulah 西方の Hauz Rani 部落の近くにあるムガル風の小水門(モーリー)のすぐ西方と, Satpulah よりずつと東方にある近代的なジャーナーの東側には, あるいはかつて門ではなかつたかと推定させる遺構が, たしかに存在している。しかし, これとても, はつきりしたことを, 現地において, 復原推定する餘裕はなかつ

たので、残念ながら、他日を期したい。ただ、私の記憶では、これらの門の遺構らしい部分は、デリー最初の城砦である、いわゆる Lāl Kūt (ラール=コート) の西面にある著名な Ranjit Singh (ランジット=シング) 門、あるいは、Tughlūqābād 大都市の城壁にみられる門を、全く小規模にしたような構造の通路らしいものが認められるように思われたのである。また、Jahānpanāh の城壁そのものが、その構築において、とくに高さの點では未完成であつたのではないかと推定している私は、これらの城門が造營され、また、使用されたことがあつたにしても、それが未完成なものであつたのではないかと想像するのである。

それはともかくとして、前述の二史料ともに、東南部分の門の数が7門であるといつているのは、南壁と東壁とをあわせての總数らしい。ただし、そのうち、問題の南壁に門がいくつあつたか、残念ながら、現状ではよくわからないのである。しかし、ともかくも、兩史料に出てくる Haud Rānī (すなわち Ḥauz-i Rānī) 門と Bakrah 門というのは、この兩著の記している方角をそのまま信じれば、南壁にあつた二つの門であろう。このうち、Ḥauz Rānī というのは、いまでも Satpulah 西方にある Khirki 部落のさらに西方、南壁の北側に沿つてある部落名である。これが、相當ふるくからつづいてある地名であることは、まちがいない。たとえば、この Ḥauz-i Rānī という名は、デリー=サルタナット最初の王朝である奴隸王朝時代の歴史書 Ṭabaqāt-i Nāsirī (タバカーテ=ナースィリー) のなかにも、すでに見出すことができるのであ⁽⁶²⁾る。また、たとえば、トゥグルク朝の次のサイイド朝時代の史書 Tārikh-i Mubārak Shāhī にも、Ḥauz-i Rānī という名稱はしばしばでてくるのである。現在のHauz Rani 部落の南方に、いまでもその遺構をとどめているヒンドゥー時代からの貯水池(すなわち ḥauz, ハオズ)がその名稱の起源であろう。そのあとには、いつのものか不明ではあるが、方型の土手の遺構がのこつている。従つて、Ḥauz-i Rānī [Haud-i Rānī] 門というのは、一つの假設としては、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

Satpulah より西寄りの地域、上述した Hauz Rani 部落の近くの地点にあつた門であつたと考えていいであろう。この場合、私の推測では、あるいは、さきに記したムガル時代のものと思われる小水門（モーリー）の西側にのこる、門のあとと推定される個所にあつたものかも知れない。

もつとも、私は、これとは別の推論も可能であると思う。それは、ここではくわしくは述べる餘裕もないが、その要點をいえば、この Hauz-i Rānī 門と Bakrah 門というのは、Jahānpanāh 南壁の門ではなくして、あるいは、その西南方にほぼ南北に走っていた Rāi Pithaurā 城砦の、東側城壁にあつた二つの門にあたるかも知れないということである。このことについても、私にはいくつかの推論の根據はあるが、煩をさけて今回は省略しておきたい。上述の Zafar Nāmah あるいは Malfūzāt の記述は、この二門が、必ずしも、Jahānpanāh の門であるとはいつていないのである。この二つの推論の決め手の一つとなるものは、Tīmūr の軍に追われて逃散した Sulṭān Maḥmūd Shāh が、當時、はたしてJahānpanāh 城内にいたのか、あるいは、舊デリーの Rāi Pithaurā 城内にとどまっていたかであろう。しかし、いまは、この點はふれないことにする。いずれにせよ、この二門の名が15世紀はじめの文獻に残されていたことは興味がある。Jahānpanāh 南壁の現地の遺構上での私の検索と観察とが不十分であつたことは残念であるが、Rāi Pithaurā, Sirī, Jahānpanāh の三城市の城門の名稱の考證とともに、後日を期したい。

以上で、少くとも、Jahānpanāh が、Sulṭān Muḥammad bin Tughluq の建設にかかるものであることは、ほぼまちがいないところとみてよいであろう。ただ、さきにもちよつとふれておいたように、Jahānpanāh 南壁を堰堤として考えるときには、そこに、いくつかの門が存在していたというのは、一體、どうしたことなのであろうか。これは、たしかに、一考を要する點である。すでに紹介したように、J. D. Beglar は、その點を考えたのか、はつきりした結論は示してはいないが、水門は、後代のものと考えているようである。つねに一

風變つた主張をするこの著者は、Satpulah (Beglar 自身は、Satpallalla という⁽⁶³⁾ら)についても、その建立の年代を述べてはいないのである。この堰堤上の門の存在という点については、私自身、若干の推論をもっているので、あらためて、次章においてふれることにする。

3. Baranī にみえる Balāband-i Sirī について

トゥグルク朝時代の歴史家 *Ẓiyā' al-Dīn Baranī* の史書 *Tārīkh-i Firūz Shāhī* のなかに、本稿に関連するものとして、堰堤と思われる建造物らしいものにふれたところが一個處ある。それは、ときの著者 Baranī が、*Sulṭān Firūz Shāh* が建設した壮大な建造物について稱讚の言葉を連ねている文章のなかにみえるのである。そこでは、Baranī は、*Sulṭān Firūz Shāh* が建設した“*Jāma' Masjīd*”と、“*Madrasah*”について、まず、讚辭に満ちた文章を記している。これら二つの建造物のうち、前者が、いわゆるオールド=デリーのデリー門 (*Dihli Darwāzah*, *Delhi Gate*) の東南方の、*Firoz Shah Kotla* (*Kūṭla-i Firūz Shāh*) といわれている遺跡庭園のなかに、今日、廢墟としてのこつている大モスクであることは、おそらく誤まりではあるまい。そして、一方の *Madrasah* すなわち學校の方は、現在、*Hauz Khas* (ハオズ=カース, *Hauz-i Khāṣ*) とよばれ、デリー、ニューデリーの市民たちに知られている史跡の建造物の一部に當ると推定されている。この史跡にある人造貯水池は、もと、ハルジー朝の *Sulṭān 'Alā' al-Dīn* が造營させたものであり、そのほとりに、*Firūz* 治世に、續々と建物が造られたのである。

さて、*Ẓiyā'ī Baranī* は、これらの二つの建造物について稱讚の筆をつらねたのち、問題の、第三の建造物について記しているのである。次に、まず、*Baranī* のペルシア語原文を引用しておく。⁽⁶⁴⁾ただし、原文は、讚辭を連ねた、かなり長文の内容なので、ここでは、“*band*”の語があらわれている部分を中心に、その一部分だけ紹介する。

و سوم بنای مبارک سلطان فیروزشاهی در دارالملک دهلی عمارت بالابند سیربست که در رفعت با فلک برابری می کند و از زیبای عمارت و خلاصگی هوا رشک عمارت ریح مسکون بر آمده است و از مساکن طیبه بر صورتهای نموداری نباشد و عجب عمارتی بر آمده است و اگر آن را قصر گویند شاید و اگر خانقه سازند بهتر آید و اگر مدرسه خوانند شایسته تر نماید و اگر با مدرسه فیروز شاهی عمارتی خواهد که بنوعی دم مساوات بزند در دارالملک دهلی همین عمارت بالابند اب سیربست که هواء خوش او حکایت از هوای حیات عدن میکند و از هر طرفی که ازان عمارت بدیع ناظران نظرمی اندازند همه باغچای بهشت و سبزه زارهای بهشت در نظر می آید و لطایف آن عمارت در نهایتی است که قلم و صافان از تحریر ظرایف آن عاجز میگردند و درین ایام در آنجا از عواطف بادشاه اسلام در ستی معظم بنا شده است و مولانا و سید الامیه و العلماء نجم الملة و الدین سمرقندی که از نوادر اساتذہ است در آن عمارت مبارک مدرس گشته

以上に引用した Barani の文章を英譯してみると、ほぼ、次のようになるであらう。この部分は、Elliot-Dowson による英譯史料集成には省かれてしまつてゐる。長文であるが、以下の英譯には、全文を紹介しておく。

“And the third auspicious edifice [*‘imārat-i mubārak*] by Sulṭān Firūz Shāh in the capital [*dār al-mulk*] of Dihlī is the building of *Balāband-i Strī*, which disputes equality with sky in elevation. The beauty of the building and the purity of the air is the envy of the architecture of the inhabited quarter of the world, and amongst excellent dwellings there is none to equal in appearances. And, it is a wonder of architecture, and if it were called a castle [*qaṣr*], let it be, and if it were made a *khānqāh*, it would be better, and if it were taken as a school [*madrasah*], it would be more suitable. If any building would claim the pride of equality with the Madrasah of Firūz Shāh in the capital of Dihlī, it is this edifice of *Balāband-i Āb-i Strī*, as its delightful air reminds the air of the life

of the garden of Eden [*‘Adan*]. From whatsoever direction spectators cast the eyes upon that marvellous building, they look at the heavenly gardens and green paradise. The elegance of that building is in such a perfection that even the pen of eulogist is rendered powerless in writing accurately its ingenuity. And, in these days, through the favours of the Bādshāh of Islām, a big school [*darstī-i mu‘azzam*] was established, and Maulānā wa Saiyid Alāīmah wa al-‘ālmā’, Najim al-Millat wa al-Dīn Samarqandī, who is rare person among the teachers, became the master [*mudarris*] of that auspicious edifice.”

かなりの長文を引用したが、その内容から、本稿の問題に關係する點をまとめてみると、ほぼ、次のようなことが指摘できるであろう。

- (1) Firūz Shāh が、首都デリーに、Masjid-i Jāma’, および Madrasah とならぶものとしてつくつた第三の建物を、同時代の歴史家 Baranī は、“Bālāband-i Sirī”, あるいは “Bālāband-i Āb-i Sirī とよんでいる。
- (2) この Bālāband は、その高さ天にも比すべきほどと形容されているように、相當、大規模な建造物であつたらしい。また、その建造物自體もその環境も、美しく、さわやかで、「エデンの園」の如くである。
- (3) どの方角からこの建物をながめても、みるひとつとは、緑の草の生えた天國の庭をもみる如く感じる。
- (4) この建造物は、城 [qaṣr] とよばれてもふさわしいし、ハーンカー [khānqāh] として造られたとしてもよかつたであろう。また、學校 [madrasah] としてもすぐれている建物である。要するに、比類を絶したすぐれた建造物であり、デリーの Madrasah-i Firūz Shāhī (フィーローズ＝シャーの學校) と比較できるのは、この建物をおいてない。
- (5) 事實、Baranī の執筆當時、そこに大きな學校が建てられて Samarqand

德里ーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

の出身の Maulānā Najim al-Millat が、その長に任じられた。

Baranī の記事から、大體、以上のようなことがらわかるのであるが、それにしても、この文章の内容にはちよつと考えさせるものがある。「この建物の美しさは、全くの完璧さにまでに達しているので、ほめたたえることの好きなひとの筆でさえも、その巧みさを正しくいいあらわすことにおいては、全く無力になつてしまう。」中世の宮廷史家の、美辭麗句を連ねての讚美の文章は、われわれが讀むときに、かなり割り引きしなければならないのが常識である。それにしても、この引用文にあらわれているような誇張した讚辭に接すると、歴史學徒としては、まことに、考えさせられてしまうのである。そこで、以上の Baranī の文章内容には、十分に慎重な態度をとる必要があることはいうまでもない。しかし、ともかく、Bālāband という言葉にしる、あるいはその表現内容から多くの誇張した文句を割り引いて考えてみたあとでも、この建造物が、かなり大規模のものであつたことだけは、まず、信用していいように思う。

そこで、つぎに、Baranī のこの記述にみてるころの Bālāband なる建造物は、いつたい、どこにある、なにものかという問題に入つていつてみよう。まず、上に紹介した内容から、この建造物が、おそらくは、水利施設のなかの *band*、すなわち堰堤に關連するものであることは、まず、想像していいと思われる。それは、なによりも“Bālāband”という言葉自體が示している。*bālā* とは、この場合、「高い」、「high」という意味であろう。そして、*Bālāband-i Sirī* という名稱はともかく、後半に出てくるところの *Bālāband-i Āb-i Sirī* という名稱が、まさに、この“*band*”が水利施設であることを示す有力な手がかりになると、私は考えるのである。というのは、ここにいう *Āb-i Sirī* の“*ab*”とは、おそらくは、川か水流か、あるいは貯水池のような、ともかくも水に關係のあるものを指すに相違ないからである。そして、私は、この *Bālāband* を、堰堤、あるいは、それに關係ある水利施設をいうものであると推論するのである。

しかし、この *Balāband* を堰堤、あるいはそれに関係ある水利施設と考えてみても、それは、単なる堰堤、あるいは堤岸構築物の一部とは思われない。というのは、前述の記述内容からみてもわかるとおり、「宮殿」、「ハーンカー」、あるいは「學校」としても通用するらしい建造物であり、現にこの建造物が、*Firūz Shāh* の時代に「學校」として使用されていたことも、右の記述のなかからうかがえるのである。とすれば、この建造物は、単なる堤岸や堰堤ではなく、なんらかの特殊な構造、おそらくは、部屋のような設備をも持っていた建造物であると推定されるのである。しかも、それは *Balāband* であり、建造物全體の與える印象そのものが、前述の讚辭から推測されるように相當な規模をもつものであつたことも、ほぼ想像されるのである。同時に、この建物は、かなりの遠方から、それも、さまざまな方角からもみえたようにも推察されるし、また、その建造物の置かれた環境が、緑の草地に圍まれた美しいものであつたらしいことも、前述の記述を信用すれば、ほぼ推測できるのである。

さて、この *Balāband* の名稱に出てくるところの *Sirī* というのは、本稿でも、*Jahānpanāh* 南壁について述べたところでしばしば言及したように、現在、*Shahpur Jat* (シャープル=ジャート) という部落をその城壁内の東端にもつところの、ほぼ楕圓形をした城砦で、ハルジー朝のスルターンであつた 'Alā' al-Dīn が造營した大城市に比定し得ることは、まず、まちがないところである。もともと、*Bālāband-i Sirī*、あるいは *Bālāband-i Āb-i Sirī* というからには、この建造物は、*Sirī* の城砦になんらかの関係をもつていたことはたしかである。しかも、上の二つの名稱は、前者、すなわち「*Sirī* の *Bālāband*」というのは、後者、すなわち「*Āb-i Sirī* (すなわち *Sirī* 水) の *Bālāband*」の略稱と考えるべきであろう。この點は、はつきり確認しておく必要があると思う。すなわち、「*Sirī* の *Bālāband*」(*Bālāband-i Sirī*) という名稱だけであれば、その對象は、地理的にはかなり限定されようが、建造物の種類としては、かなり廣範圍のものを考えなければならぬのに對して、「*Sirī* 水の *Bālā*

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

band] (Bālāband-i Āb-i Sīrī) といえ、それは、前述したように、Sīrī の名をもつてよばれる水流かあるいは貯水池の存在を前提として考えるべきで、従つて範囲も若干せばめられると思うからである。こう推測してみると、“Bālāband-i Sīrī” とは、正しくは“Bālāband-i Āb-i Sīrī” とよばれていた建造物であつたことが、ほぼ認められ得るであろう。

そこで、次には、このような名稱でよばれた堰堤、あるいはそれに関連する水利施設と推定されるこの建造物は、一體、どこに比定し得るかという問題になるのである。そこで、まず考え浮ぶのは、次の節でふれるところの、Minhāj Sirāj ‘Afif の Tārīkh-Firūz Shāhī にでてくる七つの、固有名詞をもつ band である。これらの、Firūz Shāh 時代に建設されたとされる七つの band、すなわち堰堤と思われる建造物については、次節でくわしくふれるけれども、残念ながら、ここで問題にしている Bālāband-i Āb-i Sīrī に比定し得べきものは、なに一つとして指摘できないのである。この七つの band には、Sīrī の名をもつものは一つもないし、それらしい関係を暗示させるものとして、一つもないのである。従つて、この貴重な ‘Afif の記述も、さしあつては、なんの手がかりにもならないのである。

そこで、私は、現在、デリー地域において、Sīrī の城砦、あるいは、Āb-i Sīrī という水流が貯水池と関係ありそうな遺跡を考えながら、それを、すでに述べたところの、この Bālāband なる建物の立地あるいは建物そのものの条件と照合して、比較検討してみる方法をとつてみた。

まず、はじめに、Āb-i Sīrī というその ab を hauṣ (ハオズ)、あるいは tālab (ターラブ) と同じように、池、貯水池というふうに考えてみた場合を想定してみよう。Sīrī にもつとも近い場所に現在はずきりと指摘できる池や貯水池の遺構としては、やはり、Hauz Khas (Hauṣ-i Khāṣ) が第一にあげられるべきであろう。しかし、この Hauz Khas を Āb-i Sīrī というのは、なんとしても遠すぎるし、そこにある建造物自體は、すでに Baranī の敘述中に出

ており、現に *Madrasah-i Firūz Shāh* として、この *Bālāband* の比較の対象となつている建造物である。従つて、これは問題外である。

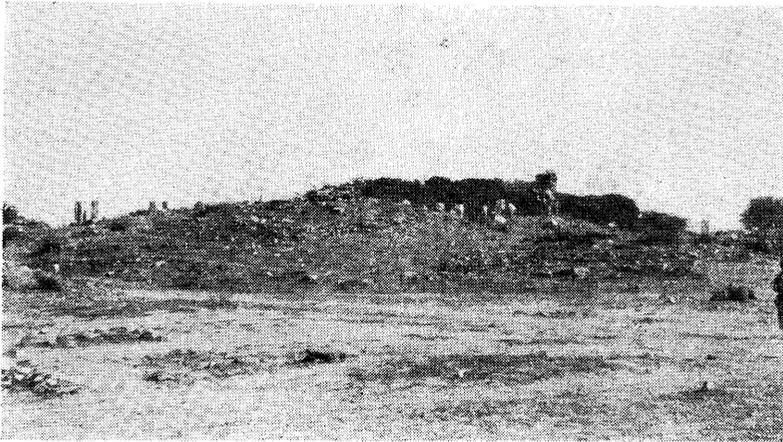
そこで、だれでも、次に自然に考えるのは、*Āb-i Sirī* というのを文字通りにとつて、*Sirī* の舊城内に、貯水池を想定してみることである。‘*Alā*’ *al-Dīn Khaljī* が造營したという、この大城市のなかに、かつて、貯水池があつたと考えることは、決して不自然ではないであろう。しかし、それらしい遺構は、現在、*Sirī* 城砦の内部に見當らない。私自身、*Sirī* 舊城砦内を東西に横断した経験があるが、それらしい遺構を認めたことはないし、また、そうした遺跡についての記述をのこしたひとも、これまで一人とて知らない。もし *Baranī* のような建物をもつ貯水池があつたとしたら、なんらかの形でそれに關係ある、大規模な建造物の遺構がのこつていそうなものである。しかし、トゥグルク朝らしい建物は、次にふれる大モスクの遺跡以外には見當らない。従つて、この推定は、一つの傍證もないことになる。

次に、その大モスクであるが、これは現在の *Shahpur Jat* 部落西北端に現存している。あるいはトゥグルク朝時代にまでさかのぼるかも知れないと、私自身、その構造と様式、あるいはプランから、推定できるのではないかと疑つている遺跡である。⁽⁶⁵⁾ この大モスクの西北西約 80m ほどのところには、*Sirī* の西壁の遺構がのこつている。そして、その西壁の外側、*Mehrauli Road* との間には、そう大きくはないが、貯水池がある。これが、もともと存在していたものとすれば、あるいは、*Āb-i Sirī* とよばれた可能性もいくらかは考えられるかも知れない。しかし、この建物は、トゥグルク朝後期までさかのぼれるかも知れないが、あきらかにモスクである。かりに数歩ゆずつても、どうしても *Balāband* というには適當でない、従つて、建物の巨大さにおいては適中しても、これも、ほとんど妥當性はないように思われる。

私は、以上に二三の推論を述べてきたが、いずれも、それほど有力なものとは思つていない。しかし、これから述べるのは、以上の推論とは異なつて、相

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

當に根據のある推論として、本章で、私がまず、假設Aとして提出したいと考えているものである。現在、Siri 舊城砦の南面を、城砦から数百メートルほどはなれて、ハイウェイが、東から西に走っているが、その沿線上に、Shaikh Sarai と Chiragh Delhi の兩部落がある。その中間のあたりで、Shaikh Sarai からのハイウェイは北東に向い、やがて南東に屈曲して、Chiragh Delhi の北側に抜けるわけである。この弧の南側に、いくつかの遺跡群が見出され、その北西隅は、小さい丘になつている。丘上には多くの石柱がのこり、かつて



挿圖27 Shaikh Ṣalāḥ al-Dīn の墓の西北北方の大建造物の遺構の柱列。

この丘上に相當の規模の建造物が立つていたことをしのばせる（挿圖27）。事實、この多本柱の大建造物の南東隅にあたる部分の斷片が、この小丘の南端附近にのこつており、それは、あきらかに Firūz Shāh 時代の多ドーム、多本柱の様式および構造の特徴を示しているのである（挿圖28参照）。そして、これらの遺跡群の西北西、さきの小丘がゆるやかにその方角へ向つて傾斜していくあたりが、現在でも、貯水池となつている。このことについては、もう少しのちに述べるとして、まず、この遺跡群について、簡単にふれておきたい。

この遺跡群の中心は、現在でも、12本柱ドームの姿をよくとどめているところの Shaikh Ṣalāḥ al-Dīn Darwīsh (シャイフ=サラーフディーン=ダルヴェーシュ) とよばれた Suhrawardī (スフラワルディー) 派のスーフィー聖者の墓である。もつとも、その墓の現存する建物のドームをみると、あるいは、トゥグルク朝後期までさかのぼることも妥當かも知れないと思うが、この點はよく分らない。Delhi Monuments List は、この聖者の死の時期、すなわち、740 A. H. (1339—40)年 をもつて建物の建立年代としているが、この没年にそれほどこだわることはよくない。この聖者の墓を中心として、やはり、サルタナット時代後期の建造物と思われる遺跡が、現在、少くも四つ指摘されるのである。⁽⁶⁶⁾それらは、墓、壁モスク (ganātī masjid, ガナーティー=マスジッド) などのたぐいである。しかし、上にあげた Shaikh Ṣalāḥ al-Dīn の墓の北方約20mほどのところに、すでにちよつとふれたように、あきらかに Firūz Shāh 時代の諸特徴をもつ建造物の一部がのこつていたのである。そしてその部分を南東端として、多本柱で、おそらくは多ドームの大建造物が存在したことを十分に想像させる柱列の遺跡の一部が、前述した小丘の地表一面にのこつていたのである。この建物の東側の全長を、私は現地では、約50mほどとみたのである。⁽⁶⁷⁾これによつても、まことに巨大な建物であつたことが想像されるが、小丘の上にかつて建つていたときの全容は、みるものに、まことに壯大な感じを與えたに相違ない。

問題は、この小丘の西側が低地になつており、しかも、現在、冬の乾期のあいだでも、ここに紹介した写真(挿圖28)でわかるとおりに、相當量の水をのこしている貯水池が存在しているのである。いまでこそ、この貯水池のすぐ北側を、前述のハイウェイが通つていたのであるが、1929年刊の地圖にはこのハイウェイはみえないのであつて、おそらく、この池は、ずつと北方、つまり Sīrī の城砦の方にまで廣がついていたことも想像できるのである。それに、私は、この池の南側に、井戸らしい建造物、あるいは、それに附隨していたと思われ

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について



挿圖28 Shaiḥ Ṣalāḥ al-Dīn の墓（右手のドーム）西北方の貯水池，中央右よりの半壊ドームは，左後方の小丘上の大建造物（挿圖27参照）の南西隅の遺構，水邊の遺跡は水利施設と水道溝の石片（左側）。

る水道溝をきざんだ花崗岩の断片などを認めた（挿圖28参照）。このことは，かつて，この *tālāb* のほとりに，なんらかの水利施設があつたことを，十分に推測させるものである。それらの水利施設の遺構は，構造，様式などからみて，少くともムガル時代までさかのぼり得るものであることは，他のサルタナット，ムガル時代の遺跡との照合である程度わかるところである。

そこで，次は，*Baranī* の問題の記述と，上述の遺跡とをむすびつける私自身の推論Aの説明に入ろう。まず，すでに紹介した *Baranī* の文章と，私がおそれからまとめてみた *Bālāband* に関する特徴（前述114—115ページ参照）を思いおこしてみよう。まず，この建造物は，その西方，そして，かつては，おそらくは，西北方にかけてまでもひろがっていたと推定される貯水池（*haуз*あるいは *tālāb* にあたるもの）の東，東南側の小丘の上にあつた。そして，

多分、その貯水池との関係は、この小丘が、一種の堤岸、すなわち *band* をなしていたのであろうと考えられるのである。おそらく、この *tālāb* は、*Āb-i Sīrī* とよばれていたのであろう。従つて、この小丘の建物を中心として、*Baranī* が書いたように、*Bālāband-i Āb-i Sīrī* というよび方もあつたのではあるまいか。

この建造物は、小丘の上にあり、おそらくは、多ドーム、多本柱の、いわば *Firūz* 的様式と構造をもつていたことは、今日、残存しているその東南の隅の一部および柱列のあとをみても容易に復原推測し得るところである。*Baranī* の如き文筆家が、それを「その高さ天にも比すべき」といつたのも、小丘上に立つこの建物を考えてみれば、容易に想像できよう。そして、それが、*Hauz-i Khāṣ* の *Firūz Shāh* の *Madrasah* や、*Firūzābād* の *Jāma' Masjid* とくらべられるほど大規模なものであつたという讃辭も、南北約 50m にも達する建物ならば、決して不當ではない。そして、この建物が、宮殿、ハーンカー、あるいは學校に適しているというのも、十分に理解できるのである。

この建物は、あるいはデリーに数多い *Firūz Shāh* 時代の大中モスクの一つとして建てられたものかも知れない。*Baranī* の執筆當時、*Maulānā Ṣalāḥ al-Dīn Najīm al-Millat Samarqandī* の長たる學校であつたということも、上の推測を裏づけるようである。しかし、あるいはモスク風の建物であつたとしても、モスクではなかつたのかも知れない。私の考えでは、モスクに使用されていなかつたとすれば、それは、*Hauz-i Khāṣ* の湖畔の東および南側の建造物のように、學校か、あるいは支配者たちの觀望所などに用いられていたのかも知れない。その建設の動機は、もちろん、湖畔の風光と水邊の涼とをえらんで、おそらくは、その東南方の *Shāikh Ṣalāḥ al-Dīn* を讃えることもあわせて、建てられたものであろう。附近が綠に蔽われ、*Baranī* の説くが如く、方々からもよく望見でき、美しい景色のなかにおわれていたであろうことは、ほとんど想像するにかたくないのである。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

以上の理由と根拠とから、私は、私自身の一つの推論として、Baranī にみえるのところの Bālāband-i Sīrī すなわち Bālāband-i Āb-i Sīrī を、現存する Shaikh Ṣalāḥ al-Dīn のダルガーの北方の小丘上にかつて建てられていた、多ドーム、多本柱の Fīrūz Shāh 時代と思われる大建造物を中心として、その西、西北にひろがっていたと推定される貯水池の堤岸となつていた建造物を指したのではないかと考えるのである。これが、まず紹介したい私の推論 A である。

以上に記した推論 A に対して、私が考えている他の推論を次に紹介しておきたい。これを、さしあたって、推論 B としておく。

この推論は、Āb-i Sīrī という āb を、ハオズあるいはターラブと同じように貯水池や池とは考えずに、たとえば、dariyā (ダリヤー) すなわち川 (インドでは、ペルシア地方ではふつう「海」に用いたこの語を、ペルシア語でもウルドゥー語でも、むしろ「川」の意味に用いてきているようである) の意にとり、これを水の流れと解するところから出発するわけである。さきにあげた推論 A で、もつとも気になる点の一つは、この Āb-i Sīrī というのが、私のきわめて乏しい語感をもつてしても、もし貯水池かそれに類似する池であれば、Ḥauz-i Sīrī とか、Tālāb-i Sīrī とか記しそうなもので、従つて、āb とは、正しくは、動く水、すなわち川か水流について用いられたものではないかという疑問がわく。そこで私は、Āb-i Sīrī という名称を、附近の水流と関連して解釋できないかと考えてみたわけである。

しかしながら、現在、Sīrī 舊城内を貫流している川はもちろん、その附近を流れる川をさがすことはほとんど不可能である。しかし、私は、さまざまな地図をみて推測をめぐらした結果、Āb-i Sīrī とは、Sīrī 舊城砦の東方を通っている地溝の水流をいうものではないかという一つの推論に到達したのである。Jahānpanāh の境域を示す附圖 (26 ページの挿圖 5 参照) にも、簡単ながら示しておいたように、この地溝は、Sīrī 東壁の東側から、南は Chiragh Delhi の部落の西側を経て、ずつと南南西に走り、ついに Satpulah 大水門の遺跡

にまで達している。Satpulah 北方では、水は、冬の乾期でもかなり貯つて湿地帯をなして沼の如き觀を呈するが、Chiragh Delhi の近邊では、ドービー（洗濯屋）などがその水流を商賣に利用している光景がみられる。この水流は、Cunningham の 1862—63年のレポートの挿圖にも、明瞭に指摘されているのであるが、それによると、この水流は、Sirī の東側を北上して、やがて、Nizamuddin 地域の南側で、ジャムナー川から西に入つてきている、いわゆるジャムナー運河に合流しているのである。ちなみに、この Jamuna Canal とよばれる運河は、もと、Firūz Shāh によつて建設されたと、ふつう、考えられている。

この水流こそは、實は、Satpulah 大水門の機能と關連して考えられるべきものであろう。現在、冬期においてこそ水量は少ないが、このわずかな水流も、雨期には、附近の凹地帯一帯にひろがり、かなりの水流となることは、容易に想像されるところである。とくに Sirī 城砦の東側の地溝は、相當に深いので、大雨のあとには、ちよつとした溪谷の如き觀さえ呈すると思う。Satpulah 大水門が機能していたころには、前述の A. Cunningham の報告書の附圖でもわかるとおりに、クトゥブ地域から Tughluqābād にわたるひろい地域の水系をあつめていたので、相當な水量を集めていたと考えられるのである。とすれば、この水流は、Āb-i Sirī とよばれるにまことにふさわしいものであつたと推測することも、決して、荒唐無稽どころか、きわめて妥當なものともいえるのではあるまいか。

このように、Āb-i Sirī について復原的推測を試みたくうえて、前述の Baranī の文中の、問題の *Balāband* に關する諸条件をみてみるといかがであらうか。緑と空氣の美しい環境、壯大な建物の景觀、遠くから望見し得るといふ點、そして、宮殿、ハーソカー、學校にも適するというような構造などを考慮に入れると、私には、一つの對象が浮び上つてくるのである。それは、ほかならぬ、Satpulah 大水門そのものである。この遺跡を、すでに多くの人びとが、*band*

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

の語をもつてよんできたことは、前章でも紹介しておいたところである。*Balāband* という名称をとつてみると、デリーにおいて、それにもつともふさわしい遺構は、まさに *Satpulah* をもつて第一とするであろう。すでに述べたように、この建物は学校としても用いられたらしく、一部の人びとがこの遺跡を *Madrasah* と呼んでいたことも、前章でふれたとおりである。大水門上部兩脇の部屋をもつ建物は、ハーンカーにもふさわしいし、また、これを宮殿と稱しても、必ずしもおかしくはない。*Āb-i Sirī* を、上の如く推論解釋した場合、*Satpulah* をもつて、*Baranī* のいう *Balāband-i Āb-i Sirī* に比定する推論が成り立つ根拠も、一應、あるといえるのではあるまいか。以上が、私の、いわゆる推論 B の内容である。

ただ、この推論 B を考える場合には、これまで私が述べてきたことがらと、若干矛盾するが如き印象を興える点が出てくるのである。それは、この *Balāband* は、*Firūz Shāh* によつて建てられたものであると、はつきりと *Ziyā'-Baranī* が述べているからである。ここで私自身が前章で述べた二つの点を簡単にくり返すと、まず、第一は、*Jahānpanāh* 南壁は、おそらくは、*Muḥammad bin Tughluq* の建設と考えて誤りないであろうということである。第二は、*Satpulah* 大水門自體については、文獻には全く言及されていないため、その面からの比定はむずかしいが、19世紀以降の諸著は、すべて、これを *Muḥammad Shāh* の建造というふうに説明してきたことである。もつとも、*Syed Ahmad Khan* のみは、その *Āthār al-Ṣanādid* の初稿本では、これを *Firūz Shāh* 時代の建造物と説明していたのであるが、これとても、その改稿本では、*Muḥammad Shāh* の建設というふうに所説を變えているのである。しかし、*Muḥammad* 建立説にしても、諸著書の推論であり、結局は、大水門自體の構造と様式の精細な比較検討によつてある程度までは推論が出せるにしても、時代差が僅少なため、決定的な結論はむずかしいであろう。これが、私が前章で述べたことがらの一端であつた。そこで、*Baranī* の記述と私の推論 B とをあ

わせ考えて、Sātpulah 建設の時代についての考證にもどらう。

(1) まず、第一に考えられるのは、Baranī が、誤まつて、Muḥammad Shāh が造営したものを Firūz Shāh の建設と記して、それを稱讃していると考えることである。この推論は、すこし弱點をもっている。コンテクストからみると、Jāma' Masjid および Hauz-i Khāṣ の Madrasah を二つ紹介したあと、「Firūz Shāh による第三の建造物」として、この *Balāband* が紹介されているのである。この記述のしかたは、いわば、ある建造物にふれ、ついでに、その建造者にもふれたというような書き方ではない。それは、Sulṭān Firūz Shāh の建築への熱意と、その建造物の偉大さを讃えるために記した特別の意味をもっている文章なのである。当時、たれが建てたかをよく知つているはずのデリーの人士の前で、こうした誤まりを、Baranī ほどのものが犯すであろうか。この點で、私は、まず、Baranī の記述を、記憶ちがい、書き誤まりの結果であるとするのは、この文章、この建造物に限つて、ほとんど考えられないのではないかと思うのである。

とすれば、この場合の結論は、明瞭である。つまり、何らかの決め手があつて、例えば、構造、様式上から、これは、Firūz 時代ではあり得ず、Muḥammad の時代のものであるとなるならば、これは、Firūz Shah 建立説を記した Baranī の誤まりとするよりは、むしろ、*Balāband-i Sīri*=Sātpulah という推論を放棄する方が、むしろ妥當であるということである。

(2) さて、Baranī の所説を事實を傳えたものと考えて、私の推論Bを採ると、これは従來の Jahānpanāh に對する私の所論からして、當然、次のような推論が導かれるであろう。すなわち、Jahānpanāh 南壁は、あきらかに Muḥammad bin Tughluq の建設ではあるが、Sātpulah の大水門のみは、Firūz Shah 時代の建設にかかるものであるという推定である。これは、はたして、妥當であろうか。

この推論の背後には、實は、いささか複雑な問題がひかえている。それは、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

Jahānpanāh 建設の理由の歴史的解釋の問題、および Firūz Shāh 建設の運河の問題ともかかわりができてくるからであり、さらには、前章でふれた Jahānpanāh 南壁に城門と水門とが同時に存在するというおかしなことからにもかかわるからである。この問題は次章にゆずるとして、ごく簡単に私見を述べると、ほぼ次のようになる。すなわち、私は、Jahānpanāh の建設の目的は、あくまで、新都城の建設にあつたが、のちに次章でふれるように、Muḥammad Shāh は、農業危機克服と、水利計畫實施のために、南壁を、多目的水利施設として擴大利用したのではないかと考えるのである（次章第3節参照）。そして、その計畫が實行されたのは、Muḥammad 治世の後半であり、その場合には、當然、水門の設置が一つの目標とされた。私は、Satpulah そのもの、あるいはその前身といえる水門施設の建設が、Muḥammad Shāh によつて、現存地點に着工されはじめたと推定するものである。この Satpulah 附近での水門の存在は、當然、北方への排水を前提とする。そこで、私が、さきに推論 B において推理した Āb-i Sīrī, すなわち、Satpulah→Sīrī 城砦東側→ジャムナー運河という水流の地溝が生かされたわけである。この地溝は、Jahānpanāh 建設、それより前代の Sīrī 建設に際して、城壁の土盛りのために開掘されたものと考えて不自然ではないであろう。これをジャムナー運河と結びつけたのは、Firūz Shāh 時代のことであつたかも知れない。そして、Firūz Shāh は、すでに存在した Jahānpanāh 南壁の水門を改築、あるいは増築、あるいは新築して、あの Satpulah 大水門を完成したと考えていいのではないであろうか。すなわち、私のこの推論 B-2 は、Muḥammad による Jahānpanāh 水門計畫、工事着手のあとをうけて、運河を開さくし、堰堤や水門を各地に設けた Firūz Shāh の時代に完工されたという結論をもつものである。

しかし、私の推論 B-1 および B-2 は、あくまで、Satpulah およびその附近の Jahānpanāh 南壁の科學的調査測量と、それにもとづく様式と構造上の研究によつて、もう一度再検討される必要があることはいうまでもない。

4. Shams-i Sirāj ‘Afif の記述にみえる堰堤について

Shams-i Sirāj ‘Afif は、トグルク朝の Sulṭān Firūz Shāh と同時代の人物である。このスルターンが、有名なアショーカの石柱を二基、デリーに移動させたとき、ちょうど12才であつたと、自ら記している。その著 Tārīkh-i Firūz Shāhī は、Sulṭān Firūz Shāh がデリーに造營した新城市 Firūzābād (フィローザーバード)をはじめ、このスルターンが各地に建設した諸都市、さらに運河やその他の建設あるいは補修事業などについてもふれているところの、特異な性質の文獻である。しかも、この書物は、他の諸著にはほとんどみえない堰堤と思われる構築物に關しても、わずかながら、記述をのこしているのである。それは、第IV部 (Qism-i chahār), 第11章 (Muqaddamah’i yāz-dham) にあたる “Dar ‘imārathāi-i Gūnāgūn kih Sulṭān Firūz Shāh kard,” すなわち「Sulṭān Firūz Shāh が建てたさまざまな建造物」という章のなかに、まことに簡単な敘述にしかすぎないにせよ、“band” の建設について、そのうちのいくつかのもの名稱をあげつつ、記述をのこしているのである。まず、ここにその原文を轉載しておこう。⁽⁷⁰⁾

و از قسم کوشکهای با تکلف چنانچه کوشک فیروزآباد و کوشک نزول و کوشک
 مهندواری و کوشک شهر حصار فیروزه و کوشک فتح آباد و کوشک جونپور و کوشک
 شکار و کوشک بند فتح خان و کوشک سالوره و مقامات دیگر و از قسم بندها
 چنانچه بند فتح خان و بند مالجه (که دران مقام پادشاه نیک نام آب زمزم
 انداخته بود) و بند مهپالپور و بند شکر خان و بند سالوره و بند سهپنه
 و بند وزیرآباد و مانند آن اینچنین بندهای محکم در هر محلے مستحکم
 کنانیده

この部分の、⁽⁷¹⁾ Elliot-Dowson にみえる英譯は、やや簡単に過ぎるきらいがあるので、次に、私譯を載せておく。

“As for the palaces [kūshakhāi], there were Kūshak-i Firūzābād,
Kūshak-i Nuzūl, Kūshak-i Mahindwārī, Kūshak-i Shahr-i Ḥiṣār-i Fī-

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について
 rūzah, Kūshak-i Fathābād, Kūshak-i Jūnpūr, Kūshak-i Shikār, Kūshak-i
 Band-i Fath Khān, Kūshak-i Sālūrah, and other places. And, as for
 the *bands*, there were Band-i Fath Khān, Band-i Māljah (into which
 place the *Pādshāh* had thrown the celebrated water of *Zamzam*),
 Band-i Mahipālpūr, Band-i Shukr Khān, Band-i Sālūrah, Band-i Sih-
 panāh, Band-i Wazīrābād, and other strong bands resembling those
 were built solidly in every district [*muḥallah*].”

右の ‘Afif 記述の後半には、*band* についての記述がまとめて見えるのであ
 り、そのうちの七つの名称を具体的に記しているのである。そこで、本節での
 私の考察は、まず、この ‘Afif の記しのこした七つの *band* の名を、もう一度、
 下に列挙することからはじめてみよう。すなわち、

1. Band-i Fath Khān (バンド = フアトゥフ = ハーン)
2. Band-i Māljah (バンド = マールジャ)
3. Band-i Mahipālpūr (バンド = マヒパールプール)
4. Band-i Shukr Khān (バンド = シュクル = ハーン)
5. Band-i Sālūrah (バンド = サールーラ)
6. Band-i Sihpanāh (バンド = スィヒパナー)
7. Band-i Wazīrābād (バンド = ワズィーラーバード)

となるわけである。

このように、*band* の名を列挙してみると、まず、以上にあげた七つの対象
 のうち、(1) Band-i Fath Khān と、(5) Band-i Sālūrah の二つについ
 ては、さきに原文とともに英譯を紹介しておいた ‘Afif の文章中、*band* の名
 を列挙した文章のすぐ前の、引用文としては中段にあたる個所の、Kūshak (す
 なわち、直譯すれば、宮殿の意) の名を列挙している部分に、全く同名の建造
 物がみられることが、注目されるのである。それらは、

Kūshak-i Fath Khān; Kūshak-i Sālūrah

という名で記されているところの建造物である。なお、列擧された *kūshak* のなかに、*Kushak-i Shikār* という名で記されているものがあることについては、のちに言及することがあるから、注意しておいていただきたい。

さて、この *Shams-i Siraj ‘Afif* の *Tārīkh-i Firūz Shāhī* の文章の内容をみて、本稿の問題に関連してまず第一に考えるべきことは、‘Afif が記したこれらの *band* が、はたして、本稿で私が使っている意味での堰堤にあたるものかどうかということがある。この點は、すでに *band* という語についてさきにも記しておいたことからみても、また、以下に記す考證の結果から逆推しても、まず誤まつてはいないと考える。とすれば、つぎの問題は、これらの七つの *band* のなかで、私が本稿の第II章で紹介してきたところの、デリー地域に現存する堰堤の遺跡に相當するものが、はたしてあるのかどうかという點である。そして、これは、私の論考のなかでも、現存の遺跡と文獻史料との照合の問題として、重要な點なのである。そこで、まず、すでにわかっている名稱から、それぞれ一致する、あるいは相似する點を探してみると、ほぼ、次のようなことが指摘できると思う。すなわち、上に紹介した ‘Afif の文中の七つの *band* のうち、

(2) *Band-i Māljah*; (3) *Band-i Mahipālpūr*;

(7) *Band-i Wazīrābād*

の三つは、私がすでに第II章で紹介した、トゥグルク朝後期に屬すると推定される七つの堰堤のうちの三つのものに、少くとも地名に関する限りは、關連が考えられるのである。すなわち、これらの三建造物は、それぞれ、次のように對應させて考えることができるであろう。

(a) *Band-i Māljah* (2) →Malcha 堰堤 (II-1)

(b) *Band-i Mahipālpūr* (3) →Mahipalpur 堰堤 (I-1)

(c) *Band-i Wazīrābād* (7) →Wazirabad 南方堰堤 (II-2)

このうち、(b)、(c)の場合には、それぞれ全く同一の名稱であるが、(a)

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

の場合には、音は似ているが同一ではない。Māljah (マールジャ) と Malcha (マールチャ) の双方の名稱について考えてみると、(jīm) が (che) に變ることとはしばしばみられるところであつて、Malcha がもと Māljah であつたとしても、決して不思議ではないのである。従つて、この (a) の場合にも、結局は、他の (b), (c) の二つの場合同様に考えていいのではないかと思う。すなわち、以上にあげたデリー地域現存の三つの堰堤については、Minhāj al-Sirāj ‘Afif の文中にみえる *band* のうちの三つと、現存の堰堤が存在している地名とは、それぞれの名稱が、まさに照應しているといふことができるのである。

さらに考えを進めてみると、これらの三つの堰堤のうち、Mahipalpur 堰堤の場合には、それが ‘Afif に出てくる Band-i Mahipālpūr に照應する確率度がきわめてつよいように、私には考えられるのである。というのは、ほぼ次のような根據によるものである。すなわち、この Mahipalpur という地名は、Tomar Rājput (トマール=ラージプート) 系のラージャであつた Rāja Mahi Pāl から出ていると推定されるのであるが、實際、ニューデリー西南郊のこの部落は、歴史的にみて、たいへんふるい部落のように思われのである。そして、すでにさきにもふれたとおりに (35 ページ)、現在の Mahipalpur の部落のほぼ中央部あたりに、この部落の住民が Maḥal (マハル、宮殿の意味) とよんできた建造物があり、それが構造および様式から推して、あきらかにトゥグルク朝後期、おそらくは Firūz Shāh の時代あたりのものではないかと推定されるのである。さらにまた、これも本稿ですでに述べたとおりに、この Mahipalpur 部落の東端に、現在きわめてよくのこつているところの堰堤およびそれに附設されているところの二つの水門のもつている諸特徴も、どうやら Firūz Shāh 時代のそれを示しているといえるのである。しかも、この問題の Mahipālpūr なる地名は、北インドに唯一というほどの珍らしい地名でももちろんないが、だからといつて、どこにもざらにあるというような地名でもない

のである。以上に述べた諸點を考えあわせてみると、上述の‘Afif の文中の Band-i Mahipālpūr は、さきに紹介したデリー現存の Mahipalpur 堤堰（I-1 に比定して、まず、まちがないと考えているのであるまいか。

この Mahipālpūr の堤堰に對して、あとの二つの *band*、すなわち（2）Band-i Mālja と、（7）Band-i Wazīrābād の場合には、それほどすつきりはしない。というのは、これらの堤堰を前章で私が、（II）自然地形利用の堤堰に入れて説明したように、現存の Malcha 堤堰（II-1）と Wazirabad 南方堤堰（II-2）の二つの建造物は、完全なる人工的な構築物ではなく、むしろ、自然の地形や地盤を巧みに利用したもので、遺跡自體の現状からしては、いまのところ、トゥグルク朝後期とか、あるいは Firūz Shāh 治世に建造されたというような時代比定はほとんど導き出すことができない対象なのである。ただ、すでにふれたように、この二つの堤堰と思われる遺構ともに、いずれも、そのすぐ近邊に、あきらかに Firūz Shāh 時代の構築と推定されるところの建造物があることである。すなわち、Malcha の場合には、Maḥal あるいは Kūshak とよばれるにふさわしいところの離宮のような建造物がその北方にのこっている。また、Wazirabad 南方堤堰の場合にも、あきらかに後期トゥグルク朝時代の特徴をもつ橋と水門、およびモスクなどが存在しているのである。こうした事實は、すでに記したように、これらの建造物のすぐ近くにあるこれらの二つの堤堰をも、一應、Firūz Shāh 時代の構築と推定させる有力な手がかりの一つである。従つて、‘Afif の記事に出てくる上述の二つの *band* と、それらと同一の地名をもつ場所に存在するところの現存の二つの堤堰とをむすびつける、有力な材料ともなり得るものと考えてるのである。

しかも、Māljah, Malcha の場合には、この語は、地名として、インドにおいてそれほど一般的なものではないのである。ただし、これに對して、Wazīrābād という地名は、Wazīrpūr などという地名とともに、ムスリム支配下の地域には、かなり多く見出すことのできそうな固有名詞である。實際、インド

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

でも、こうした地名をもつ町は、いくつか指摘できるであろう。もつとも、著名な地名としては、北インドでは、それほどはないらしい。たとえば、手近かなところで Imperial Gazetteer of India, Vol. XXV の Index によつて調べてみると、Wazirabad というのが、パンジャープ Gujrānwāla District (グジュラーンワラ縣) 内で、チュナーブ川南岸のタハスィール (tahsil, つまり郡) の名、およびそのタハスィールの中心的な町の名として出ている。この⁽⁷²⁾Gazetteer の記すところによれば、この町は、ムガル第5代皇帝 Shāh Jahān (シャー=ジャハーン) 時代に、Wazir Khān によつて創設された町のものである。従つて、もし、それが眞實であるとすれば、この地名は、ムガル時代のもので、少なくとも、サルタナット時代にさかのぼるものでないように思えるのである。さらに、デリー地域とその周辺とを調べてみると、さきに紹介した、私が参照している三つの地圖に関する限り、問題の Wazirabad のほかには、現在のいわゆるオールド=デリーの西北方に、Wazirpur (ワズィールプル) という部落があるほかは、別に Wazirabad というような地名は、一つも見當らないようである。

さらに、このデリーの Wazirabad については歴史的なことがらで、その比定を支持するものがある。それは、すでに Jahānpanāh について記したときに私も参照した Zafar Nāmah の記述であつて、そのなかに、Wazirābād という地名が出てくるのである。それは、Timūr がデリーを攻略してのち、北方にひきあげるときのことを記した個所にでてくるのであるが、それによると、Timūr の軍隊は、Jahānpanāh から、Firūzābād へゆき、そこから北上して、「Wazirābād の近くの Jahānnumāi [*Jahān-Numāi ba-qurb-i Wazirābād*] に駐營した」というのである。さらに同書は、軍はその翌日には、Wazirābād を出發して、やがてジャムナー川を渡り、6 kos 進んで、Mūdulah という村 [*mūza'*] へ進んだことを記している。同書は、Timūr 軍が、やがて、Mirat (ミラット) の城砦を攻略する次第をそのあとに記しているのである。これ

らの進軍の記述を辿つてみると、ここに記されている Wazirābād というのは、まさに、ジャムナー河岸に近く、Firūzābād より北方のデリー地域のはずれにあることはきわめてはつきりしていることがわかるのである。このことは、まさに、本稿で私が言及しているところのデリー地域北端の Wazirābād と同じ地名を、Zafar Nāmah が記していると考えて全く自然であるといえるのではないであろうか。少くとも、この Zafar Nāmah の記述は、‘Afif の *Band-i Wazirābād* という堤堰の所在地 Wazirābād を、私見の如くデリー地域北方に比定する有力な文獻上の一つの根據とみてさしつかえないと思う。

以上の諸点を考えあわせてみると、‘Afif が述べている *Band-i Māljah* と *Band-i Wazirābād* という二つの *band* は、本稿第 II 章で私が紹介したところの、デリー地域に現存する Malcha 堰堤と Wazirabad 南方堰堤とに比定し得る可能性も多いと考えられるのである。そして、第 II 章で述べた私の問題点、すなわち、この二つの堤堰と思われるものは、Firūz Shāh 時代の完全なる人工的構築物とは考えられないにしても、ともかくも自然利用による堤堰ではないかとした私の推論についても、この文獻上の地名の照合が、かえつて、それを支持するところの一つの有力な證據になり得るといえるのではあるまいか。

なお、S. H. Hodivala は、Elliot-Dowson の史料大成に対する註釋書のなかで、右の ‘Afif の記述中の *Band-i Māljah* は、Talkatora (タルカトーラ) の近くにあると考えている。これは、私のいう Malcha 堤堰 (II-2) と同じものをいつているものであろう。事實、Malcha とは、Talkatora 公園から自動車で数分の距離である。しかし、Hodivala は、また、Malcha の地名を、デリーの別の地點にも考えているようであるが、これは、私には賛成できない。⁽⁷⁴⁾彼は、同時に、*Shaikh Mushtāqī* (シャイフ = ムシュターキー) の *Wāqī‘āt-i Mushtāqī* (ワーケアーテ = ムシュターキー) のなかにみえる “*Mulcha*” という村落名にふれ、ロディー朝の Sikandar Shāh (シカンドル = シャー) 治

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

世下の Miān Zabār al-Dīn なる人物が、この地にひとを集めて、「二日間、狩獵を楽しんだ」こと(75)にふれている。この地名も、おそらく、問題の Māljah、現在の Malcha にあたるものと考えていいであろう。

さて、ここでさらに一言ふれておきたいことがある。それは、上の Wazīrabad の場合にも疑いをはさんだように、‘Afif の問題の文章に出てくる *band* は、はたして、デリー地域あるいはその近邊の地域において建造されたものに限られているのかどうかという点である。これについては、まず、すでに紹介した問題の文章があらわれている、Tārīkh-i Firūz Shāhī の第IV部、第11章に記載されている前後の内容のコンテキストのなかで考えてみる必要があるであろう。

この章では、まず、Firūz Shāh が建てた数多くの町 [*shahr*]、城砦 [*ḥiṣār*]、宮殿 [*kūshak*]、堰堤 [*band*]、モスク [*masjid*]、および墓 [*maqbarah*] について述べられているのである（原文では、すべて複数形を用いてあるが、ここでは、単数形に直して括弧内に示した）。そのうち、はじめに述べられている町 [*shahr*] については、デリーの新都市 Firūzābād ばかりでなく、Ḥiṣār-i Firūzah（ヒサーレ=フィーローザ）、すなわち、現在のパンジャブ州の都市 Hissar（ヒッサール）や、その他の地方都市の名も、もちろん、入っているのである。次に記されている宮殿 [*kūshak*] についても、Ḥiṣār-i Firūzah や Jūnpūr（ジョーンプール）の名などがあらわれており、その言及するところは、デリー近傍にとどまらず、北インド諸地域にもわたっていることがわかるのである。そして、そのつぎに、問題の *band* を列挙した文章がはじまっているのである。これらの *band*、すなわち堰堤と推定される建造物については、すでに記したところからもわかるとおり、少なくともその一部は、デリー地域に存在していたものであると推定しているわけである。しかしながら、列挙されたこれらの *band* が、たとえば建設年代順とか、地域別とか、あるいは方角順というように、なんらかの秩序や順序をもつて記されているかどうかという

點になると、その全部の地名の比定がわからない以上は、あきらかにすることは、まず、不可能といつていいであろう。

さて、‘Afif の *band* の記述のなかで、さきの三つについては、私見を記したのが、のこりの四つの堤堰のうち、まず Band-i Sālūrah については、なお若干の推論が可能のようである。というのは、同じ Sālūrah なる地名が、‘Afif の同じ著作の別の個所に出てくるのである。すなわち、第II部 (Qism-i Dawam), 第5章 (Muqaddamah‘i Panjam) の “Banāi-i Shahr-i Ḥiṣār-i Firūzah”, すなわち、「Ḥiṣār-i Firūzah 市の建設」と題する章のおわり近くに、次に英譯するような文章が記されているのである。⁽⁷⁶⁾

“……When the city [*shahr*] of Ḥiṣār-i Firūzah was built, Sultān Firūz ordered that the district [*shiqq*] was called, from that day, Ḥiṣār-i Firūzah, and that the iqtā‘^s of Hānsī, Akrūdah (or Āgrah), Fathābād and Sarstī, as far as Sālūrah (or Sitāpūrah) and Khizrābād and other iqtā‘^s, should be all included in the district [*shiqq*] of Ḥiṣār-i Firūzah……”

この文章は、Firūz Shāh 治世における Ḥiṣār-i Firūzah の建設とともに、地租徴収のための行政上の区劃のなかで、Ḥiṣār-i Firūzah という名をもつシック (*shiqq*, 徴税區) が、新しく設けられたことを述べたものである。そして、上に引用した文章の後段は、その新徴税區のなかに入るべき新しいイクター (*iqtā‘*) の名をあげているのである。

さて、この文章の内容をみると、問題の地 Sālūrah が、デリー地域のなかか、あるいはその近傍の地方にあつたことは、どうも疑わしいように思われるのである。もつとも、上に出てくる Ḥiṣār-i Firūzah、つまり現在の Hisar は、デリーの西北西にあつて、比較的これに近いといえないこともないが、他のいくつかのイクターは、北インドのかなり廣範圍の地域に及んでいるとも考えられるので、正確なところはもちろん結論づけるわけにはいかない。しか

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

し、Sālūrah がデリー地域の外にある可能性は、以上の文章から推すと、きわめて大きいといつていいと思う。

さて、‘Afif の問題の文中に出る、のこりの三つの*band*、すなわち、Band-i Fath Khān, Band-i Shukr Khān, および Band-i Sihpanāh についてはいかがであろうか。はたして、これらを、本稿の第II章で私が紹介したところの、デリー地域に現存する堰堤と思われる遺跡のどれかに比定できるであろうか。結論をさきに言えば、残念ながら、これについては、正確なことはなにひとつとしていえないということである。デリーの諸地図を参照してみても、また、歴史にあらわれる地名を探してみても、上に少し紹介した Sālūrah もふくめて、四つの“band”の名稱に相當する地名は、まず、見當らないのである。従つて、説得的な結論は、出しようがない。ただ、これらの*band*のうちには、なお、若干の推論の餘地があるようであるから、以下、それに少しふれておきたい。

さきに私がデリー地域に現存する遺跡と照應させて比定を試みたところの、Mahipālpūr (I—2, Mahipalpur 堰堤), Māljah (II—2, Malcha 堰堤), および Wazīrābād (II—1, Wazirabad 南方堰堤)の三つの“band”にそれぞれ對應する遺跡をのぞくと、デリー地域に現存するといころのトゥグルク朝後期に屬すると推定されるのこりの堰堤の遺跡は、

(I—1) Station Road 堰堤; (I—3) Būli Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤;

(I—4) デリー大學構内堰堤; (I—5) 故ネルー首相公邸庭内堰堤

の四遺跡である。まず、これらの遺跡について指摘しておきたいことは、さきに比定を試みた三堰堤と異なり、いずれも、その存在する地域と關連して、19世紀にさかのぼる古地名をもつてはよばれていなかった建造物である、ということである。従つて、これらの堰堤のうちのどれかが、‘Afif の文章の、のこりの三つの*band*にあてはまる可能性は、あるともないとも、全くいえないのである。すなわち、これらの四つの堰堤は、現在でこそ、固有の地名をもつてよばれてはいないにしても、かつては、なんらかの固有名詞あるいは地名を

けてよばれていたかも知れないし、また、それが、‘Afif の記した地名、固有名詞でなかつたともいい切れないのである。(もつとも、I—3, Būli Bhatiyāri kā Maḥal 堰堤の場合は、固有名詞といつても、サルタナット時代よりのちの時代のものであることは、すでに述べておいた。)

そこで、この可能性について、もう少し推理をすすめる餘地はないものであろうか。まず、I—5, 舊首相公邸庭内の堰堤は、すでに記したとおり(49 ページ参照)、1910 年代の A. S. I. 調査報告では、第II巻の Delhi Zail の地域区分のなかの“Kushak”という項に記されており、この堰堤に附設されていた建設物が“Kushak”⁽⁷⁷⁾とよばれていたことを述べている。また、最近の Y. D. Sharma のデリー遺跡案内も、この建造物を Kūshk-Maḥal といい、堰堤の説明に際しても、“Embankment at Kūshk-Maḥal”⁽⁷⁸⁾といつている。さきにふれた A. S. I. に保存されているこの“maḥal”の写真を参考しつつ、Delhi Monuments List に記されたこの遺跡の状態から推してみると、そこには、“kūshak” (宮殿) という名をもつてよばれるにふさわしい建物があつたことがわかるのである。一方、‘Afif の文中の *band* を列挙した問題の記事のすぐ前の、kūshak を列挙した個所をみると、その後半において、すでに紹介したように(128-129ページ)、Kūshak-i Jūnpūr のあとを受けて、

“……Kushak-i Shikār, wa Kūshak-i Band-i Faṭḥ Khān, wa Kūshak-i Sālūrah, wa maqāmāt-i dīgār……”

と記されているのである。ここにあらわれている固有名詞は、本章で問題にしている堰堤にかかわるものとして、いささか比較考察してみるに値すると思う。というのは、この三つの Kūshak のうち、最初の Kūshak-i Shikār は、いわば「狩獵宮」(hunting palace) ともいうべき一般名詞であるのに、あとの二つの *band* 固有名詞は、いずれも、さきにあげた七つの *band* のうちの二つにつけられた固有名詞と、全く一致するのである。つまり、

Kushak-i Band-i Faṭḥ Khān → Band-i Faṭḥ Khān

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

Kushak-i Sālūrah→Band-i Sālūrah

というように對應するのである。とすれば、この兩者の對應からみて、少くとも、それぞれの *kūshak* と *band* とは、同一の地域にあつたのではないかという推定が、當然に成り立ち得る。

しかしながら、すでに記したように Sālūrah という地名が、デリー地域にある可能性は、全く少ないといつていいのである。そこで、以上の二つのうち、この Sālūrah の名をつけた *kūshak* あるいは *band* は、一應省いていいであろう。そこで、*kūshak* と *band* とが同一の地域に併存していそうな遺跡をまず考えてみると、あるいは、Kūshak-i Band Faṭḥ Khān、およびその堰堤のみを指したと思われる Band-i Faṭḥ Khān にあたる可能性がないとはいえないことになるはずである。そうした条件をそなえるものとしては、さしずめ、まず、舊首相公邸庭内堰堤が考えられる。かつて Kūshak Maḥal とよばれた建造物を持ち、しかもそれが *band* に附設されていたという事実から推すと、あるいは上述した Band-i Faṭḥ Khān にあたる可能性がないとはいえないのである。もつとも、この舊首相公邸庭内の堰堤をのぞいて、デリー地域にある他ののこされた三つの堰堤のうち、Station Road 堰堤 (I-2)、および、いわゆる Būlī Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤 (I-3) は、いずれも、*kūshak* とよんでもおかしくはないような建造物を、その堰堤のすぐ傍わらにもつていることは、すでに第 II 章でくわしく紹介しておいた。現に、A. S. I. の 1910 年代の遺跡報告書は、この Station Road 堰堤を Palam Zail の地域中の Band Shikar という地域名の見出しのもとに報告している⁽⁷⁹⁾のであり、このことは、當時よく狩獵宮に對して用いられていた Kūshak-i Shikar という名をも十分豫想させる名稱なのである。こう考えてみると、‘Afif にみえる Band-i Faṭḥ Khān とは、もしそれがデリー地域にあつたものとすれば、あるいは、舊首相公邸庭内堰堤 (I-5) と、上の二つの現存する堰堤をもふくめた三つの堰堤のうちの一つに當るかも知れないという推理も、一應は、成立つ。もつとも、この場合、

デリー大學構内堰堤 (I—6) であるが、これとて、いまでは全く、その断片的遺構しかのこっていないのであるから、かつて、Kūshak 的な建物をもつていなかったとはいえない。従つて、可能性としては、もちろん、上の三堰堤とともに、全く落してしまうことはできないかも知れない。

ちなみに、Fath Khān という名と、他の *band* の固有名詞として出てくる Shukr Khān という名は、いずれも、Sulṭān Firūz Shāh の子供の稱號らしい⁽⁸⁰⁾が、このことは、まさに、これらの堰堤が、Sulṭān Firūz Shāh の治世に建設されたことを反映しているもので、その點では、かえつて、建設時期の考證の一つの手がかりとなり得るかも知れない。ただし、Band-i Fath Khān, Band-i Shukr Khān の名稱は、支配者の子たちの名を直接つけたものか、それらの人名がすでに附近一帯の地名として用いられていたがゆえにつけられたのか、その邊はよくはわからない。‘Afif は Firūz Shāh の同時代の人物であるから、おそらく、前者と考へてもおかしくはあるまい。

ここで、これまで述べてきたことをちよつと整理してみよう。Minhāj-i Sirāj ‘Afif の Tārīkh-i Firūz Shāh に見える七つの *band* のうち、Band-i Mahipālpūr は、ほぼ、現存の Mahipalpur 堰堤 (I—1) であると推定していいであろう。さらに、Band-i Māljah, Band-i Wazīrābād というのは、それぞれ、本稿の第II章で紹介した Malcha 堰堤 (II—1), Wazirabad 南方堰堤 (II—2) にあたる可能性が相當あるといつていい。一方、Band-i Sālūrah というのは、どうやら、デリー地域の堰堤ではないように思われる。ただし、それが關連するところのシク (shiqq) から考えると、デリー地域から西部、西南、あるいは西北部の方にあつたのではないかと推定される。そして、スルターンの子の名をとつてよばれたものと想像される Band-i Fath Khān, Band-i Shukr Khān, それに、のこりの Band-i Sihpanāh の三つは、どこに存在していたのか、そして、それらがはたしてデリーにあるのか、あるいはデリー地域以外の地に設けられた建造物であるのか、文獻上の考證や、現存遺跡との照合比較

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

からしては、ほとんど不明といわざるを得ない。ただ、そのうちの一つあるいはいくつか、本稿で紹介してきたデリー現存の堰堤のどれかに當ると推察することは、必ずしも誤まりであるとは思われない。そうした場合の一つの推理として、これらの *band* のうちで、Band-i Fath Khān は、問題の文章の前段に列挙された kūshak の名稱のなかにも同名の *band* 名をもつて記されている kūshak の名があるので、現存の遺跡のうちで、kūshak とよばれるにふさわしい建造物をもつている Station Road 堰堤、Būlī Bhatiyāri kā Maḥal 堰堤、あるいは故ネルー首相公邸庭内堰堤のいずれかにあたるかも知れないという推論も、一應、成立つのではあるまいか。さらに正しくいえば、デリー大學構内堰堤も、かつてそうした建物をもつていなかったとはいえないのであるから、あるいは、これも対象にふくめた方がいいのかも知れない。

最後に、以上の私の考證に関連して、トゥグルク朝時代、あるいはより後代の他のムスリム歴史家の文獻について、簡単にふれておきたい。‘Afif と同じ Firūz Shāh の治世の重要な著者である Ziyā’al-Dīn Baranī は、‘Afif が記しているに *band* については、なに一つとして記録をのこしてはいない。また、Firūz Shāh 自身の著作と考えられている Futūḥāt-i Firūz Shāhī とよばれる文獻も、デリーの建造物に関してはきわめて重要な文獻史料である。しかし、この文獻でさえも、多くの場合、このスルターンのデリーにおける建設、再建、補修などの諸事業に、その具体的な建造物の名稱まであげて言及しているにもかかわらず、‘Afif が述べている *band* については全く一言もふれてはいないのである。さらに、やはり、Firūz Shāh の時代についてふれ、たとえば、このスルターンが北方からデリーに移動させた、有名なアジョーカ王の刻文のある石柱についてもかなりくわしい敘述をのこしているところの珍らしい文獻 Sirāt-i Firūz Shāhī (スィラーテ=フィーローズ=ジャーヒー⁽⁸¹⁾)にも、これらの *band* についてはもちろん、Firūz Shāh 時代の他の *band* についての記述も、一切、うかがえないようである。

ただ、ムガム朝のアクバルの時代の三大史書といわれる著作の一つである Qāsim Hindū Shāh Firishṭah (カーシム＝ヒンドゥー＝シャー＝フィリシタ)の著 Gulshan-i Ibrāhīmī (グルシャネ＝イブラーヒーミー), ふつう Tārīkh-i Firishṭah (ターリーヘ＝フィリシタ)とよばれている史書には、トゥグルク朝の Firūz Shāh が 50 の *band* をつくつたことが記されている。もつとも、この著者は、これについては、なにひとつ、具体的なことは記していないのであるが、次に、その個所を英譯して紹介しておく。

“The detail of the construction of the building [*banā-i ‘imārat*] and its remaining information were obtained. Thus, Bands on the rivers [*band-i jāi*]: Fifty [*pañjah ‘abad*],.....”

Firishṭah の文章は、その他の建造物の数を記すことによつてつづけられているのであるが、彼がこの文章の資料をどのような文獻からとつたものか、あるいは、だれからその “*khābar*” (報告)を聞いたものかは、全くわからない。彼が記している 50 という数字が、はたして事實を示しているものかどうかとも、いまでは、もちろん、わかりようがない。ただ、‘Afif は、すでに本章で紹介したように、七つの *band* の具体的な名稱を述べたあとで、「その他の、類似の *band*」と記しているのである。そして、私自身が、本稿で紹介したデリー地域に現存する遺跡のみを対象として考えてみても、Firūz Shāh の時代の建設と推定されるものが、少なくとも八つは認めることができたわけである。従つて、Firishṭah のいう 50 という数字は、そのまま信用する必要は全くないにしても、デリー以外における運河や水利施設の工事、あるいは地方都市建設の諸事業を考えると、Firūz Shāh 治世における堰堤の数は、十数件、あるいは数十件に及んだということも、決して、考えられなくはないと思うのである。

V. 堰堤および水門をめぐる歴史的諸問題

1. はじめに

デリー＝サルタナット時代に建造されたと推定される堰堤と水門について、私は、以上に、その現状の概要を紹介し、また、わずかではあるが、それらに関連ある文獻史料にもとづく考證を試みてきた。そこで、本章では、これらの堰堤および水門の遺跡の現状とその建造に關係ある歴史的背景とをあわせて考え、それをもとにして、これらの水利施設をめぐるいくつかの歴史的な問題についての私見を記してみたいと思う。もちろん、サルタナット時代の水利をめぐる諸問題は、堰堤、水門ばかりでなく、他のさまざまな水利施設の遺跡とあわせて、総合的に考察されることによつて、はじめてその意味を全うし得るのである。従つて、堰堤、水門のみを對象とする本稿では、それらの歴史的な問題の一端をあきらかにし得るにすぎない。さらに、他の水利諸施設についての考察を経たのち、総合的な問題解明には、他日を期したい。

2. 水利施設の造営におけるトゥグルク朝時代の位置

すでに第 III 章で述べたように、サルタナット時代の史書には、堰堤、水門に關する記述はほとんどなきにひとしいほど乏しい。そのなかから、私が前章で紹介したのは、*Shams-i Sirāj 'Afif* と、*Ziyā' al-Dīn Barnī* の史書にみえるわずかな文章にすぎなかつたが、この二人は、いずれもトゥグルク朝の *Sulṭān Firūz Shāh* 時代の歴史家であつた。

ただし、同時代の文獻に言及されていないからといつて、當時、そうした建造物が實際に存在しなかつた、あるいは建造されなかつたというのは、歴史的

見地からいえば、ほとんどナンセンスにひとしいであろう。従つて、サルタナット時代の文献がこれらの施設についてほとんどふれていないからといつて、この時代には堰堤や水門がなかつたり、また、トゥグルク朝時代の文献がたまたまそれにふれているからといつて、とくに、その時代に多くの *band* が建造されたということも、また、そのままでは、誤りである。私自身は、決して、そのようなことをいおうとしているのではない。

サルタナット時代の堰堤や水門の構築の事実を、現實的に裏づけることができそうな根據としては、同時代の文献のなかでの言及の有無もさることながら、むしろ、遺跡としての堰堤、水門が、どの程度のこつているかということの方が、はるかに重要ではあるまいか。もともとある時代に構築されたものが、のちの時代になつて破壊されてしまつたか、あるいは全く新しく補修再建され、ために、それ以前からの存在の事実も正當に確認できないという場合をのぞけば、遺跡の存在は、どこかに、なんらかの年代比定の手がかりをもっているし、かつての建造を推測させるもつとも有力な證據である。こうした見地に立つと、堰堤および水門などの場合には、すでに第II章でくわしく紹介してきたように、サルタナット時代にさかのぼると推定される遺跡が、デリー地域には、いくつが存在しているのである。しかも、きわめて少数の例外をのぞけば、これまでの研究の結果は、確認された堰堤の大部分は、トゥグルク朝時代の建造物であることが、ほぼ推察されたのである。

これまでの考察から、私は、ほぼ、次のような推論を導き得ると考えている。すなわち、サルタナット時代のデリー地域においては、トゥグルク朝になつてから堰堤や水門の建設が試みられ、とくに、その傾向は、Fīrūz Shāh の治世に入つて、同時代の文献が記しのこしているように、北インドの各地に、かなり廣範圍にわたつて、堰堤が構築されるようになった。そのことは、また、トゥグルク朝の前後の時代には、堰堤、水門などの水利施設の建設は、あまり行なわれなかつたのではないかという推論をも成り立たせるのではないかという

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

ことである。デリー地域における堰堤および水門の遺跡の残存状況をよく調べてみると、これまでの私の考察が示しているように、まさに右の推論を裏づけるものがあるのである。

そうした推論を認めるとすれば、それが歴史的にはどのような意味をもつものなのであろうか、という問題が、當然、つきに出てくる。ここではまず、水の利用という観点から、この問題に入つていつてみたい。

トゥグルク朝より前の時代に属すると推定される堰堤、水門の遺構が、サルタナット時代のデリー地域に関して、ほとんど認められないということは、すでに考察したとおりである。しかしながら、サルタナット前期に、堰堤に代るべき水利施設が全くなかつたかという点、決してそうではない。パーオリーをふくむ井戸をひとまず別とすれば、大規模な水の地域的利用という点からいつて、まず挙げることのできるのは、tāl (タール)、tālab (ターラブ)、あるいは hauz (ハオズ) とふつうよばれているところの、貯水池である。しかし、貯水池というかたちの水利施設では、サルタナット時代より前の、いわゆるヒンドゥー時代のデリー地域にも、歴史的に著名なものが、すでに建造されていたのである。

なかでも、もつとも有名なのは、Tomar Rajput の支配者 Sūraj Pāl (スーラジ = パール) によつて建設されたといわれている、いわゆる Sūraj Kund (スーラジ = クンデ、すなわち、太陽池の意味) がある。これは、現在、Tughluqabad 南西方の約 3 km ほどの地点にある大貯水池の廢墟である。この Kund は、その圓形周縁に、切り石を連ねた階段状の、いわゆる ghāt (ガハート) があり、遺跡の現状から推しても、それが、きわめて大規模な建設工事であつたことがすぐわかる。Firūz Shāh が、のちに、このヒンドゥー遺跡⁽⁸³⁾を補修したらしいことも、現状から知られるということである。

こうした貯水池がすでにプレ = ムスリム時代のデリーに建造されていたことは重要なことであるが、本稿の視点からいつてより重視すべきことは、この、

いわばヒンドゥー時代のデリー地域にも、水門施設を備えた堰堤が構築されていた可能性が、現存の遺跡からほぼ確認されているということである。それは、上にあげた Sūraj Kunde のさらに南西方約 2 km ほどの地、Ananpur (アーナンプル、正しくは、Ānangpur, アーナングプル) の村落に近く、同じく Tomar Rajpūt の王 Ānang Pāl によつて建造されたと推定されているところの堰堤である。残念ながら、私自身は、これまで一度も、この遺跡を見る機会をもち得なかつた。これに簡単に言及している Y. D. Sharma によれば、local quartzite stone で、せまい“ravine”の口をふさいだ堰堤であるらし⁽⁸⁴⁾い。しかも、重要なのは、その一部に、水門があつて、それが下方の耕地の灌漑に用いられていたという推定を Y. D. Sharma が記していることである。この堰堤と水門とが、彼のいうように、Ānang Pāl 時代のオリジナルなものであるとしたならば、その構造と機能、および具体的な建設目的などがいかなるものであつたか、本稿の問題に對比したとき、まことに重要なかわりをもつてあろうことはいうまでもない。私自身、不明にして現地をみていないので云々する資格はないのであるが、もし、Fīrūz Shāh 時代の補修工事が Sūraj Kund についてなされているとするならば、わずか 2 km しか離れていない地点に存在していたこの水利施設についても、Fīrūz Shāh 時代の人びとは、少くとも見聞していたにちがいない。とすれば、このヒンドゥー遺跡には、はたして、Fīrūz Shāh 時代の補修のあとは見當らぬものなのかどうか。もつとも、トゥグルク朝の時代には、Anangpur 部落のあたりは、デリーの支配者にとつては、切實な関心をもつ地域ではなく、従つて、ふるい堰堤、水門の存在を知つてはいても、それをあえて補修する必要は感じなかつたのかも知れない。いずれにせよ、この堰堤および水門の構造や機能が、トゥグルク朝時代のそれとどう関係があるのか、あるいは全くないのかどうかということは、私の考察の結果にも大きな影響を及ぼす点である。つまり、簡単にいつてみれば、プレムスリム時代のデリーにおける堰堤と水門の構築の構想および技術が、はたし

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

て、トゥグルク朝時代の水利計畫の構想、および具體的工事における技術上の問題に、どの程度かわりがあるかという問題を解明する一つの手がかりになるからである。今後の御教示をいただきたい。(筆者追記——本稿を印刷に廻したころ、歐米に短期出張されていた山本達郎團長が、数日間のニューデリー滞在後、歸國された。同教授の出發直前に、私は以上に記した觀點から、もし余裕があれば、Anangpur 附近の問題の堰堤と水門の遺構を、すでに紹介したネルー前首相公邸庭内の堰堤の遺跡とあわせて、是非、確認觀察してきてほしい旨をおねがいしておいたのある。さいわいにして、山本教授は、私の要望をみたしてくれたのであつた。しかも、その歸國が本論文の校正直前であつたので、本稿の論旨をよりあきらかにするため、とくに、末尾に「追記」のかたちで、山本團長による、私の考察に對する補足的意見をのせていただくことにした。ただし、それによつて、私の本文を訂正する餘裕は時間的に全くなかつた。山本教授の御好意には、感謝の意を表したい。)

この Ānang Pāl が建造したといわれている水利施設に、別に、Ānang Tāl と一般によばれてきた著名な貯水池の遺構がある。⁽⁸³⁾これは、クトップ地域の近くにあるが故に、ずつと南方の岩丘内の盆地に設けられた Sūraj Kund などとくらべると、はるかに著名であつたが、現在では、⁽⁸⁴⁾少くとも冬の乾期以降には、私の知る限り、水は全くのこつてはいないようである。この貯水池は、いうまでもなく、Lāl Kūt、および Rāi Pithaurā 城砦城内における大規模な給水源として重要な貯水池であつた。この Rāi Pithaurā 都市の内部にある貯水池としては、私の知るかぎり、もう一つ、この大城砦内の東南地域に、その遺構を指摘することができるものがある。それは、この城砦の南壁の現存する遺構の東端に近い部分の城壁内にあるもので、全くの廢墟と化している大遺跡である。私が簡単にみたところでは、ほぼ十字形で、階段をもつており、次稿で私がとりあげるはずのバーオリー的な様式をもつているものである。しかし、遺跡の崩壞度が著しく、また、完全に放棄されている廢墟であるため、1960年

はじめに、私が山本團長とともに現地を観察したときには、それがはたして湧水をとまなうバーオリーであつたのか、あるいは、雨水を貯えるための単なる貯水池であつたのか、私にはよくわからなかつた。そして、さらに遺憾なことには、壁面の石積みのぐあい、あるいはその他の状態から、これが建造されたのが、はたしてヒンドゥー=デリーの時代か、あるいはムスリム支配以後のものなのか、あるいはまた、そこに後代の補修があるのかどうかという点などについて、はつきり把握し得ないままに遺跡をはなれ、その後ついにふたたび、この遺跡に行つてみる機会をもたなかつたのであつた。ただ、ここに根拠を述べることは省略するが、私は、この遺跡は、少くともその起源は、ヒンドゥー時代のものではないかと、今では考えている。いずれにせよ、この水利施設が、Rāi Pithaurā 城内の東南部地域の飲料水その他の給水源の一つとして使用されていたことだけは、疑いをいれぬところである。

さらに、現存の同名の遺構は、後代の補修の結果で、おそらく原型とはかなり異なつていられると思われるが、少くとも奴隸王朝より前の、いわゆるヒンドゥー=デリーの時代に建設されていたと思われる貯水池に、ふつう、Ḥauḥ-i Rānī (ハオゼ=ラーニー) とよばれてきた遺跡がある。この Rānī, すなわち女王・王妃という名から推しても、それがヒンドゥー関係であることを想定させるものであるが、すでに本稿でもふれておいたように、奴隸王朝時代の史書 Ṭabaqāt-i Nāṣirī にも、その名 Ḥauḥ-i Rānī がみえているのである。この事實は、この貯水池が、すでに奴隸王朝時代に、貯水池あるいは地名として、あきらかに存在していたことを示すものであるが、この貯水池の名をつけた門 (Darwāzah) が、Rāi Pithaurā 城砦にあつたことも、文獻史料から知られるのである。それらの地域の比定の結果からしても、また現存の地域名、遺跡名からさかのぼつてみても、この Ḥauḥ が、現在の Hauz Rani 部落の西南南方にある矩形の貯水池あとにあつたものであることは、ほぼ、疑いをいれないところである。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

以上が、プレ=ムスリム時代のデリー南域における貯水池の概略であるが、トルコ系ムスリムの侵入の結果、サルタナット支配が確立してからのちのデリーにおいては、水の確保を目的として設けられた大規模な貯水池としては、少くとも、二つが、有名なものとして紹介に値する。その一つは、奴隷王朝の *Sultān Shams al-Dīn Iltmish* が建設したといわれている貯水池で、一般には、後世に至るまで、*Ḥauz-i Sultān*、あるいは *Ḥauz-i Shamsī* として知られているものである。この貯水池は、現在、*Mehrauli* 部落の西南端に近く、*Mehrauli Road* がその部落を南下してちようと部落南端の家並みを通り抜けようとするあたりの西側にひろがっている。今なお、冬の乾期においても、相當の水量を保っているところの大貯水池である。

第二は、*'Alā' al-Dīn Khaljī* が建設したといわれている *Ḥauz-i 'Alāī* である。これは、その後現代に至るまで、一般には、*Ḥauz-i Khāṣ* の名をもつて、デリーの住民にあまねく知られてきた大貯水池である。

この二つの大規模な人造貯水池は、サルタナット前期以来、デリーの住民の生活上、重要な役割を演じてきたのであるが、デリーのサルタナット権力による水利政策の歴史の問題としてみても、たしかに一つの焦点となる建造物である。そして、デリーの住民はもちろん、外国人でデリーを訪れるものの多くが、よく知っていたものである。*Ibn Baṭūṭa* や、のちの *Tīmūr* 侵入について外国人がのこした史書などがこれにふれているのは、そのためであり、19世紀以降の諸著でこれに言及しているものも数多い。これらの貯水池については、私はできれば別稿で文献史料との関連について私見を述べたいと思っているが、本稿では、以上の簡単な紹介にとどめておく。

さて、上に述べたように、*Anangpur* の近くの堰堤およびそれに附設されたあつたという水門施設をしばらくのぞくと、ヒンドゥー時代のデリーにおいて目立つ大規模な水の利用のための施設は、貯水池であつたといえよう。そし

て、トルコ人ムスリムがデリー地域に新しい支配体制を確立したあとに、その居留地を中心に水の確保を計つた主な手段も、同じく、既存の貯水池の利用に加えて、新しく、大規模な貯水池を設けることであつた。もつとも、水源の確保は、一般的にいうならば、貯水池利用のほか、デリー地域では、地下湧水を利用する井戸がふつうで、とくに、圓形井戸、あるいはパーオーリー形式の階段井戸による水の確保が、もつとも一般的に行われていたようである。これらについては別稿で詳述するはずであるが、そのなかには、歴史碑文の殘存によつて、あきらかに奴隸王朝時代までさかのぼる井戸も發見されているのである。しかし、大規模な水源としては、なんといつても大貯水池の効用が大きく、飲料水、宗教用水の利用から、時と場所とに應じては、農業用灌漑にまで利用されていたと思われるのである。

このような事情を考えてみると、本稿で、私が、遺跡の現状と文獻史料とを併用して明らかにしてきたトゥグルク朝時代における堰堤と水門の建造の事實は、一體、なにを意味しているのであろうか。この疑問に對しては、私は、水門施設を備えた堰堤の構築が、トゥグルク朝時代に入つてはじめて試みられ、水門の開閉装置の新しいメカニズムの設定によつて、貯水、排水の増減調節と、水の動きをコントロールする方法が、現實に、デリー地域において採用されたという解答を、提出したいのである。そして、私は、そうした試みの最初の、大規模な實驗的な例が、Tughluqābād 大城砦南方の地形環境を巧みに利用し、城砦南城壁と、新たに設けた堰堤、水門とを組合せた大水利計畫の構想であつたと考えるのである。従つて、私は、この Tughluqābād 大城城砦都市建設に際して、あるいはその直後に計畫され、實際に施工されたところのこの水利計畫事業を、デリーの水利政策、および水利施設建築の構想と技術との歴史的展開の上で、大きく評價したいと思うものである。

ついで、Sultān Muḥammad bin Tughluq による Jahānpanāh 建設の計畫と、その南壁を中心とする水利構想、および、その重要な一部門としての

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

Satpulah 大水門の建設の意義をも、私は高く評価したい。これらは、結果においては、城砦建造と堰堤構築の計画との結合関係を示す好例であるといえよう。ただし、Tughluqābad の城壁と堰堤と、Jahānpanāh 南壁の両者の機能には、それぞれ異なる点が認められることは、それぞれの地形と建設目的のちがいかからして、むしろ當然のことといえよう。

これらの、トゥグルク朝における堰堤水門構築の構想と技術の数々の実験の上にたつて、はじめて、Fīrūz Shāh 時代における堰堤水門の建造が、北インド各地で相ついで行われるようになり、その建設目的も、かなり多岐にわたるものとなつていつたと考えていいであろう。Fīrūz 時代の堰堤の規模は、概していうならば、それほど大きなものではない。諸遺跡の現状からもある程度推測されるように、トゥグルク朝前期の堰堤計画にくらべると、その構築の規模や、水利の構想や地域的範囲は、むしろ小じんまりしてきている感じさえする。しかし、それらは、城砦都市や城壁の問題とは全く切り離され、任意の地形と堰堤とを選んで、全く独立した小規模の水利計画をもつて、各地に、同時に、分散構築されたのである。そこに、トゥグルク朝後期の堰堤、水門構築の時代的特徴をみてとることができるように、私には思えるのである。とくに注目されるのは、そうした堰堤、水門のあるものには、その建設の目的として、あきらかに、純然たる農業生産力の発展のみを指向していると考えられるものがあるということである。また、多くの遺跡の現状は、それらの堰堤水門が、多くの目的を同時にもつていたばかりでなく、それぞれの地形に應じて、それぞれがとくにねらいとする目的をもつていたということを示しているのである。このことは、もはや、堰堤や水門が、さまざまな機能によつて、さまざまな多目的に奉仕するというのではなく、むしろ、堰堤水門の構築が、現実的に、支配層の政策や農民の生活に密着したものとして、デリー地域に根を下したということにほかならない。私には、こうした変化のうちにこそ、トゥグルク朝後期の、これら水利建造物の構築における歴史的意味の一端をみてとれるように思

えるのである。

さて、以上に述べてきたような、堰堤、水門などの水利施設の構築におけるトゥグルク朝時代の歴史的位置づけの背後には、やはり、その水利計畫と水利施設構築の構想と技術における創造性についての疑問がのこると思う。すなわち、それらは、どこまで、この時代独自のユニークなものであるのか、あるいは、それ以前に、デリー、またはインドのいずれかの地域において、すでに實現されていた構想、技術なのか、あるいは、インド域外の地において、すでに、それらの原型は歴史にあらわれていたもので、それがデリー地域になんらかの事情と経路とにより、傳播影響したもののなのか。このような問題が、つぎには、とりあげられる必要があろう。ただ、そうなると、ことは容易ならぬ難問である。この点でまず私の関心を直接ひくのは、さきにふれた Anangpur 部落附近にのこつているところの、ヒンドゥー=デリー時代のものとされている堰堤および水門の遺構のことである。もしトゥグルク朝の補修のあともなく、あきらかに、ムスリム=デリー以前の構築のままであるとすれば、どういふ点がトゥグルク朝時代の堰堤、水門の構造およびメカニズムと似ているのか、あるいは全く異なつた構造をもつものなのか。そうした疑問をふまえた上で、つぎには、Anangpur 附近の堰堤および水門施設建造を實現させた水利計畫とその構想とが、トゥグルク朝時代のそれとどこが同じで、どこが異なつているか、というような問題が、慎重に検討される必要があると思う。これによつて、トゥグルク朝時代の水利計畫の構想および技術が、この Anangpur ダム計畫のそれにどこまでつながつているのかもわかるのではあるまいか。しかし、本稿に關する限り、私自身が問題の遺跡をみていないし、またトゥグルク朝時代の水門のくわしい構造や技術上の問題点についても調査團の報告書の結果をまつ必要があるので、これらの点についての考察は、別の機會をまたなければならぬ。(この點に關連して、最近、問題の遺跡を、自らみてこられた山本達郎團長による、本稿末尾の「追記」を参照されたい。)

3. トッグルク朝前期における城砦構築と多目的水利計画について

さて、トッグルク朝時代の堰堤や水門は、いつたい、どのような目的をもつて建設されたのであろうか。この問題については、本稿でも、すでに、関係個所では若干の私見を述べてきたが、ここに、まとめて、考察を加えてみたい。ただし、この節では、トッグルク朝前期の場合のみをとりあげ、Tughluqābād と Jahānpanāh にわけて考察したい。トッグルク朝後期の Fīrūz Shāh 時代の問題については、のちに第5節において述べることにする。また、Jahānpanāh についても、とくに、Muḥammad Shāh 時代における農業政策に関する問題点については、それを裏づける文献上の史料の紹介とあわせて、次節において、別個に論じてみたい。

1. Tughluqābād 城南の水利計画の場合

すでに紹介した Tughluqabad 堰堤 I, および II については、私の知る限り、19世紀以降の諸著書は、さきに紹介した H. Waddington の ‘Adilābād に關する論文をのぞくと、一切、言及していない。その Waddington にしても、わずかに “bund” としてその所在を附圖のなかで大きづばに示しているのみで、彼の場合も、論文の本文では、“a number of *bunds* or dams and waterworks” と概括的に言及しているにすぎないのである。そこで、次に述べることは、一切、私見にもとづく推論であることを、あらかじめ、記しておきたい。

私は、この二つの堰堤の建設は、Tughluqābād 主城砦、および、いわゆる Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Tughluq Shāh の墓をふくむ小城砦風の墓廟の建設の前後、おそらくは、ほぼ、同時期に屬するものと考えている。そして、もし、Tughluqābād 大城市建設計画の當初から、この二つの堰堤をもふくむ大規模な構想と計画とが考慮されていたとしたら、それは、サルタナットの築城およ

び水利計画のアイディアと技術の発展の歴史の上で、相當の評価を得て然るべきであろうと思つている。

もちろん、Tughluqābād 大城市の構築計畫のなかでは、水の確保という問題が、當初から、當然、切實な關心をひいていたことであろう。現に、城内にみられるいくつかの大小の井戸や大貯水池の遺構は、このことをよく示している。そして城砦の建設にあつては、南北および東西の、平坦および岩丘狀の地形のなかでの立地條件が計算に入れられ、とくに、南部の岩盤丘陵地帯一帯からの取水には、はじめから、依存する考えが出されていたとしても、全くふしぎではない。水の確保は、都市建設、築城に缺くべからざる條件であるからである。もしそうだとすれば、Tughluqabad 堰堤 I, II によつて、南部丘陵地帯に降る雨期の水を系統的に集水し、その結果、一定の水路により、城砦南方の平坦地に導入して貯水するというアイディアも、城砦建設の當初から考えられていたほど切實な問題であつたかも知れないのである。この計畫は、實は、'Ādilābād 城砦が立つている小岩丘の存在によつてずつと容易なものとされた。というのは、この小岩丘と Tughluqābād 大城砦を堰堤でむすぶことによつて、城砦南部一帯の、西から東の方へ緩やかに傾斜している平坦地の水を抑制し、主城砦南方に、人工的に、雨期あけの水を貯え得るからである。そこに、Tughluqabad 堰堤 III が建造される根據があるわけである。水門 III、およびおそらくそれと前後してつくられたと思われる水門南方の放水路は、あきらかに、堰堤 III によつて、主城砦南方の平坦地に貯えられた水を、その水位に應じて調節し、これを抑制、あるいは排水するために設けられたものである。いいかえれば、堰堤および水門 I, II, III を構築することにより實現された主城砦南方の大規模な水利計畫は、南方平坦地における貯水を第一の目的としていたのである。そして、その貯水の程度に應じて、水を抑制、排水することが、これらの水利建設事業の第二の目的であつたのである。

こうした大構想が、大城市築城計畫の一環として當初から計畫されていたら、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

まことに、注目すべきものであるが、それが、大城市建設の事前に計畫されていたものか、あるいは、城砦建設の過程において、あるいは完工後に計畫實施されたかについては、いまとなつては、あきらかにすることは不可能であろう。この水利構想が、もし、事前計畫のなかにふくまれていたとすれば、それは、Muḥammad bin Tughluq の治世ではなくして、トゥグルク朝初代の Sulṭān Ghiyāth al-Dīn の治世のことがらとなるわけである。このあたりの問題は、結局は、決め手がないのではあるまいか。

この三つの堰堤のなかでも、堰堤 III, , 水門 III は、この水利計畫の實現にとつて必要缺くべからざる、いわば、かなめともいうべき施設であつた。堰堤および水門 I, II は、集水と取水の系統化の必要から設けられたものである。強いていえば、それなくしても、岩丘地帯の水は、城砦南部平坦地に、ともかくも集まつたと思われるからである。しかし、堰堤 III と、それに附設されるべきなんらかの水門施設は、絶対に必要なのである。この堰堤 III, とくに城砦に近い北方よりの低地、つまり水門 III のある附近の部分は、これらの水利建造物のなかでは、比較的はやく造られたものと思われる。というのは、城南の地表は東方に向つて緩やかに低下しているのであり、防衛その他のための南城壁直下の水濠の水は、もし、この附近に堰堤かそれに代る施設の存在なしには、東方に向つて絶えず流出してしまうからである。つまり、水濠は、つねに水無しに終つてしまうわけである。従つて、Tughluqābād 城砦の南城壁の完成時か、あるいは、完工後間もないころに、この堰堤 III が、‘Ādilābād 城砦の立つ小岩丘の地形を巧みに利用しつつ建設されたと考えるのは、きわめて自然であろう。水門 III やその南の放水路が、それと時期を同じくして建設されたものかどうかはよくはわからない。しかし、堰堤 III よりも水門 III の方が早いということは、まず、考えられないであろう。この堰堤 III の南部延長線が、同時に ‘Ādilābād 城砦の外壁南部分を形成していることをみると、堰堤 III 全體の建設の時期には、おそらく、‘Ādilābād の建造も實現されていたのではあ

るまいか。

‘Ādilābād 城砦については、文獻史料の面では、その建設に関する根拠は、全く、見出されないようであるが、ふつうには、Sultān Muḥammad bin Tuḡhluq が建設したというようにいわれている。その主な根拠の一つは、このスルターンが、‘Ādil という名を自ら用いていたからである。しかし、それだけでは十分な理由とはいえない。ここでは、私見をくわしく述べる餘裕はないが、この小城砦の建設者が、Ghiyāth al-Dīn か Muḥammad か、はつきりとしていないのである。思うに、この ‘Ādilābād 城砦の建造の理由の一つには、Tuḡhluqābād 主城砦や小城砦用の墓廟もふくめて、Tuḡhluqābād 城南の地一帯の水を貯えた景観を、離宮的な位置において觀賞するということもあつたのではないであろうか。同時に、Tuḡhluqābād 城南の水利計畫のなかで、いわば、かなめの地位にある堰堤 III の防衛のためにも、‘Ādilābād を城砦化しておいた方が有用である。とくに、その二重壁をもつてした城砦構造は、‘Ādilābād 自體および堰堤 III の防衛のためにもつとも有力な手段として、考案されたのではあるまいか。けだし、第 I、第 II の堰堤はたとえ破壊されても、雨水は、ともかくも城南の平坦地に自然に流入してくる。しかし、第 III の堰堤が破壊されてしまえば、この平坦地の水は一撃に西方に流出して、貯水は減量、消滅してしまい、城砦防衛のための外濠は、埋められたにひとしくなるわけである。かくて、大水利計畫は、その存在理由を、完全に失うわけである。この堰堤 III の、南側の壁の部分が、かなり堅固なバステーションをもつ、立派な城砦として構築され、また堰堤それ自體のなかも、兵員を十分に配置できるだけの餘裕をもち得るほどにひろくつくり、もつて、その防衛力を強化しているのも、上に記したような、この堰堤、水門の重要性の故であろう。しかも、常時は離宮的役割をはたす‘Ādilābād 城砦をして、大城市と堰堤防衛の戦術的據點をも兼ねさせたのではないであろうか。同時に、‘Ādilābād 自體にとつても、この堰堤城壁が、その城砦の孤立化をふせぐ役割をはたしているし、城砦のための水の確保も、

デリーに現存するキルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

この堰堤によつて容易にされるという相互依存の関係も、十分に考えられるわけである。以上、とりあえず堰堤 III の機能に関連して 'Ādilābād 城砦の建設、存在理由についての私見の一端を示した次第である。そして、これらの三堰堤はもちろん、Tughlqābād 主城砦や、'Ādilābād 城砦までが、こうした大水利計画のなかで、それぞれ、なんらかの機能をもつものとして、巧みに相互関連的に考慮されている點に、とくに注目したいと思う。

さて、次に、Tughluqabad 堰堤、および水門 I, II, III について、その機能と存在理由とについて、私の推論を述べてみたい。それらは、ほぼ、次のようにまとめ得ると思う。

(a) 貯水。

傾斜地の一端をせきとめて、水を貯える必要（堰堤 III）。

(b) 排水と水量調節。

傾斜地の貯水を排出する場合の水位に應じた水量調節の必要（水門 III、およびその南側の放水路）。

(c) 集水。

丘陵地形を利用して、雨期の降水を低地に導く場合に、水流を系統的に一定の水路に従わせるように集取する必要（堰堤 I, II および水門 I, II）。

そこで、次に、この Tughluqabad 堰堤、水門群を建設した目的と思われるものについて、私見を列挙してみよう。

(a) 防衛。

城砦の城壁の直下に水濠をつくり、また雨量が多いときは、その降水をあつめて城砦南方の平坦地にひろく貯水し、敵の城壁附近を困難にする。これは、いわゆる Ghiyāth al-Dīn Tughluq の墓をふくむ小城砦風墓廟の場合にも同じである。

(b) 飲料その他の水の確保。

Tughluqābād 城砦の立地条件，城内の井戸や貯水池のあり方からして，飲料水を第一とする水の確保は，城砦都市存続の必要条件の一つであつた。平時はもちろん，戦時の飲料水源の確保は，籠城の場合も考慮してきわめて重要である。南方平坦地の貯水池化は，こうした水源として十分にその機能をはたし得ると考えられたであろう。

(c) 主城砦の偉容と權威の増大，および観光。

Tughluqābād 大城砦の南壁前面が水でおおわれることによつて，大城砦の景觀は，著しくその權威と偉容とを増すことは疑いをいれない。とくに，連絡橋 (causeway) で主城砦と結んで建てられた城砦風の墓廟の建立後は，水は，主城砦の南面の風色に缺くべからざるものとなつたにちがいない。この Tughluqābād 城砦南方の景觀は，城砦内の宮廷区域からも賞するに値するが，とくに，‘Ādilābād 城砦からの北方，北西方の景觀は，すばらしかつたと想像できる。ここに，‘Ādilābād 城砦の離宮的意義が，この水利構想のなかで，大きく浮び出てくると思う。このように，水をたたえて，景色を觀賞するのは，當時，北インドや，デカン高原その他の地方の専制君主や貴族層には，相當大きな願望であつたらしく，そのことは權力の誇示にもつながるものであつた。また，貯水池の存在によつて，綠樹を，常時，繁らせることも可能であつたし，また，鳥獸を水邊に誘引することによつて，狩獵その他の興趣の用にも役立つたものと思われる。

(d) 農耕條件の整備向上。

この場合は，まず，人工洪水による土地の生産力の改善が考えられよう。すなわち，南方平坦地に水を導き，一定期間，いわゆる人工氾濫の状態におき，その排水後の土地の生産力を高めるという考え方である。また，堰堤 I, II に，すでに述べたように，水門開閉装置が存在していたと假定するときには，それを閉じることにより，堰堤の東側岩丘地帯に雨期明けに貯水し，これを乾期に適時放水し，城南の平坦地の灌漑水として用いたこ

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡についてとも、一應は、考慮していいかも知れない。ただし、この農耕目的のための、人工洪水あるいは灌漑が行われたかどうかは、もちろん、城南平坦地が農耕に用いられていたかどうかということも前提となる。Tughluqābād の立地条件を考えると、この土地が都市の住民のための食糧生産のきわめて好適地であつたように思われる。ちなみに、現在では、この附近は、良好な耕地として利用されているようである。従つて、14世紀においても、この土地が同じような可耕地であつたことは、十分に考えられなのではあるまいか。

結局、私は、Tughluqābād 城南の水利計画にもとづいて構築された堰堤、水門の建設目的を、以上に挙げた内容を中心とする、いわば多目的なものであつたと考えるものである。もちろん、その場合でも、それらの諸目的にはおのずから緩急の事態に應じて、順序があつたにちがいない。いずれにせよ、この Tughluqābād 城南の水利計画が、以上の私の推論のように、多目的なものであるとしたら、それは、都市建設、城砦構築の歴史のなかでも、大きな意味をもつものと考えていいのではあるまいか。

2. Jahānpanāh 南壁を利用した水利計画の場合

Jahānpanāh 南壁をめぐるさまざまな問題については、私は、本稿の随所において、すでにいくつかの私見を述べてきた。それが、現實に水利計画を背景にもつていたことは、Satpulah 大水門をはじめ、他の水利諸施設の存在からも、きわめて明瞭である。この城壁 = 堰堤の機能については、私は、次の二つの場合を推定している。

- (a) Jahānpanāh 南壁は、当初は、城壁としてのみ構築されたものであるが、その後、堰堤としての機能をもつように改築され、水門などの水利施設が設けられた。
- (b) 建設当初から、城壁としての本来の機能のほかに、あわせて同時に、

水利施設としての機能も考えられていた。

この二つの推論の差は、實は、Jahānpanāh の建設と同時に、この堰堤に水門などの水利施設が設けられていたかどうか、つまり、より具體的には、例えば、現存の Satpulah か、あるいはそれに代るべきなんらかの水門施設が、この城壁のどこかに構築されていたかどうかという問題に関連するわけである。そして、上述の (a) の推論に従う場合には、Satpulah 大水門は、城壁よりは後代の建設、つまり、すでにできていた城壁の一部をこわして、そのあとに、水門として造られたと考えるのが至當であろう。しかし、(b) をとる場合には、Jahānpanāh 南壁の建設と同時に、Satpulah がつくられた可能性も考えられるということがいえそうである。

いずれにせよ、Satpulah 大水門は、少くとも現状からみると、あきらかにトゥグルク朝時代の構造、様式上の特徴を示している建造物である。すでに私も、文獻史料と関連してふれておいたように、この水門が Muḥammad Shāh か Firūz Shāh か、いずれの治世の造営かは、なかなか決め得ないとしても、それがトゥグルク朝時代の建造であることだけは推定できるところである。とすれば、Muḥammad Shāh の治世の造営と考えてほぼ誤まりない Jahānpanāh 城市の南壁が、同じトゥグルク朝時代に、水利建造物として利用されたことだけは、(a)、(b) いずれの推論をとるにせよ、疑いをいれないところといえよう。そして、私は、この Jahānpanāh の場合も、附近の地形を十分に考慮に入れた上での、相當大規模な構想と計畫によるところの多目的堰堤の機能をもつものとして、建設あるいは改築されたものであるという推論を主張したい。

Jahānpanāh 南壁附近の地形の現状をひろく概観してみると、その南方一帯の地形は、ほぼ、次のようである。すなわち、城壁の北側では、Satpulah を中心として、Khirki 部落の東端から大水門の東方に及ぶ約數百メートルの間に、やや平坦な低地がある。そして、Satpulah 北々東にあたつて、Chiragh Delhi 部落の圍壁の西壁に沿つて北上する凹地が、Satpulah のすぐ北側から

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

低い谷状の地形をつくつて北方につづいているのである。この凹地は、北方の Sirī 舊城砦の東側下方を、地溝を深めつつ北上し、ジャムナー＝キャナルに連なつていくのである。この水流が、かつて、Ziyā'i Baranī に言及された Āb-i Sirī にあたるものかも知れないという私見については、すでに前章に記しておいたところである。

一方、Satpulah を中心として、南壁南側一帯の地形は概して平坦である。そして、クトップ地域の Rāi Pithaurā 城砦南方および東南方の地域を西端とし、Tughluqabad に近く、その西北方に連なる丘陵地帯を東端とし、さらに、現在の Qutb-Badarpur (クトップーバダルプル) 道路の南側はるかにひろがつている緩やかな岩丘地帯を南の境とする平坦地ができあがるのである。現在、この地域一帯は、デリー南郊の重要な農耕地帯に数えられている。そして、水の動きを考えてみると、西、東、南方からの雨水は、Satpulah の方向に向つてくるというのが、現状の地形から容易に推測できるところである。このことは、ふるい地図を参照してみても、確認されるところである。例えば、1860年、1870年代の Archaeological Survey of India に提出したところの A. Cunningham および J. D. Beglar の附圖によると、Jahānpanāh 南方の平坦地における水流は、クトップ地域南方、東南方や、Tughluqabad 地域西北、西方の丘陵地帯、あるいは、Qutb-Badarpur Road 南方から、Hauz Rani 部落、あるいは Satpulah の地域にかけて、流れてきている。その水流は、Satpulah を通つて北上するか、あるいは、Jahānpanāh 南壁を東方に沿つて流れ、城砦の東南角を廻つて東壁沿いに北上していることが、よくうかがわれるのである (26 ページ、挿圖 5 を参照)。

以上に述べたような地形の現状と、それをよく示している舊水系の動きから推測すれば、Jahānpanāh 南城壁の存在は、その北側の低平地と、南方一帯の平坦地とを切斷し、後者の地帯、とくに Satpulah 附近の南側の地一帯に貯水することの可能性をよく示しているのである。そこで、Satpulah もふくめて、

この水利建造物の機能について、次に述べたい。ただ、その前に、Jahānpānāh 南壁にかつて存在したと思われる城門に關連する問題について、私見を述べておく必要があると思う。

まず、第一の問題は、すでに考察したように、この南壁は未完成であるらしいが、一定間隔をおいて設けられた半圓型のバスティオンをもつていたらしいということである。そして、第二の疑問は、堰堤であるならば、なに故に城門をもつていたのであろうかという問題である。この第一のバスティオンの問題は簡単である。すなわち、この南壁は、たとえ未完成に終つたとしても、ともかく防衛を主な目的の一つとして構築されたが故に、バスティオンを設けたのである。これは、當初からそのような計畫だつたのであろう。堰堤であるからバスティオンをもつてはいけないという理由は、ひとつもないのである。

つぎに、第二の城門の問題の方は、たしかに、やや奇妙な感じがする。堰堤であれば城門は必要としないばかりか、城門の存在は、かえつて、水のはけ口をそれだけでもつことになるわけであり、これに對する配慮が、どうしても必要になつてくるからである。雨期の最中、あるいは雨期あけの時期には、なおさらである。すでに紹介したように、Timūr 關係の二つの文獻やその他があきらかにしているように、Jahānpānāh 南壁にいくつかの城門があつたらしいことは、文獻上から十分推定できるのである。そればかりか、文獻の示すところに従えば、これらの城門は、トゥグルク朝末期においても使用されていたらしいのである。この點は、堰堤プラス水門という水利施設としての機能とどういふふうりに兩立しているのであろうか。これらの疑問に對しては、私は、以下、三つの推論を記してみたいと思う。

(a) 城門は、堰堤としての機能を考える場合、たしかに障碍となるものであろう。そこで、雨期に際して、城壁南方の平坦地の貯水が終るまでは、城門は、その大扉を閉じ、それに土囊やその他の資材を用いて、密閉し、水が城門内に洩れないように、防水工作が講じられたと考えるのである。すで

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

に述べたように、堰堤の遺跡の一部にみられる城門趾の如き遺構は、二重の入口を曲路によつて連絡していたようにも見受けられるのである。もし私の観察の記憶が正しければ、こうした構造は、門の密閉による防水を容易にするものといえよう。もともと、城門の密閉は戦闘中の防衛には絶対必要であるから、若干の補強手段を講ずれば、一定期間の水の抑制は、それほど難しいこととは思われない。

(b) 第二の推論の要點は、城門は、城壁南方における貯水の及ばない個所に設けられたとすることである。すなわち、すでに述べたように、南方の平坦地は、精細にレベルを調べれば、必ずしも全く平坦ではない。つまり、ある一部において、土地のレベルを若干高くしておけば、その位置に設けられた城門は、雨期に際しても直接水をまともに受けないで済むことも考えられるはずである。その場合は、なにも (a) の推論のように、城門をたくに密閉して水の漏洩を防ぐ手段を講じる必要はない。この方が (a) より、方法も容易で、しかも、現実的であろう。

(c) これは、(b) の推論をより徹底した考えである。(b) の場合は、南壁南方は全體的に水に浸されるのであるが、この推論では、城門の附近の地形は、雨期の水量が増加したときでも浸水しないようにレベルが高く、しかも、洪水時でもつねに外域と連絡できる道路が通じていたと考えるものである。ただし、貯水による防衛力の増加を考慮する場合には、こうした地形が、かえつて敵兵をして城壁城門に接近させることとなるので、防衛面で著しい缺陷をとまらう。

以上のように、私は三つの推論を考えたが、これがはたして當つているかどうかはもちろんわからない。しかし、こうした、いくつかの可能性が、城門の存在が Jahānpanāh 南壁の堰堤としての機能を決して損なわないで済むことを示していることだけはいえそうである。これらの推論は、たとえ、この南城壁が、建設の當初から堰堤として用いられたとする場合でも、あるいは、のち

になつて堰堤として改築され、水門施設が設けられたという場合を想定しても、いずれの場合にもあてはまるものである。

さて、ここで、Jahānpanāh および Satpulah の水利施設としての機能を考えてみると、ほぼ、次のように要約できると思う。

(a) 集水と貯水。

緩やかな土地の傾斜と、従来からあつた小水流を利用して、雨期の降水を城壁南方の地、とくに Satpulah 大水門の南側地域に、巧みに集め、貯水する。

(b) 排水、水量調節および抑水。

Satpulah 大水門の南方地域に集めた水を、この大水門を利用して、北方の低地に流す必要に應じて、この水道坑を閉鎖して排水を抑止し、あるいは水位に應じて排水を調節する。

以上のような機能を考えたうえで、こんどは、Jahānpanāh 南壁と Satpulah 大水門の建造の目的を考えてみると、ほぼ、次のように要約できると思う。この場合、Satpulah の建設の時期が、城壁そのものと同時代かどうかの問題が依然としてこのころが、ともかく、Jahānpanāh の南壁のみでは、堰堤として利用した場合に、排水が全く考慮の外におかれてしまうので、たとえば、現存の Satpulah そのものでないにしても、なんらかの水門施設が存在したことは、ほぼ、まちがいないところといえよう。しかし、煩をさけて、ここでは Satpulah 建設をつねに念頭において、述べておくことにする。

(a) 防衛。

いうまでもなく、問題の南壁は、Jahānpanāh 城市を圍む城壁の一部として建設されたものであり、新都市防衛がともかく第一の目的である。しかも、貯水計畫が実施された場合には、それは、城壁への敵の接近を困難にするため、防衛の機能を強化することになるわけである。

(b) 農耕条件の整備向上。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

地形を利用して集水し、城壁南方地域に貯水池を出現させ、いわゆる人工氾濫を現象させる。これは、Tughluqābād 城南の場合と同じく、農業生産力をそれによつて高める意圖をもつて計畫されたものであろう。一方、Satpulah 北方地域に對しては、適時、南方の貯水から取水することによつて、乾期における城内での灌漑に用いたことの可能性も十分に考えられよう。

- (c) 飲料水確保, Jahānpanāh 城内の飲料水確保のために、城壁南方地域に貯水し、また北方への放水によつて城内での水源確保は容易になつたであらう。
- (b) 景觀觀賞, 狩獵, その他の興趣の目的。

トゥグルク朝時代には、Tughluqābād につづいて Jahānpanāh と、城壁都市建造の大計畫がつづいて實施されたわけである。そして、この兩者の場合とも、それは單なる城砦城壁の建設に終つてはいない。私は、このトゥグルク朝時代の城壁建造に當つて、計畫の當初から、あるいはその途中から、城壁の一部を堰堤として利用し、あるいは、新たに附近に堰堤、水門を設けることによつて、多目的水利計畫が考案され、それが實施されたと推論するものである。すでに私が本稿で述べてきたことは、それらをうらづけるに十分であると考え。とくに私は、城壁の建造と水利計畫とを一體化することにおける、トゥグルク朝時代の構想と技術のユニークさは、たかく評價されて然るべきではないかと思うものである。しかも、その水利構想は、單純な目的ではなく、いわば、多目的計畫として實施されたと考えられるのである。なお、その歴史的問題點については、さらに具體的に、Muhammad Shāh の治世における Jahānpanāh 建設の場合において検討してみたい。

ただ、この節の最後に、城壁や堰堤の工事に關する一つの問題についてふれておきたい。それは城壁構築の際の多量の土と石材に關することである。そも

そも城砦、堰堤の構築の前提としての土盛りは、當然に、土を掘り出し、それを運ぶことを前提とする。従つて、平坦地においては、とくに開掘されたあとの低地の出現を豫想させるのである。この事情をよく理解しておけば、城壁の基盤となる土盛りのために必要とする土を得るために、近邊に地溝や凹地を、かえつて容易につくり出すことができるわけである。この点と関連して、Tughluqābād 大城砦内部の例をとつて推論してみると、例えば、城内の大パーオリーの建設に際して、掘り出された土と石とは、そのまま、城壁や城砦内の建造物の構築に利用されたと考えられるのである。この点、本節でとりあげた兩城砦について考えてみると次のことが推測できよう。

(a) Tughluqābād 城砦南方の地溝の土および石は、城砦南方の平坦地の地ならしの結果の土とともに、城砦城壁および堰堤 III の構築のために利用された可能性があると推測される。

(b) Jahānpanāh 南壁の土盛りに用いられた土は、城壁北方の低地と地溝の開さく、および城壁南方の一部の地ならしや水路の整備などの結果生じた土をそのまま用いた可能性がある。

こうして、城壁、堰堤をつくり出すために附近の地に凹地や地溝をつくり出し、同時に、そのつくり出された凹地をも、城壁、堰堤とともに當初の目的のために用いる、という公式が、この堰堤構築と城砦建造の間に見出された相互依存の一つの関係を示すものではないであろうか。このことは、城壁建造と水利構想との併立を可能にする一つの条件と考え得るのである。つまり、低地や地溝づくりを計畫のなかに入れて土や石を掘り出し、それを城壁の構築に利用したとすれば、それは、當初から、水利計畫を考慮に入れての城壁建造ということが考えられたということを示しているともいえるのである。こうした考え方を採る場合には、Jahānpanāh 南壁の構築は、まさに當初から、北方への排水を考え、城壁をはさんで南北の土地のレベルの差の實現とを前提とする水利計畫を、その建設當初からもつていたのではないかという推論を有利に導く

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について
のではあるまいか。

4. Muḥammad Shāh Tughluq 治世下の農業情勢と Jahānpanāh の南壁について

Tughluqābād にしろ Jahānpanāh の場合にしろ、これらの堰堤構築の目的の一つとして、私は、人為的洪水、および灌漑の結果の農業生産力の増大ということ、を、推論の一つとして提案しておいた。しかし、この推論をさらに説得的なものとするために、私は、トゥグルク朝の支配下における、デリー地域を中心とする農業事情、とくに食糧生産とその需給の特殊な状況についての歴史的背景を考察してみたい。そこで、次に、当時の文獻の一節を引用しつつ、とくに Jahānpanāh 南壁の構築をめぐる諸問題について、私の推論の一端を記しておきたい。

Muḥammad bin Tughluq は、727 A. H. (1326—27 A. D.) 年に、新しく Daulatābād (ドーラターバード) と名づけた Devagiri の地に首都を移したとされている。この際、Muḥammad 自身も、デカンの新都に赴いたことは、ほぼまちがいないらしい。その翌年、すなわち 728 A. H. (1327—28) 年には、デリーの後背地として、政治的、経済的に重要な Dūāb (ドーアープ) の地方に、騒擾事件が續発していたらしく、Sultān Muḥammad も、デカンからデリーに歸っている。その後の数年間、Muḥammad は、デリーと Daulatābād とを往復しているようである。そして、735 A. H. (1334—35) 年の末には、Muḥammad は、デリーを發つて南方に赴き、Daulatābād に到着している。しかし、この年に、デリー地方には、かなりシアリアスな飢饉がおこつたらしい。翌 736 年を Muḥammad は、Daulatābād で過し、この間、Warangal (ワーランガル) にも赴いている。こうして、Daulatābād 奠都後、デリーには飢饉が頻発していくのである。ついでに記しておくが、Muḥammad によるデカン奠都後には、デリーは、全く無人の町となつて荒廢してしまつたように説かれ、かなり、通説的なものにまでなつていたが、近年の研究の成果は、デ

リー地域が全く荒廢してしまつたというのは、あまり誇張してはいえないこと
のようである。これについては、私にも若干の意見があるが、本稿では、論旨
に直接には関係しないので、省略する。かえつて、ここにふれるところの、デ
リー地域における飢饉の發生という事實が、むしろ、住民がのこつていた事實
をうらづけているともいえよう。

このデリー地域における飢饉というのは、おそらくは、單なる自然的災害で
はなかつたかも知れない。すなわち、Daulatābād への行政府と都市人口の移
動の結果、その大きな變動の影響が、政府の従來の農業施策を全く混亂させた
ことに關係するものであろう。あるいは、尨大な消費人口がデリーを離れたこ
とにより、近隣の農村が、直接、その經濟的影響を受け、結果において、農民
層の生産意慾を低下させ、農村の疲弊を導き、それらが、自然的な悪條件と相
まつて飢饉を結果したと考えることも正しいのではあるまいか。しかし、本稿
でも指摘するように、のちに、Muḥammad が水利振興による農業生産の向上
という點をとくに考慮していることからみて、自然的悪條件のなかでもつとも
大きな原因の一つは、デリー地域における雨期の寡雨による乾ばつであり、政
府の移動によつて、それに対する對策が、全くとられなかつたという事情があ
つたのではあるまいか。

このようなデリー地域の經濟的、社會的状況の逼迫するなかを、737 A. H.
(1336—37) 年の間の、1337年7月に、Muḥammad は、デリーに歸つている。
この年にも、デリー地域では、相當な飢饉がおこつたようである。デリーで、
Suḷṭān Muḥammad は、これに對處する方策を考えたい。このあたりの
事情を、734 A. H. (1333—34) 年にトゥグルク朝に仕えはじめた Ziyā'ī Ba-
rani の記すところに聞いてみよう。⁽⁸⁷⁾ここでは、まず、關連部分のペルシア語
原文を、Bibliotheca Indica テキストから引用しておく。

サルタナット時代の宮廷史家の権力におもねる曲筆は、すでに著名なことが
らである(前述 103 ページ参照)。しかし、次に引用する Barani の Tārīkh-i

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

Firūz Shāhī の記述、および、のちに本節で引用する文章の場合のように、デリー地域の飢饉と農業事情の逼迫したことについて記している内容は、ことからの性質からみても、他のさまざまな歴史的背景と照合してみても、この歴史家による曲筆の可能性は、かなり少ないと考えていいと思う。そこで、まず、Baranī の文章を引用し、つづいてその内容を英訳してみると、ほぼ、次のようになると思う。

چون سلطان محمد دید که هیچ نوعی تنگه غله و علف در شهر خلاص
نمیشود و بهیچ طریقی بی نزول باران زراعت کردن ممکن نمیکرد و روز بروز
خلق شهر در مانده ترمی شوند فرمان داد تا دروازه‌ها و انگهای خلق
شهر را در رفتن جانب هندوستان و بردن زن و بچه آن طرف مانع نشود
و بگذارد تا خلق جانب هندوستان بروند و چند گهی از قحط خلاص بیابند
و در آن دیار خود را و فرزندان خود را بگردانند و بیشتری خلق از
واسطه تنگی غله جانب هندوستان رخ آورده بودند و زن و بچه را در آن
دیار روده

“When Sultān Muḥammad observed that there was no chance of relief from the scarcity of grain and fodder [*ghallah wa ‘alaf*] in the city [*shahr*] and that there was no way to make cultivation [*zira‘at*] possible unless the rains fell [*bi nuzūl-i bārān*], and that the people of the city [*khalq-i shahr*] were becoming more distressed day by day, he ordered that the doors and walls [*dar-wāzahā wa alanghā*] should not prevent the people of the city from going towards Hindūstān taking their women and children thither with them, The people were allowed to go towards Hindūstān and stay there for some time to be freed from the famine, and to take care of themselves and their children in those regions.

A great many of inhabitants, owing to the scarcity of grain, moved towards Hindūstān and took their wives and children to those regions.”

この記述の内容をみると、ほぼ、次のようなことがいえそうである。

- (a) 穀物と馬糧の入手が、デリー地域において、著しく困難となり、飢饉がおこつた。
- (b) その主な原因は雨が少ないことであり、雨が降らない限り、耕作は不可能となり、デリーの住民の救済も難かしい。
- (c) 首都デリーの住民が食糧事情の逼迫を理由に、妻子、家族とともに城外に疎開することも、スルターンの命令で許され、門や城壁も開放された。
- (d) 多くの住民が、そのため、「ヒンドースターン」へ疎開した。(なお、ここで Hindūstān というのは、ガンジス中流域をいうものとみてさしつかえないであろう。)

このようなデリーにおける農業食糧危機は、ついに、Muḥammad bin Tu-ghluq をふくむトゥグルク朝の支配層をも、一時、デリーから疎開させるまでに、情勢は逼迫したのである。その結果が、Sarag Dwārī (サラグ=ドゥワリー) とよばれた、いわば臨時の行在所への奠都であつた。このことについて、ふたたび、Baranī の記述を、英譯でだけ、紹介しておこう。⁽⁸⁸⁾

“.....Sulṭān Muḥammad also came out of Dihlī, and passing through Paṭiyālī and Kampilah, he gave an order to encamp beyond the village [*qasbah*] of Khūd on the bank of the Ganges [*Gang*], where he ordered to stay with the army, and the men built thatched huts [*chhappar*] and they made residence there. And, that village [*māza'*] was named Sarag-dwārī, and grains were sent thither from Kaṛah and Awadh, the price becoming cheaper in comparison with the city (of Dihlī).....”

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

以上に引用した Baranī の記述から、ほぼ、次のようなことがいえるのではないかと思う。すなわち Muḥammad bin Tughhluq は、Patiali と Kambila とを経て、ガンジス河畔の Khud 部落の近邊に滞在した。その地には、新しい町がつくれ、それは、Sarag Dwārī と名づけられた⁽⁸⁹⁾。そして、Kara および Oudh の地方、つまりガンジス中流域の穀倉地帯から、穀物が、この新しい町に送られてくるようになったのである。

Wolseley Haig は、このスルターンの Sarag Dwārī への臨時奠都を、737 A. H. (1336—37) 年のこととしている。そして、この人口移動と食糧疎開の結果、いくらか事情が緩和してのち、彼が、ふたたびデリーへ歸還した年を 740 A. H. (1339—40) 年として⁽⁹⁰⁾いる。この、數年間に及ぶデリーからのトゥグルク朝支配層と一般人口の疎開移住の事實は、さまざまな問題をふくんでいて興味深いできごとである。要するに、大きな原因は、首都周邊やドーアープ地方の食糧事情逼迫のための、一時的な緩和策とみていいであろう。その背後には、Daulatabād への人口移動、首都行政府移住ののち、デリー地域、デリー人口を市場としていたドーアープ地域の穀物生産、流通関係の急變による事態の變化ということを考えずにはいられない。そして、乾ばつや水不足などの悪影響がこれに拍車をかけたものであろう。前掲 Baranī の記事も、そのことを、まさしく、示しているといつていいであろう。

ついでにふれておくが、みずからの宮廷もふくめての食糧疎開までやつた Muḥammad が、彼の生涯でも有名な、ヒマラヤ地方への相當冒險的な遠征を企圖し、しかもそれを實行したあげく失敗していることは、このスルターンの研究のうで興味もたれる點である。しかも、事情がかなり逼迫していた 740 A. H. 年ごろには、Lakhnawatī (ラクナワティー、すなわちベンガルの一部地方)、Gulbargā (グルバルガー) および Bidar (ビードル) の二つのデカンの地で反亂がおこっているし、また、ガンジス川中流域の要衝 Kanauj (カナウジ) でも、反亂がおこっているのである。742 A. H. 年には Multān

(ムルターン)に、743 A. H. 年には、穀倉ドーアープの地にも反亂があり、いよいよデリーに近い地域の支配までが動搖しはじめてきた。このように、Sarag Dwārī からデリーに歸つたスルターンは、各地の反亂に對處するのに忙しく、744 A. H. 年には、Sunām, Sāmāna, Kaithal, あるいは Kuhrām などの地にみずから軍をひきいている。もつとも、この間、741 A. H. 年には、アツバース領下のムスリム聖者が、西方からデリーに來ているし、744 A. H. 年には、カリフの使臣がデリーに到着し、いずれも、Sultān Muḥammad によつて手厚く迎えられるのである。やがて 746 A. H. 年には、スルターンは Gujarāt 地方に遠征する。この年から翌年にかけて、莫大な經費と勞力とを費して建設したデカンの都 Daulatābād にも、ついに反亂がおこるのである。

و در جمله بعد از آمدن سرگردواری که سلطان محمد سه چهار سال در شهر ماند و اشتغال و استغراق او نبوده است مگر در چند چیزها و از جمله امور جهانداری و جهانگیری باستغراق چند مصلحت خود را مشغول گردانید اول اشتغال سلطان محمد در چند سال که از دهلی طرفی نهضت فرموده در ازدیاد زراعت و افزونی عمارت بوده است و سلطان در ازدیاد زراعت اسلوبها اختراع میکرد هرچه در ازدیاد زراعت در تصور سلطان میگذشته و در قلم می آمد انرا اسلوب نام میشد و در معامله ازدیاد زراعت دیوانی وضع شد و آن دیوان را دیوان امیر کوهی نام کردند و عهده داران نصب شدند و سی گروه در سی گروه دایره گرد از قیاس گرفتند بشرط آنکه یک بلشت زمین در مسافت چندین گروه بی زراعت نامند

ところで、Sarag Dwārī からデリーへ歸還したのちの數年の間に、Sultān Muḥammad Shāh は、デリーを中心にして、反亂鎮壓の指揮に忙がしかつたらしい。この間、デリー地域においては、農業生産、食糧事情は、依然として

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

好轉しなかつたものと思われる。すくなくとも、この間においては、そうした食糧事情逼迫を中心とする農業問題が、各地の反亂とともに、このスルターンの政治的關心の大部分を占めたい。たとえば、前頁に引用したペルシア語の文章は Ziyā' al-Dīn Baranī にみえるこのことに關連する記述である⁽⁹¹⁾。

前頁引用の文章を英譯してみると、ほぼ、次のようになるであろう。

“After returning from Sarag-dwārī. Sulṭān Muḥammad stayed in the capital for three or four years, and was not occupied and absorbed in few affairs, and, of all the business of government and administration, certain affairs made him busy. The first business of Sulṭān Muḥammad, for some years, which did not allow him to go out anywhere from Dihli, was the promotion of cultivation [*izdi-yāt-i zirā'at*] and the development of construction work [*afzūni-i 'imārat*]. Sulṭān invented certain methods [*uṣlūbhā ikhtirā' mikard*] in the promotion of cultivation. Anything occurred in the idea of Sulṭān on the promotion of cultivation, was written down, and was called “*uṣlūb*”.....

And, in the affair of promotion of cultivation, a *diwān* was established, and they named that *diwān* “*Diwān-i Amīr-Kāi*,” and appointed officers [*'ahd-dārān*]. They adopted suppositive circles [*dātrah'-i gird*] of thirty *kruhs* long and thirty *kruhs* wide with the condition that even a single span of land, for a distance of a few *kruhs*, was not to remain without cultivation.....”

これらの記述の内容から、少くとも、次のようなことがらが指摘できると思う。

(a) Muḥammad みずから、事態の逼迫したことを考慮して、デリーにとどまり、食糧増産と、建設工事とに従事した。

- (b) 農業の振興のために新しい方法を用い、そのために、スルターンがよしと採用したことがらは、すぐに実行に移したらしい。⁽⁹²⁾
- (c) 農業振興のための部局 *dīwān* (ディーワーン) が設けられ、耕地をふやすための施策もとられた。

さて、この敘述につづいて、*Baranī* も述べているように、*Muḥammad* は、この農地擴張、品種改良その他の農業振興のために、官を任じて、耕作者に對する貸金制度も実施させたいらしい。しかし、これに関しては、重要な問題ではあるが、本稿では、省くことにする。⁽⁹³⁾

すでに、私は、トゥグルク朝初期において、*Tughluqābād* 大城砦の南方地域における水利計畫が、かなり大規模な構想のもとに実施されたのではないかという推論について詳述してきた。この *Tughluqābād* 城市の城南における、トゥグルク朝初期の経験が、雨量の少なさや乾ばつのため、ますますその被害を大きくしていきつつあつたデリー地域の食糧危機に際して、當然、新しい水利計畫の構想をもつて、別の地域においても実施されたと考えるのは、あまりにも飛躍した推察であろうか。私は、すでにくわしく私見を述べたところの *Jahānpanāh* 南壁をめぐる水利計畫は、あるいは、このような農業危機に際して、*Sulṭān Muḥammad* が採用した農業振興のための新しい方法、すなわち、“*uslūb*”の一つではなかつたかという推論を、ここに提出しておきたい。

すでに前節で *Jahānpanāh* 南壁を利用する水利計畫が、事實上は、多目的の堰堤ではないかという私見について説明しておいたが、その推論のなかで、私は、人工氾濫と灌漑という方法を用いる農業生産力の向上という目的について説明しておいた。はじめ、デリーの既存の王城を新しい城壁によつて結合した大デリーの建設を志した *Muḥammad* にとつて、これこそ、まさに地形と水の動きとを巧みに利用するところの農業振興の一つの妙案ではなかつたであろうか。さきに述べたように、*Jahānpanāh* 城壁の建立者は *Muḥammad* とわかつていても、その時期が正確にはいつのことであつたかよくはわからないし、

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

また現存の Satpulah が, Muḥammad 時代か次代の Firūz Shāh 治世の建設かについても, 決め手をもつ結論はないのである。しかし, Jahānpanāh そのものがいつの建設であろうと, それが水利施設としての堰堤の機能をもたされたことだけは明瞭なのである。しかも, この南壁の南と北側の地域は, いずれも, デリー地域の重要な農耕地帯であり, しかも, 北側は, いわば Jahānpanāh 城内である。私は, 農業生産増強のための地域的撰擇の對象としては, まことに好位置であり, しかもこの城壁の堰堤化による水利への利用は, まさに, Baranī の記している「新しき方法」にふさわしいものではあるまいか。

ただし, 私は, 現存の Satpulah 大水門の成立年代については, すでに述べたような Firūz Shāh 時代建立という推論も十分に考慮に値すると思うので, 現存する Satpulah 水門そのものの建立が, Jahānpanāh の水利計畫と同時, つまり Muḥammad 治世のものであるといい切るつもりはない。しかし, もし, Satpulah が Muḥammad によつて建設されたという推論をとる場合には, おそらく, Satpulah も, Jahānpanāh の建設と同時であると考えるのがもつとも自然ではあるまいか。従つて, 本節に記した私見に従うときには, Satpulah 建設時期も, 上述の Muḥammad の農業危機克服の期間と推察するのが自然であろう。結局, Jahānpanāh の建設が Muḥammad Shāh によるものであることは, すでにくり返し述べたところであり, その水利施設としての機能は, 本節での私の推論をとれば, ほぼ, 740 A. H. (1339—40) 年のあたりのことと推定することになるわけである。

5. Firūz Shāh 時代の堰堤, 水門建設をめぐる歴史的問題

トッグルク朝の Sulṭān Firūz Shāh の水利政策については, サルタナット時代のみならず, インド史を通じて, かなり著名なこととされている。しかし, ふつう, 歴史的な問題としてとくに重要なのは, 水利施設のなかでも, 運河であろう。事實, このスルターンのイニシアティブによる運河建設事業はよく知

られており、19世紀以降の論著にもしばしば言及されている。このFirūz Shāh 治世の運河建設は、前代の Muḥammad Shāh 以来トゥグルク朝支配層が力をいれてきたところの農業振興政策を反映して実施されたものと考えられるものである。しかし、この運河のほかに、この時代に建造された堰堤、水門などの水利施設については、歴史的問題として、ほとんどとりあげられていない。

さて、トゥグルク朝後期の史家 Shams-i Sirāj 'Afif が、みずからのパトロンである Firūz Shāh の事蹟を稱讃しているのは當然である。Tārikh-i Firūz Shāhī のなかの一章 (Qism II, Muqaddamah' 17.) は、「スルターン=フィーローズ=シャー治世の人民の幸わせと楽しさ」[(Khūshī wa khurramī-i khalāiq-i 'ahd-i Sultān Firūz Shāh)⁽⁹⁴⁾] という題のもとに記され、この君主に対する多くの讃辭に満ちている。しかし、こと運河の開さくや水利政策の具體的内容そのものに関する記事に、架空な工事や建造物の名稱を記すことは、まず、考えられない。現に、Firūz Shāh の建設と推定される運河のあとも、いまだこそ近代的施設に改められているものが多いが、北インド各地にあとづけることができるのである。私自身、デリー滞在中、デリーからパンジャブ地方にかけてこのスルターンが建造させた史料に明示されている運河やクリークについて、自動車の運轉ができないため、ほとんど現地で探査確認することができなかつたのは、きわめて遺憾に思うところである。しかし、文献史料の面だけでも、この治世の運河建設の事情は、相當に復原できるし、19世紀以來の論著にも、現存の水系に關連して、この點を考證しているものもあるのである。

これらの運河を主とする、Firūz Shāh 治世における建設事業については、サルタナットおよびムガル帝國時代の農業問題の研究に大きな貢獻をしてきた W. H. Moreland も、簡單ではあるがすでに指摘しているように、耕地の擴張と品種改良を主とした農業振興政策に關連するところがあつた點が重要であると思う。運河構築による水系の擴散は、Firūz Shāh によつて新しく建設された諸都市への水の供給という目的もあつたが、同時に、運河開さくによる水

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

利政策が、農村地域をも対象としていたことが、とくに注目されるのである。⁽⁹⁵⁾ しかも、これらのトゥグルク朝時代の運河は、近代に建設された運河と異なつて、その機能が、かなり幼稚なものであつたであろうと、W. H. Moreland が、指摘していることは、本稿の視點に立つとき、とくに共感する點である。このイギリス人學者は、當時の運河は、現在のパンジャブ地方にみられるような精緻な灌漑水系をつくりあげるようなしくみで、河川の水を農耕地域に系統的に配水したのではなくして、むしろ、それは、雨期の雨を利用して、農耕地域に人工氾濫をおこさせるための有力な手段というふうに考えるべきであると、述べているのである。⁽⁹⁶⁾ この人工氾濫が、インドの農村において、現在でも必要とされていることは、今日、雨期あけにインド農村の上空を飛行機で飛ばせば、ただちに感得できるところでもある。そして、サルタナット時代にも同じであつたことは、すでに本稿でも、隨所に説いてきたところである。最近では、ムスリム支配下の農業問題にすぐれた業績を公けにしている Irfan Habib も、ムガル時代におけるこの問題について、簡単ながらふれている。彼が、運河ならずとも、自然地形にみえる水系が、雨期に耕地に水を導入する、氾濫のためのも一種の水脈の如きものを自然につくりあげていたという説明を述べているのは、私には、まつたく同感である。⁽⁹⁷⁾ 本稿で問題としている Firūz Shāh 時代の耕地における人工氾濫が、當時の支配層によつて、いかにつよく望まれていたかということは、現に、Shams-i Sirāj 'Afif の Tārīkh-i Firūz Shāhī のなかの一文が、よく示していると思うので、その一部分を、次に引用しておこう。⁽⁹⁸⁾

これは、英譯すれば下記のようになる。なお、Bibliotheca Indica テキストの文章には、私も一部註記しておいたように、若干の疑問點もあるが、大意に關係ないので、いまは、あまり問題にしない。人工氾濫が、一部の農村地域において望ましいこと、また、Sultān Firūz Shāh の政府が、官を派してまで、耕作地における水の氾濫の擴散の程度に、大きな關心をよせていたことが、次の記事によつて、まことによくわかるのである。

چون ایام برشکال در آمدی و بارانها بکمال باریدی از پیش تخت فیروزشاهی بعضی ملوک مخصوص تعیین میشدند تا ایشان در کرانهای هر یک جو بگردند و اخبار بیارند که آب سیلاب از کجا تا کجا رسیده بارها درین کردارها پدر و اودر این مورخ از پیش سلطان فیروزشاه برای این اخبار تعیین میشدند تا ایشان در کرانهای هر یک جو بگردند القصة چون حضرت فیروزشاه شنیدی که آب سیلاب جویها جهان تا جهان گرفت و از مغرب تا مشرق رفت بغایت خوش گشتی و در جامه ننگجیدی و اگر میادا دیهی از قریات املاک خراب گشتی حضرت فیروزشاه چون خسروان صاحب کلاه بااچ جاه بران عهدند داران تغیر بسختی کردی

“When the rainy season [*aiyām-i barshakar*] came on, and the rains [*barānhā*] were at their height, certain special officers [*mulūk*] were appointed by the throne of Firūz Shāh, so that they could examine the banks [*karānhā*] of every river [*jā*]. They brought the information telling how far the water of inundation [*sailāb*] reached. The father and the paternal uncle [*audir*] of this chronicler were often appointed for this information by Sulṭān Firūz Shāh to examine the banks of every river. On the whole, when Ḥaẓrat Firūz Shāh heard that the water of inundation of the rivers extended from such place to such and went from west to east, he was extremely pleased and satisfied. And, if, let it not be, any peasant [*dihī*] from the villages of the king’s lands [*quriyāt-i amulāk*] was ruined, Ḥaẓrat Firūz Shāh, the great king and the possessor of sovereignty, highest in dignity, removed^(*) the officers [*‘ahd-dārān*] with strictness.”

この時代の支配層は、雨期の降雨を利用して、運河を建設することによつて

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

生じさせ得た農地における氾濫が、いかに農業生産物の増産にとって有効であるかを十分に知り、それを、食糧確保、地稅徴収という最重要な問題とむすびつく農業政策に、巧みに利用していたと考えられるのである。本稿でしばしばふれたところの、堰堤の建設による貯水、人工氾濫の企圖も、まさに、このようなトゥグルク朝後期の權力による農業政策を背景に理解すべきであろう。

ところで、Firūz Shāh 時代の堰堤、水門の建設の、他の歴史的背景として、このスルターンの治世には、建築が、一般に、支配層のあいだに盛行したという事実を考えていいのではないかと、私は思う。このスルターンの建設事業は、とくに、この時代における新しい地方都市の建設ということに、まことによくあらわれているが、デリーにおける新都市、およびデリー地域における諸種の建造物の構築という点からみると、歴代のデリーのスルターンのなかでも、まことに目立っている。Shams-i Sirāj ‘Afif が、デリーの王座についたいかなる Bādshāh や他國の支配者とくらべても、Firūz Shāh ほど、建築に熱意を示した支配者は珍しいということ⁽⁹⁹⁾を述べる時、それは、あながち、自らのパトロンであつたスルターンに對する、單なる讚辭とばかりはいえないものを、今日のデリー地域の遺跡の現状に照して、つよく感じるのは、私ばかりではあるまい。このような、Firūz Shāh 時代における、支配層を中心とする建設事業に對するつよい關心と、いわば、一種の建設ブームともいふべき風潮が、堰堤および水門などの建造にも、あきらかに反映しているとみていいのではあるまいか。

なお、以上の問題に關連して、つぎに記しておきたいことがある。それは、水利施設といつても、井戸やパーオリーの場合には、一部の宮廷内部のもの^{のぞくと}、Firūz Shāh 時代に屬すると思われる遺跡は、デリー地域においては少ないという事實である。これについてのくわしいことは、いずれ、別稿で、私見を述べたいが、諸種の建造物の遺跡が比較的多い Firūz Shāh 時代の一般的傾向のなかでちよつと興味をひかれる點である。いま、簡単に、私見の一端

を記せば、次のようにいえると思う。すなわち、水利政策に力を入れることが、トゥグルク朝支配層の農業生産増大のための施策としてはつきり打ち出されたのであるが、こうした支配層の政策遂行のために、水利建設事業は、かえつて具體的には、権力が主體となつて行なつた大規模な建設事業として集中的に實施され、その結果は、運河や堰堤などの大工事が目立つて行なわれ、Muhammad 治世のデリー農村の疲弊の影響もあつて、井戸施設などの小規模な水利建設事業については等閑に附されたという事情が、あるいは、考えられるのではあるまいか。権力の政策との直接のむすびつきというよりは、むしろ村落の農民と直結している井戸は、前代に設けられた既存のものにそのまま依存していたのかも知れないし、また有効期間のみじかい単純なものによつて済まされていたがゆえに今日まで残っていないということもあるかも知れない。さらに、また、運河の開さくや水路の開発が進むと、その建設工事の影響をうけて、一部の関連地域では井戸が涸れたり、あるいは地下水系の水位が低下するという事実が、ずつと後代になつて北インドでもみられたということなどから推してみると、上に述べたことも、そうした事情と關係あるかも知れない。そして、堰堤や水門の建設によつて、降雨を系統的に集水、導水し、これを人爲的に貯水し、あるいは人工的に氾濫に導くということも、その地域の地下の水系になんらかの影響を及ぼし、それが井戸の利用の實情に影響を及ぼしたことがあるかも知れない。そうしたことの背景には、トゥグルク朝時代の前期には、デリーからの奠都やその他の歴史的イベントのために、デリーおよびドーアープ地方の農村の荒廢がみられ、それに關連ある反亂もおこつた。このことが、既存の農村地域の水利施設にも、さまざまな面で相當の影響を與えたということも考慮にいれる必要があると思う。ただ、井戸やバーオリーなどの小規模な水利施設の場合には、その建設目的や地域性についての特殊の問題があるので、一概に早急な結論は出しにくい。従つて、これについては、別稿において私見を述べることとしたい。

ここで、Firūz Shāh 時代の堰堤、水門の建設の目的とそれらの建造物の機能とについて、まとめて私見を述べてみたい。このことは、さきにも述べたように、だれが建設者であるかという問題にも関連することである。

はじめに、これらの建造物の設立目的の一つと考えられる、狩獵ということについて、いささか、私見を述べておく必要があると思う。インドのような地では、ふるくから、狩獵は、支配層にとつて、主要な趣味であり、競技でもあつた。この狩獵は、ヒンドゥー、ムスリム社會を問わず行なわれていた。サルタナット時代においても、デリーの支配者たちは *shikār* (狩獵) を重んじ、それを楽しんだ。ところで、アヒンサーの觀念が浸透していて、肉食人口の多かつたインドでは、鳥獸は、各地に多くみられるけれども、狩獵の好条件の一つは、水邊の地帯ということであつたらしい。つまり、水を求めて池や川流のほとりに集まつてくる動物は、狩獵愛好者には、かつこうな獲物だつたのである。地形条件を考えた上、堰堤を設けて人爲的に貯水池をつくり出し、狩獵の好条件をつくり出すということに、當時の支配層が努力を拂つたのは、むしろ、當然のことといえよう。

こうした狩獵地は、歴代のスルターンや皇帝によつて、デリー周邊の各地に設けられていたらしいが、サルタナット時代において Sultān Firūz Shāh が示した *shikār* に對する熱意は、とりわけ、目立つものがあつたようである。Shams-i Sirāj 'Afif も、その Tārīkh-i Firūz Shāhī の一章を、そのことに割り、Qism IV, Muqaddamah' 10 を、“Dar bayān-i *shikār*hāi-i Firūz Shāhī”⁽¹⁰¹⁾、すなわち「Firūz Shāh の狩獵についての説明」という見出しのもとに、このスルターンの狩獵趣味をめぐつてさまざまなことについて記しているのである。また、Ziyā'i Baranī も、このスルターンの狩獵について、興味ある記述をのこしている。すなわち、Baranī にいわせると、サルタナットのスルターンのなかで、Sultān Shams al-Dīn Iltmish, Sultān Ghiyāth al-Dīn Bal-

ban, および Sultān ‘Alā’ al-Dīn Khaljī の三人は、とくに狩獵を愛好したという。しかし、彼らの獵の対象となつたのは鳥 [*pl. tūyār*] のみであつて、しかもその時期は、冬期の4カ月に限られていたという。さらに、トゥグルク朝の Sultān Firūz Shāh のことに説き及んで、Baranī は、次のように述べているのである。⁽¹⁰²⁾

“However, those Bādshāhs <Sultān Shams al-Dīn, Sultān Ghiyāth al-Dīn Balban, and Sultān ‘Alā’ al-Dīn Khaljī> hunted only birds [*tūyār*] in the four months of winter [*dar chahār mäh-i zamistān*]But, the person who hunts lions [*sibā’*], wild beasts [*āhāsh*] as well as birds [*tūyār*], and who cannot remain without hunting all through the twelve months, is Sultān-i ‘Alam-i Panāh, Firūz Shāh.”

Baranī のこの記述から、Firūz Tughluq が、とくに狩りを好んでいたことがまことによくわかるようである。その獲物としての対象にも、ライオン [*sibā’, pl.*] をはじめ、ひろく野獸類 [*āhāsh, pl.*] までも含まれるようになり、また、狩獵期間もずつと擴大されて、一年を通じて行われたらしいことがわかるのである。

以上に紹介したような、Firūz Shāh 時代における狩獵の盛行の事實から、私は、一部の著書がすでにふれているように、この時代における堰堤建設の一つの目的に、サルタナット支配層による狩獵ということを推定したいのである。すでに本稿で紹介した堰堤のなかでも、Station Road 堰堤 (I—2), Būli Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤 (I—3), 故ネルー首相公邸庭内堰堤 (I—5), および Malcha 堰堤 (II—2) などは、いずれも、デリーのリッジの地帯にあり、その附近は、いわばジャングルとよばれるにふさわしい荒れた岩盤地帯に灌木の繁茂している環境で、概して耕作には不適のようである。そして、現在でさえも、鳥や獸類がひそんでいそうな環境である。しかも、その堰堤の一部、あるいはその附近には、いずれも、かなり立派な建物がのこつていたのであつて、

ザリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

それらは、いずれも、地方的には、“Maḥal” すなわち宮殿、あるいは“Shikārgāh”つまり「お狩り場」などとよばれてきているのである。それらは、狩獵を楽しむ支配層とその側近の人びとの休憩や宿泊のため、あるいは小規模の軍兵駐屯のための、いわば、離宮的な役割を果す建造物であつたと考えていいであろう。また、Station Road 堰堤のある地域は、Delhi Monuments List によれば、當時は、“Band-Shikar” という地名でよばれていたことも推定されるのである。そして、この堰堤の附近の、あきらかに Firūz Shāh 時代に属すると思われる建物の廢墟を、同報告書は“Shikargah” と考えたと述べているのである。また、Syed Ahmad Khan も、Āthār al-Ṣanādīd の初稿本では、Satpulah 建設の目的を、shikargāh をつくるためという傳承について説明している（前述 85 ページ参照）。事實はともかく、堰堤の建設が、狩獵と結びつけられて伝えられてきた點は、注目していいであろう。

以上、堰堤建設と狩獵との關連について述べてきたが、もちろん、それは、堰堤、水門などの構築の一つの動機にしかすぎないものである。そして、歴史的見地からすれば、もつとも興味をひかれるのは、ときの支配權力による農業政策の一環としての水利政策の面における堰堤、水門の建設であろう。

農業、水利政策のための建設事業の典型的なものとしては、Firūz Shāh 時代の建造と考えられる、Mahipalpur 堰堤 (I-1) をあげ得るであろう。この堰堤は、その兩翼に設けられた簡単な水門施設によつて、附近の地形の起伏傾斜の狀況を巧みに利用しつつ、人工氾濫と灌漑とによる農業生産力の上昇を企圖したものと考えられるのである。トゥグルク朝前期の堰堤が、城砦建築と密接に關連していたのに対して、トゥグルク朝後期のそれは、ずつと規模は小さくなつてはいるが、地形をたくみに選んだ上で、それぞれ獨立した目的をもつてつくられている點が注目されるのである。いいかえれば、堰堤、水門が、水利建造物として農村地域に定着し、はつきりとその存在理由を主張しはじめたともいえようか。そして、その機能や建設目的にも、新しいものがみられるよ

うである。例えば、Wazirabad 南方堰堤 (II--1) は、あきらかに、ジャムナー川の河水との関連を考えて構築されたものであろう。

要するに、Firūz Shāh 時代における堰堤および水門の建設は、次のような機能をもつものとして考えることができよう。

- (1) 地形を慎重に考慮しつつ、人工構築により、あるいは自然地形そのものを利用することによつて、堰堤を建造し、系統的に集水し、水をせきとめる。
- (2) 堰堤とその周辺の地形とにより、雨期の降水を、堰堤の片側一帯に貯水する。
- (3) 堰堤に附設された水門施設により、貯水された水を別方向に排水することを可能とさせ、時に應じて、水量を調節し、また、排水を抑止する。そして、これら堰堤、水門の建造の目的は、ほぼ、次のように考えられよう。

- (1) 過度の氾濫による河川の逆流の防止。
- (2) 貯水、人工氾濫による農業生産力の増大。
- (3) 貯水を、適時、排水しつつ行なうところの灌漑。
- (4) 飲料水の確保。
- (5) 狩獵の条件と環境の整備。
- (6) 避暑、および景観の観賞。

さて、最後に、本稿で紹介してきたトゥグルク朝前期の諸堰堤は、あきらかに支配権力による建造であるが、Firūz Shāh 時代のもので推定される堰堤および水門は、いつたい、だれによつて建造されたものかと考えるべきか、という問題がある。さきに紹介した Shams-i Sirāj 'Afif の Tārīkh-i Firūz Shāhī の記述をみれば (128~129ページ)、本稿でとりあげた堰堤の一部が、少なくとも、Firūz Shāh、あるいはサルタナット支配層の命令によつて建造されたものであることは、ほぼ疑いをいれない。また、狩獵がこれらの堰堤建設の一つの動機であつたとすれば、一部の堰堤の建設が、その近傍の建造物とともに、ス

チリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

ルターン、あるいは支配層によるものであることは、これまたあきらかであろう。事実、本稿で述べた堰堤の一部は、一般の民衆の生活にとつてはおそらくは無関係と思われる地域と環境に設けられているのであり、それらは、いずれも、支配層の狩獵、避暑、観光のための環境の整備ということを主な目的としたものにちがいない。例えば、Būlī Bhatiyārī kā Maḥal 堰堤の如きは、その小城砦風の Maḥal 自體、少数の軍兵の駐營にも適している構造をもっており、この種の施設としては、大規模なものと考えていい。従つて、この場合などは、あるいは、そのリッジ上の位置からして、デリー首都防衛のための監視駐屯所として、當時、兵を配置していたものかも知れない。

このように考えてみると、本稿でとりあげたトゥグルク朝時代の堰堤および水門施設は、その全部、あるいは大部分が、スルターンを頂點とするサルタナット權力そのものによつて建造されたものであると考えてよさそうである。これは、別稿で記すように、被支配層や村落共同体によつて建造されたものもふくむと思われる井戸その他の小規模水利建造物と對比するとき、あきらかに異なる點であろう。トゥグルク朝時代を契機として、新しい農業振興政策がサルタナット支配層によつて採られたことは大きな歴史的意味をもっているが、これらの堰堤、水門の建造も、支配層自體の生活享受のための存在理由とともに、その一部は、あきらかに、支配の存続のための農業生産の増大を意圖して、権力者によつて構想され実施をみた水利政策の具體的な所産であつたのである。

VI. む す び

本稿では、サルタナット時代に建造されたと推定される、デリー地域現存の堰堤および水門を考察の對象とした。最後に、相當な長文となつた本稿の要旨

をまとめてかきたい。

従來の諸研究，とくにインド考古調査局 (A. S. I.) が 1910 年代に行つた遺跡保存のための調査事業の結果を集大成した報告書 (Delhi Monuments List) にもとづき，私自身が，東大調査團の一員として，1959—60, 1961—62 年の冬期に現地の諸遺跡を觀察，確認した結果，その大部分は，トゥグルク朝時代に建設されたものと推定されたのである。これらの堰堤，水門を，私は，I. トゥグルク朝前期の堰堤，水門，II. トゥグルク朝後期の堰堤，水門，および，III. その他というように分類した。トゥグルク朝前期に屬するものとしては，Tughluqābād 大城砦南方に存在する堰堤，水門それぞれ三施設を紹介したが，より後代に建設されたものとして，Muhammad bin Tughluq の治世に建設されたデリーの新城市 Jahānpanāh の南壁を加えることができる。Jahānpanāh 南壁それ自體は，それが建設當初から堰堤としての機能をもつものとして構築されたのか，あるいは建設途上で水利建造物としての機能をもつべく改築されたのかについては，私自身もいくつかの異なつた推論を提示しておいたように，決定的な結論は出しにくい。しかし，Muhammad bin Tughluq の時代か，あるいは次のスルターンである Firūz Shāh の治世に建設されたと推定される Satpulah とよばれる大建造物とともに，それぞれ，堰堤，水門として，トゥグルク朝支配者の農業水利政策の具體的施策の一環として建設されたのではないかという點は，少くとも，本稿であきらかにしたつもりである。なお，文獻上の問題として，Ziyā'ī Baranī の Tārikh-i Firūz Shāh にみえるところの，Firūz Shāh 建設といわれる Bālābānd-i Āb-i Sirī の比定について，私は二つの異なる推論を記しておいたが，そのうちの一つは，現存の Satpulah と結びつけたものである。ただし，私は，多くの著書が Muhammad bin Tughluq の建造としているところの現存の Satpulah の建設年代については，Jahānpanāh のそれと関連して，慎重に，私見を述べておいた。

このトゥグルク朝前期の堰堤，水門については，私は，城砦壁と附近の地形

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

とを巧みに利用する堰堤構築の構想と技術の歴史的意義を指摘した。また、その建設が、いわば、多目的ともいべき計画にもとづくものであり、その重要な目的のなかには、トゥグルク朝時代における支配の貫徹のためのもつとも重要な問題となつた農業の復興および振興の一つの基盤として採用された水利政策を背景とするという推論について述べておいた。とくに、Jahānpanāh 南壁の場合には、Sulṭān Muḥammad Shāh の治世の後半における、デリーおよびドーアープ地域の食糧生産および社会不安の逼迫した事情を、その建設の背景に考慮し、それと関連して、この水利建造物の建設あるいは改築の時代推定についての私見を述べたのである。

トゥグルク朝後期に建設されたと思われる堰堤については、私自身の未見のもの一つをふくめて（本稿追記参照）、七つの堰堤を紹介し、これらを、I、人工構築堰堤、II、自然地形利用の堰堤の二つに分けて考察した。このうち、三つの堰堤をのぞくと、他の遺跡にはすべて水門施設が現存している。これらの諸遺跡の建造の年代については、とくに Shams-i Sirāj ‘Afif の記述が、現存遺跡の一部と関連するものがあると考えられるので、それぞれの堰堤の構造、技術の比較、その環境の考察などの結果、いずれも、Sulṭān Firūz Shāh 時代の建造と推定し、‘Afif の文中にみえる“band”のうちのいくつかのものを、デリー地域に現存する遺跡に比定照合する私見についても記しておいた。

最後に、私は、これらの水利建造物に関するいくつかの歴史的問題についての私の考えを述べた。とくに、それらの機能および建設目的についてまとめて考察した。それらは、新しい構想と技術とをもつて考案計画された集水、貯水、排水、水位調節などの機能を持ち、過度の氾濫の被害への対策、あるいは、人工氾濫、灌漑などの条件を作り出すために、農業生産力の増大を一つの目的としており、結局、それらがトゥグルク朝時代の新しい農業社会政策と関連するものであることを推論した。その他の建設目的としては、飲料を主とする水の確保、さらに城砦防衛、あるいは、支配層による狩獵、避暑、観光などのため

の環境、条件の整備というようなさまざまな目的が、単一、あるいは並存して、その建設の背景にあることを考察し、これらの諸施設が、結局は、當時のサルタナット支配層によつて建造されたものであるということをあきらかにした。

本稿で考察の対象とした堰堤、水門は、サルタナット時代に建設された水利建造物の一部にしかすぎない。支配層が、直接、建設に関与したと思われる貯水池や運河の問題は、これらの堰堤、水門と同じような歴史的問題をもっている。また、私が次回の論文で紹介するつもりの、バーオリーをもふくめたさまざまな井戸は、デリーの支配層とともに、被支配層に属する人びと、あるいは村落共同体が建設したと推定されるものもあり、それらのなかには、デリー主地域や周辺の村落の一般の住民と、より密接な関係をもっている建造物もあるのである。従つて、それらの水利諸施設もふくめたうえで、より総合的な見地から、サルタナット時代の水利建造物の建設、および、それと関連する歴史的諸問題について、いずれ、私見を公けにしたいと考えている次第である。

補 註

1. すでに本文でもふれたとおりに、水利関係の遺跡は、他の一般の建造物の遺跡の場合と異なって、私たちの目につかないことが多いのである。また、ふつう、地表面より低いところにあったり、地上の構築物でも、その高さがそれほど著しくないことが多いために、われわれの目につきにくいことが間々あるのである。とくに、新舊兩デリーの市街地や近傍の諸村落の住居地域のなかにのこっている場合には、家屋や塀や樹木その他にかくされているので、その発見や確認には、ときに、まるで豫想もしなかったほどの時間と努力を費した。また、それらの遺跡が、農耕地あるいは荒地のなかにある場合でも、地上にあらわれている部分が低かったり、あるいはほとんどなく、または樹木に蔽われているため、同じように発見することが困難であったこともしばしばあった。これらの遺跡の場合、著名な遺跡や建造物のときと異なって、近傍の住民が、それらの名稱はもちろん、所在さえも知らない場合も多かった。従って、例えば、インド考古調査局が1910年代に行なった遺跡調査の報告書（後述Delhi Monuments List）に載っているいくつかの遺跡について私が現地検証を試みたときも、対象によっては、わずか一つの遺跡に、数時間、ときには数日を費したこともあるのである。そのような場合には、やっと探りあてたときの喜びの気持はまた格別で、私に同行して写真撮影を擔當することの多かった三枝朝四郎氏とともに、文字通り、欣喜雀躍したことも、いくたびかあった。

また、はじめは、ほとんど落ちがないと思っていたその A. S. I. の報告書にも全く記録されていない遺跡を見出したこともあった。そのようなときは昂奮するのがふつうであったが、とくに、大規模なバーオリーなどを見出し得たときなどの歡こびと満足感とは、今でも、時おり、ふと想い出すことがあるほどである。畑地や荒地のなかに、全くの荒廢した遺跡としてのこっているバーオリーや井戸の場合には、通例、その遺跡の近くに、あるいはそれに蔽いかぶさるようにして、樹木が茂っていることが多いので、三枝氏と私とは、それらの遺跡を探索して歩き廻っているうちに、樹木の繁りぐあいから推してその存在を豫見する一種のカンをもつようになり、それがまた見事に適中し、二人して得意になったこともなん度かあったのである。また、Tughluqābād の大城市の廢墟のなかを、中食をとることも忘れて、山本團長とともに、朝から夕暮れどきまで、夢中になって、井戸の遺跡を探し求めて歩き廻ったことも、今は懐しい想い出である。

また、いくつかの井戸の遺跡の場合には、A. S. I. の調査報告書に、その遺跡で発見されたという碑文が紹介されている。私はどうしてもそれらをみなかったのだが、さいわいにして、それらのいくつかを、いわゆる Red Fort 内の博物館で、ごろごろ転がっている多くの石片のなかから苦心して探し当て、三枝氏らとともに托本をとったときも、忘れ得ぬ感動を覚えたものである。このように、現地調査の作業のなかでも、水利施設の遺跡に関しては、私自身、とくにさまざまな苦楽の思い出がつきまどっていることが多いのである。餘計なことのようにであるが、本稿公刊にあたり、一言、記しておくことを許されたい。

2. この表で、堰堤と水門とが並記されているのは、それぞれ関係を示すもので、水門が、その左に記された堰堤に附設されていることを示すものである。水門自体がとくに異なった名稱をもつものについては、たとえば Satpulah 大水門の如く、その特殊な名稱を採用した。

この表のなかで、歴史的、あるいは傳承のうえでの特殊な名稱をもつものは、Jahānpanāh, Satpulah および Būli Bhatiyāri kā Maḥal のみであるが、この場合には、ローマ字によるトランスクリプションにも、俗名に従わずに、私の諸論考で用いているペルシア・ウルドゥー語のためのトランスクリプションを正確に適用した。Tughluqabad, Mahipalpur, Wazirabad, Malcha, Basantpur などの場合は、これを歴史的地名としてよりは、現在の地名として扱ったので、それは今日インドでふつうに記されているローマ字寫字法を用いて、歴史的固有名詞に対する私自身のトランスクリプションを採ってはいない。ただし、これを歴史的地名として用いるときには、正確にルールに従って音寫した。Station Road, University of Delhi, Prime Minister's Residence は、1964年ごろの地名や通稱を採っている。1964年5月のネルー首相の死後、Prime Minister's Residence は、もはやその存在理由を變える運命を迎えたわけであるが、現在まで、その建物の正式な名稱ははっきりしていないようなので、ここでは、一應、最近よく用いられるようになった名稱を載せることにした。ただし、この堰堤については、後述するように、私自身は未見の遺跡である。

最後にあげた Basantpur の堰堤は、A. S. I. の Delhi Monuments List には載っているものであるが、これも私自身見ておらず、またその他の理由もあって、本稿でも、別格に扱っておいた。従って、括弧内に入れておいた。なお、これについては、次の註を参照。

3. List of Muhammadan and Hindu Monuments, Delhi Province. ed. by Superintendent, Archaeological Survey of India, 4 Volumes, Calcutta. 1916—1922. (以下、Delhi Monuments List と略稱する), Vol. IV, No. 119, pp. 62—63. こ

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

の A. S. I. の報告書では、この band を“Pathan”の時代に比定している。この Delhi Monuments List の要點を轉載すると次のとおりである。

“...The band consists of rubble masonry wall running from east to west with a slight curve. It is about 1/2 mile long and was intended to retain rain-water at the higher level on the northern side...”

この調査を実際に擔當した當時の A. S. I. の Assistant Superintendent であった Maulvi Zafar Hasan は、デリーの多くの建造物を自ら觀察調査しており、従って、Firūz Shāh 時代のモルタルや碎石の構造や様式などの諸特徴については十分に通じている人物であった。ここで、その Zafar Hasan が、自ら、この band について“Pathan”としていることから推すと、この堰堤の遺跡は、おそらくは、本稿でも紹介する他の諸堰堤の遺跡のように、Firūz Shāh 時代あるいはトゥグルク朝時代の特徴をもってはいなかったものであり、従って、より後期のものに、ふつう、用いられる“Pathan”なる時代区分の用語を使ったものと考えられるのである。もし、この band が、Firūz Shāh 時代の特徴をもつものであるならば、A. S. I. の上述の報告書が、“Pathan”という時代比定を記すことは、およそ考えられないところだからである。

これまでの数回のニューデリー滞在の間に、私は、この堰堤の遺構を自ら見ていないのである。Basantpur というのは、この Delhi Monuments List の記述の内容からみても、現在の地名でいうと、Gurgaon Road (グルガオン＝ロード) 東方で、Moradabad Pahari (モラーダーバード＝パハーリー) 地區の東北北方の村落 Basant Nagar (バサント＝ナガル) のことと考えられる。私が参照した1959年、1929年の兩地圖にも、この部落のあたりに、Delhi Monuments List が述べているような「1/2 マイル」に及ぶような堰堤のあとらしい地形は、なんら記されてはいなかった。Basant Nagar の部落附近へは、私も、1955年に一度赴いたことがあるが、そのときの記憶では、こうした堰堤について、遺跡を見たことはなかった。その後の二回の東大の調査に際しては、この堰堤のことが気になってはいたが、現地に行く暇がなかった。そのうちに、中印國境問題のもたらしたデリー地區の緊張の影響のため、すぐ南西方に、Palam (パラム) の軍營地域をひかえているこの部落に調査に行くことは、私自身あえて敬遠しているうちに、ついに確認の機会を失ってしまったのである。従って、この band が現存するかどうかさえ、私はここに確言することはできない。

4. Y. D. Sharma, Delhi and its Neighbourhood, ed, by Organizing Committee, XXVI International Congress of Orientalists, New Delhi, 1964, p. 81. この遺跡は、本文で述べたように私自身は未見である。最近(1964年秋)訪歐の歸途はニュー

デリーに寄られた大島太市氏に寫眞を依頼したが、舊ネルー首相公邸は、なお未公開であったのでこの希望はかなえられなかったが、間もなく、この舊公邸は一般に公開されるであろう。(ただし、山本達郎教授が、その後この遺跡をみてこられた。「附記」参照。) A. S. I. のデリー遺跡綜合調査報告書の Vol. II, No. 327 の項に附隨して述べられている (Delhi Monuments List, Vol. II, p. 226, No. 327. Kushak)。

なお、この Y. D. Sharma のレポートは、デリー地域の遺跡に関するものとしてもっとも新しい報告書であるが、1964年1月にニューデリーで開催された「國際東洋學者會議」で配布されたもので、とりあえず、同會議に出席した友人松井 透氏より借用したものである。Y. D. Sharma 氏は、再度の東大の調査に際して協力してくれた人で、第2次調査のとき以来、A. S. I. の Assistant Director General であるが、その前は、ニューデリーの Safdar Jung の大遺跡の構内に本據をもっていた North Western Circle の Superintendent で、従ってデリー地域の遺跡の管理や發掘にも責任をもっていた學者である。

5. その寫眞のネガ番號は5435で、A. S. I. のプリントに記された説明によれば、Delhi, Sikargah at Kushak とある。
6. トゥグルク朝時代の歴史的事件のクロノロジカルな問題には、きわめて疑問かつ不明な點が多く、これまでの研究においても、必ずしも定説として採用できないものも少なくない。その初期の Ghiyāth al-Dīn および Muḥammad bin Tughluq の治世についてはとくにそういえる。とりわけ、この時代の都市や城砦、宮廷その他の建造物については、問題の Tughluqābād 大城市的建設、およびふつう Muḥammad bin Tughluq の建設といわれているいわゆる 'Ādilābād (アーディラーバード) の建設、あるいは、デリーより南方デカン高原の Devagiri (デーヴァギリ)、すなわち Daulatābād への遷都の正確な年月とその遷都の期間、さらにデリーへの歸還と歸還後のスルターンの常駐地と宮廷の所在などについて、必ずしも確かな定説として採用できないものが多いように思われるのである。従って、これらの問題點については、諸説、諸史料をくわしく検討する必要があるので、本稿では、例えば年月などの問題について正確に述べる餘裕をまだもっていない。さしあたり、最近までの主要な概説書とともに、次の諸論著を考察の参考とした。Agha Mahdi Ḥusain, *The Rise and Fall of Muḥammad bin Tughluq*, London, 1938; Wolseley Haig, *Five Questions in the History of the Tughluq Dynasty of Delhi* J. R. A. S., 1922, Part III, July, pp. 319—372. とくに、この論文のなかの次の章を参照。4. *The Chronology of the reign of Muḥammad Tughluq.*
7. この略圖の作成には、次の論文に載っている圖を参照した。Hilary Waddington,

‘Ādilābād’ A Fort of the ‘fourth’ Delhi, Ancient India, No. 1, 1946, pp. 60—76. この論文は、A. S. I. による調査の報告書であり、これまでほとんど解明されていなかった ‘Ādilābād についてのきわめて有用なレポートである。ただし、発掘報告書であるため、Tughluqābād はもちろん、報告の対象である ‘Ādilābād についての歴史的問題についての解説は、かなり安易なものがある。この論文に載っているところの “Sketch plan of Tughluqabad” (Fig. 2, p. 63) は、‘Ādilābād と Tughluqābād 全城砦との地理的關係を示し、また、堰堤 (bund) と水門 (sluice) の存在を指摘してくれて有用である。事實、私自身、調査團の現地作業の期間で、遺跡の探索とその所在の確認の仕事を分擔していたとき、この Tughluqabad 堰堤 I の所在をはっきりと教えてくれたのは、この論文のこの “sketch plan” であった。しかし、正しくは、東大調査團による測量作圖の結果が示すであろうように、このスケッチプランに記されている二つの bund の位置は、実際とはかなりかけはなれて記され、その点は Waddington の誤りのようである。私のあげた略圖も、この点では、正確なものではなく、精細な圖面は、主報告書をまちたい。

なお、右の Waddington の報告論文も、この bund について一言ふれてはいても、その構造や状態についてはなんらの敘述も試みていない。

8. 舊デリーすなわち Old Delhi, Purānā Dihli (プラーナー=ディヒリー) などという語は、現在では、ニューデリー北方の舊ムガル城市、すなわち Shāhjahānābād (シェージュハーナーバード) を中心とする地域の俗稱である。しかし、ニューデリー建設前は、むしろ、クトップ地域を中心とする地域を、オールド=デリーと呼んだらしい。サルタナット時代中期以後は、舊デリーは、Dihli-i qadīm (ディヒリー=カディーム、すなわち舊デリー) などと出てくるが、もちろんクトップ地域周辺をいうのである。

9. これについては、のちに第 IV 章で述べるが、一應その出典を明らかにしておく。なお、Ibn Baṭṭūṭa には、次のフランス語譯、英譯を参照した。アラビア語のテキストは、右のフランス語譯併載のものを見た。Voyage d’Ibn Batoutah, Texte Arabe, accompagné d’une traduction par C. Defrémery et B. R. Sanguinetti, Tome Troisième, publié par Société Asiatique, Paris, 5e tirage, 1949, p. 147. また、この Ibn Baṭṭūṭa のインドの部分だけは、インド學者でトゥグルク朝史の専門家 Mahdi Hurain によって英譯されている。Ibn Baṭṭūṭa, Reḥla, translated by Mahdi Husain, Gaekwad Oriental Series, Baroda, 1936, pp. 25—26. なお、本稿でも、この著名なアラブの旅行者の記録については以上の二書に據るが、以下、前者は、Ibn Battuta (Def. Sang. text), Ibn Battuta (Fr. tr.), 後者を、Ibn Battuta (M.

Husain) と略稱する。

10. この建物は二階建てで、その屋上には切り石の欄かんがある。建物の構造と様式とは、あきらかにトゥグルク朝後期の特徴を示している。Delhi Monuments List では、Vol. IV, p. 59, No. 109 として紹介されており、Mahal (a palace) という見出しがつけられている。ただし、このリストでは、時代比定については、“Pathan” としているが、私はこの A. S. I. の報告書の時代区分には不賛成で、Firuz Shah’s reign あるいは、Later Tughluq period とでもすべきであろうと考えている。もっともよく似ているものを例にあげれば、Nizamuddin West 地域のいわゆる Shaikh Nizām al-Dīn Auliya のダルガーの東南入口の近く、そのすぐ外側にある建物で、現在、小學校に利用されている小建造物である。これは Delhi Monuments List, Vol. II, pp. 173—174, No. 232 には、“Langar Khana (alms house)” という見出しで載せられており、時代区分も“Afghan” としている。この時代区分についても、私は實は、不服なのであり、Firuz Shah’s reign, あるいは、Later Tughluq period とでもすべきで、あきらかに、後期トゥグルク朝時代の諸特徴を具えているように思えるのである。

さらに、この Mahipalpur 部落中央にある“Mahal”なる建造物に似ているのは、有名なムガル第2代皇帝 Humāyūn (フマーユーン) の墓の境内の北東隅の壁の外にある建物である。Delhi Monuments List. では、Vol. II, pp. 124—125, No. 162 に紹介されており、“Chilla Nizamuddin” という見出しになっている。つまり、Shaikh Nizām al-Dīn の冥想所の一つと考えられてきた遺跡であるが、實際は、この傳承は眞實かどうか疑問である。それはともかくとして、この建物の場合も、上述の List では“Pathan” という時代区分を記しているのであるが、私には、これも、トゥグルク朝後期としていいように思われるのである。上述の List 自體も、その敘述のなかでは、その“dalan” (つまり dālān, 部屋) の様式と構造は Firuz Shah Tughluq の時代の建造物と似ているということを記しているくらいである。

これらの二つの全く別な建造物をも引き合いに出して、その時代比定について Delhi Monuments List の記述にまで疑いをさしはさんだのは、實は、この二つの建物と、問題の Mahipalpur 内の“Mahal” についての時代比定が D. M. L. の場合には誤まりであって、實は Firūz Shāh 時代、あるいは、トゥグルク朝後期の建造物ではないかという私見を強調したかつたからである。一々根拠をあげる餘裕はないが、もし、私の推定の方が正しければ、それが、さらに、Mahipalpur 堰堤の時代区分とも関連してくるからであることはいうまでもない。これについては、後章で、ふたたびふれられるであろう。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

11. 拙稿, 第1論文「奴隸王朝初期の墓」, 21ページ参照。
12. Delhi Monuments List, Vol. IV. p. 58, No. 108, Band の項参照。ここには, その一部を引用しておく。

“The *band* consists of a rubble masonry wall some 500 yards long. It runs from north to south where it makes a curve and continues to the S. E. It was built to retain rain water accumulating from the neighbouring hilly mounds on the wide plain to its north and east. About the centre of each of the west and south-east walls there is mori (outlet) which projects out beyond the face of the *band* and contains a sluice to regulate the outflow of the surplus water.....”

13. Y. D. Sharma, p. 23, pp. 60—61.
14. A. Cunningham, Report of Operation of the Archaeological Surveyor to the Government of India during Season 1862—63. (Vol. I.), Calcutta, 1865, pp. 154—53. 以下, この報告書は, Cunningham (Vol. I) と略稱する。
15. Delhi Monuments List, Vol. IV, pp. 70—71, No. 139. その記述の概要を次に載せておく。

“The *band*, constructed of rubble masonry, runs a great distance from north to south. In its centre stands a dilapidated building, consisting of two compartments and measuring externally 36'6" east to west by 18' north to south. The material used in the building is also rubble and plaster with dressed stone pillars, and its main compartment is covered with an arched roof, the other compartment to the west having a flat roof of red sandstone slabs. Access to the building was originally obtained through two doorways, set in the north and south sides; while under it there are two drains for the escape of water from the higher level, on the east of the band, to the west. The arched openings of these drains on the east, together with a flight of descending steps between them, have been recently surrounded by a semi-circular wall pierced by a doorway which is furnished with a sliding door of iron sheet to regulate the flow of water through the drains. Contiguous to the northern doorway there is a three arched dalan of a later date.

The purpose of the building is unknown. Possibly it was a Shikargah like those on the bands of Kushk and Malcha...

なお Delhi Monuments List の附圖によると、Band Shikar というのは、Palam Zail のなかでも、Delhi Zail に接した地區であって、Jharera 部落の北方 Jawaharpur 地區の北に接していて、かなり広い範囲に描かれている。

16. この點、私は、私の最初のニューデリー滞在（1954～56年）以來、いろいろ親切に指導していただいた P. Saran 氏に深く感謝したい。P. Saran 氏は、あとに述べるように、もう一つ、デリー大學構内現存の堰堤趾にも私を案内してくれたのである。さて、この堰堤の遺構は、その現存する場所が、Cantonment の軍營地の入口であったことが、中印問題で緊張を加えつつあったときだけに、私をしてこの地域の探査を躊躇させた主な理由であった。また、Delhi Monuments List にいう給水塔のようなものも、軍營地區内は別として、このあたりには見當らなかつた。また、“Majra” というふるい村落については、私が参照した 1950、1959 年刊の政府發行の地圖にも、さらに1929年の1インチ地圖にも載っていなかったのも、私は、この遺跡は、完全に、現在の軍營地域内にあるとしか想像していなかったのである。ついでにふれておきたいが、軍營地内でも、正式に許可を得ればもちろん遺跡を見せてもらえることは豫期していたが、短期間の調査の間の手続き上の問題と、そのため、あるいは起り得るかも知れない爾後の調査活動への制約とを恐れたのである。「禁止區域」というのは、國の内外、時代の如何を問わず、平和な學問的活動にとつては、やはり、大きな障壁であるということをして、つくづく感じさせられた。

17. Delhi Monuments List, Vol. II, pp. 233—234, No. 337. Boli Bhatiyari ka Mahal の項を参照。このうち“bund”についての敘述の部分を用意しておくこと、次の如くである。

“……a bund, which is some 500' long, 17' broad at its widest part and 24' high. The top of the bund is reached by staircases on either side of a sluice channel enclosed between walls running east and west. The width of the bund tapers and is narrowest at the north end where the ground is highest……”

18. Saiyid Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, Rev. ed., 1604, Cownpore pp. 35—36. なお、Aḥmad Khān のこの著については、拙稿、第1論文、「奴隸王朝初期の墓」、113—114ページ、補註11および12を参照されたい。これには、Garçin de Tassy のフランス語譯もあるが、問題のない限りは本稿では用いない。なお、Saiyid Aḥmad Khān については、慣用に従って、Syed Ahmad Khan と記す。その著 *Āthār al-Ṣanādīd* については、本稿で使用したのは、1847年初版の初稿本では、私藏の1895年のラクナウの Nawāl Kishūr 版であり、1858年初版の改訂稿本では、私藏

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

の1904年のカーンプル (カunnポール) 版である。以下、この *Aḥmad Khān* の書を、*Ahmad Khan* (Orig. ed.); *Ahmad Khan* (Rev. ed.) と略稱する。

なお、この *Būlī Bhatiyārī kā Maḥal* の位置については、*Ahmad Khan* は、*Saiyid Ḥasan Rasūl-numā* の *Dargāh* (ダルガー) の近くであると述べている。このダルガーについては、*Delhi Monuments List* の同じ “*Banskoli*” の地域のなかの No. 332 に紹介されているが (Vol. II, pp. 231—232), この bund の位置を、その西方約1マイルといている。

18. *Ahmad Khan* (Rev. ed.) p. 36. これは、*Paun Pracāhanā* のことであろう。雨乞いというよりは、どうやら、風うらないの一種らしく、雨期が、どれほどの雨をもたらすかを豫見するための行事らしい。*Asārh* とは、ヒンドゥーの暦月では第3月に當り、ふつう、6～7月であって、北インドのデリーあたりでは、雨期入りの頃からの、農業上、もっとも重要な時期にあたるわけである。
20. *Carr Stephen*, *The Archaeology and Monumental Remains of Delhi*, 1876, *Ludhiana*, p. 122. 以下、この書物は、*Carr Stephen* と略稱する。なお、この著書については、拙稿、第1論文、114—115ページ、補註14を参照されたい。
21. *Y. D. Sharma*, p. 81, *Enbankment at Bhūlī Bhatiyārī-kā-Maḥal*. の項を参照。
22. *Ahmad Khan* (Rev. ed.), p. 35.
23. 例えば次の個所にみえる。*Minhāj al-Sirāj Afif*, *Tārīkh-i Firūz Shāhi*, *Persian text ed. by Vilayat Husain*, *Bibliotheca Indica Series*, *Calcutta*, 1891, p. 330. なお、このペルシア語テキストは、以後 ‘*Afif*, (*Tar. Fir.*, *B. I.*) と略稱する。ここでは、他の例は省略する。
24. *Delhi Monuments List*, Vol. II, p. 226, No. 327 参照。この “*A building probably a Shikargah*” という遺跡についての敘述の大要は次のとおり。そのなかで、“*band*” にもふれている。

“The building, constructed of rubble, stands on a terrace 16 feet high. It has three open bays containing arches supported upon typical square stone shafts, and each bay is divided in depth into three compartments. The roof of the building is flat but it has a vaulted ceiling. The building proper measures 43’ 9” by 43’ E. M. It is in line with an embankment (*band*) which was built to retain water flowing from the neighbouring hilly mounds during the rainy season and seems to have been a pleasure house or *Shikargah*. The line of the embankment has now disappeared except for a very small portion in the front of the *Kushak* to the north.”

25. Y. D. Sharma, p. 81. Embankment at Kushak Maḥal の項の氏の記述を次に引用しておこう。

“This monuments now lies within the componnd of the Prime Minister’s house. It is an almost square rubble-built structure, three-aisle deep and with three arched openings resting on stone pillars. Its vaulted ceiling is finished flat on the roof. It was probably built by Firūz Shāh Tughluq (1351—88) and was used by him one of his several hunting lodges (p. 23). Originally there existed an embankment near it, which stored rain water.

26. Delhi Monuments List, Vol. II, Wazirabad No. 409. Bridge の項を参照されたい。問題の “band” が出てくる個處を引用しておこう。

“……The bridge contains further northwards as a solid *band* for some 113’ 9” and at this end occur three small arched bays containing a sluice chamber.”

この敘述によると、この List のいう “a solid *band*” というのは、あきらかに、橋と水門施設との間の部分を指している。しかし、これを “*band*” という風にみるのは、本稿の他の堰堤を考える場合には適當でないこともまた明瞭であろう。Y. D. Sharma のいう “causeway” というのはなかなかよい言葉と思う。

27. Y. D. Sharma, pp. 114—115. “……The *nāla* is spanned by a rubble-built bridge of nine arched openings, with a solid causeway running in continuation to its north. There are three small bays at its northern end, with a sluice chamber, which has sometimes been taken as a fish-trap.”

この記事をみてもわかるとおり、Y. D. Sharma の文章は、Delhi Monuments List に大きく據っているようである。

28. Delhi Monuments List, Vol. II, p. 227, No. 328. Maḥal (Palace) の項を参照。関連部分を轉載すると次の如くである。

“Some 50 yards to the south of the palace there is the bund of a large tank into which, says Shams Siraj, the emperor Firuz Shah threw a quantity of the water of Zamzam⁽¹⁾. The palace seems to have been a pleasure house or Shikargah on the bank of the tank. [(1) Zamzam is a famous well at Mecca, the water of which is held to be sacred by Muhammadans.]”

29. Y. D. Sharma, p. 81, “Bund at the Mālcha Maḥal” に關する個所は、次のと。

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

おりである。

“Some distance to its (Maḥal’s) south existed a bund which retained rain water.”

30. Delhi Monuments List, Vol. IV. No. 119. Band, pp. 62—63. 概要を載せると次のとおり。

“The band consists of rubble masonry wall running from east to west with a slight curve. It is about 1/2 mile long and was intended to retain rain-water at the higher level on its northern side.”

31. Delhi Monuments List, Vol. II, No. 329. Tal Katora, p. 228 の項を参照。次に関連部分のみを引用しておく。

“……At the northern end of the garden overlooking the tank there is a high terrace measuring 631’6” by 62’6”, flanked at each end by double-storeyed octagonal pavillions surmounted by domes……The terrace is 17’6” above the garden on the east side but only 7’6” above the tank on the west. Thus it was really intended as an embankment (bund) to hold back rain water flowing from the higher level of the hilly ground to the west, and form a tank at the head of the garden. A similar arrangement to this is to be found at the Malcha and Kushak bands of Firoz Shah Tughlaq……”

32. Archaeological Survey of India, Government of India 所蔵。フィルム番號は、5100。このプリントはデリーの A. S. I. の Photography Section にファイルされているが、それには、“Hammam and Sluice of Tughlaqābād City, Delhi”と題されている。

33. J. D. Beglar は、この Satpulah を、“*Satpallalla band*”と記しているが、これは、おそらくは、Beglar 自身の聞きまちがえによるものであろう (Beglar (IV), p. 64)。また、例えば、Fanshawe (1902) は、これを“seven arches”といっているが、正確な譯とはいえないにしろ、うがった轉譯といえようか。H. C. Fanshawe, Delhi, Past and Present, London, 1902, p. 287. (以下、この書物を Fanshawe とのみ略稱する。)

34. ここにはそれらの書物を一々あげることはさけるが、Syed Ahmad Khan の *Āthār al-Ṣanādīd* 以来、この遺跡について比較的正しくとりあげている著書のいくつかを次に列挙しておこう。

Ahmad Khan (Orig. ed.), Part I, pp. 21—22; Ahmad Khan (Rev. ed.),

Part III, pp. 31—32; Beglar (Vol. IV, 1872), pp. 64—65; Carr Stephen (1896), pp. 101—102; Fanshawe (1902), p. 287; G. R. Hearn (1906), pp. 110—111; Delhi Monuments List, Vol. III, No. 216, p. 127; Y. D. Sharma (1964), p. 66.

なお、本文で述べたとおり、この遺跡の構造と様式の詳細については、主報告書にまつが、ここでは、上述書のなかの A. S. I. の調査報告書から、この遺跡についてのディスクリプションの一部を引用しておこう。

“……It is constructed of rubble masonry and consists of 11 arched openings and a flanking tower at each end (E. and W.), four of these arched openings, two on either side immediately next to the towers, being subsidiary ones. These latter arches are at a higher level and at the end of each is a narrow staircase leading up to the top of the bridge. Along the top of the south side between the flanking towers runs a wall which is broken by recessed arches corresponding to the arches openings below. The side walls of these arched openings are grooved for sliding gates, with which the force of the stream flowing from the south through the openings would be regulated.

Each of the flanking towers has a deeply recessed arch facing north, inside which is an octagonal chamber diam 19'6". It is entered through an opening to the north, and has in each of the remaining 7 sides of the octagon an arched recess, the back walls of which are pierced by holes 2'6" long by 7" broad probably for use as arrow slits for the defence of the building……”

なお、東大の調査團に参加した私自身の観察の結果も、以上の Delhi Monuments List の敘述の内容を變更する必要はなんら認めなかった。

35. Ahmad Khan (Orig. ed.), Part I, p. 22. いま、その關係部分のみを英譯紹介してみると、ほぼ次のとおりである。

“……When I went to draw the picture of this band, by chance it was Sunday. Many Musalmāns and Hindūs were at the religious holy place. It was so much crowded that it was difficult for me to draw a picture……”
多分、Syed Ahmad は、その後、あらためて出かけていって、寫生の目的を達したにちがいない。

36. Ahmad Khan (Orig. ed.), Part I, p. 21.

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

37. *kachchhā* と *pakkhā* とは、例えば、英譯すれば、もともと, *unripened, ineperfect* と, *ripened, perfect* というほどの對語であるが、家屋、道路やその他の建造物について用いられる場合には、後者がレンガや石造、あるいはコンクリート造りや舗装道路などについていうのに對して、前者は、泥土の資材のままの粗製のものについて用いられるようである。この *Satpulah* の場合にも、*kachchhā* とは、コンクリートや砕石モルタルではなく、泥土を利用し、あるいはせいぜい粗製のモルタルを用いて構築したものをいうのであろう。
38. Wolseley Haig (compiled), *Comparative Tables of Muhammadan and Christian Dates*, London, 1532, p. 17.
39. W. Haig, *Chronological Tables*, p. 361,
40. Ahmad Khan (Orig. ed.), Part I, p. 21.
41. 彼は、Shaikh Niẓām al-Dīn Auliya の弟子で、Chishtī (テシュティイー) 派の聖者として、その師および Quṭb Ṣāhib とよばれて Shaikh Quṭb al-Dīn Bakhtiyār Kākī の二人の聖者ととも、デリーのもっとも著名なスーフィー聖者の一人である。彼については、例えば、次の論文がまとまっている。Mohammad Habib, *Shaikh Nasiruddin Chiragh of Delhi, Ahigarh* 彼の廟は、*Dargah-i Rūshān-i Chirāgh-i Dihlī* とよばれて、前二者の廟とならんで、デリーのみならずインド有数の聖廟とされている。この聖者の墓を中心として部落ができていったらしいが、ムガル末期には、それは城壁をもって圍まれた大部落となり、今でも *Chiragh Delhi* (チラーグ=デリー) としてよばれている。この部落は、この廟を中核として成長したもので、現在でもこのダルガーの周邊や近くには、サルタナット、ムガル時代の墓やモスクやその他の建造物が多い。この部落は、*Satpulah* からのも近く、その東北方約 700m ほどの距離にある。ダルガーはその部落の西南部にあるが、インド・パーキスタン分離獨立の、いわゆる *partition* の時に若干破壊され、いまではヒンドゥー部落人口に圍まれて、實際には、大へんさびれたダルガーとなってしまっている。
42. Ahmad Khan (Orig. ed.), Part I, pp. 21—22. 改稿本の方では、敘述はずっと簡単になっているが、土曜、日曜、月曜の日が混むと記している。何百人もの男女がやってくるのは、悪魔 (*jin*)、悪靈 (*bhūt*) および魔術師 (*jādū*) などの災厄から守るためといわれていることが述べられている。Ahmad Khan (Rev. ed.), Part III, pp. 31—32 参照。

なお、ここに記した祭の行事については、毎年10月に3週間にわたって行われると、Carr Stephen も記している (Carr Stephen, p. 102)。興味ある點は、初稿本で Ahmad Khan が、このムスリムの慣習について批判していることである。Syed

Ahmad は、水をあがめるのは彼らの眞の宗教に反することであることをとくに添記している。また、聖者が手で水をさぐりあてたという Naşir al-Dīn Chirāgh-i Dihlī にまつわるスーフィー的な傳承についても、それは決して奇蹟というようなものではなく、Satpulah 附近の問題の個所では、何千年も水が流れていたもので、誰の手で掘っても、そこから容易に水が得られるのは當然だとつけ加えている。これは、19世紀中葉以降のムスリム思想界の新しい指導者らしいコメントである。たいへん興味をひかれたので、ついでに紹介しておきたい。

43. Delhi Monuments List, III, No. 216. 同報告書は、従って、この遺跡を“Satpula, also called madrasa”という見出しで紹介している。學校に用いられた點については、Y. D. Sharma もそれにふれている。Y. D. Sharma, p. 66,

44. Delhi Monuments List, Vol. III, No. 214. South Wall of Jahanpanah, pp. 124—125 のなかに言及されている。関連部分のみ引用しておく。

“The mori which lies at the western boundary of Hauz Rani is an arched opening in the wall some 20' long, 5' high and 2' 2" wide. At its southern end are two recessed grooves probably intended to hold a sliding gate for controlling the escape of rain water from the higher level on the south towards the north.”

45. この二つのジャーナルについても、Delhi Monuments List は、Jahānpanāh 南壁の項でちょっと言及している。Delhi Monuments List, Vol III, No. 214, pp. 124—125 参照。関連部分のみを次に引用しておく。

“The jhals lie in Khirki village, the eastern one some 100 yards to the west of the mori and the other some 500 yards to the west of the Satpulah. They consist of a ramp paved with rubble and seem to have been lately repaired.”

46. Delhi Monuments List, Vol. IV, p. 58. 関連部分を引用すると次の如くである。

“……About the centre of each of the west and south-east walls there is mori (outlet) which projects out beyond the face of the *band* and contains a sluice to regulate the outflow of the surplus water…….”

47. Delhi Monuments List, Vol. IV, No. 139, p. 70. 参照。次に、関連部分のみ引用する。

“……Access to the building was originally obtained through two doorways, set in the north and south sides; while under it there are two drains for the escape of water from the higher level, on the east of the

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

band, to the west. The arched openings of these drains on the east, together with a flight of descending steps between them, have been recently surrounded by a semi-circular wall pierced by a doorway which is furnished with a sliding door of iron sheet to regulate the flow of water through the drains.....”

この約50年近くも前の説明は、現状でも大體あてはまるが、西側の“two drains”はすでに本文で述べたように表面の剝落が著しく、また東側の“the openings”は、私には見出し得なかった。そのあたりは、灌木と草に蔽われていたからである。

48. Delhi Monuments List, Vol. II, p. 233,

“.....The top of the bund is reached by staircases on either side of a sluice channel between walls running east to west.

49. すでに述べたように (53 ページ参照), Delhi Monuments List あるいは Y. D. Sharma は、この水門施設の橋を“causeway”とよんでいる (Y. D. Sharma, p. 115) D. M. L. は、この causeway と bridge との間を“a solid band”といている。私は、一時、この D. M. L. のいう band とは、この場合、橋や問題の水門と直角に走る土堤のことかと思った (現に西側には、そうした土盛りのあとが少しく残っている)。しかし、リストのいう“a solid band”とは、あきらかに、橋と水門の中間にあってこの兩者を接續している構造物をいうようである。この點もふくめて、次に關連部分を, Delhi Monuments List, Vol. II, No. 409, Bridge, p. 290 から次に引用しておこう。

“.....The bridge continues further northwards as a solid *band* for some 113' 9" and at this end occur three small arched bays containing a sluice chamber measuring 22' 6" by 8' 8" I. M. The eastern and western walls of the chamber are furnished with sluice screens pierced with circular and oblong holes, and access to the chamber is gained by staircases in its northern and southern walls.....”

50. Delhi Monuments List, Vol. II, p. 290, Note.

“The chamber has been variously described as a bathing place, and a place for the catching of fish, but it seems probable that it was simply intended (as was the heavy superstructures of the bridge itself) to regulate or restrict the excessive back-flow of the water from the Jumna when in flood; and that access to it was provided merely to permit of the clearance of silt, etc., that would be left in it after subsidence of the

water. Similar sluices exists in the band at the “Boli Bhatyari ka Mahall” (No. 337), at Banskoli.”

なお、Y. D. Shama, p. 115 を参照。

51. 拙稿, 第2論文「デリーに現存する奴隸王朝中期の墓について」38～40 ページ参照。
52. 拙稿, 第1論文「デリーに現存する奴隸王朝初期の墓について」, 序文, とくに11～15ページ参照。
53. P. Hardy, *Historians of Medieval India, Studies in Indo-Muslim Historical Writing*, London, 1960. 以下, この書物は, P. Hardy とのみ略称するこの書のうち, 本稿で利用する Baranī および ‘Afif による二つの *Tārīkh-i Firūz Shāhī* を中心とする史料としての性格とその限界とについては, Chap. II, III にそれぞれまとめられてある。なお, この書物については, 最近, 私自身, 紹介書評を公けにしたので, 下記を参照されたい。荒 松雄「P=ハーディー著, インドにおける中世の歴史家」, *東洋學報*, 第XXXVII巻, 第2号, 308—315ページ。
- なお, 上述の二人の歴史家とその著書については, 次にも記されている。C. A. Storey, *Persian Literature, A Bio-Bibliographical Survey*, London, 1939, Section II, Fasc. 3, pp. 509—512 参照。
54. Ibn Battuta (Def. Sang.), p. 146. なお, Ibn Battuta (M. Husain), p. 25 にみえる英譯を次に引いておく。
- “The city of Delhi covers a wide area and has a large population. It is now a combination of four adjacent and contiguous cities……”
55. Ibn Battuta (Def. Sang.), p. 147. Ibn Battuta (M. Husain) の英譯は, 次のとおり。
- “The fourth is known as Jahānpanāh, a city particularly distinguished as the residence of Sulṭān Muḥammad Shāh, emperor of India *malik-ul-Hind* at present, whose court we visited. It is he who built it. He wished to combine the four cities in one rampart; and he built this in part, but left it incomplete on account of the great outlay which its construction would entail……”
56. 本稿では, ペルシア語原文の掲載を省略したが, 私の使った刊本は, 次の二書である。Futūḥāt-i Firūz Shāhī, *Persian text ed. by Shaikh Abdur Rashīd*, Muslim University, Aligarh, 1954, p. 15; Futūḥāt-i Firūz Shāhī *Persian text ed. by N. B. Roy*, J. R. A. S. B. Letters, 1941, p. 83, なお, この兩テキストは, 以

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

後、Futūhāt (Aligarh); Futūhāt (Roy) と略稱する。

ここに譯出した文章に関する限り、この兩テキストのあいだには大きな差異は見出不されるが、次の点だけを指摘しておこう。第一は、スルターンの名で、Aligarh テキストが、“Sulṭān Muḥammad Shāh-i maghfūr wa marhūm” と記しているのを、Roy のテキストの方は、“Sulṭān-i maghfūr-i marhūm Muḥammad Shāh” とひっくりかえている。また、前者が、“……wa man bah ḥuzūr parūrdah” とあるのを、後者では、“……wa man maḥshūsh parūrdah” となっている。いずれも Aligarh テキストには、この点、註記されている。

なお、この Futūhāt は、Elliot-Dowson にも抄譯があるが、念のために、次に引用しておく。Elliot-Dowson, Vol. III, p. 385, 参照。

Jahān-panāh. This foundation of the late Sultān Muhammad Shāh, my kind patron, by whose bounty I was reared and educated, I restored.”

57. Maulānā Sharaf al-Dīn ‘Alī Yazdī, Ṣafar Nāmāh, Persian text ed. by Muḥammad ‘Abbāsī, Tehrān. 1336 A. H. Jald II, p. 94. (以下、Ṣafar Nāmāh と略稱) これは、Timūr によるデリー攻略成功後 8 日ごろの 1398 年 12 月下旬のことである。念のために、Elliot-Dowson の譯を次にかかげておく。

“……The wife of Jahan Malik Agha and other ladies went into the city to see the palace of the Thousand Columns (Hazar Sutun), which Malik Jauna had built in the Jahan-panah……” (Vol. III, p. 503)

なお、関連する部分を Elliot-Dowson 本の Malfūzāt-i Timūri の英譯から引用すれば、次の通りである。

“……Another reason was that some of the ladies of my harem expressed a wish to go into the city and see the palace of *Hazār-sutūn* (thousand columns) which Malik Jaunā built in the fort called Jahan-panāh……” (Vol. III, p. 445)

58. Ṣafar Nāmāh, Jald II, p. 90. この記事は 1398 年 12 月中旬のできごとで、Sulṭān Maḥmūd Shāh と Mallū Khān のデリーからの逃散についての記録である。Elliot-Dowson 譯を次に記しておく。

“……So, in the darkness of the night, Sultān Maḥmūd left the city by the gate of Hauz-rānī and Mallū Khan by the Baraka Gate, both of which are to the south of the Jahān-panāh. They fled into the desert……” (Vol. III, p. 501)

なお、このできごとは、Malfūzāt-i Timūri では、次のように Elliot-Dowson 本

に譯出されている。

“……They saw that if they stayed in the fort they would be captured and made prisoners so in the middle of that night, Mth Rabi, u-l’ákhir Sultán Mahmúd and Mallú Khán left the fort of Jahán-panáh and fled towards the mountains and jungles……”

この Malfúzāt の日附は Zafar Nāmah のそれとちょっと違っているようである。そして、問題の Jahānpanāh の門に関しては、少しあとにでてくるのである、すなわち、

“……On the same night that I heard of the flight of the Sultán and his generals from Delhi, I sent Amír Alláh-dád and other officers to watch the gate of Hauz-rání, through which Mahmúd had escaped; and that of Baraka, by which Mallú Khan had gone out……” (Vol. III, p. 442)

59. Zafar Nāmah, p. 97. なお、英譯しておいた部分に、(a), (b), (c) という記号をつけておいたので、まず、それについて説明しておきたい。

(a) “ba-jānib-i mashriq māil ba-shimāl wā’qī’st.” このところは、直譯すれば、“to the eastern direction inclining to the north” であるが、本文中の英譯では分りやすく直しておいた。

(b) “az ṭarf-i gharbī ast māil ba junūb” この場合も、上の場合と同じように、直譯すれば、“from the western side inclining to the south” である。

(c) この方角については、ペルシア語原文は、“shish az jānib-i shimāl māil ba-gharb wa haft az jānib-i junūb māil ba-sharq” となっている。英譯にあたっては、さきの二つの場合と同じく、“six from the north-western side, and seven from the south-east” と、文章を整理したまでである。この点については Elliot-Dowson は、誤まっているようである。すなわち、次に引用しておいたところからもわかるとおりに、ここでは “six to the north-west and seven to the south-west” (傍線筆者) となっている。この方角では、Jahānpanāh の遺跡をみても、Sírī, 舊デリーつまりいわゆる Rāī Rithaurā 城砦の遺跡の位置と考え合せてみても、方角の点で合わず、全く混亂してしまう。これは、あきらかに、誤記であると思う。あとに紹介する Malfúzāt の方は、その Elliot-Dowson 本の譯をみても、私が譯出した方角と同じになっており、理窟にあっている。

さて、問題の Elliot-Dowson 本における Zafar Nāmah の関連部分の譯を轉載しておく。

“……From the wall of Sírī on the north-east to the wall of Old Dehli

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

on the south-west, a wall has been erected on both sides, and the space between is called Jahānpanāh. It is larger than Old Dehli. Three gates of Sīri open towards Jahān-panāh and four towards the open country. Of Old Dehli five gates open into Jahān-panāh and thirteen gates, six to the north-east and seven to the south-west, making in all thirty gates to these three cities known by the common name of Dehli.....” (Vol. III, p. 504)

Ṣafar Nāmah 中の問題の個所に相當する Malfūzāt の記事を, Elliot-Dowson 本の英譯で紹介すると, 次のとおりである。

“.....From the fort of Sīri to that of old Dehli, which is a considerable distance, there runs a strong wall, built of stone and cement. The part called Jahān-panāh is situated in the midst of the inhabited city (shahr-i ābādān). The fortifications of the three cities have thirty gates. Jahān-panāh has thirteen gates, seven on the south side bearing towards the east, and six on the north side bearing towards west. Sīri has seven gates four towards the outside and three on the inside towards Jahān-panāh. The fortification of old Dehli have ten gates, some opening to the exterior and some towards the interior of the city.....”

60. 前註に引用した Malfūzāt-i Timūri の記述と, 本文に述べた Ṣafar Nāmah の文中の, 門の数は, その数え方に少し喰いちがいがいがあるようである。兩者ともに, Sīri, Jahānpanāh については, 門の数は一致しているが, Dihli-i kuhna, すなわち, 舊デリーについては, その数が違っている。すなわち, Ṣafar Nāmah では, 舊デリー城砦の場合, Jahānpanāh 側に向けて5門, 外側に向けて13門としているのに対して, Malfūzāt にあっては, 舊デリーの城門は, その城壁の内外に向いているものすべてをふくめて, 全部で10門というふうに数えているらしいのである。ただし, 兩書とも, 全部の城門の總計は, 同じく, 30門といているのである。

このことは, ちょっと考えると, 兩書のうちのどちらかが誤まっているようにみえるのであるが, 實をいうと, まことに面白いことには, 兩書ともに, それぞれ, 理窟に合うように数えているのである。以下に, それについて, ちょっと説明しておこう。

まず, Ṣafar Nāmah の場合は, Jahānpanāh の方に向いている門, すなわち, Sīri の3門と舊デリーの5門とをのぞくと, 4 gates (Sīri) +13 gates (Dihli-i kuhna) +13 gates (Jahānpanāh S. E. 7 gates+N. W. 6 gates=Total 30 gates という数字がでてくる。つまり, この数え方では, この城市を一つの大デリー市(い

わば Greater Delhi とでもいおうか)とみて、外に向いて開いている城門の總數というわけであろう。これに對して、Malfūzāt-i Timūri の場合は、門の數を全部數えているのであるから、その計算は、7 gates (Siri) +10 gates (Dihli-i kuhna) +13 gates (Jahānpanāh S. E. 7 gates+N. W. 6 gates=Total 30 gates. という數式になる。そして、その結果たるや、まさに、總計、いずれも30門なのである。これは、まるで、ちょっとしたクイズのようである。これらの門の數をめぐっては、例えば、次にあげるように、これまで、二三の書物がふれているが、本稿では、一切省略することにする。Ahmad Khan (Rev. ed.), Part II, p. 22; Cunningham (Vol. I), p. 218; Beglar (Vol. IV), p. 60; Carr Stephen, p. 100.

51. Beglar (Vol. IV), p. 64.
62. Minhāj al-Din 'Uthmān, Ṭabaqāt-i Nāsiri, ed. by W. N. Lees. Bibliotheca Indica Series, Calcutta, 1864. 以下, Tab. Nas. (B. I.) と略稱する。H. G. Raverty による英譯については、拙稿第1論文、補註3を参照。同譯註書を, Tab. Nas. (Raverty) と略稱する。この Ḥauz-i Rāni の名稱の出所については、次のとおり。“Maḥrāi-i Ḥauz-i Rāni” (plain of Ḥauz-i Rāni), Tab. Nas. (B. I.), p. 198; Tab. Nas. (Raverty), p. 662; “Ḥauz-i Rāni,” Tab. Nas. (B. I.), p. 316; Tab. Nas. (Raverty), p. 854, p. 855.
63. Beglar (Vol. IV), p. 65.
64. Barani (B. I.), p. 565.
65. この大モスクについては、Delhi Monuments List, Vol. III, No. 293, p. 169 に “Mosque locally known as Tohte wala Gumbad” として紹介している。この D. M. L. の筆者は、この大モスクを “Khalji” 時代と記しているが、これは、Siri 城砦がハルジー朝の造營であるということから想像したものであらうと思う。しかし、私の所見では、せいぜいさかのぼって、トゥグルク朝中期どまりであらう。
66. この聖者の墓を中心とする五つの建造物については、Delhi Monuments List も、Shaikh Sarai の地域の後半に列記している (Vol. III, pp. 145—147. ここでは、煩をさけて、その一々について説明することは省略する。ただ、D. M. L. のかかげる見出しのみを記しておく。No. 251, Tomb of Shaikh Salahuddin Darwesh (p. 145); No. 252, Tomb (p. 146); No. 253, Tomb, unknown (p. 146); No. 254, A building probably a Majlis Khana (p. 146); No. 255, Mosque, nameless (p. 147). なお、次註に、問題の Fīrūz Shāh 時代と思われる大建造物址にふれる。Delhi Monuments List は、私が本文で述べた貯水池 (ḥauz, tālāb) や、そのほとりに残存する、井戸らしい水利施設や、水道溝の遺構などには、一言もふれていな

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

い。

67. この、問題の崩壊した建造物については、Delhi Monuments List は、Vol. III, No. 256 (p. 147) に紹介している。次に、その敘述の一端を引用しておこう。

“The mosque is in a ruined state, and is marked by accumulated debris, only three of its bays at the south end now stand. These bays are roofed with plastered domes which, supported on dressed stone pillars, are similar to those of the mosque built by Khan Jahan during the time of Firoz Shah Tughlaq. The mosque constructed of rubble seems to have been of considerable size and its ruins measure some 168' N. to S. by 42' E. to W.”

なお、この遺跡については、Syed Ahmad も、その “Āthār al-Şanādīd” のなかの Dargāh-i Shaiḵh Şalāḥ al-Dīn の項で紹介している。建物の大部分が、当時、すでに崩壊していたことは、その記述からもわかるが、それにつけられた挿畫の示すところ、現存する建物よりは、かなり多くの部分がのこっていたように思われる。Ahmad Khan (Rev. ed.), Part III, pp. 32—33. ただし、Syed Ahmad も、私が關心をよせている西方の tālāb については、なにひとつふれていない。

68. Cunningham (Vol. I), Plate XXXV.

69. P. Hardy, p. 40.

70. Minhāj al-Sirāj ‘Afif, Tārīkh-i Firūz Shāhī, Persian text ed. by M. Vilayat Husain, Bibliotheca Indica Series, Calcutta, 1891. 以下、このテキストを、Tar. Fir. (‘Afif, B. I.) と略稱する。ここでの引用は、p. 330. なお、これには次のウルドゥー譯もある。Tārīkh-i Firūz Shāhī, tarjmah, Maulwī Muḥammad ‘Alī Şāhab, Haidarābād, 1900, pp. 229—231. このウルドゥー譯本では、問題の文章のある章のタイトルは、“Un mukhtalif ‘imārāt kē bayān men jū Firūz Shāh nē ta’amir kun.” となっている。

ウルドゥー譯では (p. 230). 原文中にあらわれる *band* の名稱のうち、Band-i Mahipālpūr, Band-i Sālūrah, Band-i Sahpanāh が、それぞれ Band-i Mahibālpūr, Band-i Sābūrah, Band-i Sahīnah と寫されている。私は、のちに本文でふれるように、このウルドゥー譯の名稱は採らない。

71. Elliot-Dowson, Vol. III, p. 354. 次に、すでに本文で述べた英譯の後半の關連部分のみを、この Elliot-Dowson 譯本から引用してみる。

“……His palaces (*kushk*) were those of Firoz, Nuzūl, Mahandwāri, Hisār Firozah, Fath-ābād, Jaunpūr, Shikār, Band-i Fath Khān and Salaura. *Bands*: Fath Khān, Mālja (into which he threw a body of fresh water, *āb-i zam-*

zam). Mahpálpúr, Shukr Khán, Salaura, Wazirábád, and other similar strong and substantial bands.....”

ここで、なによりも注意すべきは、列挙された *band* の名のうち、私が使用した Bibliotheca Indica Series ベルシア語刊本には記されている Band-i Sahpanāh が出ていないことである。

72. The Imperial Gazetteer of India, New Edition, Oxford, 1909, Vol. XXV, Index, p. 620; Vol. XXIV, pp. 378—379.
73. Z̄afar Nāmah (Tehran text), Jard II, pp. 98—99. なお、これに當る記事は、Malfūzāt-i Timūrī に、ほぼ、同じ内容で記されているが、その方には、Wazirābād という地名はでてこないようである。cf. Elliot-Dowson, Vol. III, pp. 448—449, p. 505.
74. S. H. Hodivala, Studies in Indo-Muslim History, A Critical Commentary on Elliot and Dowson's History of India as told by its own Historians, Bombay, 1939, pp. 331—332. 本書は以下、Hodivala とのみ略稱。この書と補篇については、拙稿第1論文、補註50を参照。S. H. Hodivala は、現存の Malcha の地を考えたあと、Cooper, “Guide to Delhi,” 1863, p. 92 の説を引きつつ、Kālkā Mandil, すなわち、ニューデリー東南郊に現存する Okhra に近い Kalkaji Deviにあるヒンドゥー寺院の近くにあったという考えをも記している。この附近には、諸地圖をみても、似たような地名は見當らず、Hodivala の根拠もはっきりしないことでもあるし、私には賛成できない。
75. Elliot-Dowson, Vol. IV, Appendix G. Wāki'āt-i Mushtāki, p. 544 を参照。
76. 'Afif (B. I.), p. 128. ただし、本文でも括弧内に記しておいたように、この B. I. テキストは、Akrūdah は Āgrah, Sālūrah は Sitāpūrah (あるいは Satāpūrah か) という固有名詞をもあわせて註記している。
- なお、Elliot-Dowson, Vol. III, p. 300 に出ている英譯も、その主意は上の私譯と少しも變らない。ウルドゥー譯本では、問題の Sālūrah は、Samūrah と誤記している。'Afif (Urdu), p. 96.
77. Delhi Monuments List, Vol. II, p. 221.
78. Y. D. Sharma, p. 81.
79. Delhi Monuments List, Vol. IV, pp. 70—71, No. 139.
80. Hodivala, p. 332.
81. Sirāt-i Firūz Shāhī には、これまで刊本が一つもない。寫本も少なく、インド國の Patna の Oriental Public Library, すなわち Khudā Bakhsh (フダー = パフ

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤および水門の遺跡について

シュ) 文書館所蔵のものが世界で唯一の原寫本とされている。この寫本は, Catalogue of the Arabic and Persian Manuscripts in the Oriental Public Library at Bankipore, Patna, 1921, Vol. VII, Indian History, No. 547, Sirat-i-Firūz Shāhī (pp. 28—33) として紹介されている古寫本である。私は、かつて、1961年はじめに、當時インドに留學されていた山崎利男氏の助力を得て、この現在唯一の古寫本を、この世界的に著名な文書館の入口の玄關の石だたみの上で、撮影複寫させていただいた。そのフィルムとプリントとは、現在、東大東洋文化研究所に保管してある。このペルシア語寫本については、二、三の書目や論文ですでに紹介されているが、私にはなかなか讀み難い對象なので、黒柳恒男氏をわずらわして、ともかくも、さっと目を通していただいたのである。

82. Muḥammad Qāsim Hindū Shāh Firīshṭah, Tārīkh-i Firīshṭah, Persian text published by Nawal Kīshūr, Lucknow (刊年不詳, 私蔵)。p. 151. なお、この Firīshṭah の著書をもとにした英譯本があるが、そのうちで有名なのは下記 John Briggs の書物である。しかし、この著書は、あまりにも原文から逸脱し、恣意的に原文を省略しているのでも有名な書物である。私蔵カルカッタ刊本は次のとおり。John Briggs, History of the Rise of the Mahommedan Power in India, till the year A. D. 1612, translated from the Original Persian of Mahomed Kasim Firishta, Calcutta, Vol. I. 1908. 關係個所は、やはり意譯しているが、次のとおりである (p. 465)。

“The following are the public works constructed during the reign of this prince:— 50 Dams across rivers, to promote irrigation.”

この最後の「灌漑を振興するために」というのは、原文にはみえない。

83. Suraj Kund へは、私は、1955年に一度だけ行ったことがあるきりであるが、最近は大形バスも近くまで入り、だれにも行きやすくなったらしい。これについては、Y. D. Sharma, p. 84. 参照。これについての一切の論争は、ここでは省略する。
84. Y. D. Sharma, pp. 84—85.
85. Anang Tal については、さしあたって、Delhi Monuments List, Vol. III, p. 87, No. 140, Anang Tal の項を参照。その他の著書は略す。
86. Wolseley Haig, Chronology, pp. 339—345, pp. 361—362; M. Husain, Chap. VII, VIII, このあたりのクロノロジーは、Baranī が、事件ごとに、はっきりと年代を記していないので、よくわからないことが多い。さしあたって、私は、この二人のクロノロジーに據った。
87. Baranī (Tar. Fir., B. I.), p. 485, なお英文の抄譯には、Elliot-Dowson, Vol.

- III, p. 246 があるが、全くの部分的抄譯になってしまっている。
88. Baranī (Tar. Fir., B. I.), p. 485. cf. Elliot-Dowson, Vol. III, p. 246. B. I. テキストでは、“*Sarak Dwāri*”となっているが、これは諸書に従って、私譯では“*Sarag Dwāri*,”に直しておいた。
89. Sarag Dwāri については M. Husain, p. 165. & note 1; W. Haig, Chronology, p. 349. & note 1; Elliot-Dowson, Vol. III, p. 246. Sarag Dwāri は、サンスクリット語起原の言葉であるが、M. Husain, W. Haig は、それぞれ、“the Gate of Paradise,” “the gate of heaven”と譯している。Elliot-Dowson 本は、“Heaven’s Gate”と譯している。
90. W. H. Moreland, *The Agrarian Systems in Muslim India*, London, 1936, p. 49. 以下、本稿では、Moreland とのみ略稱。
91. Baranī (Tar. Fir., B. I.), pp. 497—498. このあたりのことは、Elliot-Dowson の抄譯では、かなり省略してしまっている。Cf. Elliot-Dowson, pp. 250—251.
92. Baranī (Tar. Fir., B. I.), p. 498. “*uslūb*”というのは、手段、方法 (measure, method) というような意味であるが、ここに引用した文章の内容でもわかるように、ちょっと特別な用語として記されているようである。従って、ここでは“*uslūb*”として原語をのこしておいた。
93. Baranī (Tar. Fir., B. I.) p. 498. なお、以下にちょっと紹介しておくが、このことには、‘Afif もふれている。‘Afif (B. I.), p. 92. Cf. Moreland, p. 50; Elliot-Dowson, pp. 287—288.

“.....After Sulṭān Muḥammad returned from Daulatābād, in his life-time, for restoring the regions [*mamālik*] of Dihlī, he gave [*dādah bād*] the people [*khalā’iq*] of Dihlī.....property [*māl*] equivalent to two krons [*dā krār*] for making the home-land [*khiṭṭah*], towns [*qaṣbat*], and villages [*qariyat*] habitable, which had been ruined during the days of the famine [*qaḥṭ*]

なお、この貸金や報償金制度は、支配貫徹のための農業振興策として、Muḥammad 時代の重要な問題である。その金額については、史書の間に数字の異同があるが、本稿では省略する。こうした農業振興のための施策は、形式と内容とを變えて、次の Firūz Shāh 治世にも強力に行われるのであって、トゥグルク朝支配の歴史のなかでも、もっとも重要な問題の一つである。しかし、本稿では、問題の視點がややずれるので、別の機会にゆずって、一切省略する。

94. ‘Afif (B. I.), p. 178.

95. Moreland, p. 89.
96. Moreland, pp. 59—60.
97. Irfan Habib, *The Agrarian System of Mughal India (1556—1707)*, Asia Publishing House, 1963, pp. 31—33. 以下, Irfan Habib と略稱。
98. ‘Afif (B. I.), p. 130. Elliot-Dowson の譯は全く短くなってしまっている。(Vol. III, p. 302.) なお, 私譯の最後の部分で (*) 印をつけた部分は, B. I. テキストでは, “taftī basakhtī kardi” となっている。しかし, 註 6, 7 には, 私が本文で轉記しておいたように, “taghir,” “mi-kardi” とも出ている。前者だと韻がっている感じで読みやすいようだが, 意味からいって, 私は, 本文私譯に示したように, B. I. テキストの註の方を採用した。
99. ‘Afif (B. I.), p. 329.
100. Irfan Habib, p. 28. & note 23.
101. ‘Afif (B. I.), p. 315.
102. Baranī (Tar. Fir., B. I.), pp. 599—600.
103. Delhi Monuments List, Vol. IV, pp. 70—71, No.139; Vol. II, p. 226, No. 327; Vol. II, p. 227, No. 328. なお, Y. D. Sharma, は, Mahipalpur 堰堤 (I—1) の遺跡が現存している Mahipalpur 部落の中央の “Maḥal” なる建造物をも, おそらくは, 水を求めて堰堤にやってくる鳥獸を獲るための Firūz Shāh の shikargah としている (Y. D. Sharma, p. 61)。しかし, この Mahipalpur の場合は, 私は, “Maḥal” が shikargāh を兼ねた離宮的建造物であったとしても, この地の堰堤の建設の第一の目的は, すでにくり返し述べたように, 農耕問題にあったように考えている。

〔附記〕 この論文執筆に用いた文獻のなかには, 日本でみることができず, インドで寫眞複製して利用したもののがかなりある。文獻閲覧の便を興えてくれた A. S. I. Library, Bankipore Oriental Public Library に謝意を表したい。

また, 本稿に掲載した寫眞は, いずれも, 東大の現地調査の際に, すなわち, 1959—60年, 1961—62年の冬期に撮影したもので, A. S. I. の許可を得て行ったものである。東洋文化研究所保管のこれらの寫眞の使用については, 山本團長の承認を得ていることを附記しておきたい。なお, 撮影者は, 次のとおりである。卷頭圖版 I (2枚), II (2枚); 挿圖 4, 6, 8, 9, 11, 15, 16, 17, 18, 20, 23, 24, 25, 26——三枝朝四郎氏。挿圖 2, 3, 7, 10, 12, 13, 14, 21, 22, 27, 28——荒松雄。

卷頭圖版の Tughluqabad 水門 IV (I—B) は, III の誤りにつき訂正。

追 記

山 本 達 郎

1964年12月19日と20日、私がニューデリーに滞在した間に訪れた遺跡のうちで、故ネール首相公邸内の堰堤と Ānangpur のダムについて、ここに簡単に見聞を記して置きたい。

(1) ネール首相の死後その公邸は彼の生前を偲ぶ博物館として公開されて



挿図 A 故ネール首相公邸内堰堤上の “Shikarghat” とよばれる建造物。

いて、東京大学の調査団がデリーに滞在した当時とはすつかり様子が變つていた。公邸の正門をはいつて正面玄關に至るまでの前庭の右側（西側）に問題の堰堤の一部が僅かに残つており、その上に建造物が残存している。南北に連るこの土堤は現在 100 米にも足りず、

しかも建造物の北側で道路によつて切斷されている。本来の堰堤はこの部分だけを残して崩され、平地としてならしたものと認められる。残つている土堤の南の部分、建造物の南側には近來作られた水泳用のプールがあるが、建造物そのものは古く、様式や構造（三間のアーチ・石柱・石積みなど）は、Firūz Shāh 時代のもつと符合しており、管理者はこれを “Shikarghat” と呼んで

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤及び水門の遺跡について

いる。この建造物は二階建てで、堰堤の上に約11.5米の高さをもつ。一階は東西に長い長方形で、南北13米、東西はその約2倍で、西部はやや不規則に損壊し、全體として基壇の性格が強いが、下部で東西に通り返けられる形である。北側から昇る階段は近年になつて築造されている。二階、即ち建物の主要部分は一階四面、平面は約13米の正方形で、その東にテラスが出来ており、テラスに近い階段から屋上に出ることが出来る。

(I) Ānangpur (Arangpur) のダム (或は水門) は Suraj Kund の西南方約2 軒のところにある。Tughluqabad の東南端から南に直線距離5 軒を隔てて Ānangpur の村があるが、この村を西南隅に含む小盆地があつて、その水は集まつて東北に向つて流れ出して行く。この水の出口を塞いでいるのが問題のダムである。もともとデリー附近の主要な遺跡は、北北西から南南東に流れる Jumna 河とその西方の丘陵で囲まれる平地に分布しており、その丘陵線は北は Jumna に接した Wazirabad に近い分水線にはじまり、略直線に南南西に延びて Mahipalpur の東で南東に轉じ、Tughluqabad の南方に至つて起伏の多い低い臺地を形作つているが、この臺地の中の低平な部分が前記の盆地であり、よく耕作されている。盆地の東北に位するダムは略北西から南東にわたる方向をとり (N 32°W)、巧みに地形を利用して構築してあり、その西側に水を溜めるようになつている。私は地質學の渡邊武男教授(東京大學理學部長)、飯塚きよ子、本多由民子諸氏と共にこの遺蹟を訪れたが、ニューデリーから南南東に向う Mathura 街道を進み鐵道の Tughluqabad 驛から約三軒を南下した個所から右に折れて Ānangpur に向つた。問題の遺蹟は最上部で幅 21 米、長さ 128 米の石築で、下部に於てやや幅廣く、水の溜まる西側は土が相當に堆積しているが、東側は高さ 12~3 米に及ぶ。岩石の露出の多い丘と丘の間、本來水の浸蝕によつて出来たと認められる谷間を堰きとめたもので、ダムと呼ぶのに適しており、Satpulah の場合が水を溜める堰堤の役割をも持つ城壁を築



挿図 B Ānangpur のダム. 東側 (下流).

いてその一部に水門を作つたのと異つている。Ānangpur のダムには、両側に方形の突出部が15米程張り出している。このダムは本来七つの通水道があつたもので、東側からみると上部がアーチ形で上下に細長い七つの穴がみえている。穴は上下三段に並び、上段の二つは、左右に著しく離れて置かれ、中段の三つは上段よりも中心部に近く等間隔に位し、下段の二つは中段の三つの穴のそれぞれの中間の下方に置かれている。このダムは現在も活用されているが、通水道として使われているのは中段の中央の一つの穴だけであり、この穴の高さが西側でみた地平面の高さに當つている。西側の中央部には、この穴を中心として左右から次第に狭まる二つの壁が作られ、穴の直前に水を調節するための開閉板を上下する溝が作られている。ここを訪れたのは乾季であつたが若干の水が流れていた。このダムの主體をなす部分は割石で作り接着物質が用いられているが、西側の表面は長方形の切石で蔽われている。この石積みが全面を蔽つた

デリーに現存するサルタナット時代の堰堤及び水門の遺跡について

姿に於ては、前記の七つの穴は中央の一つを除いて、西側に於ては表面に現れていない。一見不可解なようであるが、これは元來七つの穴のあつたダムであつたのを、西側に増築補強を行つて切石を積んだ際に大部分塞いでしまつたものである。そのことは西側の石積みの上部が取り崩されている個所があり、そこに内部の石積みの母體が現れていることによつて明かである。南側上段の通水道の入口が通り崩された個所に現れているが、これは調査の目的で外側の石を取り除いたものかと思われる。このダムが少くも二つの年代の構築を含むことは明かである。伝えられるように Tomar 王朝のものであるかどうか、遺跡そのものから確言は出来ないが、そう認めるのに支障もないようである。西側の石積みの切り石は、デリー諸王朝時代初期の切り石とみられる Gandhak-ki-Bāoli の古い部分の切り石などとは性質を異にしている。

この Ānangpur のダムは下流の土地を灌漑する機能もあつたであろうが、主としてそれは上流の側に水を溜めて耕作地を広めこれを豊かにする作用を營



挿図 C Ānangpur のダム (北西の突出部から南東をみる)。

んで来たものと認められる。なおダムに近接して北側に近く崩れかかった建物の一部が残っている。

さてこのダムを Satpulah の大水門と比較してみると形式の上で注目すべき問題がある。前者には西側(上流側)の両端に方形の突出部があるが、Satpulah に於ても水を溜める上流側に方形の突出部があつて、平面に於て比較するとよく類似している。兩者共にこの突出部の方形が末端でやや狭くなつている點も同じである。前記の如くこのダムに於ては上段の通水道が左右に遠く離れているが、これは Satpulah に於て左右兩端の通水道が何れも一段高くなつているのと類似した點である。Satpulah の大水門は複雑な形式となつているが、その前に Ānangpur のような簡単な形式のダム乃至水門があつて、それをもとに發展させて作つたものと認めることが出来よう。

[なお、この「追記」に載せた寫眞は、いずれも、山本が、1964年12月に、自ら撮影したものである。]